明治卅八年七月十五日發行（每月一回五日發行）明治三十年十二月廿五日第三種郵便物認可



世界各國の家庭

女學世界

定期增刊

第五巻第拾號



女學世界定期增刊

世界各國の家庭 目次

口繪

家庭事情

登録商標

良薬にして口に甘し

登録 浅田宗伯先生直傳 商標

登録 **浅田飴** 商標

たんせき一切

肺病の持薬

ひきかぜ

よわき人

老人の滋養薬

登録商標



十二日分	金五拾錢	一週間分	金参拾錢	四日强	金貳拾錢	二日分	金拾錢	日本全國到る處の薬店に販賣す	〔郵送料壹個拾錢〕	

本家

東京市神田區鍛冶町
大阪北久寶寺町堺筋

（電話本局壹壹二番）
（電話東三九五八番）

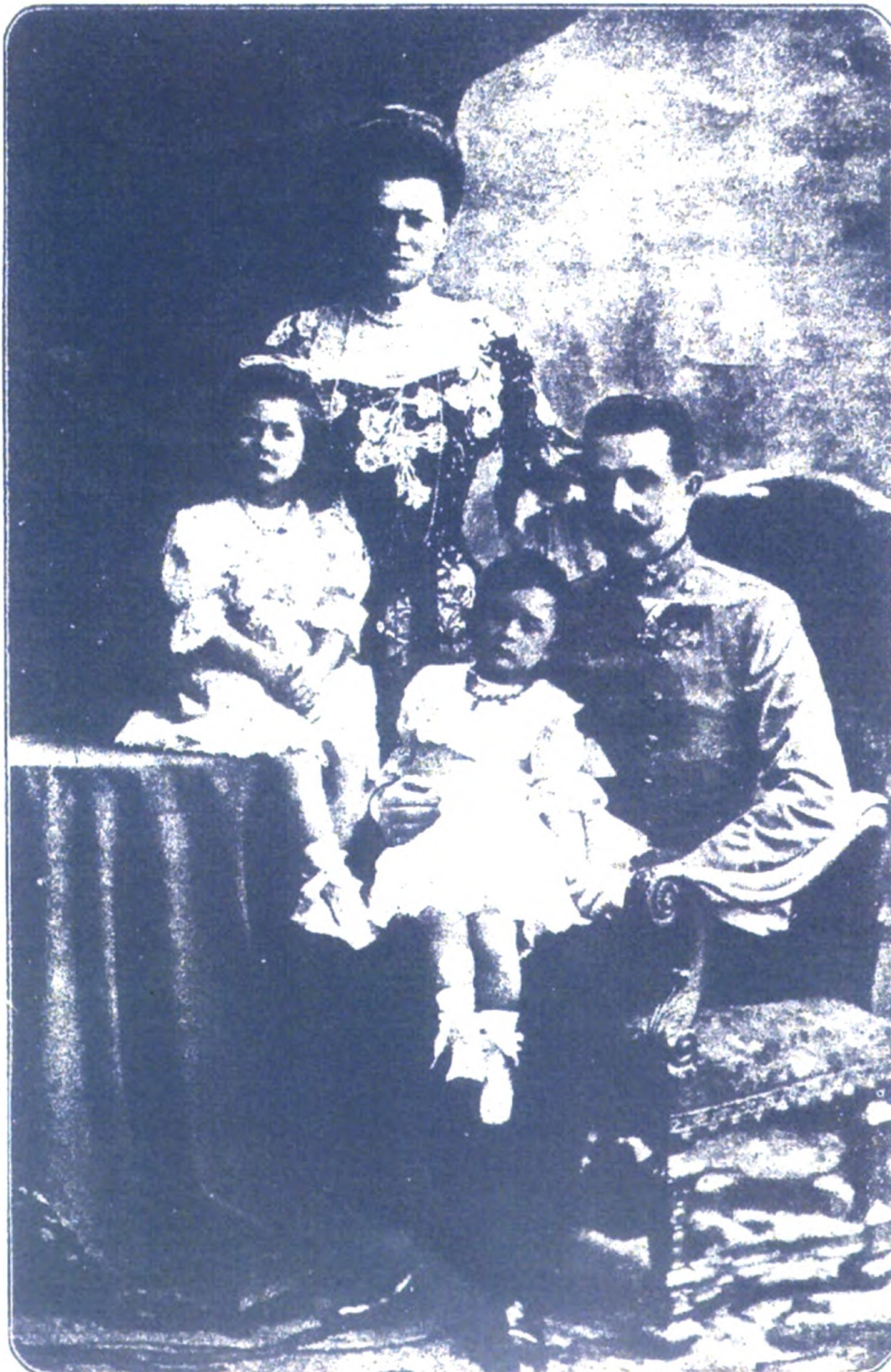
堀内伊太郎



尾竹國觀筆

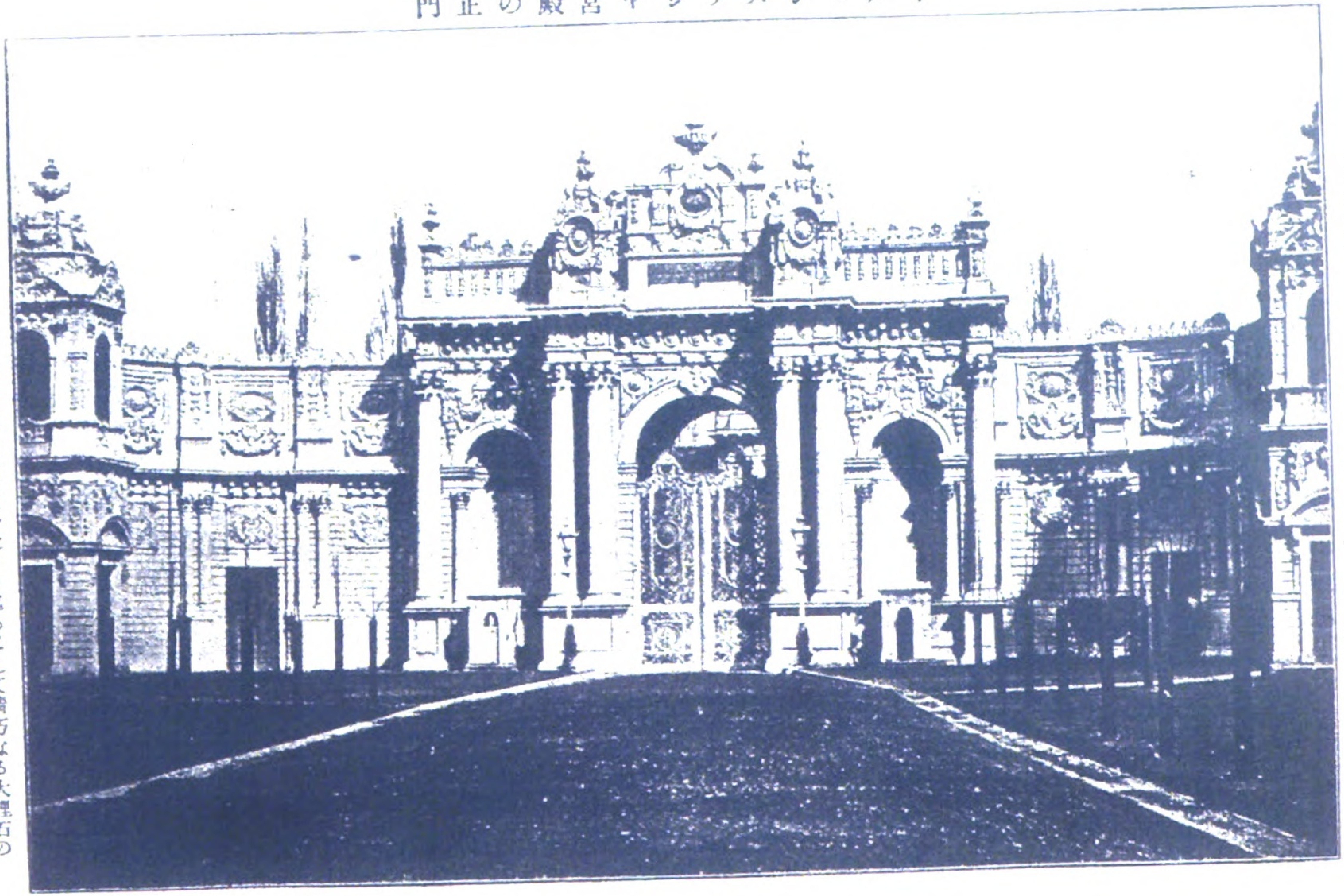
和氣滿堂

墺國皇太子フランシス.ヘルヂナンド公の家庭



土耳古の偉觀

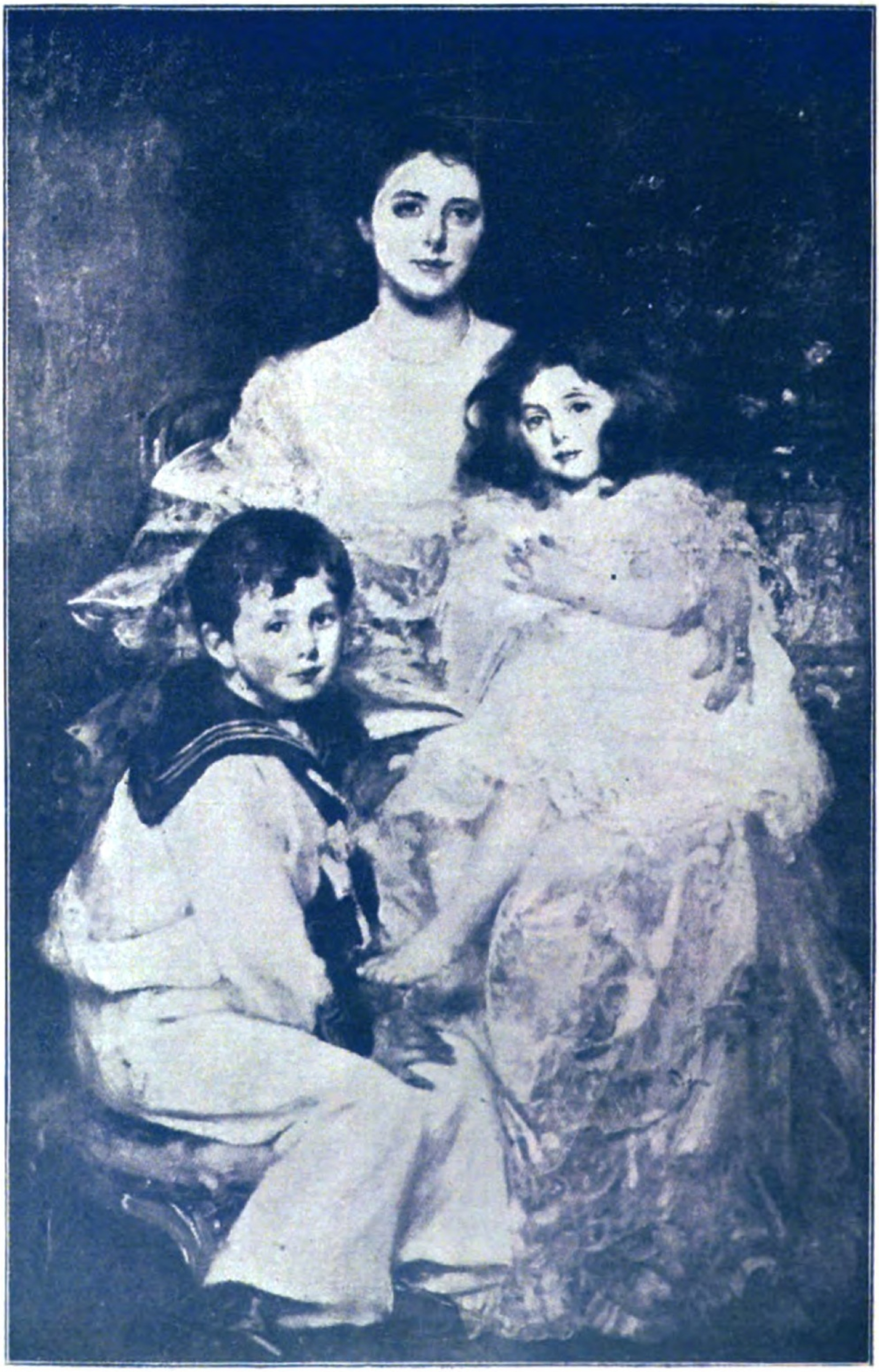
ドルマンバツシャ宮殿の正門



ドルマンバシャ宮は皇帝が毎年二回文武百僚の賀を受くる處ろにして精巧なる大理石の建築眞に土國の偉觀なり

母親と子供

（泰西名畫）

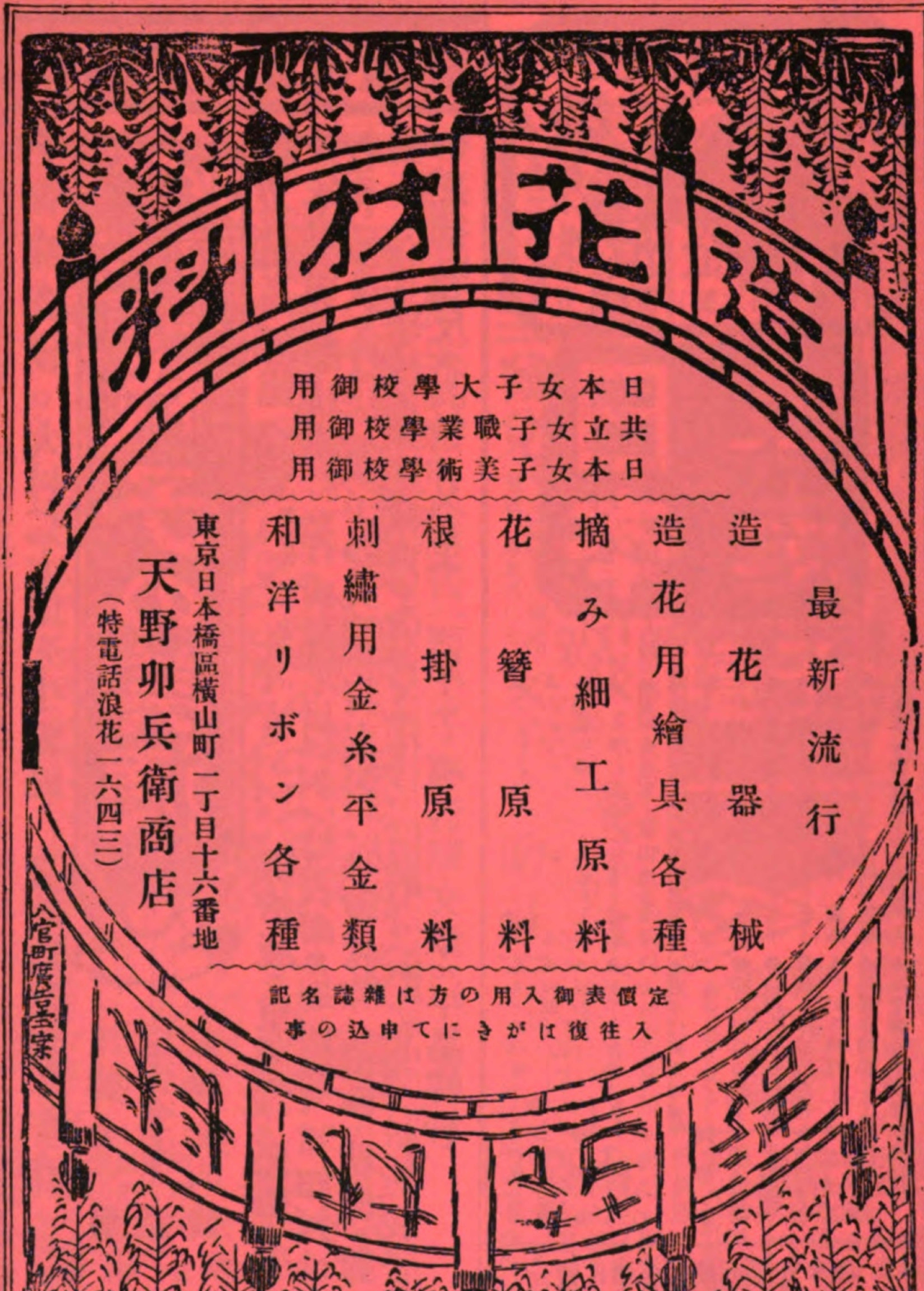


詩神アポロー



女神ミネルヴ




造花材料
日本女子大學校御用
共立女子職業學校御用
日本女子美術學校御用
最新流行
造花器械
造花用繪具各種
摘み細工原料
花簪原料
根掛原料
刺繡用金糸平金類
和洋リボン各種
東京日本橋區横山町一丁目十六番地
天野卯兵衛商店
（特電話浪花一六四三）
定價表御入用の方は雑誌名記
入往復はがきにて申込の事

（甲の一）

教師及父兄の讀物

學習院教授 大村仁太郎先生編述

教育寓話 我子の美德

（最新版發賣）

洋裝全一冊 定價金七十錢 郵稅金八錢

大村教授「我子の惡德」を編述してその價値を社會に問はれしに好評嘖々四月を出でずして既に拾版を重ぬるに至れり。而も惡德は學校家庭の裏面を描寫したるもの、裡面より警告諷刺せられたる表面が如何なるものにして、且つ如何にあるべきかは實にこの「我子の美德」によりて表彰せらる。彼れと此れとは消極と積極との對象にして、並びて以て、互に相學校及家庭教育の改善を進捗するものと言ふべく、一を反射鏡とすれば一は正面鏡、一を闇黑とすれば一は光明。「我子の惡德」を讀みて反省せしものは必ず又本書を繙いて兒童を導かざるべからず。文章は平易輕妙。

教育學術研究會編纂

教育辭書

洋裝全五冊定價金五圓

小包料金卅錢上製料六拾錢

特價金四圓

九月限

（製本料送料別）

日本の家庭

七月十日發行 第五號 每月一回發行

- ▲よくつれて……（口繪）
- ▲あめかぜ……記者
- ▲葡萄の蔓……大村仁太郎
- ▲一女子に答ふ……中島德藏
- ▲暑中の子供……山本きよ子
- ▲梅雨のつれづれ……三宅花圃
- ▲とりつかうか、ひッつかうか……いうせむ
- ▲當世奥樣氣質……中島きよ子
- ▲文祿時代の聟選び……柴田常惠
- ▲お濱さん……沼田笠峯
- ▲母樣に御注意……天籟道人
- ▲まといの時……今西菫公子
- ▲和歌……三宅花圃選
- ▲紅の話……幡幽泉
- ▲どちらが羨ましいでしようか……かさみれ
- ▲男子に與ふる書……劉芳子
- ●婦人の眼に映ずる若き男子
- ●輕薄なる女性的男子を排す
- ●眞に家庭の意義を知れりや
- ▲てがろ料理……ゆふづき
- ▲料理の切形……石井泰次郎
- ▲高千穗小學校●新刊紹介

一冊代價金九錢 六冊五十錢

發兌 東京市神田區表神保町二 同文館 關西大賣捌 大阪市東區備後町四 寶文館

（甲の二）

出版界高評

選評大家（日本女子大學教授）鹽井　文學士女子高等師範教授尾上　文學士巖谷小波君、佐々木信綱君、廣津柳浪君、山中古洞君、編輯記者



▲名家玉稿、懸賞應募佳作滿載內容豐富

▲優美無比口繪　三宅氏水彩色密畫及名家彩色密畫（石版數遍刷）の外寫眞版口繪數葉挿入

最廉無比　▼定價▲一册（大判百廿頁密畫入）金拾錢、六册前金五拾七錢、外郵送料一册壹錢宛、毎月一回壹日發行◉

第七號　七月一日發　文學士岡田氏　作家の階級　文學士鹽井氏　選評餘談　必讀の價あり　口繪　克己氏水彩畫夕立雲（十一色刷）古洞氏密畫美人朝の散歩（石版六色刷）の外に女學校卒業生大判寫眞名畫寫眞挿入

▲本誌三號殘本僅少其他賣盡

發兌　東京京橋大鋸町　女子文壇社（電話本局六〇七）

發賣元△神田東京堂、上田屋、京橋東海堂、北隆館、良明堂外全國書店

夏季進物に最適品

新刊

內務省衛生試驗所技師　藥學士　慶松勝左衛門君著

家庭衛生　衣食住

大和綴上製　優美口繪挿入　定價金五拾錢　郵稅金八錢

衛生は夏季の最大要務なり本書は家庭衛生に必要なる衣食住を理論に基き最も平易に説明せし者にて飲食物篇には調理法、食料撰擇の方法、飲食物防腐劑、衣服篇には着服の注意、廣帶、袴、帽と髷、夜具、石鹼、沐浴の注意、化粧料、住居篇には土地と病原菌の關係、井水、雨水、清淨法、室內、光線空氣の關係より人工換氣法、便所の防臭、消毒法其他家事一般の衛生を最有趣味に記述せしもの夫人令孃保姆教師の必讀良書也

發兌元　東京本郷森川町一　育成會

（甲の三）

文藝倶樂部定期增刊　第拾壹卷第拾號　七月十五日發行



洋装美本
紙數三百二十頁
正價廿五錢
郵税貳錢五厘

偏く日本全國花柳界の風俗を網羅して社會半面の眞相を窺はんとする、是れ本誌を增刊するの目的なり
彼の坊間に散在する花柳細見記、狹斜案内記と全く其の撰を異にし、他日日本社會史を編纂せんとするものゝ先驅たらんとする、是れ本誌を增刊する期待なり。左記の諸項目に涉りて花柳界の眞相を詳述したれば、一日一刻も活動して止まざる社會の形勢に留意するものは、來る十五日發刊の日を待つて、賣切れざる内購讀の榮を賜へ！

掲載の要目

花柳の歴史△花柳の位置△規約及作法△言語及び流行唄△妓夫、箱丁、女將、女中、仲居等の身の上△藝娼妓の狀態と客の種類△雛妓と其の養成法△遊船宿、待合、貸席の今昔△花柳に關する傳說及び逸話△花柳界の迷信

倘夫れ全篇を裝飾する一班を語らんか、曰く、現代美人書家の泰斗富岡永洗氏に乞ふて、艶無双なる浴後の美人を題とし特に大版口繪四頁大にして實に我國雜誌界唯一の精彩驚くべき木版口繪を卷頭に挿入す。武内桂舟氏筆の表紙と相俟つて如何に光彩を放つべきか。尚ほ寫眞版口繪の數を例號より增加する美人の寫眞版約百姿を以て其の如何に趣味深く、其の如何に美觀に富むか讀者願はくば刮目して待て!!!

(四十の四)

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

醫學博士井上通泰先生監修

家庭衛生叢書

▲正價壹册貳拾錢　郵稅一册六錢

全部十二册
洋裝大判美本
紙數一册
百四十頁以上

第五編目次

口繪　三輪博士、岡村博士（肖像）

●創傷の話……醫學博士　三輪德寛先生

●神經の攝生に就て　醫學博士　吳秀三先生

●「ヂフテリア」の話　醫學士　宮本叔先生

●皮膚の衛生……醫學博士　岡村龍彥先生

衛生雜話

（一）肺結核の本態（二）病源の人體内に侵入する方法（三）黴菌はどうして吸入せらるゝか（四）結核患者の咯痰によりて肺結核の蔓延するを防ぐ方法（五）患者の乾咳又は高聲に談話したるときは唾液の小滴に混じて出づる病毒を吸入することを防ぐ法（六）人體結核の動物に傳染する機會（七）食物よりする傳染の豫防法（八）食物以外に結核菌の消化器侵入（九）結核の接種せらるゝ場合（十）肺以下の結核病（十一）健康者の結核菌に對する抵抗力（十二）結核の遺傳性素因に對する豫防法（十三）肺結核豫防法

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

肺病

私義多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入して御照會あれ

千葉縣安房郡北條町　川名助次郎

醫學士小玉龍藏君編述

延命長壽法

全一册

洋裝上製　三六版紙數四百卅頁
正價金六拾錢　郵稅六錢

緒論……

第一編　人壽を短縮する諸件

一　章　柔弱なる教育……
二　章　戀愛の惑溺外二項……
三　章　腦力使用の過度……
四　章　疾病の不合理なる處置外一項
五　章　不潔なる空氣……
六　章　飲食の過度……
七　章　人壽を害する氣質及情慾……
八　章　誇大想像力●病的妄想
九　章　病毒……（七項）
十　章　年齡の早老……

第二編　長壽諸件……

一　章　遺傳上壯健なる出生……
二　章　合理的身体教育……
三　章　活潑青年●軟弱を避くる事……
四　章　青年時代の婚禮……
五　章　幸福なる夫妻關係……
六　章　睡眠……
七　章　身体の運動……
八　章　新鮮なる大氣の攝取●溫度の中和……
九　章　田舍と田園生活……
十　章　旅行……
十一章　清潔と皮膚の强壯……
十二章　毛織製服と麻製服の優劣……外一項
十三章　精神の安寧……外三項
十四章　爽快適度の感覺及び刺激……
十五章　疾病の豫防及び合理的療養法……外三項
十六章　頓死に際する救助法……
十七章　年齡及び之に伴ふ攝生法……
十八章　精神的能力と肉体的能力の練習……
十九章　人類の諸種の性質性癖及び生活狀態に從て上記諸方の應用……

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（甲の五）

醫學博士 瀨川昌耆君序文
醫學博士 遠山椿吉君題辭

千葉勝景君
鹿島櫻巷君 共編

家庭衛生訓

全一冊

洋裝並製菊半截
紙數三百七拾頁
正價參拾五錢
郵稅六錢

健兒は健全なる家庭より造り出さるゝなり、我が日本が有史以來未曾有の大捷を博したるも、その健全なる家庭に出でたる健兒が力に歸せざるべからず而して健兒の養成は戰捷國の急務なり、本書は著者が多年家庭に於て經驗したる衛生上の注意を記述したるものにして節々句々悉く健全なる家庭を造るべき要素を指示し其文頗る平明にして一讀誰人にも能く了解し得べきなり之を家庭簡易の醫術書とするもよろしく又た衛生の教訓書とするも可なり且つ卷末には弘田博士の皇孫殿下日常の御撫様を談話せし要項あり請ふ左の要目を見られよ

（甲の六）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

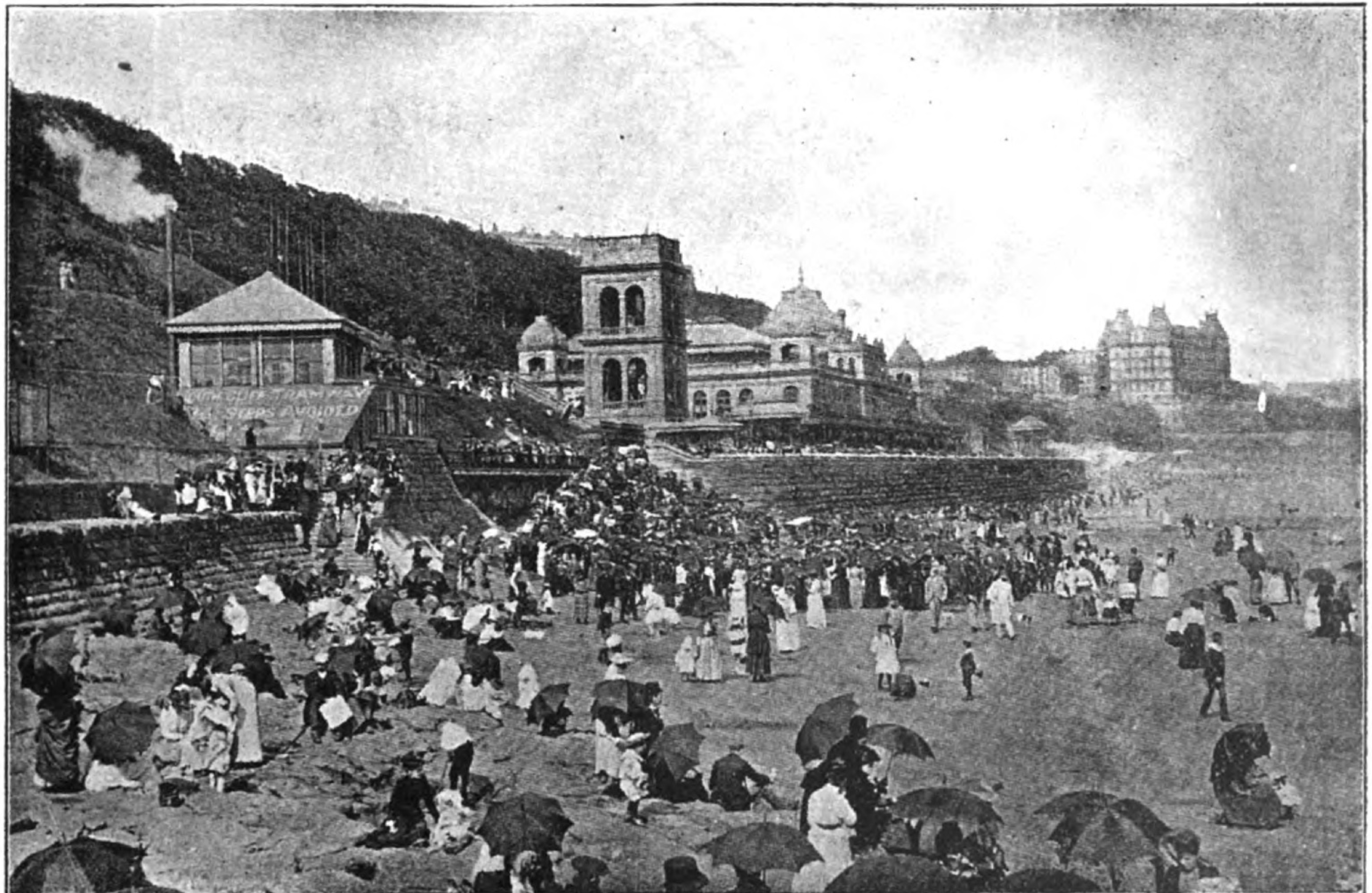
(甲の八)

緬甸人の家庭



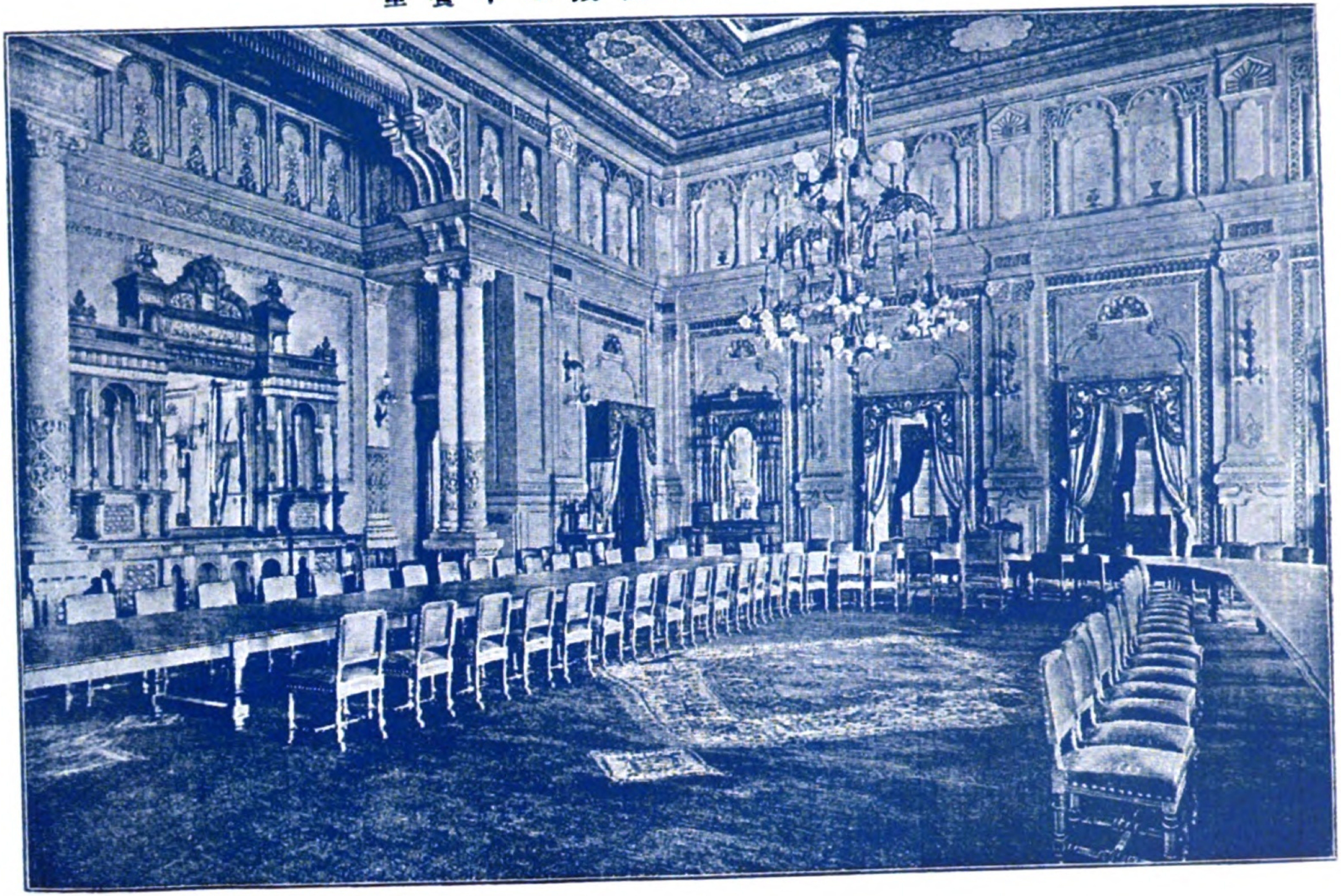
子供の避暑地

當面の大建築物は避暑地のホテルなり

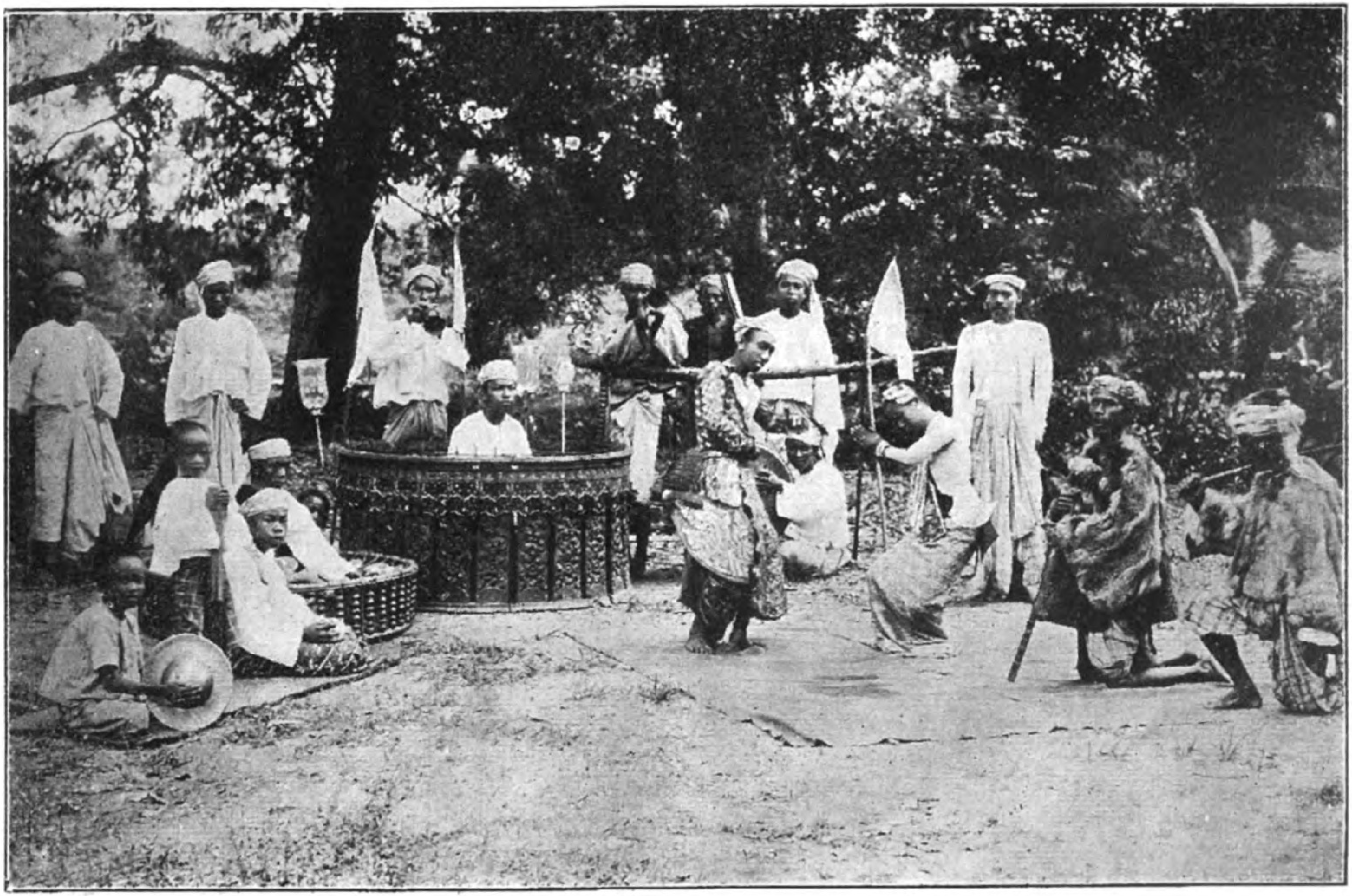


英國スカーボロー海岸

埃及アブゲン宮殿の午餐室



居芝の甸緬



印度風俗



ヒンヅー族の家庭



マホメダンの家庭

水上の涼味



英國サウスポートの長棧橋

わきがいんきんたむしの藥



わきが

吾人の忌むべき嫌ふべき交際社會の障害病たる「わきが」は本剤玉霜散にて全治すべし嗚呼此わきが嗚呼此惡病を患ふる諸君は速かに玉霜散を用ふべし

いんきん

痛い、かゆい、と口慣に少しも忘るゝ間なき「いんきん」も又此玉霜散にて治療す其效の瞬速なる雪に熱湯を注ぐよりも尚早し

たむし

かゆい、見苦しと自から耻る「たむし」も此玉霜散を用うれば忘るゝ如く根治す此藥は內攻の憂ひなし

藥價 二貼分 五錢 五貼分 拾錢 十一貼 廿錢
十七貼 卅錢 卅貼 五十錢 六十二貼 一圓

調製元 東京兩國米澤町一丁目 大木口哲 發賣元 東京神田鍛冶町 大木合名會社

米國醫學博士 ホリツク氏著
日本醫學士 守矢親國君譯

生殖器新書

一名 男女必讀婚姻案內

（第八版）

▲中判洋布上綴 正價九拾錢 郵稅拾錢

本書の原著は合衆國に於て非常の喝采を博し第五百版の多きを累ねたるものなり而して同國の貴婦人等は此書の爲めに莫大の利益を受けたるを喜び或は謝狀を添へて金牌を贈るものあり又は金ペン寫眞臺を送るものあり何れも口を極めて此書の効驗の著明なるを頌讚せざるは無し推して以て其價值如何を知るべし世の紳士令夫人令孃よ請ふ一本を購ひて幸を受け禍を防がれよ

發兌元 東京本町 博文館

禿、脱毛、薄毛、生際惡き人試みよ

東京皮膚病院發明 山崎發賣

毛生液



本剤は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髪の毛はへぎは眉毛髪等の薄きをこく生じ皮膚病てき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

藥價三十錢五十錢●特製一圓二圓●送料六錢

本舖 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

（乙の一）

香國土居通豫君述

初學作詩活法

七月下旬出版

全一册

洋裝總クロース
袖珍小本美本
紙數五百餘頁

香國先生は詩界の大家なり由來初學の便蒙となり作詩の捷徑となるべきの良書なきを憂ひられ近時閑を得て本書を大成せられたり行文平明にして指導最も懇切なれば初學の徒は容易く作詩の要訣を了して習養するに至極便利を得るなり

上卷

詩の由來
詩を作る習養
詩を作る考へ方
詩の体
七言絶句○七言律○同排律○五言律○同排律○五言絶句○五古○七古○樂府○雜體
句法
字法

下卷

詩病
和漢洋詩の比較
漢詩と俳句○漢詩と和歌○漢詩と新體詩○漢詩と歐詩
詩を作る法
熟字の用ひ方○韻脚の押し方○典故の用ひ方○虛字の使ひ方
平仄の式

題例　熟字
熟字對句
韻脚　韻脚對句
典故　虛字
作例
○賦比興體○七言絶句○七言律同排律○五言律同排律○五古○七古○樂府○用虛字格

發兌元　東京本町　博文館

（乙の三）

海軍省御認可　佐世保鎮守府御藏版

日露戰役海軍寫眞集

寫眞銅版
五十面
四六判二倍
横綴美装
七月下旬發行

（乙の四）

緬思すれば昨年二月、仁川に旅順に、劈頭第一彈を酬ひてより以來、大小幾海戰、戰ふ毎に必ず克ち、遂に本年五月に及びて、遠來の敵艦隊をも殲滅せしめ、全く海上權を掌握するに至る、我が海軍の偉功、宇内に震眩する、亦宜ならずや、然るに世上流布する所の寫眞集なるもの、假を掛け眞を紊る者比々として是なり、佐世保鎮守府に於て之を遺憾とし、開戰以來、各艦の戰況を撮影したるものを集め、以て此の無前の功績を後昆に傳へんことを期せられたるもの乃ち本書なり。佐世保鎮守府教授蘆野海軍技師、關機關大監、秀島海軍中佐、新納海軍大尉等が、親しく艦上にあり、彼我艦隊行動の實況を撮寫せられたる所に係り、眞の極眞、正の最正たる者、信に一ありニなきの珍品たり、今回佐世保鎮守府と海軍省との允許を得て、順次之を發刊し此に之を世に公にせんとす、空前偉蹟の眞相を知らんと欲するもの、之を措て他に求むべからざるなり。

宮原機關總監閲　工學士增田知藏君著

●**軍艦詳説**　全一冊 大判上製　正價壹圓貳拾錢 小包料拾五錢

東郷大將題辭　杉本文太郎君著

●**海軍解説**　全一冊 洋裝大判　正價參拾錢 郵税六錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　**博文館**

文學博士 井上哲次郎君
文學士 有馬祐政君 共編

武士道叢書

全部三冊洋裝
正價一冊五拾錢宛
郵税一冊拾錢宛

上卷（第一版賣切れ再版出來）

●神皇正統記抄錄……北畠親房
●竹馬抄……斯波義將
●文明一統記 樵談治要抄錄……一條兼良
●兵要錄抄錄……長沼澹齋
●倭忠經……南部立庵
●和俗男子訓抄錄……井澤蟠龍
●學論抄錄……松宮觀山
●武家須知……蟹養齋
●日本傳治亂要訣……高山健貞
●淇園答要抄……皆川淇園

中卷目次（新刊發賣）

▲卷頭、腰越狀……源義經
●匡正論……本多忠籌
●武學啓蒙……力丸東山
●尚武論……中村中倧
●武學拾粹抄……星野葛山
●練兵說明抄……山鹿素水
●武家小學……高木政明
●武藝訓抄……片島武矩
●武人訓抄……村井昌弘
●士道要論……齋藤拙堂
●明訓一班抄 告志編……德川景山
○各編末に著者の傳記を附す

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

文學士 笹川種郎君著

元祿時勢粧

全一冊
洋裝袖珍
金字美本入

▲正價金參拾錢 郵税四錢

第一、元祿時代
第二、文藝復興 一（儒學）
第三、文藝復興 二（國家）
第四、文藝復興 三（小說戲曲）
第五、文藝復興 四（俳諧及藝術）
第六、江戶と上方
第七、太平の粧飾
第八、廓の音づれ
第九、若衆姿
第十、歌舞 音曲
第十一、元祿美人相
第十二、餘談
附錄 紀文と奈良茂 時代一覽

元祿は其風俗に於て最も趣味ある時代なり復興の氣運熟しし革新の氣風吹きすさび社會のあらゆる方面の氣勃興し膨脹したる時代なり此書は則ち元祿の時代觀なり時代史なり風俗史なり文藝史なり社會史なり元祿をパノラマ的に示したるものなり二百餘年前の時勢を活動寫眞的に描きたるものなり其如何なる觀察をなしたるか如何なる筆を以て寫したるか如何なる趣味あるや如何なる興會あるやは本書則ち能く語らんか……

發兌元 東京本町 博文館

（乙の六）

文學博士重野安繹先生序　石崎篁園先生編述

（新刊發賣）

祝賀弔祭記事論說 國民作文軌範

洋裝三六判金字入
紙數五百六十頁
正價金四拾錢
郵稅八錢

緒言◎文は道を以て主眼とすること◎作文の三法◎何の書を讀むべきか◎文章は鍛錬を要す◎主意◎作文の五材◎文章結搆法◎篇章句字の法◎比喩法◎諷諭寓言◎層語法、漸層法、反層法◎誇張法◎對語法◎對比法◎寫聲、寫容、換義◎敬語、警語、枕詞、序詞、兼詞、引用法◎叙事文、記事文、解釋文、議論文◎文章の諸体◎文章沿革（日記、伊勢物語、源氏物語、紫式部日記、和泉式部日記、枕草紙、方丈記、四季物語、著聞集、徒然草、太平記、林道春、貝原益軒、新井白石、室直清、伊藤東涯、太宰春臺、柳澤淇園、加茂眞淵、本居宣長、清水濱臣、件資芳、藤井高尙、瀧澤解、松平樂翁、堀內新泉、著者、）◎結論……

△祝文、其作り法、朗讀法、（賀表、祝辭、式辭、告辭、祝捷文、感謝狀、表彰狀、）古今作例（凡百頁）△祭文其作法、朗讀法（祭文、弔詞、哀辭、誄詞、告文、）古今作例（凡八十頁）△傳及び記、其作法（人物傳、記事、事物の記、遊記、日記、學校堂齋の記等）△古今作例（凡六十頁）△論說序跋、其作法（宴序、壽序、送迎序、書序、論說、解、原議書類）古今作例（凡六十頁）△墓誌銘其作法（墓表、墓法、墓碑銘、碑神、道碑、碑陰記、贊戒等）古今作例（凡五十頁）△公私用文其作法（上書與ふる書文書簡文）古今作例（凡五十頁）……

岸上操君著◉作文自在（第十一版）　全一冊洋裝大判二百七十餘頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

上村左川君著◉記事論說文範（第九版）　全一冊洋裝大判二百五十餘頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

井上敏夫君著◉國語漢語類語作文錦嚢（第七版）　全一冊袖珍上製四百三十餘頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（乙の七）

臺灣民政長官後藤新平君序文

波蘭シダコッフ氏原著

田原禎次郎君譯述

洋裝大判美本
紙數約貳百頁

製本既成發賣

光榮の日本

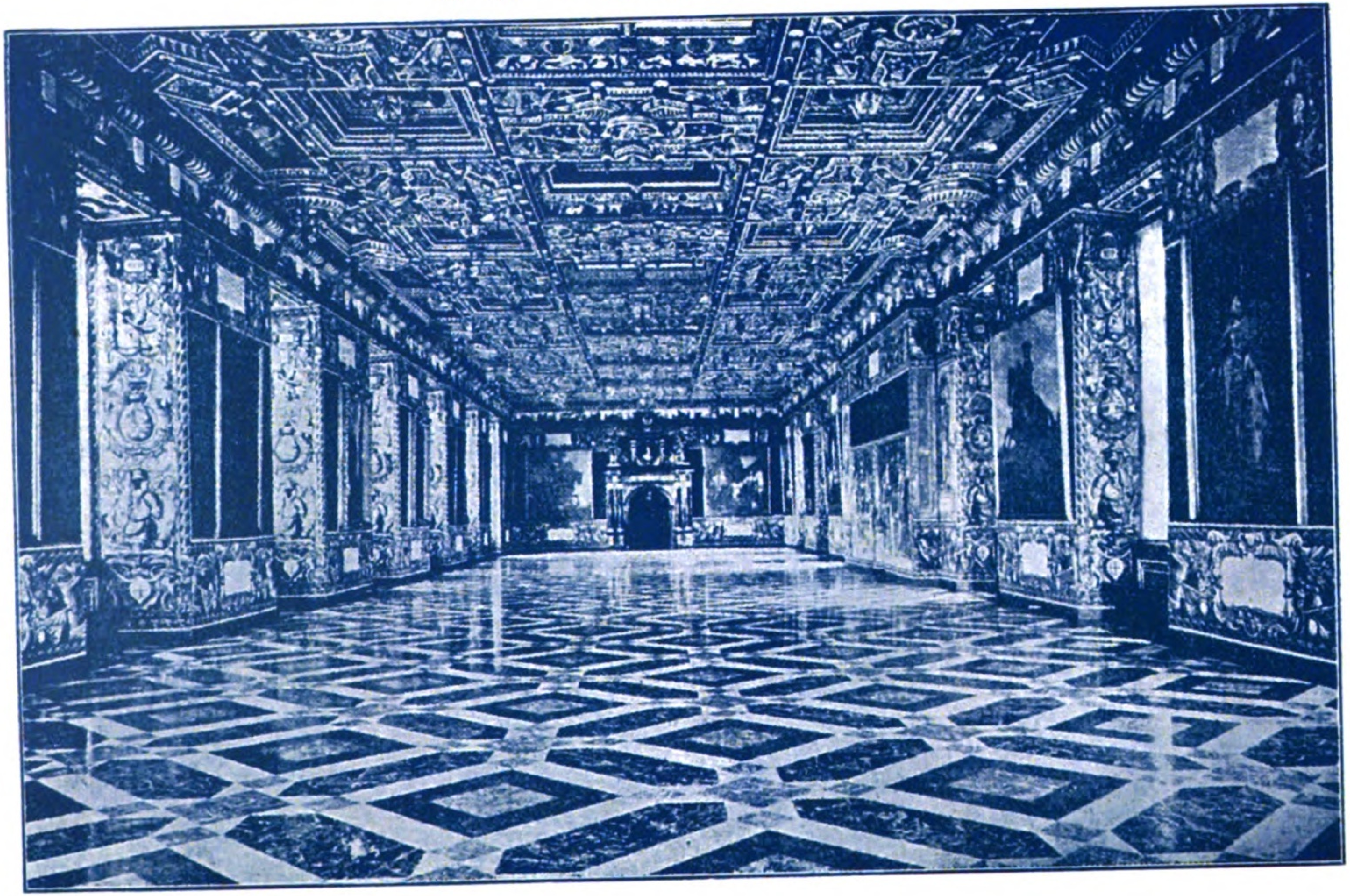
本書は、『露國の闇黑面』、『露國皇室の内幕』等を著して、露國通の名、歐洲に喧しき、波蘭の志士シダコッフ最近の著述に係り、記載事項は更に幾層の興趣を添うるものなり。先づ筆を『日本の宮廷』に起して、我國室の尊嚴に在すこと、及び國民の愛國心に富めることを説くこと一番、轉じて『日本の眞相』に入るや、其風俗慣習の微よりして、陸海軍情に迄説き及ぼし、秋山露探事件の如き、又其逸するを敢てせざりし所なり。次ては清韓宮廷の秘密を發きて犀利の筆を揮ひ、『日本と露西亞』の項に於ては、日露戰爭の源委を極めて餘蘊なく、終りに黃禍説の露國の政策に因ることを喝破し、黃禍は亞細亞にあらずして露西亞に在りと爲し、露國の全敗は歐洲の希望する所なりと結論せるが如き、確に巨眼を具するの記者たるを知る、加ふるに譯文暢達、些個晦澁の點なし。蓋し近來の珍書、戰時の國民は必ず一讀を怠るべからざるなり

全一冊
正價廿五錢
郵稅六錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（乙の八）

丁抹武士會館の内部



韓國風俗



兩班と其妻（地方富豪の老夫妻、韓人には參らしき進歩家）



中人の家庭

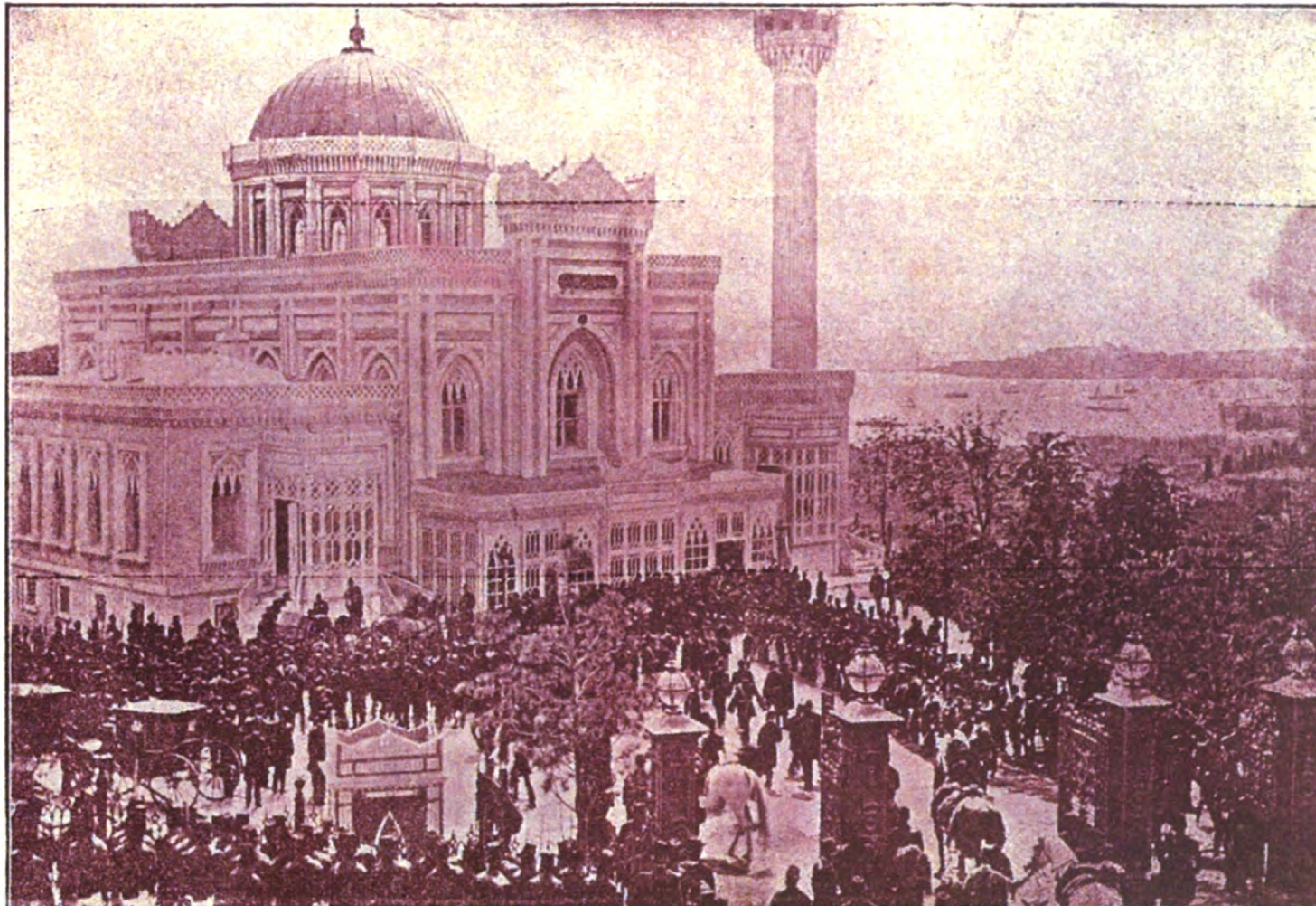
（一家團欒の情掬すべし）



兩班（貴族）の夫人と處女（此の内右方なるは有名なる李夏運氏夫人）

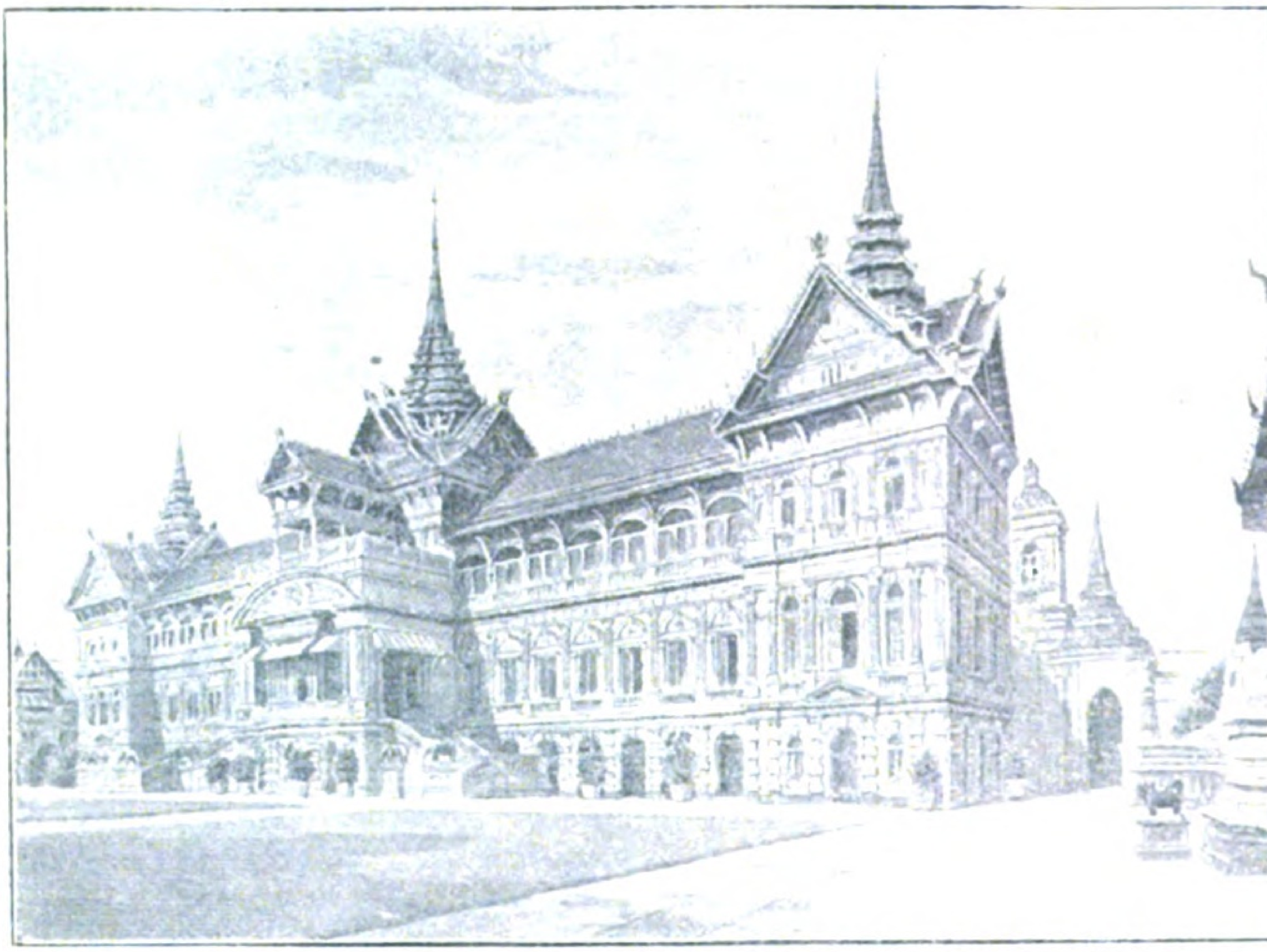
土耳古風俗

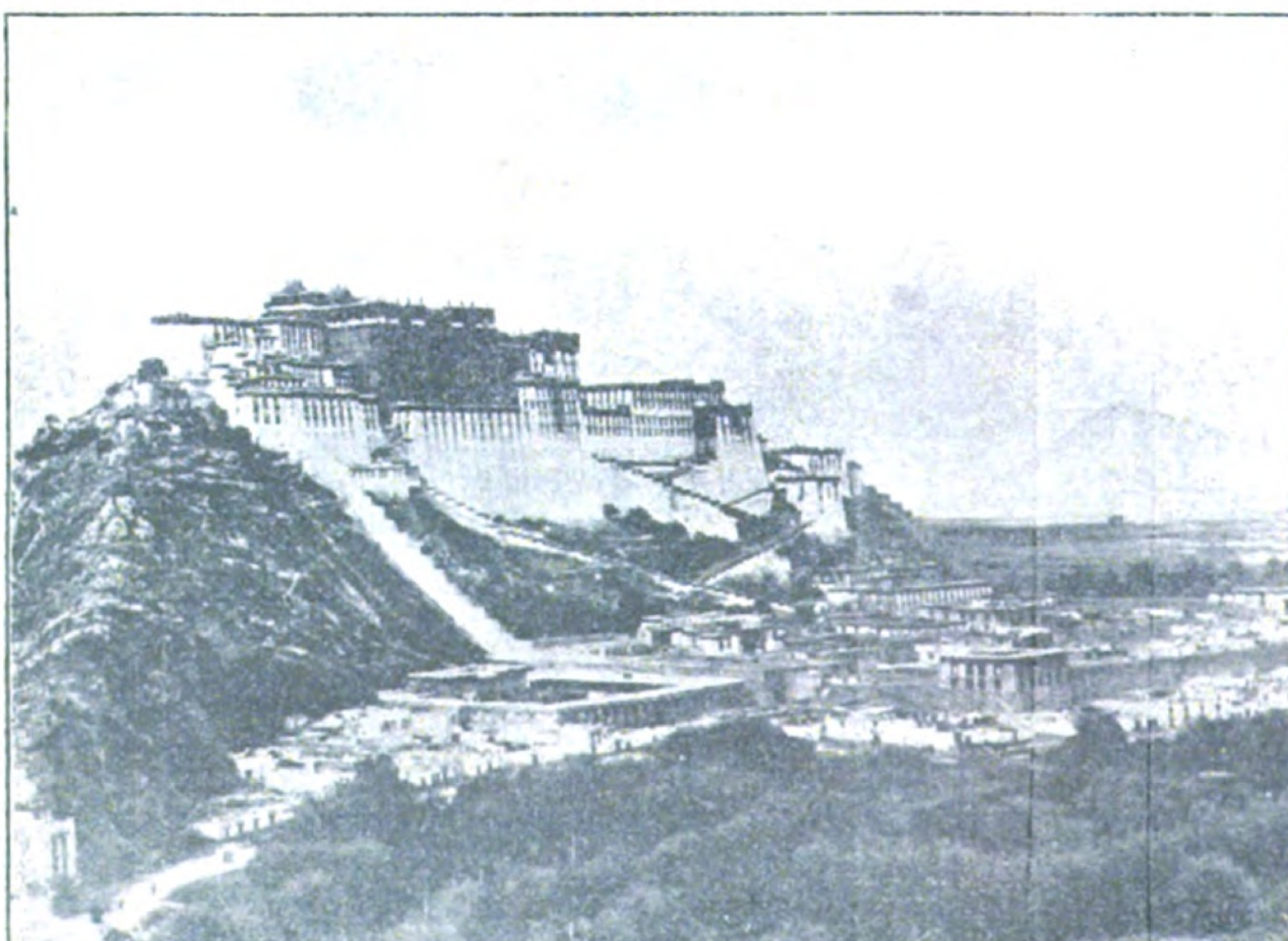
セラムリック祭典の景況



セラムリックとは金曜日に土耳古帝が文武百官を從へて會堂へ參詣さるゝ時の行列なり

暹羅國盤谷府の王宮





西藏國喇嘛法主の宮殿

歐洲の處女



北米加奈陀の處女



墺太利の處女



羅馬尼の處女



日耳曼の處女

米國婦人風俗



米國醫學博士アイ、ビー、デーヴィス氏原著
海軍大軍醫隱岐敬次郎君譯述

女子衛生學 附結婚論

（新刊發賣）

全壹册洋裝袖珍上製
總クロース金文字入
約三百頁頗美本
正價卅錢郵稅六錢

女子衛生學は米國の大醫アイ、ビー、デーヴィス氏の著にして譯者米國漫遊の砌特に著者の委囑に依て譯述を約せしの珍書なり其說く所世の年少婦人特に妙齢の女學生の爲めに懇切叮嚀を極め、片言隻句皆な衛生の原則、人道の眞理ならざるなし、且つ米日素と國俗風習を異にし女尊男卑の淵源たる米人の所說なるにも拘はらず或點までは其主張の頗る孔孟主義（實に女大學）に近邇し又た文明の粹華を訓ふるに拘はらず反つて東洋の敎義に則とれるが如きは最も東西折衷主義を能く發揮して毫も餘蘊なしと謂ふべし尚附錄とする結婚論は文學家として有名なる英國のハーディー氏が世の青年男女の爲めに書かれたる趣味豐多の珍書にして着眼の奇警なる將た觀察の妥當なる讀者をして不覺通讀の妙を得せしむ。

發兌元 東京 博文館

をんな

十年來女學通信敎授に貢獻し無形の大女學校也と世評ある本會は女學講義錄の外をんなと稱する女學雜誌を發行して廣く會員外にも配付し誠實に婦人達の友たらんことを努む第六號目次左の如し

○東洋婦人の長所と短所（黑田侯爵）○婦人に對する我が希望（尾崎行雄）○東洋婦人と西洋婦人との比較（添田博士）○漢書解題（丸井文學士）○大和魂と武士道（大森文學士）○作歌批評（大口鯛二）○作文批評（今泉定介）○結婚要義（本田增次郎）○點茶（松浦伯爵）○挿花（戶川正得）○割烹（石井泰次郎）○育兒上注意（三島博士）○法制談（岡戸法學士）○史傳（下田歌子）○危險の豫防に就て（濱尾作子）其他

◎每月十五日發行紙數百四十頁
代價金十五錢郵稅不要

東京市麹町區下二番町三七
大日本女學會 電話番町一三三〇

（丙の一）

發兌元＝銷夏忘暑

鹽井武島大町三文學士合作

美文韻文 花紅葉

天に春花秋葉の文あり、人間亦文辭なかるべけんや。鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月三文學士の文名、夙に江湖に騒ぐ。其の錦心繡腸、吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、凡そ數十篇、集つて此冊子に在り。才華爛發、紙上珠を聯ね、地に擲たば金石の聲を發せんとす。洵に花紅葉を一時に看るの心地すべく、明治文壇の奇觀たると、言を俟たず。天下文を好むの士、願くば一本を備へて讀誦に資せられんことを。

全一冊袖珍美本 正價參拾錢 郵稅六錢

文學士 鹽井雨江君著

美文韻文 暗香疎影

袖珍美本 正價廿五錢 郵稅六錢

佐々木信綱君、印東昌綱君合著

美文韻文 磯馴松

袖珍美本 正價廿八錢 郵稅六錢

押川春浪君著

●海底軍艦 正價參拾錢 郵稅六錢

●英雄小說 武俠の日本 正價四拾錢 郵稅六錢

●海國冒險奇談 新造軍艦 正價參拾錢 郵稅六錢

●戰時英雄小說 武俠艦隊 正價參拾錢 郵稅六錢

文學士 武島羽衣君著

美文韻文 霓裳微吟

袖珍美本 正價參拾五錢 郵稅六錢

武島文學士が世の歌學者其他文學に志すもの丶爲めに、歌に關する論說、叙事、隨筆、史傳を收輯して、一卷となしたるものなり。皆之れ山の峨々たるが如く、水の洋々たるが如く、琅々誦すべきものならざるはなし。

文學士 土井晚翠君著

天地有情

袖珍美本 正價貳拾五錢 郵稅四錢

峨々の山、洋々の水、以て晚翠君の詩を評すべし。此集君が吟峨を錄して、こゝに美麗の冊子を成す。新體詩中別に一旗幟を樹立するもの、詞華爛熳誠に明治詩壇の新光輝たるに背かず。請ふ愛讀を賜へ。

（丙の二）

之好侶伴——博文館

文學士大町桂月君著

美文韻文 黄菊白菊

全一冊袖珍美本 正價貳拾五錢 郵税六錢

桂月先生の文は、蠻貊を動かすこと已に久し。悲慨の聲を發しては、秋風の老松に激するが如く。哀痛の音を吐きては、孤猿幽澗に叫ぶが如く。句々血を吐き、字々珠を綴る。麗にして沈痛、優にして豪宕、洵に是れ一代の才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を清くし、感情を純潔ならしむ。美文と韻文とを學ぶ者の模範となすに足る。

内田不知庵君著 ●文藝小品 正價廿五錢 郵税六錢

國府犀東君著 ●龍吹鶴語 正價拾五錢 郵税四錢

文學士笹川臨風君著 ●雨絲風片 正價拾五錢 郵税四錢

石井研堂君著 ●雅三俗四 正價拾五錢 郵税六錢

大和田建樹君著

散文韻文 藻鹽木

袖珍美本 正價廿五錢 郵税六錢

國府犀東君著

新體詩集 花ざくろ

袖珍美本 正價卅五錢 郵税六錢

大和田建樹君著

散文韻文 深山櫻

全一冊 袖珍美本 正價四拾錢 郵税八錢

著者大和田先生が文學に深く、措辭に妙なるは世既に定評あり、今此書は新作の散文韻文二百廿餘篇を輯めたる者、一たび之を繙かば櫻の山に分け入りて清香衣襟に滿つる如く讀者をして、手を放つ能はざらしむる妙あるべし

散文韻文 雪月花

全一冊 袖珍美本 正價卅五錢 郵税六錢

其文は清楚婉麗趣味掬すべく、其歌は優雅流滑、奇想天外より來りて句々風を生じ、言々花を降らすものは、大和田先生の筆となす。此編收むる所、近作無慮二百篇、蓋し落寞振はざる今日の文學界中の旗皷たるものは此書を措きて他に又た何かある

(丙の三)

博文館發兌

▲上欄は何れも明治文壇を賑はせし新著にして此外尚數十の小說書類を刊行せり

樋口一葉女史著

一葉全集

洋裝大判四百八十頁
正價四拾錢
郵稅拾錢

一葉女史の文壇に顯はるゝや明治の紫女を以て評せられ其文の優美なる其想の幽玄なる實に稀代の天品なる世既に定評あり本書は女史の遺稿を集成せしもの其生涯の才華收めて此中にあり

村井弦齋君著

◎小說 酒道樂

全二冊洋裝大判上製
正價一册 五拾五錢
郵稅一册 八錢宛

著者の序に曰ふ『酒を飲む者衆し、酒の効用と害毒とを知つて而して飲む者幾人かある、我が小說を讀む者衆し、我が小說の精神を知て而して讀むもの幾人かある、惟ふに知るは易く語るは難し、悟るは易く行ふは尙ほ難し、千萬人中幸に我が精神を知悟して而して行ふものありや否や』と以て其內容を知るに足らん。

若松賤子女史譯述 肖像入
●小公子 全一冊洋裝綴 大判三七四頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

江見水蔭君著 極彩色木版畫口繪挿入
●軍事小說 武裝の卷 全一冊石版表紙 大判二四八頁 正價貳拾五錢 郵稅八錢

理學士依緣軒主人著
●社會主義新小說 文明の大破壞 全一冊洋裝綴 大判四五四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

內田不知庵君著
●社會百面相 全一冊洋裝綴 大判五五四頁 正價五拾五錢 郵稅拾貳錢

博文館編輯局校訂

◎修紫田舍源氏

全一冊中判美本
正價六拾錢
郵稅拾六錢

源氏物語の古雅なるを俗化し、美文圈中に一新機軸を開きたる柳亭種彥の傑作たる田舍源氏は行文艶麗にして趣向優雅實に時代人情の機微を發揮せるもの、原文總假名なるを校訂し本書となせり蓋し江戶文學の粹なり。

博文館編輯局校訂
●種彥傑作集 全一冊背皮上綴 中判一一八〇頁 正價六拾錢 郵稅拾六錢

博文館編輯局校訂
●京傳傑作集 全一冊背皮上綴 中判一一五〇頁 正價六拾錢 郵稅拾六錢

博文館編輯局校訂
●三馬傑作集 全一冊背皮上綴 中判一〇五〇頁 正價六拾錢 郵稅拾六錢

幸堂得知君校訂
●名家短篇傑作集 全一冊背皮上綴 中判一〇三六頁 正價六拾錢 郵稅拾六錢

博文館編輯局校訂

俳優全集

全一冊中判美本
正價六拾錢
郵稅拾四錢

目次

(丙の四)

小說書類

●聚寶盆　饗庭篁村君著
全一冊紙皮上綴　小判四九二頁　賣價貳拾五錢　郵稅六錢

●戀　江見水蔭君　寫眞銅版挿入
全一冊紙皮上綴　小判三八二頁　正價參拾錢　郵稅四錢

●星　江見水蔭君著　寫眞銅版挿入
全一冊紙皮上綴　小判六八四頁　賣價貳拾五錢　郵稅八錢

●福　鶯亭金升君著　新撰落語
全一冊紙皮上綴　小判三一二頁　正價參拾錢　郵稅六錢

村井弦齋君著

◎小說女道樂

和裝大判上製　定價八拾錢　郵稅拾貳錢

酒道樂は過ちで御座る、女道樂は罪で御座る、男振のよき人此罪を作り、金のある人此罪を作り、權勢地位のある人此罪を作る、主人一人の罪作りは、妻子眷族一家親類迄、如何なる影響を及ぼすべきや、人は鏡に對して顏を磨く何ぞ其書を讀んで其心を磨かざる、此書は心の鏡なり、美貌も映じ醜顏も寫る親は子に與へて心を照さしむべく、妻は夫に捧げて其行ひを正さしむべし、文明の世の家庭道具は一日も心の鏡なくて濟むべき。

若松賤子女史遺稿　櫻井鷗村君編纂

忘れがたみ

中判上製六百卅頁　正價金壹圓　郵稅拾錢

目次

○忘れ形見○難嫁○セーラ、クルー物語○我宿の花○波のまに〱○イナック、アーデン物語○入學前○ひろひ兒○林のぬし○鼻で鎚○邪推○榮公の誕生日○淋しき岩○病母と小倅○砂糖の隠所○箸物なる木○けんつく踊○黃金機會○ローレンス○女房演說○お向ふの離れ○おもひで

▲下欄は明治以前の幾萬卷の珍貴を網羅せる帝國文庫正續壹百冊の一部分なり

博文館編輯局校訂

北雪美譚時代鏡

全一冊中判美本　正價六拾錢　郵稅拾六錢

かゞみ山は悲劇中の傑作として久しく行はるゝ所なるが更に潤色を加へて麗はしき文章となしたるもの本書是なり、全篇四十餘卷正邪相鬪ひ美惡相搏ち千變萬化其妙其快蓋し又稗史中の魁と云ふべし

●兒雷也豪傑譚　博文館編輯局校訂
全一冊脊皮上綴　中判一〇四〇頁　正價六拾錢　郵稅拾四錢

●近世說美少年錄　博文館編輯局校訂
全一冊脊皮上綴　中判一二〇〇頁　正價六拾錢　郵稅拾六錢

●校訂黃表紙百種　幸堂得知君校訂
全一冊脊皮上綴　中判一〇九二頁　正價六拾錢　郵稅拾四錢

●梅暦春告鳥　博文館編輯局校訂
全一冊脊皮上綴　中判一二八〇頁　正價六拾錢　郵稅拾六錢

博文館編輯局校訂

◎傾城水滸傳

全一冊中判美本　定價六拾錢　郵稅拾四錢

曲亭馬琴翁が水滸傳を飜案して婦人世界となし艶虎嬌龍を出して大に其技倆を鬪はしむるもの結構の奇文辭の妙讀者をして一讀再讀飽くことなからしむ。

◎水滸傳

全三冊中判美本　正價一冊六拾錢　郵稅一冊拾四錢

(丙の五)

坪谷水哉君著

（兩卷共銅版刷市街精測圖二十餘葉、寫眞銅版八十餘面、及全國各半部詳密着色大地圖添附）



上下二冊洋裝中判長形
總クロース金文字入美本
正價一冊壹圓 郵税一冊拾錢宛

上卷 日本東半部 東山道、東海道、北陸道、北海道

下卷 日本西半部 近畿、中國、四國、九州、琉球及臺灣

上卷に對する東京朝日新聞の評

坪谷水哉氏の編纂に係り東海、東山、北陸、北海の四道を收め名勝舊蹟は更なり順路、旅館、物產等に至る迄細大漏さず挿入せる寫眞版は手の物なれば殊に麗はしく別て細密なる全國地圖を附せるなど其用意の周到なる在來案内書の缺點を遺憾なく補ひたるに似たり頁數六百三十餘頁に旅客の好伴侶たるを失はず

下卷に對する國民新聞の評

漫遊案内の上乘なるもの上卷東半部を合せて完成せり猶續卷として韓滿の分の早く出づるを待つ漫遊者及地理學者は此書によつて到る處の名勝舊蹟都市に其歷史を知り地理に通ずべく各道縣郡交通等の形跡亦之によつて掌を指すが如くならん挿入せる地圖は詳細なり製本の體裁も高尙なり

大橋

◉千山萬水
◉續千山萬水

全二冊洋裝袖珍
頗る美本紙數千三百頁正價一冊五拾錢郵税拾錢宛

野崎左文君 田山花袋君共著

改訂增補 漫遊案内

袖珍美本
正價五拾錢
郵税八錢

（丙の六）

之良師友——博文館

乙羽君著

本書は辱くも九重の聖覽を賜ふの榮を得前古稀有の美本として内外の喝采を博し發賣以來既に十七版を刊行するの盛運に會す各地の名山古蹟勝景等優美なる色刷寫眞版數百景を挿入して一々懇切に詳述したれば一面完全なる旅行案内たると同時に婉麗なる大文章なり而して前編には東北地方を記し續編は西南部を專叙せり

大橋乙羽君著

耶馬溪

袖珍顛美本
正價四拾錢
郵税四錢

文學士大町桂月君著

一簑一笠

袖珍美本
正價參拾錢
郵税六錢

桂月先生筆に健にして又脚に健なり閑あれば則筆を載せて飄々として天下の名山大川に遊び興到り筆を落せば筆に聲あり筆致或は勇壯或は優婉花の如き美詞となり達意流暢の佳篇となり千變萬化端倪すべからず此一篇先生の紀行を集む山や川や先生の才筆に驅られて紙表に躍動す

文學士久保天隨君著

檜木笠

袖珍美本
正價貳拾五錢
郵税六錢

此書久保氏の紀行文廿餘篇を輯めたるもの文中時々詩併を加ふ閑窓の下淨机の上試みに一讀すれば紛々たる俗塵を隔離して相伴ふて遠く去り青山白水の間に逍遙するの感あらん

田山花袋君著

南船北馬

全一册袖珍金字入美本
正價四拾錢　郵税六錢

續南船北馬

全一册袖珍金字入美本
賣價廿五錢　郵税六錢

隨處に感興を作り到る處に詩想を着するは花袋氏の紀行なり、殊に氏は暗勝の見に富みて殘山剩水處として至らざるなく探らざるなければ、其紀文は珍談奇話百出して或は溪村の夕或は深山の夜或は怒濤岸を嚙むの邊或は山中の湖畔など他の紀行文に見るべからざるの趣味あり。

流暢なる行文を以て詳かに日本全國各地の名勝を紹介したるものにして其如何に世の歡迎を受けしやは發賣以來其第廿五版を重ねたるを見ても知らるべし而して社會の事情は年と共に改まるを以て田山花袋君主任となり修訂大增補をなし大に紙數を增し面目を一新して江湖の需用に應ず。

萬朝報社探凉軍記者合著

東北西南 探凉案内

中判美本七百頁
正價參拾錢
郵税拾錢

日本鐵道會社編纂

日本鐵道路線案内記

中判五百七十頁
正價四拾五錢
郵税拾四錢

（丙の七）

曠古空前の大海戰＝唯一無二の珍寫眞

寫眞畫報 第八拾貳編 第貳拾八卷 臨時增刊

日本海大海戰

七月二十日發行

全一册洋裝大判
寫眞口繪五拾頁
正價金貳拾錢
郵稅貳錢

◉口繪＝空前の大海戰 中村不折君畫
◉附錄＝日本海戰鬪地圖

本編に收むる所の日本海々戰々況は左の如し

一朝日艦上より同艦機關長關機關大監の撮影せられたるもの
一常磐艦上より同艦軍醫長羽太軍醫中監の撮影せられたるもの
一日進艦上より同艦副長秀島海軍中佐の撮影せられたるもの
一特務艦八幡丸より同艦機關長佐橋機關士の撮影せられたるもの
一大本營の囑托に由る光村利藻氏寫眞部舞鶴及佐世保特派員の撮影せられたるもの

以上五拾餘種の寫眞は、盡く五月廿七八兩日激戰の開始より敵艦降伏、捕虜收容、捕獲艦根據地到着までの實況にして、曠古大海戰の光景は、盡く目前に在り、眞に萬世不滅の絶好紀念物たり。世に同種類の名を冠して、實は往年海軍演習當時の寫眞を排列せるものと、全然選を異にす。這般各方面の實戰寫眞を盡く網羅して世に公にするを得たるは、本館の最も光榮とする所なり。

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

(丙の八)



女學世界定期增刊

第五卷第拾號

（七月十五日發行）

細戈千足の國、豐榮登る旭日の勢をもて世界に優勢の地歩を占むるに至るや、世界各國の人々は驚嘆の眼を以て我を仰視し、畏敬の心を以て我を賞讃し、大和民族の奇しき眞相を知らんことに努めつゝあるや必せり、是れ偏に聖上陛下御稜威の致す所、我等は之を空前の光榮として斯る盛代に生れ合せたる幸運を欣ぶものなり、されど此の時に當り我等唯だ強を恃み武に驕り、徒らに國粹を主張するのみにして可ならんや、我よりも亦た大に進んで世界民衆の事情を窮め、己に資す所なかる可からざるなり、今、坤圓球上に家庭をなすものゝ風俗習慣を蒐めて一卷となすもの、聊か長を採り短を補ひ、以て隆々の國運に貢献せんと欲するの微意に外ならざる也。

英國家庭の基礎

佐藤顯理

先づ英國の家庭事情を御話しするのには、日本の家といふ考を全く離れて御話しせんければならんと思ふ。

其處で英語の Home といふ事を家庭と譯しますのも、家族の集團といふ意味から見れば、不相當の譯では無いが、西洋と東洋との家族の組織、家政の基礎が著しく違ふて居るから、茲に能く注意して考究せずしては、西洋に於て最も美なりとするものが却つて甚だ厭はしく見えたり、又先方に於て一寸した弊害のやうに思つて居る事が、我目には隨分酷い事のやうに見えたりして、判斷を誤る事がある。

故に私は先づホームといふ英語の定義から御話し致しませう、ホームとは或學者の言はれたる如く洗禮を受けたる言葉で、換言すれば基督教々義より生れ來つた言葉であります、此基督教主義を土臺として組織されたる家庭が、即ち目下英國に行はるゝ處の家族的生活で御座います、基督教は一夫多妻主義の猶太教流義を排して、一夫一婦主義を唱道したる教宗でありまして、新約全書の中に「人は其兩親を捨てゝ其妻に附くべし」といふ事が明に書いてある、我國に於て此教義を其儘實行したならば、申す迄も無く敷島の大和心も全く失せて日本の家庭其物の神髄を滅却し、土臺を崩壞して二千餘年間繼續したる優美なる國家を覆滅する事になります。耶蘇の此一言は家長渇仰、祖先拜崇に基いて父子の情義を生み出したる我國傳來の制度には到底應用の出來ぬ事で御座います。

然し我國に應用が出來ぬからと言つて一槪に惡いものだと斷定する事は大早計であります。

私の見る處を以てすれば、今日英國家庭の美と力との存して居る處は、蓋し基督の此一言に基因するものでは無いかと思はれます、歐洲太古の事はイザ知らず、彼の蕃土が基督敎の敎化を受けて以來、基督敎に於ける夫婦尊重主義は深く其家庭の土臺を作つて、之れより生れ來りたる一美事は彼の近世學者の所謂 Individualism 即ち個人主義の發達にして、之れを極端に害用せば俗に所謂我利々々主義に流れますが、其處には幸ひ然るべき調和劑が加はつて、今日英

倫敦風俗(1)



婦人の弓戯

國あたりの父子の關係を見るに、親は子を育つる義務がある故之を育てる、勿論親子の愛情は此間に充分存在しては居るが、兎に角主義とする處は親たるものは子供を敎育し獨立獨歩の出來るものにしてやる可きもの、子たるものは可及的早く自立して親に世話を掛けぬやうにする、自分の事は自ら之れを處理し親始め、其他の者に厄介を掛けぬやうにする、所謂自ら助け自ら立つの主義を實行する事に努めて居ります。去れば英國あたりの小學校生徒抔を見ますのに、良い家庭に育つた子供は、其幼少の時より既に自立獨歩の精神を保持し、自分の事は成丈

け他人の手に掛けぬやうにして居ります。一寸例を引いて申せば、日本で月收五百圓以上ある家の男の子が、小學一二年の生徒で日々學校に通ふとすれば、其家の書生が見送りをするか、乃至は乳母や下婢が其子の學校へ持つて行く書物、石盤鉛筆に至るまで之れを取纏めて風呂敷若しくは鞄に入れて一切の世話をして遣りますから、坊ちやんは時間が來たら唯だニユーッと學校へ出掛けて行けばよいので、必要品は皆外の者が注意して與れ、甚しきに至つては靴までも穿かしてやる、若樣々々と頻りに之を崇め奉るのが立派な家の子であるから、誰れも怪むものは無い、子供も稚い時から人を頤使する事に慣れて、自分より目下の者を見れば、自分の手で出來得る事までも他人にさせて平氣で居るといふ習慣がある、之れは極端なる惡例を私が申上げた次第であるが、英國に例を取つて申上ぐれば、日本の前に申した家庭に匹敵する位の暮しをして居る家の子供でも、其身の廻りの事に他人の手を煩はすやうな事は毛頭無く、夫れ以上則ち日本ではお大名とも言はるゝ家柄の子であつても、男女を論せず幼少の折から自分の身の廻りの事は他人の手に掛けぬやうにする習慣を充分養成して御座います。日本の子供は他人に靴を穿かして貰つたと云つて、自慢こそすれ決して之れを耻とは思はんが、若し英國の子供にお前は靴をお母さんに穿かせて貰ふだらうなど聞く人があらば、必ず其人は拳骨の御見舞を受くる覺悟をせなければならぬ。要するに、獨立獨歩といふ事を神髓として組織したるが英國の家庭で、其本源たる基督教は其儘我國に實行する事は出來ないが、夫れより生み出したる結果則ち個人主義といふものに、然るべき調和劑を加味して我國の家政に應用したならば尠からぬ利益ある事は信じて疑ひません。

更に一例を舉げて申せば日本の親の中には郵便貯金でもする心持で子を育てゝ居る者がある、曰く今は苦しいが、此子が成人すれば私共に樂をさせて與れますと始めから老後は我子の厄介になる事と極めて居る奴があるが。少くとも此類の貯金的育兒法の弊を挽める

事は乾度出來ませう、又子としてよい年をしながら親の脛を嚙つて平氣で居る意氣地無しの青年を鞭撻奬勵して將來有爲の男子たらしむる刺激劑にはならうと思ふ。詳細の事項に關しては更に申上げる事として概要斯な事で局を結んで置ますが、近頃の青年男女間に頻りに唱道されて居る Sweet home 抔いふ事は、原來が基督教主義から生れて來た言葉であるから、之れを其儘日本に應用すれば、根本から日本の家族組織を覆へすやうな事になります、此點に關しては私も常に寒心して居りまするので、斯くの如き事を夢想して居る青年男女を一日も早く覺醒せしめたいので御座います。

以上氏の談話を筆記したるものなれば文責は記者にあり

英國の貴婦人社會

附り健全なる中等家庭

歐洲各國の上流社會は一般に、學問、智識、資產、能力に富んで居るが、就中英國の上流社會は智識、財產、學問、能力の府である、彼等上流社會、即ち貴族はいづれも數世紀以前の地方の領主で、前代より持ち續いた財產を以て家計を營んで居るのであるが、多くは鐵道、鑛山、地面、其他工業會社の株券などが其重なるもので、其大なるものは數千萬圓、小なるも四五十萬圓の世襲財產があッて、是より生ずる年々の收入が一家生計の基礎となつて居るのである。

彼等の主人公たるものは概ねケンブリッヂ、若くはオックスフホルド等模範的大學を卒業して、世界的教育を受け、卒業後は二ヶ年乃至三四ヶ年間歐洲大陸は勿論、世界各國を漫遊して、智識、見聞を廣め、或は印度、濠洲、又南米等の各殖民地を歷訪し、又は未開

地を探檢して新聞の材料を富ますものもあり、兎に角彼等が一家の主人となるまでには、學問と實際の見聞を廣むる爲めには、種々なる困難を冒して其の心身を鍛錬するのである、それ故、英國の貴族は他の東洋諸國の貴族に比して生理的にも心理的にも極めて健康である。されば一旦家督を相續して主人となり、何々公爵、何々伯爵となつても決して懐手してゐるものはなく、あらゆる公共事業に關係して活潑に立働らいて居る、で、まづ働らく方面はといふと、公吏としては國會議員、市町、村長で是等は勿論無俸給の名譽職であるが、其外某々の學會、其々の組合等を組織して金錢、又勢力を義捐し、或は某の探檢事業に盡力して一世の功業を助けた事などは中々多い、彼の有名なる、北極探檢、又亞弗利加探檢、或は地學協會、其他種々なる學術の研究に投資して事業を補助して居る、是等すべて貴族といへる一階級の智識と財產の力に依つて英國が今日の文明を致した事は非常なものである、其外義勇兵となつて國家の干城となり、又著述家や、音樂家や、美術家となつてそれ〲不朽の製作に従事して居るものも中々多い、兎に角英國の貴族は一般に社會的義務の念に富んでゐて一人として尸位素餐の者はないといふてよいのである。

主人公既に此の如くであるから貴族の婦人となるものも又實に公共的に働らかねばならない。勿論貴族の婦人は其の家計の裕な處から、一家の事は大概家人に任せてある、タトエば子供が幾人あつても其の生活は一切保姆に委せきりで、時々注意を與へる位に止まる、又庖厨の事はそれ〲料理人を雇ふてあるので自身に臺所に出掛て手を下す事もない、貴族の有福なるに至つては多く巴里から料理人を雇ふの例であるが、其の料理人は年俸五六千圓も取ッて、大きなホテルや、料理屋の割烹の指南役で、如何なる大饗宴の献立をも難なく賄ふほどの者であるから、中々上手で手腕を揮ふて種々の佳肴珍味を卓上に備へるのである、其外、衣裳や、調度、又は室内の装飾、家事會計等はそれ〲侍婢もあり、家從もありて萬事受持ッて立働らいて居

るのである、それ故一家の主婦たるものは、只それを程よぐ命令指揮する丈であるから、表面から見ると極めて氣樂なものゝやうであるが、併し、それは只家に居る時の事で、一度び此貴婦人が戸外の事に關係しては中々容易ならぬ氣骨折があるのである。

一體英國の風習としては、貴婦人が家に蟄居する事を免されない、苟くも貴族の婦人が、自分勝手に戸内的生活のみを續けては到底、其の家名を維持する事は出來ないのである。さてその家名維持の第一資格が交際法である、英國貴婦人が社交界の花である如

倫敦風俗(2)



クロケット

く、苟くも上流社會の婦人たる以上は此道の一と通りの習慣には熟練しなくてはならない、即ちお世辭に巧で、愛想がよくて、話の材料に富んで客を待遇するに妙を得て、萬事如才なく立廻つて、文藝の道一通は心得て居らねばならぬ、音樂や舞踏は勿論、社會の出來事、當世の大問題など能く呑込んでゐて客に向つてそれ〴〵話を合せて行かねばならず、又塲合によつて適當な問題を捉へて其席を賑はす事などは千變萬化の秘術を盡して交際社會を切り廻さねばならぬ、若し其

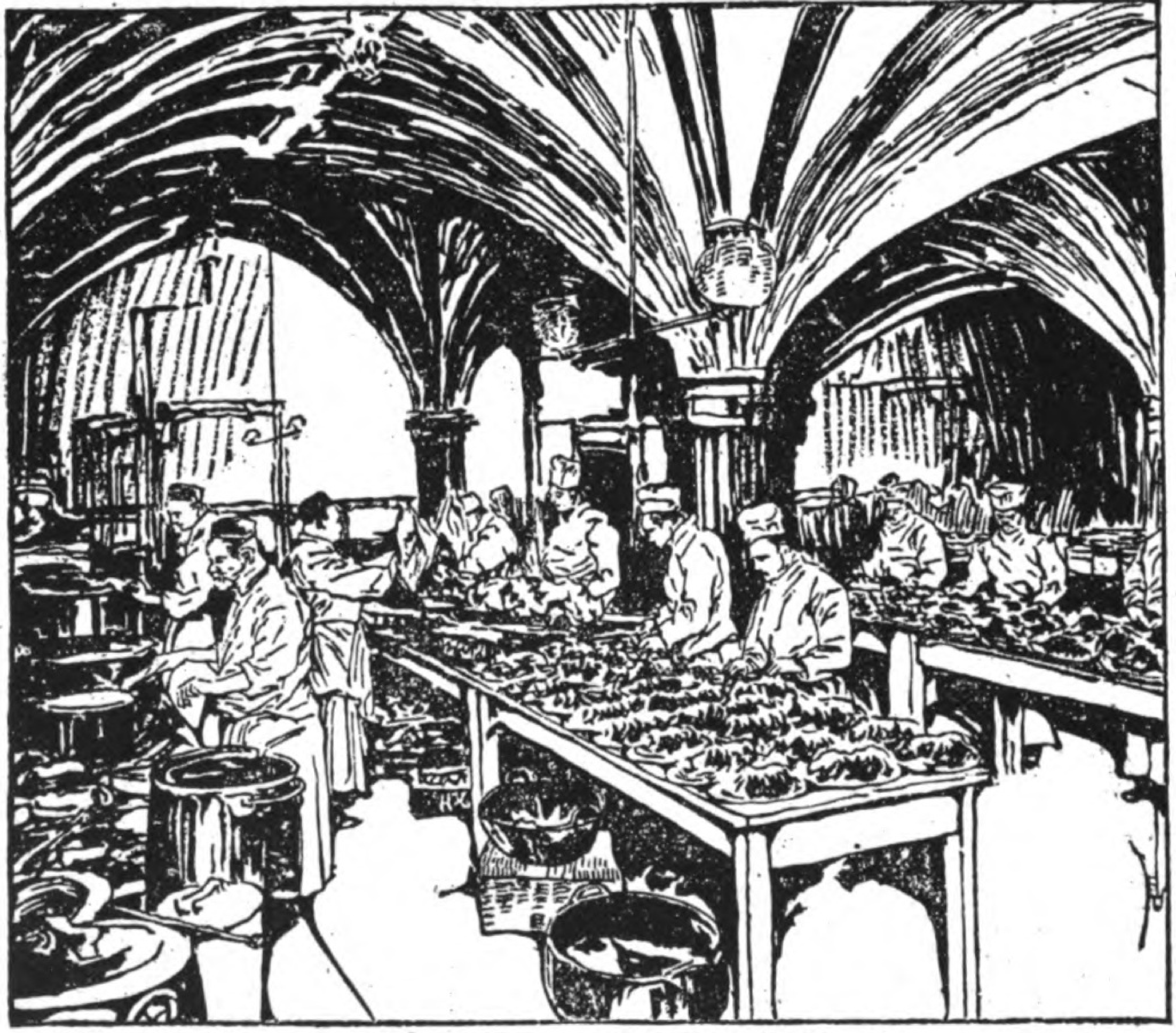
心得が未熟で交際場裏で戸迷ひをするか、又は何かの疎忽で一歩其の道を誤ると、甚だしく擯斥を受けて終生顔出しの出來ぬやうな事がある、時には無實の艶名などを流して夫妻共に社交界から遠けられたものも少くない、斯る次第であるから此の交際は貴婦人の大役で、一生の心血は殆んどこの交際術の練習にあるといつてもよい位である、其様は恰もむかし支那宮廷の後闈で三千の美人が如何にばせ、帝の特寵を得るかに汲々として居たのと比すべきものである、英國の貴婦人たるもの又實に辛らい事と云はねばならぬ、のみならず、其外名譽の報酬地位の義務として又各所の慈善事業に出席せねばならぬ、或は某の貧民學校を訪ふて幾干かの義捐をなし、或は某の競技會に出席して金嚢を寄附し、其他音樂會、慈善市、夜會、園遊會などの催ふしには一々出席して其社會の御機嫌を取らねばならぬから中々骨の折れる役目で身に相應の資格が出來て居ないと迚も務めきれないのである、英國の貴婦人が多く世界漫遊を企て、或は容易に人の行かない未開地などへ出掛け、或は各地の名士、英傑と交際を結び、見聞を廣め話の材料を貯蓄するのは一つは其の本國へ歸つて他日交際場裏へ雄飛せんとの野心からである。所詮英國上流社會の婦人は引込思案では成立たないのである、若し交際場裏に出づる事がうるさいといつて役目を逃れやうとすると、其の貴婦人は勿論、其家族は世間から擯斥されて、悲慘な境界に陷るのみならず、新聞紙などに其過失を發き出されて甚だしく攻擊罵詈を加へられるのである、或る觀察者が英國の交際社會を評して鐵條を曳きはへた上で舞踏をし、劍の上を渡つて曲馬をするやうなものであるといつたが、考へて見ると實に其の通りで未熟なものには危險、此上もなく、其の代り熟練して來ると縱橫の技術神に入つて人を感動せしむる事名人の藝も及ばないのである。

△貴婦人の家庭生活

貴婦人の日課は朝は大抵九時半頃に起き、朝餐前に寢室で、ミルク入の咖啡一杯を呑み、それから化粧室に入つて身體を洗滌し、身じまひをなし、正服に着代

へて食堂に出で、家族と一緒に食卓に就くのである、朝の食事は大概燒パン、スープ、珈琲、野菜、鷄卵、冷肉種々の菓子類等で比較的簡單な者である。終ると書齋に入つて手紙を認め、新聞雜誌を通讀し、よきほどの時間を過し、それから小兒養育室に行つて小供の事に氣を配り娛母にそれ〲注意を與へ、その役目が濟むと、直ちに馬車を命じて病院や貧民學校、育兒院などを見舞ひ、其處で演說を

倫敦風俗 (3)



市長官舍の地下割烹室

するとか又は寄附金をするのである。歸れば丁度晝餐の時刻となるから、午後一時から二時の間を食事に費し、食後友人など訪問し、又先方の訪問を受けなどして二三時間を過ごすのであるが、日によりて在宅日と訪問日とを定めてある、四時は喫茶の時刻で、折ぶし訪問に來た人や家の小兒達と一緒に、種々なる談話をして時を移し、午後の七時に晩餐につ

くのであるが此時は主人も主婦も禮服に改ためて、訪問者があれば訪問者と一緒に食事をする、晩餐は一日中盛饌の時で、卓上は種々の草花もて奇麗に飾り、大凡料理は七八品より十二三品、元來英國の庖厨は世界的で有名となつてゐる、即ち世界各國の材料を集めて献立するもので如何なる下等社會の膳部でも自國の食物ばかりで献立する事は出來ない位であるが、殊に貴族の食卓となつては食品中の二三種を除いては皆外國船來のものである。近くは佛蘭西、露西亞遠くは印度南米南洋の品々で、一杯のチヨコレート、一盞の葡萄酒、一顆の菓物、一片の肉とても決して自國で生產したものはない、であるから英國貴族の晩餐に一度招かれると世界各國の生產が一目の下に判別される程である、そこで食事中は種々のおもしろき話が集つて極めて愉快であり、多くの世界的智識は食事中に交換されるのであるから、晩餐の席上は又實に世界的學問の研究所といつてもよい位である、食事が濟むと音樂や、舞踏、其他文學、宗教に因みのある高尚な遊び事が催ふされて夜を更すのである。若し訪問者の中に男女の客が多ければ、一時間ばかり男女別々になつて婦人は客間に分れて女同士さま〴〵の話や遊び事をして樂しむのである。此間男子は食堂に殘つて喫煙をなし、又ビールなどを飲むの例である。男女別々の會談が濟むと婦人も一緒に食堂に落ち合つて又樣々の遊戯をして十二時頃まで過すのである。

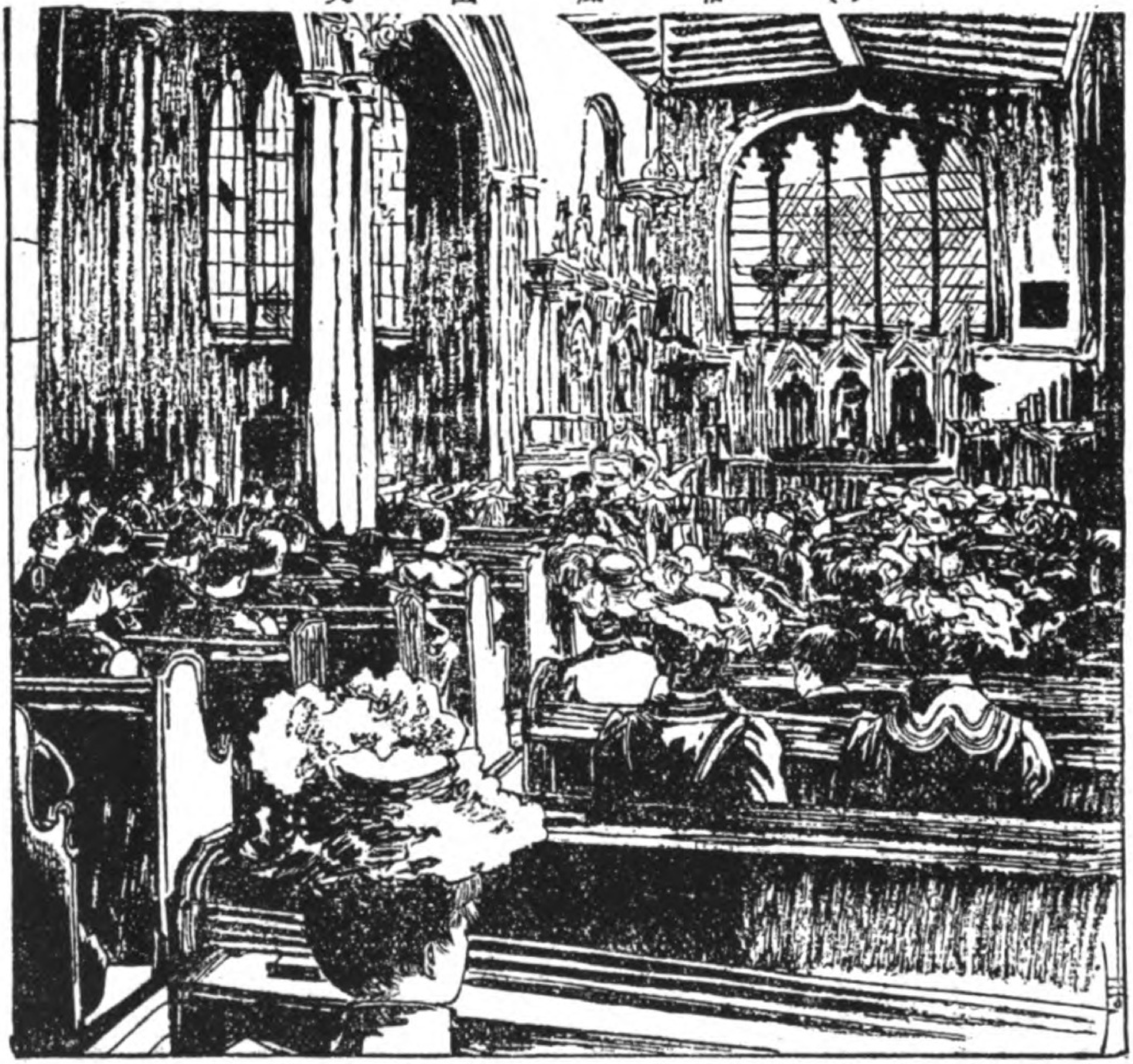
兎に角英國の貴婦人は家庭内では別に是れといつて仕事はない、日課の大部分は知友の訪問、來客の應接、會食、茶話、音樂、舞踏などである。

△中流の家庭生活

英國の上流婦人は社交的であるが、之に反して中等社會の婦人は家政的である、英國の貴婦人が社交の花であると同時に、中流婦人は家政の中軸である。一方は花の如きに比して一方は實の如きものである、英國中流社會の婦人は日本の中等社會の婦人と同じ位地にありて專ら家政を取り、子女の敎養より、近隣の附合、知己友人の家々の訪問をもなし、すべて夫の相談相手

となりて家事を取り賄つて行くのである。又婦人家政の大部分たる衣服の調製は上等晴衣の外はすべて自分で裁縫し、洗濯し、食事庖厨の事をも下女に任す事なく自から手を下して調理鹽梅し廉價の品を甘く調理して膳に上せるのである。英國の諺に「麵包を揑ねる力のないものは嫁に娶るな」とあるが、英國中流の主婦は自分で麵包をも揑ねる事もやるのである、すべて庖厨の品や衣服は主婦が自から市場に出向いて買ひ求め、日用の菓子やジヤムやバタなどは自分で拵ゆるのである。で英國の中流社會では主婦は實に活きた料理全書でなくてはならない程である。

英國風俗(4)



倫敦教會に於ける日曜日の禮拜

彼等の日課は朝は七時に起き毎日の規則として冷水浴をする、この冷水浴は神經や皮膚を強壯にする健全

法で如何なる嚴寒の日も休む事はない、冷水浴が濟むと衣服其他裝飾をなし、下女の手助をして八時から九時に一家族卓を圍みて朝飯を採る朝餐は大概パン、鷄卵、肉類、菓子、バタ位である、食前に祈禱會がある、此時は主人が司會者となり聖書を讀み讃美歌を歌ふ、食後新聞を讀み、會話をなす、其中子供は學校に行き主人は勤めに出づる、細君は家に殘ッて下女の掃除を指圖し、室内を裝飾し、彼是して家の役目が濟むと市場に出でゝ日用の諸物品を買ひ求め、歸宅後は衣服を繕ひ、編物をなし、又一週間の中に洗濯日あり、掃除日あり、食物を調へ置く日ありて、それ〴〵專問的日課の時があるからこれ等の日にはいづれも下女を指揮して行ふのである、

晝食は十二時で、食後より二時までの間に下婢と晩餐の準備に取かゝり、午後三時より友人を訪問し又來客あれば應接し、午後四時の喫茶の時間に茶菓子を整へそれより七時半に一同晩餐の席に就くのである、晩餐の時は如何なる家でも屹度晩餐服に着かへて席に就く、これは家庭に取ッては一日中最も愉快な時で、主人が日々の勤勞辛苦を慰するのは實に此の晩餐の時である、妻女が一日の出來事を話題に上せて巨細取交せて話すのも此の時である、されば一家團欒して和氣靄々として睦み樂しみ互に何の隔もなく笑ひ興ずるのである、或る觀察者が英國中流社會の晩餐時を評して地上の樂園であるといつた、誠に其の通りで、王公も其の樂みを奪ふことは出來ないのである、僞らず飾らず、情濃やかにして、天眞の流露するは英國中流社會の晩餐に於て始めて發見し得るのである、食事が濟むと主婦は洋琴を彈き、夫は謠ふ、子供は躍るといふ騷ぎ、眞に此の世の天國である。

英國の中流社會は健全の標本である、小兒は活潑、老人は無邪氣、壯者は健康でよく勤め且つよく遊ぶ、遊びは戸外の遊戲甚だ盛んで、テニス、コロッケ、クリケットなど最も行はれ、室内では舞踏玉突、將棊それ〴〵の遊戲が行はれ、夕方又は休日には夫婦親子、兄弟相集りて無邪氣に遊び暮らすのである、蓋し英國の富强は中等社會の健全にあり、中等社會の健全なるは全く其の家庭の美しい處にあるのである。

佛國の家庭生活

樋口勘次郎

私などよりもつと適當の人がありませうが。折角のお尋ねであるから、自分が留學中に看察したことの概畧をお話し申しませう。イギリスの家庭、ドイツの家庭などの話もお載せなさるとあれば、西洋諸國に共通のことなどは、餘りいはぬことにしませうか。といつて誰も彼も各國に特別のこと丈けを話しては、西洋の事情を貴誌の讀者に知らせようとする御趣旨に適ひませう。

又同じ佛國の家庭といつても、巴里と田舍とでは非常の相異があり、上流社會と下等社會とでも著しくちがひ、看察者の見地、談話の目的如何によつても取捨の材料が變つて來ねばならぬことは勿論で、色々考へると、かゝる範圍の定めがたいことを突然とお話しすることは中々の難題であります。

フランスといへば、すぐに巴里を連想する、實に巴里をのぞいては佛蘭西はゼロになるといつてもよい。巴里が佛國の中心であることは他國の首府が、其の國の中心であるよりも甚しいから、巴里のことを主としてお話しいたしませうが。

思ふに「女學世界」の讀者の大多數は、我國の中等社會に屬する人々であらうから。向ふの同階級の社會のことに、重きを置くことを至當と考へる。而して私は教育者として看察して來たのであるが、衣食住及び風俗習慣のことなどをといふ御希望であるから、それらのことを焼點として材料を選擇しませう。

△上等社會

巴里といへば非常なはでやかなところ、綺羅を着け寶玉を飾つて、贅澤な生活をして居るところの樣に一寸傳へられてあるのは、二三週間滯在の遊歴者には博物館や、宮殿や貴族町や、遊藝場の外を見て居る暇がないからと、人に話すには、さういふ方面のことが最も興味があるからとによりませう、

いかにも、地主、屋主、金持等のミリオネール（百萬以上の身代あるもの）等は、朝夕馬に乘り、馬車を驅り、自動車を走らせて、或はブーローギユ公園にあそび、或はグランブルバー（大通り）をさまよひ、或は劇場を訪ひ、或は、舞踏會に臨みなどして、蜂蝶の花に戯るゝが如く、天女の仙郷に狂ふが如く、遊び暮してをるものが多い、其の子女の家庭に於て學ぶ所は美容術である。化粧法である、交際の藝、談話の技、音樂、唱歌、舞踏等である。彼等の用ゐてゐる料理人の給料は、月額百五十圓より二百圓を越ゆる者が多い折々二十人三十人の客を招いて饗應をして自分等夫婦もまたよそに屢々よばれて行へ、お互に訪つたり、とはれたりする。芝居見に行き。音樂會に行き、舞踏會に行くなどいふが、彼等の日課と夜の仕事とである。從て衣服も華美を競ひ、流行をおひ、女子は頸飾、腕輪、指環、などまでこめるときは常に數萬法の價の物を身につけてをるといつてよい。男子でも朝と晝と夕と衣服を改めお化粧をしなほすといふ有樣で、日本のハイカラ連などは、三舍も五舍も避けねばなるまいとおもはれる、住所の裝飾なども、一個幾千圓の彫刻一枚幾萬圓の額などでかざられて、いはゆる善つくし美盡した生活をしてをるといつてよい。

△中等社會

併し中等社會以下になると、存外質素な生活で、奥さん方が中々儉約で、吾々の眼にはけちだとまで思はれることが少くない。どんな家でも、どんな人でも、下女でも、下男でも、職工でも、官吏でも、教員でも月々いくらかづゝの貯蓄をして行くことを絶對の義務と考へて居るらしい。フランスは、世界で一番貯金の多い國の一つであることは人の知つて居るとほりであ

る、巴里丈けの郵便貯金の預高が、日本全國のそれよりも八九百萬圓も多い樣に覺えてをる。千圓の收入があるものならば、其の十分の一、少くとも十二分の一即一ヶ月分は貯蓄する風といつてよい。

▲ある佛國の書物に家庭經濟の標準が出て居た。一ヶ月百圓取れる家ならば、食物に五十圓、住居に二十圓雜費が同じく二十圓として十圓づゝを餘せとあるので、大體くらしむきのことがわからう。

倫敦風俗 (5)



小間物店

佛蘭西國民はいはゞ女性である。フランスを代表する肖像が、いつも女神であるのもおもしろい、女性は秩序と調和とをはかるに長じてをる。國民の節儉も此の秩序性の中から生れ出た事である。其の美術思想に富み、世界の美術の粹は此の國にあるとまでいはれてをるのも、此の國民性がもとであらう。

從つて衣服の特徴は其の仕立方の美しいのと、其の着こなしのよいのとにある。「フラン

ス」から「ドイツ」その他の國へ行くと、都會から田舎へ出た樣なきもちがする、佛人は女も男もどことなく垢ぬけて居る。そこで「フランス」殊に巴里は、いつでも流行の中心となつてをる。

△住居と裝飾

住居でも其の通り、室内の裝飾、かざりつけ、あつさりとして而してうつくしい。「ドイツ」や「イギリス」などのはいやにひつつこい、佛國のは瀟洒である。「ドイツ」「イギリス」などのはおもくるしい。此の區別は食物にまであらはれてをる。佛國料理はあつさりとして、誠によく吾々の口にあふ。「フランス」から「ドイツ」に行けば、其の食物のまづいのに閉口する。鹽がからくて、油氣が多くて、パンがまづくて、料理がこて〳〵して居て、いかにも田舎料理である。「イギリス」の料理もまづい。「ベルジック」は中々よいが、其の他の國は料理の點に於て皆田舎である。そこで、各國とも、よい料理屋、宿屋に至ると、皆佛國式の料理人をおいて、フランス料理をする、料理の名前に「フランス」語もしくは、フランス語源の言葉が多く、獻立表は本國語とフランス語とでかいてあるのでも、フランス料理の勢力はわかつてをる。

△家庭雜話

以上は一般についての話しであるが少し特別なる一個の家庭の内部に立ち入つてお話して見よう。私の知つてをる大學教授の某氏は、夫婦暮しで、年俸は四千圓、外の收入も二千や三千はあるだらうと思はれる人東京でいはゞ本郷とか、牛込とかいひたい處の片隅に二階をかりて住んでをる、二階は最も住居に適して家賃も最も高いが、一年六百圓から七百圓の者と思れる其れで間數は臺所、食堂、應接間、書齋、寢室、妻君の居室と六間ある。月曜日が受け日になつてあるから其の晩にいつて見ると、朋友も子弟もさま〴〵の者が五六人來て、學問上の談話、時事の評論など、或は一團となり、或はわかれになつて。隨意にしてをる、其の中に歸るものもあれば、新らしく來る者もある。十時半頃に茶が出て、妻君自ら愛嬌をふりまきつゝ配つ

てあるき、チヨコレートや、ビスケツトの樣なものなど饗應する、日本のある人から贈たといふ友禪染の布片の四尺許りなるを、壁の飾りにかけてあるなどは、吾等の眼には變に映じたが、其の他のことはまことによく調和してかざられて居て心持がよかつた。此の家で應接の主人は、夫人でなくて、教授であつたが、家によると細君が出しやばつて、中心に立つてをることが多い。ある上院議員の家

倫敦風俗(6)



學校教場(試驗)

に行つた時、露西亞の衞生局長だといふいかめしい老爺さんが來て、太つた奧さんに敬禮をするといつて、先方の左の手の四本の指を、こちらの右の手で握つて其の甲に接吻しながら、少し上等の社會では、芝居で見るやうな此んなことをもするものと思つて、ある時ある新聞の小說かきの家に行つて、妻君にそれをやつた所、其の禮儀の仕方は非常に懸隔のある人に對してする仕方で、むやみにやるものでない、まあ、今の社會には殆ど行はれないといつてもよいといはれて、早く敎つてよかつたと思つた、露西亞人の類似などすると飛んだ眼にあふ。婦人は煙草を吸はぬがよいことになつてをるが、學者などになると、何處も同じく例外がある。此の小說家の夫人、同じく小說かきで、私も其の後共同して日本のものを佛文に飜譯したりなどしたことのある人であるが、煙草がすきで、たばこをすはねば物が書けぬといつてをる。婦人一人であまり親しくならぬ客と應接することは稀であるが、此の先生などは、平氣で私を引見して居つた、尤も私の用事のあつたのは此の妻君の方であつたからでもある。

此の女の先生に愛犬があつて、室內に住つて、女主の吟聲に應じて、泣くまね、睡るふりなどすることから思ひ出したが、フランスほど犬を愛する所は少なからう。二階以上の部屋を借りてをる家の部屋は、隨分不潔になることもあるが、其れでも家主が、人間の子供の三人四人あらうよりは犬一疋、猫一疋位あるものにはよろこんで家をかすといふ話をきいた。ある中學敎師が、二人とか三人とか子供のあつたためにあちらでもこちらでも門前拂をくつて、容易に家を借りることが出來なんだ話をもきいてゐる。

ヴイクトルユーゴーも、鳥籠に鳥の居らぬと、家庭に子供のないとは淋しくて物たらぬといつたが、實に子のない家族ほど憐れなものはない。然るに「フランス」の家庭では子供は二人あれば澤山だ。一人でもよいといつて、子供の出來ぬ工夫をする。富有のものは、其の遺產をあまり多くのものに分けて、小くしてしまふのがをしさに。貧窮のものは、安樂にくらさむが爲

めに子供をうるさがる習慣がある。一千八十萬の家族の中、百八十萬は子のない家、二百六十萬は一人子の家、二百三十萬は二人の子のある家、百五十萬は三人のこどもの家、九十余萬は四人、五十八萬は五人、僅かに三十三萬が六人、二十八萬が七人以上の兒女を持つてをるに過ぎぬ。其の七人も丁年未滿のものは皆計へての七人である。此の如く、子どもが少いといふことも、佛國の家庭の一大特徴といつてよからう。日本では年々五六十萬人の人口が殖えるのに佛蘭西では五十年以來三百五十萬人ました許りである。同

(7) 倫敦風俗



クイン俱樂部に於ける少女の自轉車競走

じ年間に露國は六千二百萬、獨逸は二千萬、英吉利や、墺士利匈牙利は千四百萬、イタリーは八百萬ふゑたといつて、佛國政治家などは救濟の道を講じてをるが、其の効果はいつ顯はれて來るであらうか。

私が留學中久しく食事丈けしに行つた、寡婦の家がある。此の後家さんは、一個の女丈夫で、婦女新聞の主筆である爲めに諸外國の女子間にも名が知れて居て「ロシヤ」、「ドイツ」、「スイツツル」、「ノールエー」、「オランダ」、「ズエーデン」などから澤山の女學生などが、入りかはりやつて來て、寄宿させて貰ふ。一食六十錢の勘定で外からも食ひ

にくる。多くは言葉を學ばうといふ外國人で、少しは、此の女主と交際を結ばうといふ「フランス」人もある。夕の食事をしたあとは、談話會、音樂會、舞踏會を一二時間することが常例であつた。此れはどこの家でも普通にすることで又「フランス」に限つたことでもないが、西洋の此の風俗はまことによい。種々の社交上の會合に於て、男女相混じて談話し、唱歌し、舞踏するが爲めに、第一には男女相識り、互に他の心理を讀むことが出來、互に道理知識を補ひ、殊に女子のせまくなりがちの見聞を廣めることの利益ある外に、會合をして變化あり、趣味あり、調和あるものとならしめて、一同を樂ませることが出來る。宴會の席に酌婦をは侍らせるなどいふことも出來なくなるのみならず、藝者や、幇間の必要もなくなる。日本の婦人がたにも調和の神として、社交場裡に出現して貰ひたいものである。尤も年をとつて、あとずさり許りする習慣のついてをる人に、急に新風俗に從へといふのは無理で、談話のしぶり、坐作の調子、若い時からでなくては覺えられぬ。まづ都會の少女諸君から始めて、あまり保守分子の攻撃を受けぬ範圍に於て、漸次に巧みに、風俗改良の行はれむことを希望する。

前の女丈夫の後家さんの逸話で、彼の國に於ける親子の關係、風俗の一斑がわかると思ふことがある。私が其の家へ行きはじめて間もなくのことであつた。僅に丁年に達した許りの長男が、殖民省の雇になつて數年間も滯在する豫定で、出かけようとする。友人なども手つだつて荷造にいそがしい。夜の十時の汽車にのりこむといふとき、其の母は七時前夕飯をすまし、長男に簡單な別れの言葉をのべて、さつ〱と何處かへ出て行くから、どこへ行くのかときいたら、通俗大學の講談會へ演說しに行くのだといふ。此の萬里の遠征にのぼる靑年は母の留守に、妹と三四の友人におくられて出立した。

此の妹が、家に寄宿して居た露西亞人に愛せられて、結婚の約束が出來た。此の露人は、本國に於て相當の門閥も財產もあり、獨逸のドクトルをも持つて居るも

のであつたが、母は大の露西亞嫌びであつた爲めに、娘を露西亞人にはやらぬといつて強く干渉して、どうしても許さぬ。娘は一時失望の極半病人の有様であつた。外國でも自由結婚が、文字のまゝに行はれるものでは無い。私が三ケ月ばかりとまつて居た獨逸のエナの家庭では、其の長男が、約束した女と添はれぬ……母の許さぬために……といつて首を縊つて自殺した此の男は私と非常なナカよしで萬事打明けて話しあつて居た、ある時、母と喧嘩して、水に投身するといふ所を私が助けたものであつたが、とう／＼自殺してしまつた。

△紀念音樂會

ある時デイデローの紀念音樂

倫敦風俗 (8)



兵隊遊び

會が巴里にあつて、千人近くの聽衆が「シルクデイベール」といふへ集つて居た。其の音樂隊の長は私の同行した人の友人であつて、其のオルケストルの長の父が、死んだといふ報知が奏樂最中に來たことが譯つた。私の友人は豫て、彼の父が重病であることを知つて居たから、急使の來たのか電話を傳へた小使の樣子かをあやしんで、其の場へ行つて、此の訃報をきいて來たのである。其れで私はオルケストルの長は直に歸るであらうとおもつたが會のすむまで續けて勤めて行つた。義務の考への強いこと、公約を重ずる風は感心すべきであるが、親子の情はあまりあつけなさすぎると思はれる。

佛國の交際社會

林忠正氏談

△單に佛國の交際社會と云つても甚だ範圍が廣いので簡略には述べ難いが、今は唯だ思ひ當つただけを不順序に申上げます。

△佛國の交際社會を通じて、特に嬉しく思はれるのは佛國人士が總て人に懸隔てをしない事です、何れの國でも內國人と外國人と又同じ外國人の內でも親しい部と左程親しからざる者と、多少の隔ては自ら出來る譯ですが、佛國には其が有りませんから、知己少き外國人に有つても、交際場裏へ這入るのが甚だ手易く出來ますのみか、外國の人には餘計に好意を表して呉るのです、佛國の人ばかりで親戚朋友等が交はる時でも、趣味を同じくする人達が集つた時でも、內の一人が特に身分が低かつたり、財產が足りなかつたりしても、朋友なら朋友で宜しく、敢て之を喜ばない樣な氣風は少しも有りません。

△交際時期と云へば冬です、夏は一般に田舍へ避暑に出懸ける風に成つて居ます、此避暑と云ふ奴は、一寸は贅澤な事の樣に聞えるけれども、隨分と生活の程度高からぬ人も一家を擧げて行きます。之は裏面に於て少からぬ都合の有る話なので有る、即ち交際場裏の花たる婦人の衣服は、大底冬に適する樣に造られて有る尤も男の衣服とても大方は左樣で有るが、特に大金を要する女のは夏にふさはしく無い樣に出來て居る、と云つて短期な夏に、交際場裏へ出入する衣服をも備へる事は、一寸中等社會では出來難い事で有り、且つは田舍へ引込んだ方が、小供でも澤山に有る人には小供

等の衛生上にも甚だ善いので有るから、何を止めても夏は一般に涼しい田舍へ行く事と定めて居る、田舍へさへ行けば、他を訪問する事も、他から訪問される事も無いから、善い衣服は着ずとも宜しいので從つて靴も靴下も平生の儘ので間に合はせる、尤も時に依つて或は訪問しても、されても、それは極めて親しい間柄の人ばかりで有るから、先づ日本で云へば浴衣着で庭前か椽端で團扇でも使ひ乍ら話す樣に成るから、三枚かさねや五つ紋の樣な儀式張つた物は不用ので有る、それが又衛生上にも善いので有る、更に又少からず精神上の保養と成るのみならず經濟上より打算すれば、非常に冗費が省ける。即ち夏服は造らずに濟むし、來客が無いから食物にばかりでも、一夏田舍へ行くと行かぬとは大差が有ります、平生家に居る時は主人が胃が惡くて妻君も何所か善くないので菓物は喰られなくても、矢張食卓の上に食後の菓物は備へねばなりません、けれども田舍へ行つたらそれが不用。

△巴里では大方の家屋は五階七階造りですから朝夕目に見る物はお向ひの家の石ばかり、窓から首を出して見ても家ばかりで、吾々の如く一寸泉水も有つてテニス位出來る庭を持つて居る者共には、殆んど想像の出來ない位な生活ですから、一夏は海岸へでも山間へでも河邊村里の何れへでも、必ず避暑がてら一家を擧げ下女まで連れて氣保養に行くので、特に急がしい用事の有る者は主人だけが、時時往復する、それも一日幾回往復しても都合の善い滊車切符が出來て居ますし、二三里位な所では散歩がてら自轉車で行き、金持ちの人には自働車も有ります。

△之を要するに冬期の交際塲裏で散財するが物を、夏期で節約して之を埋め合はすと云ふ樣に、裏面の具合が甘く出來て居ます、それとは知らず未だ巴里に馴れない人の、夏は田舍へ行かぬと氣が利かない樣に思はれるだらうと考へ込んだり、今年の夏は何所の方へ避暑なされますかと、不意に尋ねられて、未だ定めて居りませんと返事した後で、獨りで恥かしがつたりする等は素人の事なのです。

△然し上流の人々では、中々左樣中流の樣には行かない、之は田舍へ行つても毎日巴里でやつて居た通りの衣食住を續け、多くの客を招待するのですから、此方は反つて多くの費用を要します。

△偖、冬期に這入れば、各家順送りに一回でも二回でも必ず朋友親戚を招待すると云ふ風に成つて居る、それは日本の樣に時きらはず客が來る、直ぐに茶菓を出す、酒肴を出すと云ふ事は無いからです、又一つには交際の廣き人は各所で夜會なんどに招待を受けるからその挨拶をするので有る。

△無論夫婦で招待を受けるので有るが、年頃の娘でも有れば尚ほの事注意して其娘をも招待するので、特に懇意な仲で有つたならば、其娘に善い婿でも探させる樣にしてやらねばなりません。

△多きは一週一日、少きも二週に一日位は、來客に接する日を定めて置いて、其日になれば、茶や菓物やお菓子等を備へて、來客と親しく談話をする。此時の往訪者は長く居る樣にしてゐて決して長くは居ないのです、善い加減に時分を見計らつて、後からも來る客の爲め、先樣おかはりをする。で此訪問は單に見舞とか慰問とか御機嫌伺ひとか敬意を表するとかに止まつて用事などは反つて申しません。

△之が上流社會になると、何々夫人は何月何日には在宅します、と通知書を發するのです、こゝらを以て見ても彼の國では平常突然に他を訪問せぬ事が分ります日本とは大なる差です、で此通知に接した者は、何分間でも善いから乾度顏を出して敬意を表して來る習慣に成つて居ます。

△簡單な中食で有つても案内を受けた人は、直ぐに諾否の返事を出さねばなりません。

△舞踏會や夜食までする夜會に呼ぶ程の親しさで無くて、澤山の人を知つて居る時は、食堂の大さに限り有るからそれは二度にも三度にもする、云ふ迄も無く如何に親しければとて案内を受けない者が、夜會と聞いて押かけて行く樣な事は有りません。

△同じ夜會でも、親しい同士が、愉快なる談話の内に

會食して、後は各自が、樂器の演奏や唱歌位で濟まして置く小さな物も有れば、大きな物には、專門の藝術家を賴んで來てプログラム通り各種の演奏を順序に從つて見せる、或はモノロープと云つて短篇の暗誦や、一人舞臺のコメデーなどを演り。もつと大きな物に成ると純然たる芝居までも見せる。尤も夜會と云つても必ず舞踏はそれに附屬した物でないものですから若し舞踏を催ほす時には、踊りますと云ふ事を招待狀に附記するのです。

△娘の有る家では、娘が結婚するまでには、成る可く澤山に舞踏會を開きます、それは此舞踏會の間に、婿たるべき者の候補者を見出すのです同時に娘の友達も澤山集つて、此所に保護の下に若き男女の立派な交際が出來ます。

倫敦風俗 (9)



跳超戲

△總て舞踏會は娘の婚禮に於ける下調べが多いのですから、平常餘りこんな事をせぬ家で何日には舞踏會が開かれると風評があると、では彼所の娘も餘程大きく成つたと見えるな、とか、明日も亦舞踏會が有ると云へば、はゝア近々婚禮が有るナ、それにしても三人有つた筈の候補者の內、何れが成功するのか知らんなどと、他所で想像する。

△で此舞踏會には奇麗な手帳に來會者の姓名を記入し一一其人を紹介して踊りの相手を組合はすのです。大きな會になると朋友親戚から外國の珍客まで招いで、庭にはエルミテーションを爲し、各室には或はアイスクリームや、氷水や、喫茶店などを設けて、甚だ立派な物で有る、中等のものでは大抵夫

人若くは夫人の友達などが踊りの組を紹介して組合はせます。

△此後でスーペー(夜の食事)が有つて、酒や氷などは始めから備へて有れど、更に別室の廣い所に小テーブルを並べて、此夜の會で親しく成つた連中などが、差向ひで樂しく語り乍ら食ふので、丁度此時分は午前の一時頃に成つて居ますが、此時には中々しやれた物や氣の利いた物や、意氣な料理が出ます、斯くて夜どほし踊り明して、翌日は病氣で寢て居ます、大方は體は綿の如く成つて非道く踊り勞れるのです。衛生上から云つたら此樣な馬鹿氣た事は凡そ天下に無いもんですが、芝居などが室一杯に人を入れて夜更くる迄やるのと同じ事で致方が無いです。

△こんな風に夜通し舞踏會をやつても行政官が安眠防害など丶制止に參りません、其旨を通知してやれば、巡査が來て反つて門前の車馬の混雜を防いで與ます、其代り舞踏會を催す前以て隣へ豫め通知して置かねばなりません、隣家でも矢張舞踏會をやらずに居られぬのですから、多少の迷惑はお互樣で、決して其邊に何等の故障も無いが、日本では隣に家が無くても十二時過ぎると、樂器を鳴しては不可と巡査が云て來ます、

△此外の慈善會や音樂會やは、更に多く、文學好きの集り、美術好きの集り、或は男女同權論を擔ぎ出すお轉婆連中の不愛嬌共進會と云つた樣な物も澤山に有ります。

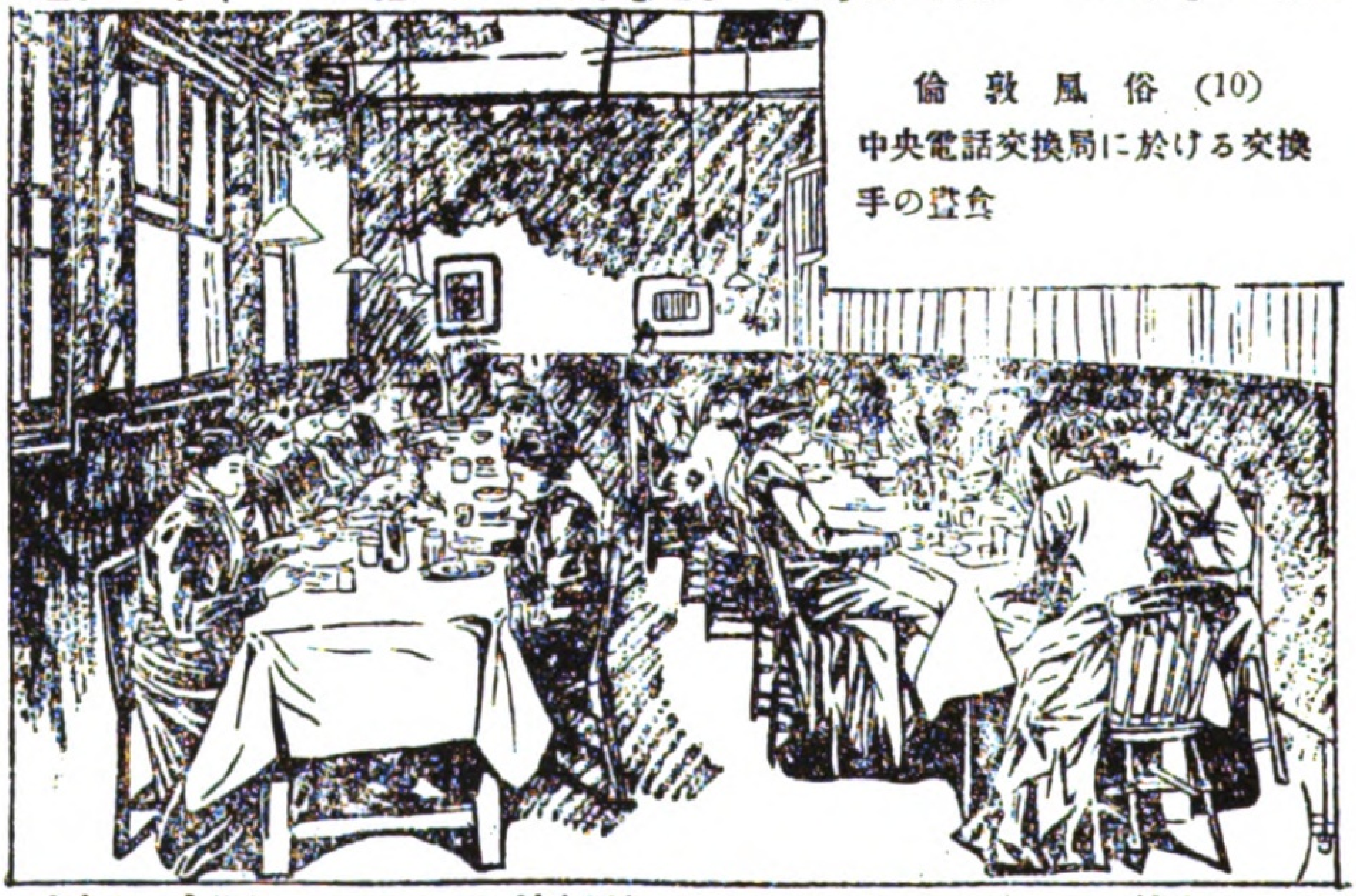
△次はお祭禮の話ですが、クリスマスの樣な宗敎から出た各種のお祭りが、一年の内に何回も有ります、七月十四日の國祭などは中々賑かです、そんな日は各銀行會社が一般に休業します。或は洗濯屋ばかりの祭禮が有れば、牛肉屋共のも有り、市場でやるのも有る。此等は皆大なる車に色々の飾装を施して、或は古代の服裝した一群を乘せ、或は仲間中の美人を女王に仕立て丶出したり、日本の山車と大抵同じ樣な騷ぎを仕ます、就中市場でやる時の如きは、各種の人選の爲めに投票などをして、落選運動や及落に泣くやら笑ふやら怒るやら、それは〲大した騷ぎをして居るのも有りま

す。

△こんな風にして賑かに山車が前を通つても、近來は銀行や會社では、つまらん祭日には休業せぬ事になつたから、認めて居ない物には平氣で執務して居ます。

△で今年は何處の市場の祭が一番善かつたと風評をする事などは何處も同じ事で、牛屋の祭禮には其年の共進會で、一等賞を取つた一番肥大な牛に、奇妙なる飾りを施して引き出すなども餘り異つた事は無いが、總ての祭禮は唯だ一日切りで、國祭には一般國民が七日ばかり前から、彼是と各種の用意をするのです。

△其他に純然たる祭禮にはあらで緣日の樣な祭が有ります、之は各種の物賣りや見せ物などが集るので、長くて一ヶ月短くとも一二週間は續くのですが、丁度淺草市など



倫敦風俗 (10)

中央電話交換局に於ける交換手の晝食

の樣な物です。

△ヌイエの街で之が行はれる時には、巾二十間位な此街に約二十丁位は一直線に町の西側に市が出來て、十間置位に飾り立た旗を交叉して、各種の燈光は勿論目を眩する程に有つて、其賑かさはすばらしいものです。

△衣食住共各國に比べて巴里の方が勝れて居る樣です巴里から見れば各地は皆田舍とも云へる樣です料理の如きも佛蘭西料理は一番高等な物で、其他各國のは佛國料理から出て居る樣です。建築物にしても、米國では近年金の有るにまかせて、隨分立派な物が出來たそうですが、元は矢張巴里で巴里の方が揃つて居る樣です。總てがこんな風で巴里は、世界各國の人が來て遊んで面白い樣に、都合の善い樣にと出來て居る樣です。

露國の家庭生活

本田増次郎

露西亞は國土廣大にして人口甚だ多く、人種多樣にして自然風俗を異にし、階級の區別顯著にして貴賤貧富の差甚しく、都市の豪奢と田舍の質素と亦殆んど別天地の觀を呈せり、此故に露國の家庭生活を畫きて能く一幅の中に收めんは何人にも爲し得らるべき事ならず、今茲に述べんとする所は露國民のキッ粹たるスラヴ人なり、彼等の中所謂地主にして貴族なるものゝ生活なり、都會に於ける華美不自然の狀態にあらずして田舍の領地に歸りて營々と働く自然の生活なり。彼等地主の下に立つものは奴隷に近き小作人にして社會の中堅を形づくるものにあらず、行政官となり、大臣となるもの多くはこの地主より出づ。露國の地主は日本舊時の大名と武士とを併せたるが如く、其の中間に位する身分のもの多しとす。

露西亞の冬季は都會活動の時期なり。田舍に住める地主貴族は夏期の收穫を終へて都會の住宅に出で、或は交際、宴遊、賭博に日を送るものあり、或は製造事業などに投資して營利に忙しきもあり、下民勞働者も亦雪中に埋もれる田舍にて爲す事なきを以て、相率ゐて都市に入り込み製造所などに職業を求むるなり。之に反して夏季は田舍に生命を與ふ。地主も勞働者も悉く都市より歸りて本業に從事し、爰に彼等が自然の狀態に復するなり。露人の家庭生活を觀んと欲せば之を夏期に於てせざる可らず。

露西亞には樂しく長き春と秋とを見ず、忽ちにして冬また忽ちにして夏といふの趣なり、四月の中旬まで

五六箇月の間滿目一面の銀世界と化し、雪下の地面亦三尺以上も凝固せしも、往々二週間をも隔てずして冬は卒然夏と化し了る吹雪の殘塊が此處彼處の隅々に見ゆる外地は悉く顏面を現はし、融けたる雪は低地を一面の淺き湖となし、高地に點接せる農家村落は洋中の群島かと疑はるゝの狀を呈す。此雪水の乾き去るまで、十日乃至二週日の間は、外界との交通全く絶えて帝國王國の興廢も之を耳にするを得ざるなり。

夏季の間は人々邦國の隆替を念頭にかくる餘閑を有せず、天地再び雪霜王の占領に歸する前に、彼等は一年の生計を稼ぎ出さんと星を戴きて出で星を戴いて歸る、小作人も農夫も馬も牛も殆んど間斷なく働き、『收獲は終れり夏は過ぎたり、されど我等は救はれず』との歎を免がれんと期す。忙しきは人畜のみにあらず、鳥までも大

英國風俗 (11)



女生徒のダンス習練

急ぎにて巣を營み、住居の整頓するまではゆる〳〵歌ひ樂む暇もなく、急ぐの大切なるに驅られて正直をすら棚に上げ自身より弱き同屬の巣を奪ひて卵をかへすものさへあり。急ぐは生物のみならで、木の芽草の花までも一時に競ひて夏に後れざらんことを勉む。未だ融けやらぬ雪塊の傍に、花さき亂れ蝶蜻蛉の戯るゝを觀るも敢て稀ならす。

地主に在りては夏季は誠に必至の戰期なり。露國の貴族は近來產を傾くるもの多く所有地の抵當に入り居らざるもの少なきが故に、一家老幼悉く働きて一錢にても收入を多からしむるにあらざれば、祖先傳來の財產を他人の手に渡すの不幸に陷らんとするもの多數なり、都會の殿樣は夏の始まると共に忽ち百姓に化す、其の變化の速かなる實にスラヴ人種の變通自在なる本性

を證す。最近の鐵道停車塲より往々數十里を隔てたる領地に歸り着くと共に、榮華の衣を脱ぎすてゝ、純然たる勞作の人となるなり、而して一家活動の中心は何處も同じ主婦の務なれば、冬季都門に綺羅びし貴婦人(*Khazyaeeka*)奥様が田舍の働きぶりを紹介せん。

主婦は早朝より一日の務に取りかゝる、その第一は廚房の指圖なり。彼等多くは手織の質素なる衣服に身を固め、帽子は冠らずして農民の用ゐる被物を頭に結ひつけ、十人内外の下女に向つて彼是と仕事を言ひつく、その下女といふは、農民の妻や娘にして、洗足にて衣物も少なく甲斐々々しく立働けり。今しも主婦が裳を高く引きあげたるは、一人の下女が煉瓦の土間を掃除せんとて水をザブ〳〵と灑げるが故なり。下女は箒の柄の先きにヅックの雜巾の最と大きなるを押しあてゝ、その流るゝばかりの水を拭ひとりつゝあり。主婦は或は笑ひ或は叱り或は威しなどしつゝあるかと思へば又してもドッと笑ひ出す。下女たちは口を揃て言譯しあやまりつゝこれも亦ザワ〳〵と笑ひ興ず。痛く出來損へる事を見付られたる一少女が、此噪がしき中に唯詫びたるのみにては主婦の耳にも入るまじと、濡れわたりたる床に膝をつき、目には涙を湛え髮ふり亂して、主婦の裾と足とに接吻しつゝ謝罪するもあらん彼等はみな自然の兒なり、些細の事にも泣き叫び、泣くかと見れば忽ち又笑ひ崩るゝなり。

女中頭が其の日の食料にとて取り揃へたる品々を檢閲し終りて、主婦はそれより圓石にて疊める臺所先きの小庭に立ち出で、庭の中央にある深き溝を越えて下男(*stroge*)に命令を下すこともやあらん。此下男といふは田舍の家庭にて尤も不器用なる漢にして、何事に使ひ試むるも用を爲さゞるものが概して此地位に下るなり。さて此下男の務といふは、夜は番犬の代理をなし、晝は薪を割り水を汲む位の事にて、その夜番といふも甚しき苦役にはあらず。臺所と物置とを連結する廊下に藁蒲團を敷き、物置の戸口にて眠るまでの事にて、翌朝に至りて空瓶と化し了るべきヲッカ酒の一本を枕頭に備ふるを通常とす。下男が晝間の勤務は夜

間のそれほど氣樂ならず、山なす薪をストーヴに入るべき大さに鋸き切り截ち割り、夏日厨房にて用ゐるだけにても、大暮しの家にては優に一人終日の手を塞ぐ程なり。猶ほ其の上に家中にて用ゐる水を汲みて荷車に載せ、井戸より若干の距離を幾たびも往返せざる可らず、露國田舍の井戸は日本や埃及の井戸に似て今なほ舊世界を偲ばしむ、長き棒の片端に重き石又は沙の嚢を付けて、他の一端に釣瓶をつけたるさま風雅とも呑氣とも謂ひつべし、此井戸端にて村の靑年男女が相會合し、又近邊の醜聞珍話を輪に輪かけて語り傳へしは、幾百千年の前も今と異る所なかりしならん。露西亞の古諺に曰く、井戸もし耳と舌あらば、その水を悉く濯ぎても火の手は納まらざるべし』と。げに井戸端會議は世界共通の制度なるぞかし。

庭の彼方には離れ家あり、主婦はこれにも目を配らざる可らず。此離れ家の土間には跣石の女房や娘坐し居りて、キャベツの外側の葉をちぎり棄て、心の部分のみを荷車の中へ投げ入れつゝあり。彼等は下女にあらず近邊の農民にて、日傭賃として外側の葉をもらひ歸るなり。さらばキャベツの心は何にするか、そは後段に說くを待たれよかし。

さて此離れ家にて主婦は請願の雨霰に遇はざる可らず。森にて枯枝を拾はせたまへと願ふもあれば、病兒に牛乳を惠まれよと請ふもあり、屋根つぶれかゝりたればとて是を修繕する木材をねだるもあれば、近邊の町に住む醫師がり病人を伴ひ行くに荷馬車を貸せと求むるもあり、かゝる村民は主公主婦の財產に限りなしと思ふものゝ如く、願ひ求むる所に際限なきを以て、主婦は色々と聞合せ問糺して後然るべきものゝみを許すの心得なかる可らず、而して一生懸命に願ひせつく婦女は主婦の憐みを受けんとして、手や衣服や足などに果てしなき接吻をあびせかくる間に、願ひごとなき者どもはポカンと坐して頻りにキャベツの葉をむしりつゝあるなり。

キャベツの心の堅き所を投げ込たる荷車は何處へ行くやと云ふに、數十間を隔てたる彼方に又一軒の低き

建物ありて、數人の女たちは其中にてキャベツの始末をなしつゝあるを見る。キャベツを小さく切り刻みて長く低きテーブルに上せ、字形に曲りたる庖刀の中央に木の柄のつきたるにて更に小さく切り刻み、さて其の斷片を樽に入れてヒシ〳〵と押しつけ、少許の鹽を加へて數日を過ぎ、醱酵適良に達したる頃を見計らひて樽を密閉し、物置に納めて冬季の用に備ふるなり。

此醱酵キャベツは露人食料中の尤も大切なる一品にして、其調理法も二三に止らず、之を種々のソップとなしてライ麥の麵包と共に食するは、都鄙を通じて農民及び勞働者の常食なり。醱酵の爲めに生ずる糖分によりて甘味を帶ぶれども、決してうまからずと謂ふを得ず。

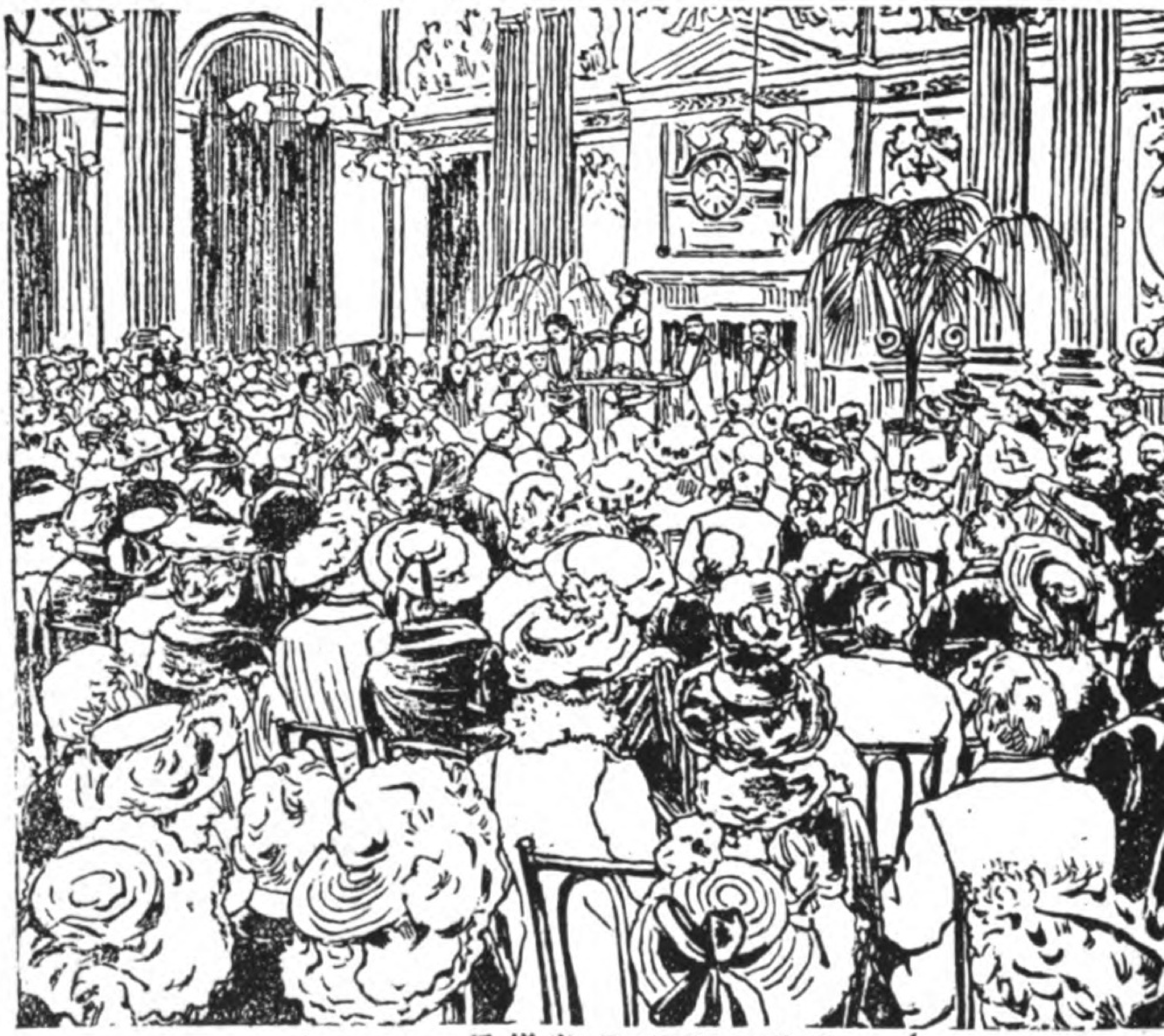
次に主婦の巡視するは搾乳所ならんか、もし年ごろの娘あらんには、主婦は搾乳所の監督を擧げて其の一人に託するならん。上流社會に於ける露國の少女は、學校又は家庭にて一と通りの教育を終りたる後、一家の資産之を許す塲合には外國旅行をなし、さてそれより一二年を農學校又は乳業學校に費すなり。今日此種の學校にて授くる教育は誠に綿密なるものにて、凡そ農民の内助又は露國地主の妻として用あるべき事柄は悉く敎へざるなしと云ふまで完備せるさへあり。紡織の事より應急治療法、看護法さては幼兒の取扱ひまで敎ふるものあり。されど悉くの學科實科を修めんは數年を要するが故に、又通例の露國家族は多勢にして女子多きを以て、各々別箇の專門を分ち修むるを常とす。更に高貴にて富裕なる地主の家にありては、上記の如き學校の卒業證を持てる女子を傭ひて、各專門の事柄を分擔監督せしむ。而して此類の被雇婦人中には雇主と門閥を等うするもの少なからざれど、雇主もし重要の官職を帶ぶる時は、彼等に家族同樣の待遇を與へざるを通例とす、これ官職の有無は露國貴族の社交的地位を判つ所以なればなり、又上記の學校にては制服を用ゐるもの少なからず、青色のセル服又は綿服に白色の麻布帽、麻布袖を常とせり卒業の後家に歸りて家事を分擔しつゝ、此制服を引き續きて用ゐる青年女

子も少なからず。これ露國政府の規定せる制服にして卒業證を有せざる者は之を校外に着用するを得ざるなり。

搾乳所は普通別箇の建物となりて住宅よりやゝ隔たりたる處にあり世界に名高き丁抹の搾乳所と匹敵する程に整頓せり。かく乳業の進歩せるは主として露西亞の愛國者ヴェレスチャギンの盡力によるものにて、彼は數年の間歐洲各國に歷遊し、專門の技師を露國に移住せしめなどして、チーズの製造其の外乳業全體の上に大改良を加へしなり。而して一家の乳業を監督する女子は、農家の婦女を指導して此業の成功を收めざる可からざるを以て細心注意中々に遊び戯るゝの餘暇なく、他國の上流夫人令孃に比して人生の快樂を得ることは甚だ少なきを免れず。

猶ほ主婦の訪問せざる可らざる場所あり、野菜果物の乾物を製して賣却し、又は冬期家内の用に備ふる處ろ

倫敦風俗（12）



オー、ピー倶樂部日曜日の討論

これなり。土地を所有する貴族中の財産豊かならざるものは、此業によりて收入の要部を作るもの少なからず。露國にては冬季新鮮の野菜を得られざること勿論なるを以て、特殊の方法にて野菜を乾燥貯藏すること大に進歩せるを見る。此業は農學校にて教授する一科目にして、乳業と同じく家の娘の一人これを監督する場合少なからず、季節中は極めて骨折るゝ勞働の多量を之に投せざる可から、此作業を出す場所は大抵木造の家屋にして、他の建物より若干の距離を保つは乾燥中發火の恐れあるを以てなり。多くの竈を据え付けて野菜を熱き乾燥せる空氣に曝し、野菜の種類によりて熱度と時間とを加減するなり。而して秋に入りて之を市場に賣捌く量は驚くべき程なるが、調製其の宜しきを得たるを料理して食卓に上す時は、畑より取りたての野菜の殆んど區別し難き色味を有す。果物を乾燥するは野菜よりも一層露國特有の產業にて、梅類は素より各種の苺に至るまで之を貯藏するの術あり、苺類は多く砂糖漬となすなり。乾燥せる果物は獨り內國の都市に賣弘むるのみならず、近來は獨逸佛蘭西にまで輸出せり、又此業の部類に屬して等しく婦人の監督を受くるは果物酒の製造なり。露國にて果物酒の需要多き所以は、外國より輸入する酒類に課する稅金の高きにも因るものならんが、種々の果物より色々の酒類を製し、一家の收入に重要なる一財源を加ふるなり。

以上述ぶる所は中等の地主が土地の產物より得る所を以て家計を立つる、其の主婦の必然擔任すべき日々の勤務の一端に過ぎず。而してさすが永き夏の一日にも一家相語るの餘暇なく、餘事さへ大急ぎにて認むる程にて、主人はまた差配人を使ふまでに富裕ならざる場合には、自ら所有地を乘り廻して種々の取締りをなさゞる可らず、年長の娘たちはそれ〳〵分擔せる業務の場所にて他人にまかせ難き要事なる時は出先きへ食事を取寄することも珍しからず、既に長育せる息子等は鐵道鑛山などの技師となりて遠地に在るもあらん、或は土耳其坦、シベリヤ邊に官職を奉せるもあるべし又年若き男兒等は皆は高等の學校にて孜々として勉學

し居るべく、休暇中は受驗準備の爲めに敎師の宅に寄宿するもあらん。かくて家に殘るは幼兒と家庭敎師と主婦とのみにて、その主婦さへも要務の爲めに外出すること少なからず。仕事する時間中に家の食卓に就くものは誠に少しと謂はざる可らず。

いよ〳〵永の一日も終り仕事を仕まひたる上にて、家人一同の相會することとありとせばそは晩餐の時のみに限れり。夕食終りを告ぐる時は小供たち皆立ちあがりて、今や食堂を去らんとする主婦即ち母の手に一々接吻して敬意を表す、これは誠に美はしき露國の舊慣にて今尚ほ到る處に行はる。もし來客あらば彼

倫敦風俗(13)



少年遊戯(帽子と鷄卵)

等も亦同じく主婦の手に接吻す。夏の夜は暑くして室内に留まりがたきを以て、家族はうち連れて客室より張出しゝ椽側に出づ、往時小作人を悉く農奴となしたる時代に在りては、彼等は毎朝此椽側の前面なる芝生に集ひて主人より其の日の仕事の命令を受け又は願ひ事を主人に申し出でたるなり。習慣を忘るゝは誠に難きものにて、既に解放せられて自由の民となれる老臣や其の子たち、今猶ほ十人二十人と打ち連れて此芝生に來り手に帽子を持ちたるまゝ幾時間も佇立して木像の如く主公か主婦かゞ心づきて來りて其の願意を聽きくるゝを待つなり。されど夏の夕は農民の來りて家族の納涼を妨た

ぐるものなし、そは彼等夏季は早朝より日沒後まで も仕事に忙しきが故に、歎願を以て人を煩らはすの暇を有せざるに由る。やがて部下は椽側に茶をもち來り前に述べたる砂糖漬の果物を入れたる籠之に伴ふ。主婦は又紙卷煙草を吃し、同居せる主婦の母又は姑も亦その例に倣ふ。さて此老婦人は貴族の時めきし過去のかたみとも見つべく、農奴未だ廢せられず鐵道未だ入り來らずして、地主の身代遙に饒かなりし往時を顧回しつゝ、若き時の朝廷語たりし佛蘭西語（貴族の子弟は當時農奴や僕婢の用ゐてふ鄙語にて話す時は、野卑の極みなりとて、兩親に罰せらるゝこと往々なりき）を操りつゝ、行儀正しく安樂椅子に直坐して白髮と煙草の煙とをうち混ぜしむるなり。

聖彼得堡や巴里の交際社會に出でゝは、朝廷の儀式と社交骨牌の外何等の心配あるべしとも見えざりし主人は、煙草をくゆらしつゝ思案顏にて、今年の收入不足は幾何ならんと胸勘定をなすものゝ如し。時既に十時を過ぐれど空は猶ほ露國日の入りの金色紅色を留め、翌朝の日の出まで其の輝きを失はじ。夜鳥の啼く聲蝙蝠の飛びかふ音など夜の靜けさを破り、遙かの彼方には農民の野らより歸る道すがら奇妙なる歌うたふも聞ゆ、一時間の後には人聲悉く消えて夜番の笛のみ高く響く、これ此笛は主公主婦に聞かす合圖にして、火事なく盜なし心安く眠りたまへと告ぐる心なるぞ。

露國の貴婦人社會

某公使婦人談
婦人記者筆記

私共の住居とした家は四階造りでしたが、其二階に居つたのです。臺所は四階に在りまして、コックだけは、毎日此處へ昇降しましたが、此四階には貧民が多勢雜居して、丁度病院のやうな仕組になつて居たさう

です、其處に私共の臺所があつて、始終暖室爐に湯を沸かして在つたので、貧民達が始終コックにお湯を呉れろ〱と強請つたと聞きました。此人達の昇降口は別になつて居ましたから、私はツイぞ見たともありませんし、一つ家の四階でも一度も上つて見たとはありませんでした。其後轉居した家は、前のに較べると完全で、チヨツト一戸建のやうに見へましたが、床下に矢張り人が住んで居たのです。床下と申しても、窓だけは地面の上になつて居ました。私共の家の中央に中庭があつて、厩が拵えてありましたが、床下の人は其處から出入して居ました。四階住居をして居る人達でも、地震は無し、火事も滅多に無し、又あつても下の方の火事が上へ燃え拔げるとは決して無し。少しも心配なく、住つて居たやうです。

▲室外の運動

普通の家では庭と云ふものは少しもありませず、又彼國は寒いので、始終窓を密閉致し、空氣の流通が惡う御坐いますから、大概の人は、一日の一二時間位づゝ公園へ參つて運動致すので、何時もよく同じ人に出會ふとが御坐います。冬分は雪が却つて澤山に降りませんで、道路が凍つて居ますから誠に歩き易く、それに掃除人が多勢出て居て、降つた雪を片付けては砂を撒きますから、清々とした道路で御坐います。一番いけないのは十月頃なので、雨と雪が降つて道が軟かく汚くなります。運動と申しても處々方々歩くばかりでなく、宮城前の河岸一丁ばかりの地を往きつ復りつ運動して居るのがチヨツト面白いので……他の國では餘り見受けない事ですから、私は參り立てに何だらう、何かの會の切符でも買ふのか知らんと存じましたが、只だ多勢の人が押し合つて往つたり來たり運動して居るのでした、其處を餘り汚い服裝の者が通ると、警官が其者を引き出して宮城の側の方を歩かせました。宮城の直下よりも、河側の方が却て宮城からよく見える故でしやう。彼國では貴人の馬車は馭者の脊中に特別の徽章があるので、直に乘つて居る人格が判ります、それで大使などの馬車が通ると警官が叮嚀に敬禮しま

す。皇后陛下など運動に御出掛の時は、女官が一人陪乘して居るだけですが、馭者の服徽章で直に判ります。

▲掃　除

外國では所藏品を何から何まで座敷に飾り付けて、我國のやうに藏つて置くとは御坐いません。露西亞でも同じ事ですが、永く我國へ來て居つた人などは、隨分日本の種々な道具を有つて居ります。掃除の仕方は、毎朝一度づゝ毛ハタキで拂ひ清め、一週に一度づゝ大掃除を致しますが、茶殼を絨氈の上へ撒いて掃きますと、茶殼の濕り氣へ塵埃が吸ひ着けられて清潔になります、寢部屋の板の間なぞは、掃除を商賣にして居る男が來て洗ひ、蠟を引きますと鏡のやうになります。私共では其男が餘り汚らしい風で厭でしたから下女に致させました。下女は露西亞の者でしたが、至つて心掛の良い善く働く女でしたので、唯今でも其女の事は忘れません。

▲下　女

彼國の下男は餘り善くないさうですが、下女には却却善いのが御座います。特に私共で使つた下女は別段でしたらうが、前の主人の悪口など少しも申しませず、極口數が少くて親切に働きました。『陰で惡い事は出來ません。神樣が見て居らつしやるからつて……日曜には朝の内に必ず寺院へ參つて來ました。一躰日曜には、自由に出ても可いと申してありますが、其女は寺より外には何處へも參らずに衣服の繕ひなど致して居りました。下女自身は總躰日本より儉約です、髪結錢を出すとはありませず、髪の飾りを買ふこともありませんし、衣服も主人から貰ふのだけで、他に飾りませんから、給金は銀行や郵便局へ預けて了ふのです。堅い家では、下女の帽子や衣服が整然定まつて居ますから、飾りやうもありますまい。私共では夏は鼠色の服冬は黒服を一枚づゝ與りましたが、働き着は古い粗末なので澤山ですから、仕着の服が三年ぐらゐ持ちました。子供の守は壯年の女を使ひ、又よい家の學齡子女は、家庭教師が附いて運動に出掛けます。彼國の地位ある家では、子女を永く學校へ通はせずに、家庭教師を聘んで教育

を任せるのです。

▲休日多し

露西亞では宗教の祭日が度々ある上に、皇帝皇后の誕辰は勿論、其命名日も非常に重んずるので休日は他國に比べると多いのです。外國人が露西亞では一年の半分休むと惡口を申しますが、本當に仰山に申すと先づ其樣なものです。祭日には食物店の外は晝のうち休業して居るのですが、私は毎々それを忘れて、下女を買物に遣らうとして、今日は祭日で御座いますと注意されることがありま

倫敦風俗 (14)



市長官舍の饗應

した。復活祭と申すは夜半の祭りなので、私は度々誘はれましたが、一度も參つた事はありません、誰でも一度行くと最早澤山だと申して居ます。皇帝は何時も莫斯科で祭に臨れました。

▲服　裝

冬分初めて露西亞へ來た人は、外套着て小帽子被つて歩く婦人ばかり觀て、服装に質素な處だと思ひますが、夜會の服裝を見ると、其立派で贅澤なのに驚きます。貴婦人は大概巴里から衣服や髮飾を取寄せるので裁縫師も巴里から參つて居ります。多くの貴婦人中に

は、自身巴里へ出掛けて調べて來るのもありますが、衣類の海關稅は高くかゝり、殊に仕立て上げた品は尙更高いので、布地や飾りをバラ／＼に買つて來て、露西亞で仕立てさせる人が多いのです。絹物の稅は最も高いのですが、絹と毛と交せて織つた物は、絹物の目方に算して稅を課るから、割合に高くかゝるのです。或人が我國から衣服を取り寄せた處、絹へ木綿裏を附け、寒い國だと思つて多く綿を入れて寄越したので、稅が非常に騰り、二百五十圓で拵えた衣服に二百五十圓の稅金が掛つたから、實に馬鹿氣た事で懲々したと申して居ました。彼國で服を造りましても、却々上手なのみならず、餘程安直に出來るのですが、唯だ流行を競ふ習慣から、何でも巴里誂へでなけりや幅が利かぬと云ふ傾きがあるのでせう。

▲食物

料理も上流社會では皆巴里から取寄せるので、自分の家で拵へるのでも、多くは巴里から來た料理人が拵へるのです。交際の季節は十二月一月ですが、魚類、野菜、菓物など極不自由な時なので、却々高くかゝります。特に活花の高直なことは、非常なものですから、一度の夜會は隨分莫大な費用が入ります。平生の食物は大抵土地の物で間に合せて居り、夏分は魚類も種々ありますが、皆淡水の魚なので、川に籞を拵へて置くのです。純粹の露西亞料理も却々よいもので、羊肉と豚肉とを繋いで燒き、それを御飯の上へ載せた物など至極風味があります、魚のスープは椀盛のやうで日本人の口に合ひます。

▲婦人連の薄面

一婦人が『私の娘は何故彼樣に人の前に出るのを耻かしがるのでせう』と申すと、他の一婦人が『イエ御孃さん方は御尤もです、私でさへ多勢の集會へ出る時はキマリが惡く、特に皇后陛下に謁見の際は胸が〱ドキして困ります、平生陛下が斯う御意遊ばしたらば、斯う答へ奉らうと考へて居ても、拜謁の際狼狽て考へて居た事を御意遊ばさず、他の事を御尋ねになると、ドキマギ致して御答へに差支え、顏ばかり眞赤に致します』なぞと、話して居るのを聽きましたが、斯樣な點は我國の婦人方と同じ樣だと存じました。

露國家庭の裏面

紅巾女史

今を距ること二十年の昔、日本婦人にして露國人に嫁したる人あり、多年露國の生活せしが數年前夫を喪ひて我國に復籍するに至れり、女史一日此婦人を訪ひ、問ふに露國の家庭生活を以てす、婦人即ち語るに其の實歴を以てす、又以て露國家庭の裏面を知るの好資料たらん。

私は良人が我國に居るに關らず、子女を引連れて彼國へ渡り、良人の親類の世話で、オデッサの町端れなる家を借り受けました。此家は聖彼得堡で石膏の店を有つて居る人の製造場の中に建てゝあつて、庭も相應に廣く、一戸建の萬端揃つた貸家でしたが、家賃は割合に廉いので、三十留でした其内キシチフから四十哩ほど隔つたモルダリヤ在へ移住しましたが、田舍だけに極暢氣とは云ふものゝ、寂し過ぎて殊に危險な處で、過日は何處の家へ強盗が入つたとか、昨夜は何處の門番が殺されたとか云ふ話を毎々聞くにつけ、女と子供ばかりの事とて心配で耐らず、復たオデッサへ轉居するとに定めたのですが、人頼みして家を搜すよりはと思つて、自分で搜しに出掛けました。貸家札は家國の通り方々に貼つてあり、誰にでも見附け得られるので、オデッサの繁華な通りの横町、丁度神田錦町の裏手のやうな場所に相應の家を見付けました。此家は門内の玄關が長四疊で左に十疊の食堂あり、十二疊の客間あり、六疊二室あり、八疊の臺所があつて、家賃は四十五留でした。私の借り受けた家と同じ建方の貸家がズット列んで、一戸に物置一棟を貸し鍵は軒別に

與へるのでしたが、引越に敷金も要らず證書も要らず向ふ三軒兩隣や差配人へ配り物をすると云ふ世話もなかつたのです。

△食　時

何れの國も同じ事でしやう。朝九時前に牛乳や茶を飲み、麵包ぐらゐを食べ、十一時頃に又チヨツト茶を飲み、時としては菓子を少しぐらゐ用ゐるので、出勤する人や學校へ通ふ子供は麵包を持つて行き十一時に食べます。晝飯と申すのは二時です、これは諸官省や學校の退刻が皆二時だから家族打寄つて食卓に就き得らるゝ様にしたのでせう。晝飯は三品か四品で濟まし、四時に茶を飲み、夕飯は普通八時ですが、子供の多い家では六時に濟します。客を招くのは大抵八時頃からですが、誕生日とか聖名祭とかで、大きな御馳走では十二時頃が御馳走の眞盛りですから、悉皆お客が歸ると最早四時頃です。それで斯う云ふお客は日曜日か祭日の前夜に致します。子供の間食で御座いますか、これは定時以外に與らぬと定めてありましても、間にねだられて與へる家はイクラもあるのです。我國では家の料理が不味いからチヨイト飲食店へ行つて食べると云ふ人がありますが、彼國では飲食店よりも自分の家で拵へる料理の方が餘程旨いので、獨身者は格別、家持の人は滅多に他で飲食する事はありません。子供を連れて公園でも散歩する際にアイスクリームでも飲ませる位なのです。

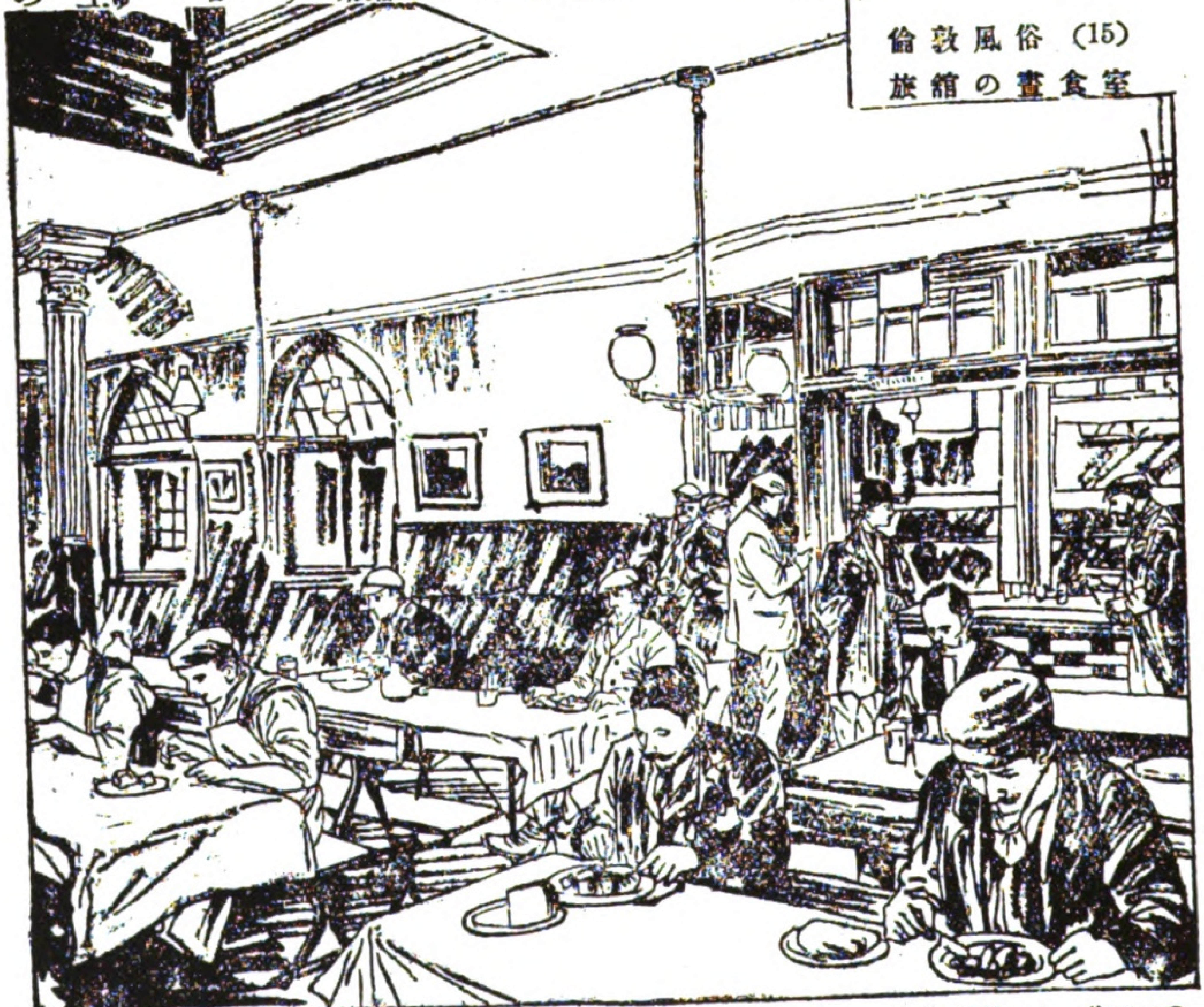
△食料品買出し

彼國では地位ある人の家でも、主婦が自分で買物に出るので、自分で買物に出ない主婦は不經濟者と非難されるから、各戸の主婦は毎朝食事前に必ず市場へ出掛けます。地位ある方は馬車で行つて、馬車で歸るのですが、中流以下の細君は大きな籠を持つて參るのです。牛肉店、靑物店等軒を列べて居る市場へ、多勢の買手がぞろ〳〵と出盛る有様は、却々賑かなものですが、其の買方は日本のやうに買ひ付けと云ふ店を定めては無く、一軒々々相場を聞き歩いて割の廉い店で買ひます。而して其直切るとも隨分酷いので、負けなけ

れば止さうと出掛けるのです。スルト我國の古着店や植木屋のやうに負けます〳〵と呼び返すをが多いのです、總て買方に外見も要らず、至極買ひ易いのです包み皮ですか、竹の皮がないから、ボールの袋樣の物へ入れて寄越します。野菜や果物は田舍から車で曳いて參つて、原へ卸して賣つてる者もあり、朝市の賑ひは實にエライもんです極上流で平生はコックが買ひ出しに來る家でも、お客をする時には必ず主婦が自ら買出しに來るの

倫敦風俗 (15)

旅館の晝食室



で、それで無ければ好い御馳走が出來ない事となつて居ります。此通り毎朝必ず買ひ出しに行く風習ですから、出入商人もなく、懸賣月末拂と云ふ樣な事は一切ありません又衢を賣り歩く食物商人もありません、私の借りて居た家の門内には、共同水道を用ふ小さい棟割長屋が澤山列んで居りましたが、私が何樣な包を抱へて歸つて來たとて誰も見る者もなければ、何樣な服裝をして出たとて噂する主婦達もなく、近所交際も至つて淡泊で

面倒臭くなかつたです、往來を歩いても、人種が異つて居るからとて振り向いて觀る子供もありません。

▲肉類と露西亞スープ

彼國では牛肉が實に廉いので、一斤十五錢位でした一番牛肉を澤山用ふので、其次が羊肉鷄肉です。豚肉と魚肉とは、平生餘り用ゐません、教會の齋戒時分には多く魚肉を用ゐます。それから七面鳥の肉は風味が好いと申して、お客をするには必ず七面鳥を用ゐて居ました。私の家庭は、夫婦に子供五人、下女一人とで、一日にスープ肉二斤は必ず用つたのですが、二斤の肉を煮るには三時間ぐらゐ要りました。スープには赤茄子、赤大根、玉葱、王菜など加へますので、赤茄子から酸味が出ますから肉汁に少し酸味を帶び、却々風味が好いので御坐います。バタは一斤十二錢位ですが、四斤ほどあれば一ヶ月分澤山です。

▲牛乳と卵

牛乳は麥酒罎へ入れて朝夕配達しますが、直段は一罎幾許と云ふ定になつて居り、一罎大抵十五錢程ですが、私の家では毎日二罎ぐらゐ用つたのです。卵は極廉價で百個に付一圓五十錢ぐらゐ、之を一週間に二百個は必ず用ゐましたが、單だ料理ばかりでなく、菓子を拵へるにも用つたのです。

▲林檎と麵包

市場で一週間分づゝ林檎を買つて來ましたが、一プード（四十斤）が七八十錢、食麵包は大抵三斤半づゝ一塊になつたのを買ひましたが、これは十五錢で一日の分量、朝市で求めると出來立で、其味は實に宜しいのです。お茶の時のはフランス麵包で少し甘味を帶びたのです。

▲茶と砂糖

彼國では一日に五回は茶を入れるのですが、一般に支那茶を用ゐて居ります。支那茶は一斤七十錢位ですが、私宅では一ヶ月二斤は用ゐました。砂糖も茶の要るに準じて一ヶ月四十斤ほど用ゐましたが、料理には少しも用ゐず、唯だ茶に加へるばかりでした。

▲穀　類

小麥粉の外の穀類は餘り必要は無いが、家によると麥のゐましたのをスープの中へ入れたり、蕎麥の殼を取つた儘の粒に牛乳や脂肪を混ぜて茶菓子にします。米も斯様な風にして茶菓子に用ゐますが、上等としてある伊太利米は、一斤十五錢位でした。私か我國を立ちました時は、米と醬油と酒を携帶して行つたので日本食が欲しいと、胡爪やキャベツの鹽漬を香の物にして、日本米を土鍋で炊いて食べたのですが、懇意な婦人など來合せて居ると、『貴女は米を白湯で煮たのが如何して其様に旨いのですか、何處に風味があるのでせう、ちよいと少し食べさして下さい』とて摘んで口へ入れ、『よくまア斯様な不味い物が食べられますネエ』と笑ひましたが日本米が盡きてからは伊太利米を一斤づゝ買つて、時々御飯に炊きましたが、トント支那米の通りで、粘氣がありませんでした。

▲湯　錢

借家の建方は却々完全で、雪隱には水道を引いてあつて、カランをねぢると一度〳〵に洗ひ流して少も臭氣を留めぬので誠に心持が好いのです、塵溜も共同捨場があつて、家の周圍に不潔物を置かぬやうにしてあり、萬端整ふてはあれども、風呂場は中流以下の借家には備へ難いので、夏分行水の外は、矢張り錢湯に行くのです。尤も子供は家で浴させ、決して湯に拉れて行きません。大人の入浴は大抵一週に一度ですが、入浴料二十五錢、流しが五錢、着物番が五錢、それで最早三十五錢ですが、冬の最中は雪で歩けないから辻馬車に乘ります、スルト其往復が四十錢位です。錢湯は男女別々の家で、湯槽が幾つも行列して居り、チヂを拈ると湯も水も出て自由に加減が出來、蒸風呂も微温と强溫と幾槽にか別けて備へてあるのです。女湯の流し人（三助）は、年を取つた婦人で、腰部以下を股引で包み、客一人に流し女一人付き切り、頭髮から手足の先まで殘る隈なく淸潔に洗ひ、客は只だ人形の如になつて居れば可いのです。左様、婦人の入浴時間は、大概一時間半ぐらゐですネ。

▲洗　濯

細かい物は一週に一度づゝ洗濯しますが、シャツ、ヅホン下、シーツ類は外へ出すので、洗濯師が一週に一度參り、品數を調べて洗ひます。而して今日此家の洗ひ上げれば、明日は他の家へ行き、其翌日は又此家へ錢をかけに來ると云ふ風に、順繰に廻つて歩くので、一日の洗濯賃七十錢、尤もこれは廉い方の標準と御承知下さい。日本の洗濯と異つて、大釜で煮沸したり、消毒したりするので、家内の者ばかりではチョット億劫なので御坐います。洗濯日はチャンと定つて居て、勝手の天井裏に乾燥場がありますから、雨天でも雜作なく乾きます。

△下　女

私は自分で田舍から五十歲ばかりの質朴な下女を見付けて來たのですが、「掘出し物だ大當りだ」と人から褒められました。給金は食べさせて八圓、復活祭と降誕祭の前には、チョット我國の盆暮と云ふ具合で、衣服とか金とかを與るのです。下女の使ひ方は、我國に比べると、それは〳〵激しいもの、下女の食事の時間は勘定に入れて無い位なので、下女の方も却々氣が強く、日曜には早朝からサッパリした衣服に着更へて、『奥様これから行つて參ります』と澄して出掛けます。それで下女二人を使つて居る家では、夜晝交代させて遣るのですが、下女一人の家は土曜日の晩に遣ると云ふもあります。私宅の下女は、今申す通り田舍氣質で極使ひ易く、日曜に出ても四時には歸宅しましたが、擦れた町の女は、却々言ひ付け通りに歸らないで困るさうです。

△下女の情夫

下女部屋が家の内に在る家には下女が居附かぬ、家と下女部屋と離れて居ると下女が居附く、其理由と申すは斯うなのです、下女には大概情夫があつて、それは多く兵士ださうですが、部屋が家と離れて居ると、夜の用事を片付けてから自分の部屋へ下り情夫を引入れて入口に錠を下して了ふさうで、下女部屋が家の中に在る處では、左樣いふ次第に參らぬ、それで下女が居附かぬのでしやう。日曜日に兵士の情夫と手を携へ

て、公園など散歩して居るのは實に暢氣らしいと思ひます。

▲普通教育行届かず

上流社會では家庭教師を雇つて置き、中流社會では母親が時間を定めて仕事の傍ら子供を教へ、母親に素養のない家とか、忙しくて暇の無い家の外は、大概子供を小學校へ遣らぬ樣です。尤も高等の學校へ入學させる前には先づ寄宿させるので、私の長男は八歳の時彼國へ拉れて參つて

英國風俗(16)



公衆展覧所の美術室

直に寄宿舎へ入れて了ひましたが、此兒は英語を少し知つて居ましたが、露語を少しも知らなかつたので非常に困つたさうです。併し五個月ほど寄宿した間に、巧く露語を話すやうになりました。

▲衣服

交際用の晴着は仕立屋に頼むが、常着や子供の物は皆主婦が自分で仕立てます。着物道樂の人は有る上にも拵えて、澤山藏つて置くこと我國と違ひません老人が割合派手づくり

の様にも見えますが、實際は左様でありません、寡婦で子供を育てゝ居る婦人などは、黒服ばかり着けて誠に質素なものです。

▲露西亞婦人の頑固

顔の異れる如く心の異れるは何國も同じ事、又婦人相集れば知己の時に餘念なく、衣服の品定めなど矢張り我國同様ですが、彼國では男子の方が温良で交際し易く、婦人は多く頑固で底意地惡く、チヨット附き合ひ難い。併し極深く附合ひ込むと情が深いとも申すことです。

▲身の上話

私は二十七歳の若盛りに、八歳、六歳、五歳(雙兒)、三歳の五人を遺して良人に先立たれ、途方に暮れて涙も出なかつたのです。所が良人の姉妹が『日本の婦人は良人が死んでも泣きませぬか』と改まつて問ひましたので、私は自暴に『露西亞の婦人は如何です』と問ひ返しました。所が眞面目腐つて『露西亞婦人は無論泣きます』と答へましたから、私は『人情に東西の區別が有らう筈は無い、遠い他國で頼りにする最愛の夫を喪ひ、幼少の五兒を遺されたる今の私は泣くにも泣かれぬ胸の中、悲哀極まつて涙も出ないのです、それが判りませぬか』と言つて遣りました。良人の姉で寡婦になつて居るのが、良人の不在中も良人の歸國後も私宅に同居して未だ慣れぬ露西亞の世帶向や外向の相談相手に爲り、私も頼りに思つて、極親密な間柄でしたが、良人死去して漸と葬式が濟むと、『同胞が死ねば最早此家に用は無い』と申して姉は直に歸らうとしました。私は呆れ返つて『切て一週間居て呉れても可いぢやありませんか』と怨みを申しました。妹婿は軍人でしたが、狡猾手段で良人の遺産を瞞着しやうと掛りました。私は良人の長兄の日本に居るのを信用して居ましたから、良人の遺産を其儘銀行へ据ゑ置き、後の始末を日本に居た長兄に相談する積りであつた所、妹婿は頻りに急き立て早く銀行から引き出させ、利の高い公債を買はせやうとしましたので、私は兄弟の間柄と信じて居ました處から、宜しきやうにと打ち任かせ

たのです。スルト妹婿は私に向つて『貴女は此國の銀行の事情が判るまいから、拙者が引出して上げましやう』とて私を市役所へ連れて行き、證明書に捺印させました。後に知人に見て貰つたところ『此證明書持參の者へは何時にても金子を渡されよ』と云ふ私の委任狀でしたので、私は眼は通さずに捺印した失策を氣付き大層驚いたのです。それから私は妹婿の家へ銀行の金を受取りに出掛けましたが、何の彼のと延した末『此金は貴女に直渡すとは出來ない、未だ生若い人に子供を托して大金を渡すのには後見人が要る、ソコで私が後見人になつて上げやうから、貴女は家を仕舞つて私の家へ同居しなさい、それが安心である』と百方勸めました。それで私は『子供を拉れて同居すれば永い間に面倒の起るは必定である。何樣な小さい家でも可いから一戸持つて、子供逹を育て上げ、而して良人の家名を繼がせたい決心です』と斷然謝絕しました處が妹婿は尙ほ『子供逹は我々が立派に育てるから、二千圓ばかりも持つて日本へ歸つたら宜からう、同胞が死んでからはアカの他人だ』と言ひました。私も最早自暴ですから『左樣アカの他人は御互樣、言はずと判つて居ります、私が故鄉を離れて斯樣な異鄉へ來たのは、二千留や三千留の金を貰ひたい爲めではありません、可愛ゆい生みの子の行末を見たい一心で、斯樣な方角も分らぬ國へ渡り苦勞もしたのです、遺產其他の方法に就ては、日本に居る長兄に問合して取計らふから、御世話になりません』と言つて喧嘩しました。さて遺產の件は親切な知人が中へ立つて、種々世話を燒いて吳れましたので、滯りなく運びましたが、一時は面倒臭くて、腹が立つて、金を妹婿の橫面へ擲き付けて遣らうかと思つた位。それで引拂つて我國へ歸る時も、親切な人は波止塲まで送つて吳れましたが亡夫の兄弟共は影も見せませんでした。

以太利の一小村に、大層賑やかな婚禮があつたそれは三人の兄弟が別の三人の姉妹と一人つゝ、外に三人の兄弟中の一人の妹が三人の姉妹中の一人の弟と、都合四組の婚禮が同じ場所で同時に行はれた、それ計りではない、揃ひも揃つて四組共、連合は同じ年齢で、同じ服、靴それで三人姉妹の伯父さんが儀式の時の副牧師であつた相だ、其上新婦の中二人は、双子の樣に能く似て居た。

獨逸家庭事情

獨逸協會學校長　大村仁太郎氏談

最初の家庭敎育

中流以上の家庭では、敎育の第一目的として、小兒に「從順」と云ふ事を仕込むので有る、此從順は家庭一般に守らねばならぬ所で、即ち親の云ふ事を能く聞いて何所までも從ひ守るので有る、若し親が其は不可と云へば如何なる事でも直ぐ止めて仕舞のである。

獨逸では小兒が生れると直ちに此方針を採つて兩親が養育し始めるので有る、と云へば東西も分らぬ言葉も分らぬ生れたばかりの者に如何して從順が敎へられるかと危ぶむ人も有らうが、元來眞の敎育は搖籃の內から敎へ込まねばならぬのが當然で有つて、此搖籃時代の敎育が且つ又最も大切なので有る、從順で無くてはならぬと云ふ事が徐々小兒の頭に分り相に成つて來る年頃に至つては、最早既に遲い、どれ程敎へても幼少な頃に敎へた十分一の効もむづかしい。

偖、如何なる事を從順と云ふか、又如何にして生れたばかりの赤子に其れを敎へるかと云ふに、言ふ事も知らねば東西も分らぬ赤子でも先づ規律と云ふ物が作られます、たとへば何時には寢床に這入り、何時には起き出で何時には食事をさせると云ふ事の如き、規則正しく時を定めて實行すれば、追々に生長するに從つて永い間には何時と無く、小供の方でも、時きらはず隨意に寢たり起きたり物を食べたりは出來ぬ事と氣が附いて來る、何にも無い時に若し食物を求めても、親達が承知しなかつたら、仕方無しに小兒の方が服從して行くのである。斯の如くにして先づ規律が出來る、

此規律と相待て從順が小供の內から敎へ込まれるので有る。

鞭撻の敎訓

若し父母の命令に從はない性質の惡い小兒が有つた時には、之を矯正する方法として、或る一定の年齡に至る迄は、時々小兒を鞭撻する事は敢て厭はない、如何にも野蠻な仕方の樣では有るが、かまはずどし〱毆打する事が有る。

之を敎育論から云へば云ふまでも無くそんな亂暴な事が出來る譯の物で無い、進步した敎育に成れば成る程、幼少者を保育者親ら鞭を持て毆打するなどは言語同斷な事で有る、けれども世界の文明國富强國たる獨逸の家庭では實際此手段が盛んに行はれて居る、行ふ人も見て居る人も決して不思議とは思はない、云ふまでも無く此鞭撻に附いては隨分各種の議論は有るけれども、英國のジョンロック氏の如きは之を認めて適當なる手段として居る、少くとも七八歲位までの小兒には差支無き事宜しき事として居る者が、獨逸の敎育者の中にも中々少く無い。

單に鞭撻と云つても、日本人の考へる樣な二つ三つ御見舞する位な事では無い、飽までの鞭撻で、それを七八回までも續け樣にやるのである。斯うなくては眞實に其甲斐は無いので有る、例令はチビ〱少しづゝ藥を飲んで居ても中々其効が現れないのと同じ事で、滅多に鞭撻せぬ代り、鞭撻する時には厭になるまで鞭撻するから、從つて小兒の方でも强く其痛みを覺える深く感じる事に成る、さて一言の下に親の命令に服從する樣に成れば、それから暫時の間は其小兒に盛んに用事を云ひ附ける、小兒も未だ鞭撻の痛みを忘れる所で無いから、能く從順に之を守る。こんな風で段々習慣に成つて、年月の立つに從つて從順の美德が現はれて來るので有る。

小兒と意志の發育

斯して小兒には必ず從順と規律とを敎へ込むが、他の半面から見て小兒の意志の發達を妨げはせぬかと危ぶまれるので有るが、獨逸では之が爲め小兒に活動の

自由を許して一方では大に意志の發育を計つて居る、例令ば學校から歸宅來ると閑暇が有る、此閑暇には出來るだけ遊ばせて申分の無い程跳ね廻らせる、時に衣服が汚れようとも、或は靴を傷つけやうとも、そんな事は一切咎め立てせないので有る。

日本では小兒を外へ遊びに出す時、衣服を汚してはいけません、と母親が屹度命令るけれども、小兒より衣服の方が大切な物では無いのだから之は大きに間違つた話で有る。

私に大層銃獵好きな朋友が有つて、一匹の獵犬を飼つて居るが、此の獵犬は中々の惡戯者で、時々お庭の邊に穴を堀つたり大切な植物を頭から嚙みちぎつたりするので、妻君の方から小言が出て、どうか犬を他所へ預けて下さいとの申込に對して朋友は、己には此庭よりも彼犬の方が大切なのだからと云つて素氣無く其請求を拒絶した事が有る。

それから私の庭に牡丹が咲く、で小供は無頓着であるから時々其傍へ行つて、頻りに其を慾しがつて居るそれを妻が横合から、牡丹を折つてはなりませんと命令て居たから、私は其時左樣云つてやつたので有る、牡丹よりも倘ほ美しい花の咲く意志を折つて如何なるものか、牡丹は折らせる其代り意志の自由が延ばさるれば結構なので有る、此意志の發達と從順の養成とは是非とも相待て行かねば、畢竟美菓を收穫する事が出來ない。

國民の精神

生れてからの家庭教育及び小學校時代は總てこんな風に仕込まれて、やがて中學時代も高等學校時代も又此方針で、引續いて教育されるのである。今日も倘ほ教場には教鞭を飾つて有る學校さへ有る（勿論使はない）總て生徒等は授業の時には如何にも從順で有ると同時に、常に十二分の活氣を帶びて居る、これは即ち意志の發達が遺憾無く出來て居るからである。米國にては倘ほ一層自由多く少年子弟が教育されて居るけれども、其代り從順や規律は甚だ不足で有るが、幸に之が程善く平均して居て、國民の精神と云ふ物も之から

出て來て居る。

獨逸に於ける修身（即ち倫理）の三大眼目と云はれる物は、第一に誠實です、第二は從順、第三は規律です、此三つさへ揃へば實に立派な人間が出來る。國民の性質には一つは其風土の關係も大に有る事で有らうが、獨逸人は一般に日本人の如くあきつぽく無い、甚だ忍耐心が强大である、此忍耐心が前の從順や充分發達せる意志等と相待つて、盛んに活動するので有るから獨逸今日の富强と文明とは當然で有る。



倫敦ハーロツド倉庫の食料區

小兒の氣風

私が伯林に居た時、一日三歳前後の小兒が其家の前の石段を上り下りして遊んで居るのを見ると、ピヨンと跳ね上つてはピヨンと飛び下り又ピヨンと上つて又ピヨンと下りて、何時までも此單純な無趣味な事を仕て居て少しも飽かない。で何時まで同じ事を仕て居るかと試みに立つて見て居たが、約三十分時の後までも未だ同じ事を止めないので見て居る此方の根氣が盡きて、末を見屆けず仕舞たが日本人には給金貰つても飽きに堪えられない様な事を

何時までもこんな風でやつて居る。獨樂を廻しても唯た一人で一つ所に何時までも〲同じ事をやつて居る此飽易く無い氣質が自營自働の社會へ出てから必要な堅忍不拔の精神と成るのである。尤も之は獨り獨逸國民に限らず歐洲は大方自主自營獨立の氣風が盛んで有るが、此氣風も規律や從順と共に小兒の時から敎へ込まねばならぬ。

何事でも自ら手を下して爲る、少しも他人に依賴しないと云ふ是等の氣風を養成する一例を上げて見れば座敷の眞中で小兒が椅子に躓き倒れて泣き出しても、つい傍に居る母親が、それを起してはやらない、起してやつたら善いぢやないかと忠告すれば、己で轉んだのだから己て起ますと云つて知らん顔を仕て居る、で始めの内は多少躊躇して居た小兒も遂に單獨で立つて行く。斯して他の助を借らない風に成るので有るが、日本では旦那樣とでも呼ばれ相な身分に成れば、一寸した事でも妻君や下僕に命ずるけれども獨逸では勅任官位な人でも、己の書いた手紙はポストの在る所まで己で持て行て入れて來る。衣服の如きも妻君に從から着せて貰ふ樣な事は仕ないで、自ら塵を拂つて自ら着るので至極結構な習慣で有る、が斯の如きは一日にして養成し得る習慣で無い、佛國のルツー氏は天然主義を採つて、小兒はうつちやつて置いて勝手にさせるが善いと云つたけれども、それでは必ず他の一方に弊害が起るのである。

獨逸の小兒に忍耐心强き一例が有る、それは玩弄品を唯だ一つより小兒にやらぬ、此玩弄品が破れて、人形ならば手も取れ足も離れて殆んど胴ばかり位なのを小兒は矢張大切にして持つて居る、親も亦どれほど破損しても一つ有る以上は決して他に與へない。何所までも物品を愛用する性質は斯して養はれるので、日本の小兒の直ぎに飽いて新奇を見れば求めねば承知しない――父母を苦しめて――惡癖に比ぶれば實に大なる差で有る。

獨逸人の内には祖父の時代から傳はつて三代も持ち續けた緣の甚だしく磨滅して居る銀時計などは珍らし

く無いので有る。或時私が友達と公園を散歩した折り、友は誤つてステッキを折つた、元より善い品物でも無かつたが七年間持ち來つたのなそうで、安價な物を七年間も使つたのなら最早捨てゝも遺憾の無い筈だが、其折れた先を拾つて行くので有る、如何するのかと尋ねて見たら、宅へ歸つて輪を嵌めて繋げば再び使用されると思ふからだと云つて居たが、彼等は此ステッキを繋ぐ爲めには新らしき品物を買ふより高ついても敢てそれをかまはないのである。

以上は獨逸の家庭に於ける顯著ある特色で有るが、其他は總て歐洲各國と大同小異で爰に書くだけの價値が無いので有るけれども次手だから一寸、

臺所と衣服

中食に澤山御馳走をして、晩は一切冷い物——家のハム燻した鮭なんど——で濟まして煮炊を仕ない朝は配達されたパンとミルクとコーヒーで、下女の手を勞する事は至つて少ない、私の下宿して居た某博士の宅は十數人の多數で有つたけれども、女中は唯だ一人でそれで尙は且つ閑暇な位であつた。何時も朝飯が濟めば妻君が其日の入用品を一切電話で注文する。ビールは特に獨逸の食堂で過多に飲用される之は茶代りに飲むので、大樽に買つて置いて五合位這入る大コップに入れて食事の時附けて出す、五合で上等品が七八錢位で有るから價値も丁度日本の茶程で有る。それから室内を掃除する時、勿論倉も押入も無いのだから床の間に飾つて置く各種の器具の塵を一々拭ひ取るのが下女の大骨折りで有るが、絨氈を一週一回淸めるのは各工の役で豫定の人足が來て繩に懸て能く叩いて又元の通り敷き詰めて行く。

衣服は巴里から直ぐ流行して來るので有るが、東隣の墺國は隨分華美と驕を喜ぶので兩國の影響を受けて居る、が要するに一般に地味で、往來の色と云ふ物は殆んど定つて居る、鼠で無ければ黑で、一寸汚れ目の見えない、雨に少し位濡れても差支の無い物を平生に用ゐるので有る。

次手に小兒の喜ぶ祭日の內此國の天長節は各國に比

類の無い盛大な物で、店々は各種の飾りを爲し陛下の肖像を澤山に飾り(此點は日本と反對)盛んにエルミチーションを施し、一町悉くエルミチーションで晝より明るい事も有る、で學生等は二日間休業する、前日は學生等の祝賀が有て翌日は父兄を招待するのも有る。も一つセダン祭が樂しき日で有る、之は七十一年の普佛戰爭を紀念する愛國祭で、各學校では校長始め生徒等の演説なんどが有る。

家政家としての獨逸の婦人

獨逸は武强國であると同時に又其國民は質素勤儉主義である、故に其の家庭は概して浮華を厭ひて質朴を旨として居るのである獨逸の主婦は英國の主婦が上流社會に進めば進む程多く家庭の事を放擲して盛に交際場裡に出入し、競ふて贅澤を衒ふの風あるに比して頗る質素で且つ屈强なる家政家で、節儉主義で自から世帶の勞に服するを厭はぬ風がある、彼等はまづ朝飯が濟めば下婢をつれて市場へ出掛け日用の必需品を買ひ調へ、歸宅して臺所の業に從事し、食事の準備をする間に最早午前の時間が過ぎて仕舞ふ、晝食後には又裁縫を爲し、諸般の家事を營んで日を暮すが常で、夕食後の時間が專ら修養と娯樂とに供されるのである。

彼等の趣好娯樂の第一はまづ音樂である、獨逸の家庭に於て上等下等押なべて普く行はるゝ娯樂は音樂で、獨逸の家庭に入つて恐らくピヤノの無い家はなく、ピヤノの奏けぬ婦人は一人もない位で、少しく餘裕のある家ではバイオリン以上の物を供へて居る總じて獨逸人は音樂の趣味を感づる事深く、皆音樂を解し得る耳を持つて居る、

音樂に次で彼等の趣味は繪畫である、元來獨逸では

男子よりも女子の人口が多く隨つて生涯結婚する事の出來ない婦人が年々増加して來る傾向があるので、親たるものは女兒にはまづ財産を分與するの心配をする外に幼時より自活の道を授くる爲め、繪畫は優美な婦女子の天性に適ふて居る處ろから自然婦人社會に繪畫の趣味を備ふるものが多くなつたのであらう。

右の外夜分には新聞雜誌を讀み、又男女相集つて戲曲を誦して樂しむ事もある。之は夫々役割をして置いて順々に讀んで行くので終りに批評などを試みる、勿論獨逸の戲曲は文章もよく事柄には不倫猥褻の事なく誠に高尙純潔家庭の娛樂として恰當のものである、又一家手を携へて演劇を見に見く事もある、そして此の觀劇も普通夕食後三四時間で濟むのである。

又婦人の修養としては外國語の研究である、これは一家の主婦たる母親も娘も一緒になりて六七人の仲間を語らひ、大概午後に日を定めて輪番に宿に當り親しき外國人を敎師として招き寄せ、珈琲をすゝり、ビスケツトを嚙りつゝ不審を糺し、發音を直して貰ふので、年を老つても猶孜々として勉强を怠たらぬは感心なものである、そして其の外國語といふのは多くは佛蘭西語で、これは諸學校に於て第一外國語として佛語が重く課せられて居るからである

獨逸では英國と反して食事は中食を正餐とするのである、朝は八時より九時の間にパン、珈琲、卵位で淡泊なる朝餐を濟まし、晝は一時より二時の間に正式の御馳走を食べる例である。大概は食卓に麥酒が備へられる、肉、野菜、鷄卵、パン等五六種の料理で佳なりの御馳走がある、そして晩は大概七時から八時の間に晝食の殘物を用ひ、冷肉などで夕食を濟すのである、又獨逸では主婦が頗る世帶染て居るから中等社會でも下婢を使ふことが比較的に稀である、まづ大概中流の家庭で子供の二三人もある家で一人の下婢を使ふのが例である。二人以上置く內は餘程餘裕のある家でなければならぬ、そして下婢には大概二週間每に一回づゝの休暇を與へる習慣で、それは通例日曜日の午後である、されば日曜日の午後は客の方で氣兼して極く懇意

な家でなければ訪問を見合す事になつて居る。

獨逸は結婚に就ては極めて穩當な風習である、或る社會に於ては自由結婚も多少は實行されて居るけれども、まづは大抵其の親達が充分に撰擇する風となつて居る、でいよ／＼約婚が成立つとそれより短かくて半年、長くて三年の間待つた上で漸く婚儀を行ふ。これは双方家計の都合や、持參金調度の仕度などもあるからである、又男の方では收入の都合が第一で且つ相互に氣心を知りあつて充分間違のないのを期する爲めに若干の年月を過すのである、其間男は女を訪ねて共に散歩する事位は許されて居るが、其の時は親の方で萬一の不心得を慮り、小兒を一人道づれがてらの監視役として尾行せしむるのである、元來獨逸は歐洲第一の武强國で、軍人は人間の中の花として交際社會から持囃されて居る、隨つて彼等は身の廻りを華奢にし、又所謂意氣を尊ぶ處ろから自然辭令にも嫺れて居る、旁々して處女の歡心を得るものは多く少壯士官である。

獨逸は英國などゝは違つて男女の間は餘程の隔てがある。まづ妻は夫に一目を置いてゐる。此の邊はやゝ東洋的にも見へるが、さればとて決して東洋諸國の如き男尊女卑の弊風はない、又親と子の關係を見るにこれも又東洋風の父親尊敬主義の風習である、又親が子に對しては中學程度までは監督頗る嚴重で一歩も假借しないのである、若し親しき友人などが尋ねて來ても若し其の子の勉强時間中であれば父母は一言の下に之を逐ひ斥ける事がある、兎に角獨逸は英米諸國に比較して家庭は多少壓制的であると言つてよいのである。

白耳義の婦人社會

新歸朝者 I A 生

▲先づ何から御話を申してよいか順序立つて御話しを致す譯にはまゐりませんが、私が同國に四五年間滯在して居る間に見聞した事を申上げたらば同國婦人の狀況も家庭の模樣も自然とお分りであらう

▲其處で婚禮 の事から申ませう、元來が保守主義の國、特に女子に對しては飽まで保守的で、女子敎育もなか／＼盛になり隨分進步主義の婦人も多くないではないが、學校へ通ふのでも良家では必ず之を送り迎する保護者を附けて置いて油斷をせず、保護者を雇ふ事の出來ぬ家でも婢とか母とか兄とかゞ必ず之を送り迎ひするといふ風に餘程嚴重であるから、婚を約す塲合であつても、男女直接に相擇ぶといふ樣な塲合よりも、親の指圖に委せるといふ塲合の方が多い。其處で愈々婚禮となると二葉の招待狀が知己友人間に配布せられます、其第一葉は花嫁の兩親の挨拶で、第二葉は花聟の親戚の名で是非式塲及宴席へ御出席を乞ふといふ案內狀で御座います、夫れで此案內狀に關する一切の費用は花聟の負擔、また式塲たる寺院の飾付け、役僧に着せる華かなる式服、其他讀經費等は一切花嫁の方の負擔に成て居る。式塲には立會人として嫁聟雙方の知己友人がズラリと席に就く、少し名族の婚禮となると實に夥しき多數の立會人が集る、其數の多い程が所謂家門の譽である。祭司の讀經が始ると同時に嫁聟は祭壇の傍なる大椅子に座を占め、附添の役僧が嫁の被衣をパッと其處へ廣げる、嫁が立つたり膝を突いたりする度に役僧は其被衣を取除け、坐に復するを待つて之れを元の如く整理する。此式の終る頃番僧に保護された美しい服裝をした女達が寺院の門口へ出て、ワイワイ言つて集つて居る貧民及乞食に金錢を施す。彼等が惠を受けて歡聲を發して居る最中新夫婦の馬車を先にして一行は公園へと繰込み、此處で新夫婦は化粧を直し寫眞を取り休息をして宴席へ臨むですが宴席はホテルで開くのが普通になつて居るやうです。此處で新婦は新夫の名の次へハイフンを付けて名を呼ぶやうになる、日本で良人の家姓を冒すのと意味から申しても事實から見ても同樣で御座います。

▲次には葬禮　原來此國の人は華麗好きでありますから葬禮すらも何處か華やかです。先づ黒枠付の死亡廣告札が、壁、門の柱、電柱、雜貨店の窓杯に張出され、出入する人は皆喪服を着け、泣き男と呼ばるゝ町の月番が葬儀番端の指圖を引受け、周圍一丈もある造花の花環を柩車か柩の上に載せ、上流社會では冠を戴き手に光輝燦爛たる金色の十字架を捧げて柩に隨ふ一婦人の外、女子は總て柩を送らぬ事になつて居ります。柩に引添ふては僧と泣男、夫れから一般見送人といふ行列で町端にまで練り行き、町端れへ來ると、冠を戴いて居る女も十字架を他の男に渡して用意の馬車に乘り泣男も乘り、そして墓所へと急ぎます。勿論貧乏人の葬儀は極めて略義に行はるゝのですが、少し知名の人々になると式を略するといふ事は到底出來ないやうになつてゐる。

▲お祭好の國民　白耳義人は快濶で、客好で、音樂好で、お祭り騒ぎを年中して居る國民で御座います、先づ第一が

（一）セント、ニコラス祭で　御坐います、此祭の前夜に於ける町々の雜閙と申したらば實にお談の外で殆んど此人浪の中へ卷込まれたら出るも引くも出來なくなつて仕舞ます、或年は雨が降りましたが夫れでも傘と傘が重り合つて、往來は押返される程の人出でした。ニコラス尊者は十二月の六日の朝未だ夜が明けるか明けないかの内に驢馬に乘つて御着になると信じられて居て、子供等は其驢馬に喰はせるのだと言つて日頃から蕪菁や枯草を貯へて置いて、五日の晩に之れを籃の中へ入れて置いて眠る、若し子供が日頃大人しく良い子である時は翌朝目を醒して見ると蕪菁や枯草が消失せてしまつて、其代りに種々の御土産や玩具が澤山に入つて居る。惡い子の蕪菁や枯草は其儘驢馬も喰はずに殘つて居るさうです。六日の日になると娘の子といふ娘の子は可愛らしい人形を抱き、男の子は男の子で各自に太鼓や馬を手にして喜々として相往來して居る樣、誠に美しい光景で御座います、貧民乞食には喜捨金與へられ、

奴婢には薑餅で造つた造物を送る例となつて居て、私の雇つて居つた或コックは牝鶏一羽と三十九羽の雛を貰つた事が御座いました。

(二)クリスマス祭　其内にクリスマスになる各戸クリスマス、トリーを立て、簡略にしても樅の枝を立てゝ之れを飾付ける、「幼きクリスト」の讃美歌を唄ふ間は此飾木の前に一二本の蝋燭が點せられる、寺院といふ寺院も飾付けをします、舊教徒はセントニコラス祭を盛にしますからクリスマスを新教徒程盛大には致しません。

(三)新年の祝　新年は誰彼無しに一大祝節として祝はれ、政廳に式が擧げられ國王に祝辭を奉り、國民一般は贈物を交換し、カードを取交はし、相訪問し、絶えたる交情は再び温められ、深き恨も一掃せられ、茲に新なる生活は更に開始せらるゝといふ次第は日本と大差なしでせうが、虚禮虚飾が盛なる國民丈けにカードの交換などの劇しさは實に目覺しい程で、郵便配達を泣す事到底日本の端書交換などの比ではありません。少し交際の多い人々なると中には其費用を貧民院に寄附する廣告を新聞に掲げる者もあるが其は五百フラン六百フランといふ額です、夫れでも口惡屋は之れを目して吝嗇家と嘲ける處から見ると實際の費用は尚多と懸るので御座いませう。

(四)カーニヴァル祭　夫れから數週の後がカーニヴァル祭になる、假面を着け假裝をし、唄ふ舞ふ、騒ぎ放題騒ぎ散らす。年若の男女は假面假裝の爲めには費用を惜む事無く盛裝して押歩き、上流の婦人すらも往々假裝して其仲間に加はる事がある、ボンボンや花を露臺から行列に向つて撒散らす、下からも投げ返す、歡呼の聲、唄の聲の絶ゆる間とては無い、踊り手は多く古風の姿をする、特にピンチユ其他二三の都會にては中世時代の服裝を其儘用うると申します。此祭は數日間續いて、老若共に發狂したのでは無いかと思はれる程です。

(五)アッシユ、ウエッドチスデー　次は物忌の始りで堅戒日とでも譯すので御座いませう、此時はカー

ニヴァル祭の反動ともいふべく、華奢なる事は一切禁止され、男女は勿論子供に至る迄も陰氣な服裝をして寺院に赴き、此處で其額へ太く黑く十字架の印を押捺して貰つて歸るのですが、此印の在る間即ち廿四時間内は身を淸淨に保つ事になつて居る、如何なる事があつても之れを消す事は出來ませんのです。

(六)セント、ヴエレンタイン祭　一名戀選みの祭と言つて、日本ならば昔の常陸帶のやうな意味の祭かと思はれます。或は日本の懸想文の故事に該當すると仰しやる方も御座いました、此日になると郵便配達の小さい鞄の張切れる程懸文や道化た事を書いた手紙が一杯になるので御座います。

(七)アプリル、イデオシース　又アプリル、フールスデーとも申します、例の四月馬鹿で、米國などでは此日惡戲の仕放題といふので、子供達が盛裝せる紳士の腰の邊へ長い紙を下げたり、膠で銅貨などを人道の煉瓦へ貼付けて置いたり、用も無い人家のベルを鳴らしたり致しますが、此國でも同樣種々の戲をして遊びます、ボールや菓餅で種々の造物をして一杯喰はせて手を拍つといふ事もやります。

(八)メー、フエステヴアル　アプリルフールの後一ケ月が此祭になります、宗敎家、俗人の區別なく音樂會を開く、宴會を開く。

如斯祭好ぎ騷ぎ好きの國民は種々の名目の下に、年中唄つて踊つて日を暮して居るといふ有樣です。

▲音樂の嗜味　原來上述の如く祭騷ぎの好な國民でありますから音樂好である事は勿論で御座いますが、音樂に對する趣味は却々高尙であつて、寄ると觸ると音樂の合奏が始まる、誰でも二三人寄ると直ぐ合奏が出來るといふのは、即ち誰でも音樂の素養のある證據で、或時七歲になる少年が姉妹と共にピアノを執つて大人仲間の宴會に興を添えて居るのを見ました事が御座います、一家族の中一人も音樂を弄ぶ者の無いといふ家庭は餘程珍らしい位で御座います。

▲白耳義人の特性　白耳義人は親切にするといふ事を

主義の樣に思つて居つて、遣放しで私利をのみ謀る樣な連中は極めて少い、洒々落々とでも申しますので御座いませう、明け放しな大まかな處がありまして誠に人附きがよいので御座います。外國人を客として迎ふる事を喜び、親切で快濶で人をそらさぬ處は羅甸人の如く又夫れかと言つて一方に確乎した處のあるのは何處迄もフレミッシュ血統の民たるを證して居ります、此樣風であるから食卓に着いた時でも快談縱横手眞似顏付までして談笑いたします、卓上の葡萄酒、若しくは水罎などは皿の傍へは必ず置かず皿の向ふへ一列に並べる事にしてあるのも妙では御座いませんか。

▲水と葡萄酒　前に水の壜の事を申しましたが、筆の走り過ぎた爲め思はず申して仕舞つたので、此國で水は單に洗濯用と化粧との外には用ゐられませんといふのは、實に一口でも飲まうものなら乾度嘔吐を催すといふ惡水で御座いますから、グント市の或年若い婦人などは未た生れてから水の味といふものを知ら無いと申しました、之れは知らぬ方が餘程幸福であると思はれます、又葡萄酒は獨逸の麥酒と並び稱せらるゝ名產地で、朝飯晝飯の區別なく之を用ゐます、そんなにずヲに用ゐるのなら品質が惡いのであらうと思ふとさうで無い佛蘭西の食卓で用ゐるものよりも遙に上等で、一寸した家には必ず葡萄酒貯藏室が設けてあります、此室は極めて瀟洒困難に出來て居つて美術家などの好みさうな構造であるのです。珍客があると此室から埃りだらけな、然し鄭重に口をしたトットキの葡萄酒を出して御馳走する、麥酒も咖啡も同じく貯藏されてありまして、茶も食事中度々用ゐられ、夫れから午後の四時と同十時又普通午後八時に家族團欒して之を喫用するやうでありました。

▲食事の模樣　出職出商賣の人々は朝七時から九時迄の間に咖啡と巻パンとを用ゐて外出し、十一時半になると各自に家に歸つて來て、朝飯を十二時乃至一時に濟まします、食事中は如何なる場合でも品の變る毎に幾品でも皿は換へて出すがナイフ及ホークは之れを代へる事をしません、皿其他の食器は如何にも上手に取

披はれ、銀製若しくは玻璃製の箸が食器の蓋の上に載せてありましてナイフやフォークを用ゐず箸で食物を皿へ取て夫れからナイフ、フォークを用るといふ順序ですが慣れ無い外國人は思はず知らずナイフやフォークを食器へ持つて行く、給仕女は吃驚する、此方も氣が付いて面喰つて仕舞ふ事が尠く無い。御馳走にも種種あるが先づ英國産の杏製プッヂング、燒肉、其他でソップ、胡蘿蔔、犢肉、馬鈴薯、キクジシヤ、ホップ（蛇麻）の若葉、生菜、レオポルド等で仕上げ、肉類でも果物でも米國などには有觸れたものが此國ではなかなか珍重される、ソースに用ゆる米國製牛肉エッキスカリホルニヤ産果物鑵詰が無かつたならどうする事も出來ないのです。

▲家屋及家具　食堂と客間との後には必ず小綺麗な一室があつて、床は煉瓦で敷詰め若しくは敷物で張詰めてある、一方には晴々としたガラス窓が出來て居つて窓近くには棕櫚や其の他の蒼々とした樹木が繁つて居つて、窓の内にはピアノも備付けてある、安樂椅子もある、寢椅子もある、小形な書物卓子、茶、珈琲、葡萄酒を載せた卓子もある、是れを家族の居間として居ります。又寢間は床に絨毯を敷かず、如何にも綺麗に掃除が行屆いて居つて、若し新夫婦の寢室あれば、一人寢の寢臺が二臺、二組の箪笥、二組の衣裳棚、二組の化粧臺といふ風に總て、二組宛用意してあるといふ事は衛生の點から言つても、氣持の良い點から言つても良好なる結果を見るに相違ありません。特に化粧品を供用するといふ塲合になると新婦は更らでも小さい氣を痛める事が少くないと思はれます。富みたる人の家屋は各間貴重なる陶器、美術品を以て充されて居つて、一寸したストーブの爐縁爐棚にすら瑞典古代の經文などが記されてある物を用ゐるといふ風で、一室毎に皆博物館の參考室を見るやうな氣が致します。

▲奴婢の地位待遇　ワルルーン人が勤勉でよいとしてありますが、フレミッシュ人も忠實なる事は之れに劣りません、器具の掃除といふ事が女の一大仕事で、上下を論せず一週に一回即ち土曜日には必ず家の女主

人公自ら手拭前掛けで大事な器具の拭掃除をする事になつて居ります。日本でもかゝる風習は眞似をしたいと存じます。下婢の給料は最下等で一ケ月十五フラン小間使で三十フラン、料理番は廿五フランより四十フランの間で隨分出入は頻繁であるが家族に寵愛せられて一生奉公するものも多いやうであります。

▲氣性は保守的　一般の氣性は保守的で、父の職を襲ぐといふ事を餘程大事に思つて居る、職工に名人の多いのも一つは之れが爲めで、織物なども其機械の依然舊式を用ゐて居るに拘らず、新機を使用して居る國よりも精巧なるは、其職工が優れて居る故と思はれます。此外、生活費の事、商業政治、宗教の事、郵便、握手の話等お話し致す事は澤山ありますが、餘り永くなりますから女子教育のお話をして筆を止めて置きませうが總て女子は良人を助けて稼ぐといふ事は致しましても、單獨に或職業に從事して働くといふ事はしない即ち社會の表面に立つて働くといふ事は成丈け避けるやうな傾向が御座います。

▲女子の教育、社會と新思想　前にも言つた通り婦人は家政を掌るの外、社會に立つて業務に從事するといふ事は無いが、近年教育も次第に普及し師範、手藝、家政の各學校及幼稚園の如き其設備もなかなか完全して居つて生徒も年々増加するの傾向を生じてまゐりました、夫れ以上の高等教育即ち大學中ブラッセル大學は所謂國立であつてリーグやゲント等の大學と違ひ女子の入學をも許す處から入學者も年々加はつて來て、之れも前途喜ぶ可き傾向があると申す許りで無く、其學識が寧ろ男學生に優つて居るといふのは誠に賴母しい事と存じます。新しい教育を受けた女子の職務を鐵道部内郵便部内に奉ずる者も少くは無いが、其仕事は重に寫字計算等で御座いまして、何か纏つた仕事を任せ切りに任せるといふ事はされ無い、夫れで英米其他の外國から工藝又は學事の調査を囑せられてドシ〳〵女子の遣つて來るのを見て驚いて居る。兎に角女子の職業といふ事を餘り歡迎しないといふ證據には、良家の女子にして商業に從事し又は教師を爲すが如き事がありますると萬事に付けて處世の邪魔をするといふ風がある日本でも少しく未だ此傾向がありはしないかと思はれます。

米國家庭事情

在桑港　天涯生

▲家庭の主權者は誰？

既に今日では一體に個人の地位が高まつたけれど、それでも未だ吾日本の如くに家格を重むずる國柄にあつては、主人は則ち主權者であるが彼等の家庭ではホームの主權は則ち其家の主婦にあるので、所謂良人の勢力を以てしても、容易に此處には干渉が出來ない、既に法律上に於て其責に任じて居るので、であるから所謂主人なるものは單に其家計收入上の權利義務を負擔し居るに過ぎないのである。

▲良人と雖も一個の家族

家庭に於ける主婦の眼よりすれば、良人と雖も一個の家族、子女姑舅、雇人なぞと少しも撰ぶ所のない家族中の一分子であるので、惡く解釋すれば弊害もあらうが、主人をして毫も内顧の憂なしに、彼が平和の戰爭たる其職業に熱中せしむるには、良人をして其日其日の戰場に好個の勇士たらしむるもの、動もすれば閨間に良人を說くを以て、己れ唯一の事業と心得ふるが如き、東洋一流の妻君の、眞に思ひもよらぬ所であらう、未だ女子教育の効果が彼等程に發輝しない我國の女性に敢て此語を勸むるのは、或はお門違ひでもあらう、併しながら此心以て其ホームに盡瘁して貰ふ分には少しも差閊へない事と思ふ。

▲主人に後顧の憂患なく

猶ほ又た併せて言て置かねばならないのは、即ち彼等の住居である。夫は如何なる小規模の職業でも、彼

等の習俗必ず其職場商店事務所等、其職業を執る所と其住宅とを明かに區別しあるが如き、頗る囑目すべき現象である。從て彼地の都市は自ら兩分されてある。否職場と住宅の兩區劃を以て組織されてあるのが即ち彼等の都府である。曰く住宅町、曰く職場町！　勿論我國の市府の如き、自ら下町と山の手の區別はあるが夫は月給取と商人の住宅別に過ぎなからうと信ずる、故に我日本の女性がホームの主權者として、進むで其家を濟むるには、餘りに良人の職業方面に撞着の怖あるに反し、遒に彼等にありては、其社會組織が組織だけに、至つて安心なものである。恰も主人が後顧の患なくして、其職業に專念なり得るが如くに、妻君も亦た良人の職業を念頭に置かずして、一心其ホームの按配に盡す事が出來る、此主權者を中心として、彼等北米桑港に於る白皙種族のホームなるものを、次に少しく述べて見やう。

▲感服すべき妻君の腕前

彼等は徒らに厨房に出入せず、洗濯に手を浸さず、箒を把らず、塵を拭はず、甚だしきは己が履の紐さへ手ら結ばうとしないのである、而も一糸亂れざる其家庭の平調は、我國女性のアクセクとして、猶は巳が顔一つ直す暇さへ無きものゝ比ではない、机に肱を持たせて讀書に耽りながら其兒女を保育し、自ら監督の位置に立つて、其邸苑を淨め、其家を掃き、其服を洗ひ手づから其食卓を飾り、其晩餐に良人が終日の疲勞を滌つてやる、其腕前は實に感服の外は無い。

▲貧乏世帯でも

勿論勞働者のホームとなると、多くは部屋借で、謂はゞ慘憺たるものである。併し我日本の借家人の、みぢめな生活と一緒にされては困る、幾ら貧乏世帯でも天井には瓦斯燈あり、室の一隅にはシンクあり、ストーブあり、唯能く一本の寸燐にて、僅かに五分の短時間、パンも出來れば、ハットロール乃至マトンチャプの舌鼓も容易に打たれる、寢るにソファッーあり、眠るにベッドあり、粗末なりにも流行を追ふて晴衣の一枚を被るに、妻君左程の困難は、此種勞働者のホーム

と雖も、敢て感じないと云ふ事である。

▲それは〳〵贅澤な

されはこそ少しく餘裕あるホームになると、主人が精神の人たると、物質の人たるとに論なく、それはそれは贅澤な事である。良人は寢床を出でゝ先づ鏡に對する、髯を剃る、妻君は自ら己が頭髮を束ねる、食堂は白衣のウトレスによりて、飾られる、雪のテーブルクローズに、雪のナプキン、雪の皿に銀のナイフ輝きフオーク眩く、スプーン映じ、グラツセス反射し、金色燦爛たる花瓶乾として卓の中央に、家族一統の着席を待つの處、漸くにして厨房に香氣芳しく、ミートに玉脂滴りたぎるの時は、方にブレキの團欒の時であるマツシ運ばれ、ボイルド、ユギス出で、カーヒ來り、其處にフライ、ハムの特別注文あるかと見れば、此方にハム、ナ、エギスの無心出で、林檎出で、ハツトケーキ出で、中には不用意のハムボク、ステツキに、クツクの愚痴を聴かされることさへある。最も簡單なる朝の食事如きでさへ此通りであるから、デインナーの御膳立の盛饌聊か以て推すべしであらう。

▲美食日と來客日

尤も此デインナーなるものは、必ずしも晝食の稱で無い、寧ろ其一日中の最も大なる食事を意味するのでそして一週間中の最も大なる食事をビグデインナーと稱ふる樣である。夫は何れの家でも、大概金曜の晝の食事と定つて居る樣だが、主人の職業によりて、晩餐をビグデインナーと極めた家もある。蓋し主人の職業が、晝の食卓に着かれない家に於ては、獨り金曜日に係はらず、毎日デンナーは、晩餐に移されたものでもあらう。そして此日は彼等が一週間に一回の美食日で何處も盛な事である。そして此日は何れの家でも必ず一週一回の來客日で、未だホームを有せざる近親及び朋友が續々と見ゆるのである。此日臺所には乞食の客もあると知るべし。

▲客に供する食卓の斡旋者

序に猶ほ一言する、彼等の食卓には必ずテイブルマスターと云ふのがある、尤も我日本の食事にも全然無

いことはないが、其趣を異にして居ると云ふのは、日本の家庭のテーブルマスターは、最も無勢力者たる奴婢、若くは奴隷的妻君必ず其任に衝るに反し、彼等の習俗にありては、其家族中の最有力者が其責に任ずるのである、さは云へ、家族の中に、必ずしも誰と極つた譯でない、勿論單に外來者交らずの家族だけの食事ならば、即ち主婦とか、グランマーとか、所謂其中の權力者が必ず之に推されるのである。併し爰に近親若くは珍客の食卓となると、則ち其近親珍客へ、直接の關係者たる家族がテーブルマスターとなるので、主人の客ならば主人、娘の客ならば娘、先づ其首座を占めて、以て其客と其家族とに對する、其態度が一種の禮とは言ふものゝ、儀數の家庭に固められた私などの頭腦には、如何にも異樣に感じられるのである。

▲樂しき食事時間

それから食堂に就て、彼等の美風とも稱すべきもの二三を擧ぐれば、第一に敬服すべきは食事に對する彼等の感念である。一種の迷信か、それとも又た樂しく食ふべく特に斯る習俗を爲したのか、それは兎に角、美風は遂に美風である。彼等の食堂に入るや、假令如何なる匇卒の場合と雖も、手を洗ひ、顔を拭き、頭髮を梳り、コートを被ぎ、儀容を正ふして、齋戒沐浴して初て食卓に着くのである、當日の新聞は必ず器皿の間、藥味の壜に立掛られて讀む人がなと待つて居る、樂しく語り合つて睦じく美味が分たれる。尤も彼等のホームにあるや、各自に其室を異にし、別に所用あるでなければ、互に相見る事がないのであるから、即ち此食事時間を利用して團欒を樂む事に自然となるのであらう。

▲食堂は生命の繼足所

故に此食事中の彼等は實に平和なもので、子供なぞが如何に笑ひ興じやうとも、高聲を發し樣とも、戯れやうとも、食ひ散らさうとも、爲すが儘に任せて置いて、決して小言を加へない、併し苟もダヾを捏るやうな事があつて、食堂の平和を破ると見るや、唯に頑是なき小兒の故を以て、敢て之を假借しない、其父兄

乃至主婦は直ちに起つて泣き喚く我子を拉し、最も嚴酷に之を戸外に排し、冷然其食事を終るにあらざれば其子女を再び手にしないのである。以て如何に彼等が食事に就て神聖な考を持て居るかゞ分らう。勿論食事が吾人に生命あらしむるものならば、食事時間は命の繋目で、ダイニング、ルームは命の繼足所―神聖な筈である。

▲子供の家庭教育

彼等は其子女に對する極めて放任で、此食堂の一例を除くの外には、假令那樣の事あるも、決して干渉しない、第一學校から歸つて、溫習するではなし、衣類を汚したとて叱られるではなし、外にあるも、内にゐるも、子女の行爲は所謂神の動靜として、其父母兄姉皆畏敬する、茲に於てか吾人は我國兒童の事々物々、一舉一動其父兄乃至叔父叔母なる者共に迄、喋々と干渉された成績が、他日人としての彼等に何程利益が增れるかを疑ふ者である。彼我の國情に相違あるが故に、日本の兒童此位に干渉せねば眞人間に成れないと云ふこと口癖にする我日本の眞人間は、私などの目を以て見れば、些の抵抗力なき兒童の上に迄、暴威を逞ふする事の餘りと云へば我儘であるやうに思はれる。

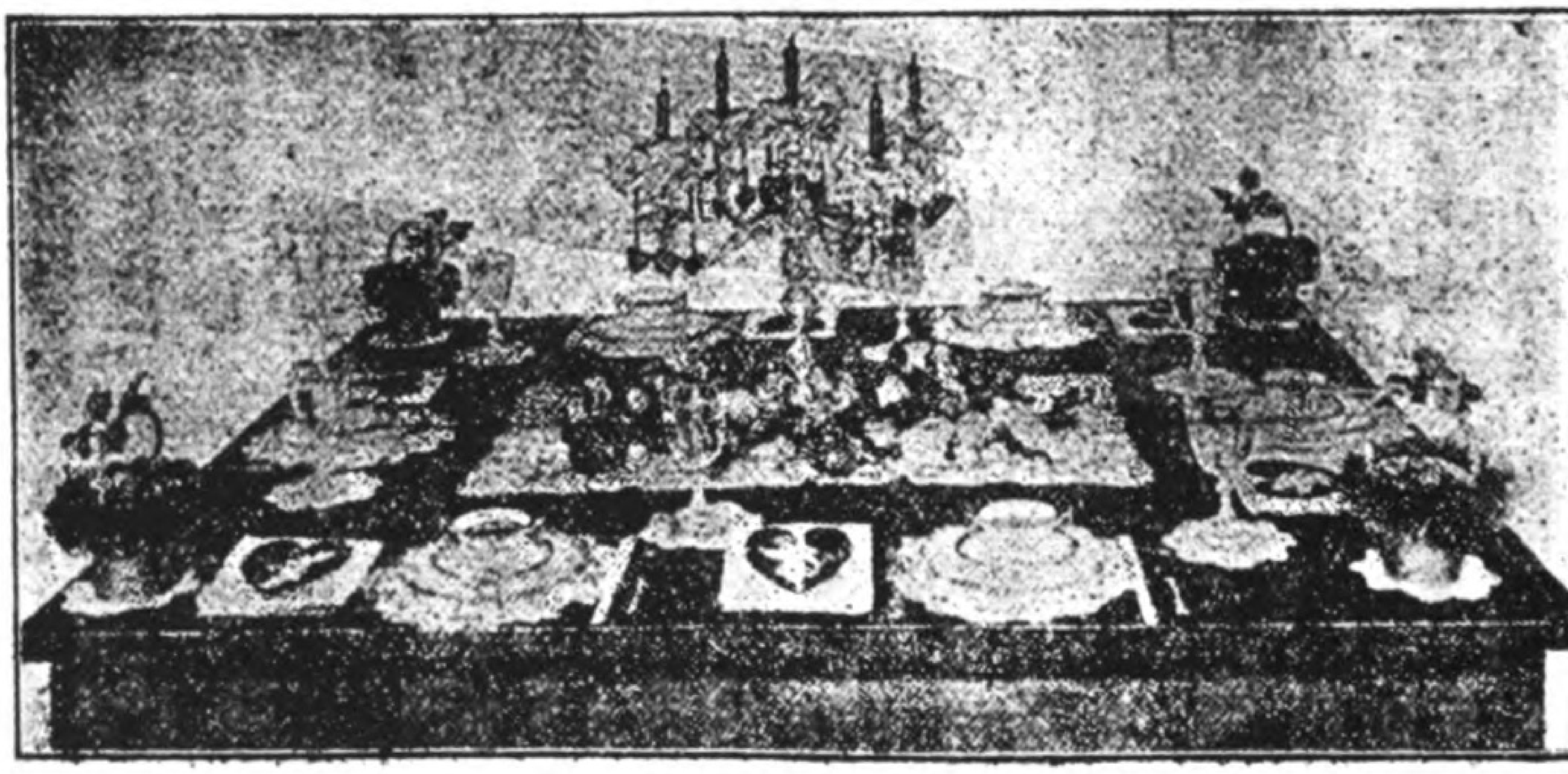
▲下女下男の待遇振り

次に食堂に於ける彼等は、其雇人に對する態度は又た實に見るべき値がある、或時代迄は彼等の社會には、主從關係と云へる非人間的な考が流行した歴史を持つて居る彼等でありながら、下女下男、料理人、小守と共に、卓を圍むで其食を均ふするの美風は、我日本などの近き將來には、却々に見られない進化である。私は米國の如くに、我日本でも法律を以て特に雇人に粗食を供する紳士の家庭を嚴重に取締つて貰いたいと思ふ、此外食事に就ては、土曜日には火を使はないで、都て金曜日に準備した處の物を、冷たい儘で食卓に上するとか、日曜日には朝寢をして、何れの家も二食であるとか、所謂慣習俗を爲して居る彼等の生活の狀態は、實に餘所目にも羨しい位である。

▲流行に追はれる衣服の心配

朝の食事を卒へて、稼手の主人を官廳將た商店へ送り出すと、後は彼等が命から二番目の流行着の苦勞であるのだ、男性家族の服は如何に流行を急ぐと言つても一年に一着か、乃至二年に三着位が先づ上等社會の暮し方である。併し是れが女性、殊に主權者、ホームの女王たる女性の流行着となると、隨分新調に忙しい譯となる。年が年中、裁縫師の一人は如何しても雇ひ切りの有樣である。但し職工は何れも女性である。それは蓋し其服を己が體格に固く緊かり合せる爲に、日に幾度となく全身裸體となるの必要からの名案であらうそして假縫の服をお召に相

米國婚禮の膳部



成り、幾度となく姿見の前に立塞がり、見るも氣の毒な程に苦心に苦心を重ねらるゝのである。尤も七八才未滿の子供服は、女王手づから所藏のミシンで以て仕立らるることもある。流行着に就ては專門の月刊雜誌が巴里紐育等から引も切らず到達するので、流行を追ふのか、流行に追はれるのか、兎に角此等雜誌の流行紹介に追はれて、自らは唯々夢のやうに新調を追ふのが妻君濟家の第一要義と爲つて居る。

▲一月前の流行服は！

であるから、一度彼等の住宅の物置に入れば、宛然流行の墳墓である、令孃の死骸、女王のなきがら、二ヶ月前に流行したポンチット、先月まで流行せしウエスト、コート、曰くカラー曰くチクタイ、舊冬に流行を誇りしタイ

ト、少しく流行後れになつたハット、流行期が過ぎたスカー、それが皆な、色が褪たと云ふでもなければ、垢が付て了つた譯でもない、さりとて膝頭乃至裳裾、袖口、肱尖の破れて了つた譯では猶更ない、流行期と云ふものはほんの〳〵短かい間であるから、勿論破損し、垢が着き、色地の褪せやう譯がないのである、而も新聞、雜誌、紙反古、襤褸切と共に塵埃の中に葬られて、哀れな最期を遂げるのである。

▲廢物は如何に處分する！

是唯に衣服に於るのみではない、寢臺然り姿鏡然り机然り、書架、置簞笥、古本、暖爐、食器等あらゆる家具の一切が、矢張り流行に支配せられて、其無缺損なるにも係はらず、悉く衣類と運命を共にして居るので吾日本の年俸三千圓位な高等官のホームの家具は、彼等の床下に行けば直に調ふることが出來る、餘計な心配だが、彼等は限りある床下を以て、限りなき廢物を時々如何に處分するか、塵芥人に取らするには一週一弗乃至二弗は取らせねばならない、古着古道具を他人へ與へれば、我日本なぞならば、其代價をさへ受くべきに、却つて此方から唯の五仙と雖も支出するのは、隨分割に合はない業である位は、如何に應揚な彼等と雖も之を承知して居るに違ひあるまいが、我日本にて所謂花燒別名燒肥の流儀で、悉く之を燒却するのである。併し其邸宅の位地如何によつては、警察の干渉が之を許さない處がある、第一彼地に徑二尺大の丸太によりて架せられたる棧橋を見、五寸板を張詰めた街路を見たならば、一見此地の木材の豐富なることが分らうが、我國にては、一箇數十錢に價すべき、將た女子供に珍重せられさうな種々なる雜貨食料品の空箱が捨てゝある。是れ皆其始末に困ずる處から燒棄策の出來ない家の人が泣々も二弗を拋て芥屋を肥して、此處へ運び出さしたものである。

▲掃除後の周到なる檢査

次は彼等が掃除の遣方である、之には流石潔癖ある日本人と雖も、一歩も百歩も輸せねばなるまいと意はれる。第一其精細なる注意、緻密なる用意、實に驚く

ばかりである、人をして窓を拭しめむか、直に斜に透して之を點檢する、人をして敷物を掃かしめむか、濡紙を卷いて其掃痕の如何を調査する、人をして卓、椅子、階段、手摺等を拭かしめむか、雪の如き指頭を以て之に塵埃の有然を見るか如き、其一例である。從つて屋敷回り、前栽の植込、後苑の花壇等其手入れか行達くだけに、頗る美事なものである。

▲精神の休まる暇が無い

日本の家屋は住居に宜く、歐米の建物は事務所として適當であるとは、能く人の唱る所であるが、實に其通りである、彼等が其居にあるや、何時も直に出でゝ人に接し、將た直に外出し得る便利ある代りには、睡眠時間以外、所用が有つても無くつても、精神の休まる時がないのである、若し夫れ休養を得むと欲せば土足の儘寢臺に登り、或はソウフアーに着かねばならない。從つて彼等の住居には、塵が澤山に出る、掃除が大變だ、大建築になると、蒸氣力でもつて其塵を管の中から塵箱へ吸收さする仕掛けになつては居るが、夫とても思はしくは行渡らないので、矢張り人の手數を要する。

▲汚れ物の始末と洗濯賃

至つて大きい家では、總て洗濯屋に送る、又極く小さな家でも洗濯屋に出すのが常である。然るに中位の家には、ちやんと洗濯室があつて、洗濯板も洗濯盥も一切の洗濯器械が備へつけられてあるから大概の家が雇人をして月曜日に必ず大洗濯を命じるのが普通である、勿論小さな洗濯は毎日あるので、ナプキン、タオル、ハンケチーフ、デミシユ、クローズ、小兒の敝服及び大人の下着、ゆもじ等で、カーテン、シーツ、ワイシヤツ、テーブル、クローズ、カラー、カフス如きは、矢張り洗濯屋に送られるのが例となつて居る。其賃金は無論物の多寡に依つて違ふが、週間勘定で約三弗乃至五弗が止りである。尤も大きな家では職工二名以上の常雇を抱へて、專門に洗濯一切の仕事を附托し些も洗濯屋へ出さない處もある。猶洗濯物主婦令孃のゆもじの事に就て一言するが、至極高等な家の、嗜あ

る女王は、此丈は自身で洗濯されるので、洗濯屋にも送らねば、雇人にも命じないと云ふ事だ、さもあるべき事で、これでこそ初めて女王の價値があるのではないか。此點に於ては、日本の女性は都て女王の資格ある者と言ふも敢て溢美ではないことになる。

▲入浴は月に一回！それも怪しい

入浴は彼等にありては殆ど皆無で、月に一回遣るか遣ないか、夫さへ實に疑問である。併し彼等は日に二回は必ず水を以て全身を拭き、肌着を清潔にし、寢具寢衣は必ず一週毎に取替へられ、毎朝顏を拭く手拭は必ず洗濯屋の手を經た、火伸のかけられた物でなければ使はない、故に入浴は殆ど不必要なやうなものゝ、彼等と雖も時には微温湯で、至極生理に協つた、衛生的入浴を攝生に必要と心得て行ふことは確かである、我日本の錢湯に、溝泥の臭を嗅ぎ、垢の湯を被り、手さへ浸されない程の熱湯に、全身を摩擦させながら、猶ほ江戸ッ兒を氣取る愚的入浴者は、先づ北米には見當らないやうである。

▲屋内到る處に湯水あり

少し高等になると其ホームに必ず湯殿が設けられてあッて、入浴に要する一切の道具も亦た、石鹸、背ブラシ、頭のブラシ、爪切、鋏、揚子、櫛等、悉く備られてある。家に依ては化粧室と共同になつて居るのもある。夫に湯と水は、應接間と書齋とを除けば、各室内至る所に、臺所から引いてあるので、處を嫌はず湯と水とは自由に使はれ、時を厭はず自由に入浴し得られる。着物の裾を濡して、力の限りの水を汲込むで、風呂桶の下、下女が焚く槇の煙に攻撃されて、泣きながら据風呂に入るやうな困しみは、到底彼地では見られないのである。

▲勿驚一回の入浴料二弗半

又た彼等の錢湯は、一回入浴料二十五仙以上一弗五十仙が其範圍であるが、飛切二弗五十仙のものになると私のやうな田舍者は、目を回さないのが仕合せと思はれる程の待遇を受ける、待遇と云つても旅館に非ず、料理屋に非ず、將た又た待合の夫にも非ずであるから

別に待遇の仕様も無い筈ではあるが、彼等には又た彼等獨特の發明があつて、此處専用の浴衣を着けたる浴客が、浴槽を出で來るや、煙草を勸め、菓子を饗し、揖讓至らざる間に、預けられたる自分の衣服は運び出されて、待遇もないものだ、それが他人の衣服である此程完備した營業組織に、斯る間違ひはありさうもない筈であるに、如何せん、確に自己の服ではないと、剛愎を張りながら猶ほよく見れば、何ぞ圖らん、コートの皺失せ、パンツの折目正しく、履下、カーラ、カフス、ワイシャツ、アンダアウエアー、ハンケチーフ等の一切が、入浴中西洋洗濯にかけられたので、大仕掛の蒸氣器械でもつて乾かされ、既に火伸まで濟まされてあるのであつたので。

▲見やう見眞似の廂髮

外國には我國の化粧法があつて、自然其趣が一様でないから、敢て私は我國女性のそれを卑むものではないが、次に掲ぐる例の如きは、彼に眞似せざるを得ない美風で、最も盛に繁えない處、澤山に其例はあるが、就中其頭髮に汚臭の發しないこと、殊に日本女性に惡臭紛々たる頭を嗅されつゝあるの私等日本男子をして更に己を動かすの力甚だ大なるを覺ゆるのである。如何なる下層の生計を營むホームの女性でも、決して香氣の無い迄が、惡臭は毫毛も發しない、之れは一々彼等女性の嗜の一例として、此處に少しく紹介の勞を執る、是非とも之れだけは我國女性の頭髮否頭腦に一つ勵行して貰い度いものである。尤も之を行るには、今日大流行の文明の表面をのみ眞似る、見やう見眞似の廂髮に、斷然、百尺竿頭一歩を進めて、所謂日本流の結髮を廢棄し、そして其髮結錢を、ハット若くはボンチットの購求費に轉じて貰いたいと私は思ふ。

▲裸體となつて髮を解き

彼等の寢床を出るや、先づ姿見の前に立つて、親ら其髮を束ねるのである、そして外出せんとするや、更に結ひ直すのである、其歸るや、直に解くのである、汗を拭くのである、其寢室に入るや、先づ裸體と成つて更に其髮を釋き、そして眠に就くと云ふ有様で、奥く

仕様にも臭くなる暇がないのである。一日の中に其髪は幾度釋かれ、幾度結はれるか數へられたものでない而も其時間たる、正に二分を出です、假し一日に十回の手數を要するとしても、僅々二十分を出でないのである、之を我國女性の夜髪日髪に憂目を窶し、一日數時間を費して、猶は其不出來に自烈させられるなど、時間の上から說つても、女髪結に機嫌氣褄の附屆け的不經濟な點から言つても、其惡臭を大切さうに仕舞ひ込むで置かれる其お心根、誠に氣の知れない次第である。

▲女の職業、特に獨身者の

北米に於る女性的職業、特に獨身の女の職業としては裁縫工、洗濯職、給使、子守、俳優、曲藝師、舞娘、料理人、奴婢、商店の賣子、昨今は我國にて流行して來た銀行會社の事務員、電話交換手、小學教師等である、而も出でゝは其都てが令孃であつて、日曜日の公園、夏の海濱、春の郊外、秋の釣、冬の夜の劇場、土曜日の夜の大街路、七月四日の獨立祭クリスマスなど云へる國祭日の市中は、衣香薫ずる裾捌きのサヤ〳〵とそれは〳〵素破らしい現象を呈するのである。

米國の中流家庭

松山　俊

此春米國の首府華盛頓府に開かれた母の會大會に於ける、大統領ルーズベルトの演說は、東西に傳へられ、少からぬ注意を惹きました。氏は開口先づ世界のある限り消滅せぬ眞理であると云ふて引用したのは、左の如き諺でした。

夫たる者の第一の義務は、妻子の爲めに家庭を作

り、且つ食物を準備することである。
妻たる者の第一の義務は、良人の内助者たるは勿論、主婦たり母親たるにあり。

といふのでした。我觀を以てすれば、米國に於て家庭と呼んで差閊へない家庭は要するに、ルーズベルト氏の引用した諺の實現であると思ふのです。彼國は新興國である程貧富の隔りが甚しいし、隨て其家庭の事情も大に異なるものがあるが、社會に最も役に立つ人を出し、又た重きをなして居る中流社會は、我觀の如くであると斷言することが出來る、これたゞ余の想像のみでなく、十中八九人迄かく云ふて居ります。さて此の如き米國の家庭事情はどんなものであらう。今其中流社會を標準として、簡單に陳述し樣。題は『米國の家庭』としてあるが『日本人の目に映したる米國の家庭』と云ふ積で讀で戴きたいのです。

▲約婚時代　さて先づ此約婚時代から畧述しなければなりません……申までもなく夫婦互の撰擇即ちつまさだめは社交上の交際でなされるのは一番多い、場處は學校、集會、友人の宅などであつて、其間互に注意して居るが、愈々これと目星をつけると、次第に交りを深ふし、次で男は其女の家を訪づれ、父母に面會し、交際の道を開いて折々訪問する、しかし當時は父母の前を離れて相語るなどのことはない、かくする間に交りも段々親密の度を加へ、遂に其父母の許しを得て、音樂會なり講演會なりへ伴ふて行く、それから社交上の集會には普通に一人の婦人を伴ふも差閊へない樣になつて居るから、共に出席する。かくして居る間に互にそれと觀察した頃に、男は女に對して愛人たらんとを要求する、こうなると直に承諾する者もあるが、大抵は熟考の期間を要求し、或は會して夫となるべき者の主義目的を聞き、一家の計營のことに及び、それから互の一家の關係に說き及ぼし、共に相許すと父母に請ふて承諾を得、斯くて約婚を成立するのです。もう斯樣なると更に親しき交際をするが、女の方から男の家を訪問することはあまりない、よしあつても單獨に行くとはありません、されど男は女の家に至る、が其父

母の前で會談せしを私かに語り合ふなどのことはない、さて愈々

▲結婚式を擧ぐる樣になりますと、お互に準備に取りかゝり、畧々終ると披露或は招待の書状を發する、我國の例により夫の父母或は友人の名に於てするが、米國では妻となるべき女の父母（歿後ならば兄弟或は伯叔）の名を以てする。それから結婚式一切の費用も亦た妻方の父母の負擔であります。夫方では妻を迎へる準備として家屋のことから家具一切を整へる、財產のあるものであれば、男の獨力によらで、其父母が準備してやり、かくて莊重の儀式あり、樂しく愉快な恰と蜜の如く年若きものを醉はしむるホニームーンを經て始めて一家は共に住ひ、家族的生活に入るのであります。

▲最初の有樣　さてかく共棲する樣になると、最初は大抵召使などは雇はぬ、全くの夫婦差し向ひで、只だ洗濯の如く多忙な時など臨時に人を雇ふのみです。これ一は一家經濟の爲めでもあるが、又た其間に一種『曰く言ひ難し』的の精神上の爲めである、要するに是等は餘程興味のある事柄であつて、一は夫婦相愛相助の念を深からしめ、又た他年學習のことを實際に試むるので、新婦の爲めには勿論、新良の爲めにも大なる利益を與へらるゝと同時に、眞面目なる家庭的練習をなすに至るのである。之を精神上から見ても、一家は他人が交ると何となく思ふ樣にはいけぬもので、少々は不便でも水入らずの夫婦暮しが最も樂しいのである。併し之を我國に行ふとして中以上の社會の婦人は實際やり得るでせうか、殊に女學校を卒業した位の年若き婦人は、之をなし得るでせうか、我國の父たり母たるものも少しく考へて可なりであります。筆覺へず他岐に亙りましたが、さて婚後の

▲夫婦間の關係は如何であらう、申せば種々ありますが、今之を簡述すれば、もう一家を計營する樣になると、一言で云へば

一家内の全權は主婦に歸し、食事のことから、室內の粧飾等迄一切妻が主裁する

夫は外に出でゝ社會の事業に從事し、妻を輔助して、一家計營の不便なからしむこれである。如何なる料理をなし、或は室内を如何に粧飾して夫を喜ばせ、また心身の勞を慰籍しやうとは、妻の心を摧く處で、如何にして妻を喜ばせ樣、また缺くる處なからしめ樣とは夫の心で、互に輔け助けられつゝ行くのである、能く聞くことに彼國では權利義務といふことが多く用ひらるゝ、あれは面白くないといふものがある、なる程皮想より見、舊慣未だ脱せず又た不統一なる我國の家庭より想像すればそうかも知れぬが、之を實際に見ると誠に圓滿に行はれて居る、即ち夫妻敬愛がこれによりて程よく實現されて居ることは誠に羨しい樣である

●●●●

▲財政問題　即ち一家の生活問題に就ては一樣ではない、が概して固定財産の有無に拘はらず、夫の月々の收入によりて計營して行く、例へば夫の收入は百弗あるとすると妻は之によりて一家の豫算を案じ、日々の家計を處理して行くことは我國と變りはない、唯だ之を能くやつて行くと否なとの區別あるのみです。

併し我國と少し異つて居る處は、妻の特有財産です、これは皆々然りといふではないが、全く妻君名義の財産があることがある、それは妻の權利であつて、其使用方法も妻の心の儘である、鳥渡考へるとおかしい樣であるが、久しい習慣であつて、又其使用方法も都合よく行つて居る。さて是に關聯して記さねばならぬのは、

●●●●

▲廚房の事　です。前申た樣に是等の事は全然妻の責任であつて、大抵巧に處理されて居る、一體この廚房問題といふことは、我國では大に賤められ少しく地位ある家庭になると、主婦が之に關係するなどのことは恥辱の樣に思はれ、之を召使に全托し、中には殆ど廚房を覗かぬ主婦さへあるが、米國では之と全く反對である、同國の婦人の料理に注意することは中々深いもので、隨分立派な家庭でも主婦が自ら手を下してやる、一度彼國に往つたものは直ぐ氣がつくが、立派な紳士或は夫人か八百屋や肴屋の店頭に立つことは普通のこ

とで、立派な馬車の中に大根だの玉葱などが載せられて通るのを見るは珍らしくはない、一例を云ふとクヲーク大學の教授ハーデー博士の如きは學識に於ても地位に於ても、また生活上に於ても上流に入るべき人であるのに夫人は料理に注意し、種を選擇し、賓客に供する料理は殆ど自ら手を下してやり、且つ常に主人は如何なる料理を好むかに注意し、巧に鹽梅すると云ふとである、また欽すべきではありませんか。

前にも申た樣に家事經濟は全く主婦の責任であつて、夫は關係ない、されば來客の時などの着席も妻に聞かねば着くことの出來ぬ程である、夫れから買入物は大抵現金であるが、出入の商人になると月末拂になつて居る。此の如き次第であるから、厨房の整頓して居ると、清潔なとは實に見事なものである。

▲**交際上の事**　は父母及び親戚と、他人との二つに區分して畧述し樣、

(一)、新郎新婦は新に住居を持つて、父母を別居するのは普通のとで、父母とは全く別に生活する、されば親子の間の交際はどうであらうと危むものがあるが、實際は、同居して居るよりも圓滑で溫情がある、妻は舅姑に夫は妻の父母に盡し相訪ふて歡樂する、此の如き次第であるから新夫婦も思ふが儘に發達するし、父母も何の憂ふることがなくて暮して行かれるのです。我國では未だこれ程迄に進んでは居りませんが、若し出來得るならば新舊思想の衝突もなからうし、繋累はなし、殊に子弟の教育上など此點に於て獨立心を養成せらるゝなど、意外の良果を結ぶであらうと思はれる。

(二)、他人との交際に關しては、記すべきとが隨分多いが、今其要を摘記すれば左の如くである。

イ、米國人は一般に來客を歡待する風があり、若し知人でも來るならば、一家族して迎へ歡樂を共にする。

ロ、公の用向或は社會上の事にての訪問は、事務所で濟して自宅へは來らぬ。

ハ、私用、音問などで自宅に訪問する場合は我國の如く時間にかまはず、また特別の事情の外長座するも

のはない、大抵午後の二時から四時頃迄の中で、十五分か二十分が通例である。

ニ、親しき間柄になると、夫婦連れ立て夜間訪問することもある、があまり尠い。

ホ、面接日、時刻などを一定して居るものが多い、名刺などの裏に刷り込んで置くものも隨分見ゆる。併しこれは主に市俄古、華盛頓、新約克などいふ都會に住するものに多く、田舍には少ない。

へ、來客があつてもめつたに茶菓などを出さぬ、客の方でも飲食するものと思ふて居ぬ。併し「お茶は如何です」と問はれることがある「戴きませう」といふと初めて出されることもある。



米國兒童の風俗

まあざつとこんなものであるが、此事の序に記して置きたいことがある、それは外でない。

▲贈物の事　である、我國ですと二度も三度も辭退をし、交る〳〵御世辭を云ひ、よふやうにして納めるが、米國では是と反對で、貰つた方では大に喜び、非常に感謝して受納し厚意を述べる、或時のことであつた某外人が某に世話になつたので、禮物をもつて行くと、某は再三辭退した爲めに却て外人の意をわるくしたといふことである。

さてまた其贈物は直接生活上に必要なものなどは用ひない樣である、大抵粧飾品などの樣

なものである、これは受くる方に對しての禮で、必要品であると輕蔑の意に當るからだとか。鳥渡注意して置くべきである。

▲●●●一週間　話はまた主婦の方に歸るが、一家の主裁者たる主婦は、大抵一週間中の事務を豫定して置く。左にその例を示しませう、但し日、月、火、土の四曜日はどの家でも一定して居るがその外の日は、家によりて異るとを記臆して居て下さい。

日曜日　所謂安息日で精神日の休養をなし、職業を休み家族と共に教會に出席し、公園に郊外に散歩し、靜かに一日を送る

月曜日　これは洗濯日であつて、主婦が頭となつて、一週間中の汚れ物を洗濯する、前に申たクラーク博士夫人の如きは博士の衣服の仕立から洗濯まで人手にかけられぬと云ふとである。

火曜日　これは洗濯物の仕上日である。火のしをかたり、綻びを縫ふなど中々多忙である。(以上一定す)

水曜日　訪問日として他に出る

木曜日　面接日として終日家居する

金曜日　(次週)の準備

土曜日　掃除日で家の内外を掃除し、器物を整頓し、次週の準備をする。

▲●●●母と小兒　小兒の養育將た教育に關しての責任は妻にある、實に母は子に對しては「チキスト、ゴツド」であつて、夫は唯だ輔助者たるに過ぎぬ、例へば子が父に對して「とーさん何處其處に往つてよいでせうか」と聞くと父は大抵「おつかさんに伺つて御覧なさい」といふ樣に答へる、其の他此の單法で行くのですから、母も中々責任がある、隨て權力もある、といふと父は子に對して無勢力なもの、輕蔑され易きものゝ樣に思はるゝが、實際は大に異つて居る、再三申た通り夫婦互に權利あり、隨て婦人は一見我儘に思はるゝが、敎育あつてのとであるから俗に所謂「夫を尻に敷く」などゝいふ樣なことはない、夫は妻を愛すると同じ樣に、妻は夫を敬する心より尊敬する、又た夫は取締るべき

處は充分に取締るし、妻は服從すべき處は乾度服從する、斯樣な次第であるから、子と父母との關係は實に美はしく行はれて居る。さて又子の敎育といふところを申すべき順序ですが、本題以外に亘る虞れがありますから略します、併したゞ一つ吾人の感服した事を記して之に代へませう、夫は外ではない、子が親のいふ事を聽かぬ事がある、斯樣な場合でも、親は決して小言もいはず叱りもせぬ、唯靜かに自然に

「私の云ふたことが聽へましたか」

とたづねる、これは何故に親の云ふことをきかぬかと云ふ意味に當るのです。若しこの言葉を再び繰返さるゝならば必ず聽きわけます、其間の美はしい事……なほ申たい事がありますが、一と先づ此邊で筆をとめて、一の事實話を致し局を結びませう、それは

▲貴府の紳士●●●　ウヰングといふ人の家庭です。ウヰング氏は貴府で銀行や保險會社の副頭取をして居る有名な紳士で、二三年前芝聖坂にある普連土女學校の燒失した頃來朝し、大に同校に同情を表し大部分の費用を寄附し　新築せしめた人でありますが、同氏の自宅は西部ヒラデルヒヤの四十四丁目にあつて三階造りの堅固の家屋です、同氏の妻君は四年前に永眠し、且つ子がありません、が、弟の妻で十六七歲になる靑年をもつて居る人が寄寓し、また亡妻の極くの親友も同居して居る、斯樣な不幸な、また入組んだ家であるのに、實に立派に家事を整理して行く、此家の食事の方は弟の妻君が擔當し、衣服に關する事は亡妻の親友が全權を握つて居る、是等は皆な熱心な眞面目なフレンド派の信徒です。主人は交際好きな人である、事務所からは午後三時に歸るので、客は夜分に來るとになつて居る、是等の來客は家族と一處になつて食事をなし相樂むを以て無上の慰樂として居る。若しそれ室內器具、衣服等の整理に至りては、所謂一糸紊れぬといふ有樣で、實に欽美に堪へなかつたとは、新歸朝者の語る處であります。

要するに米國中等社會の家庭は、槪して整頓し健かに模範とするに足る、是等は舊來の習慣もあらうし、社會自然の感化もあらうが、夫婦互に一點の秘密ないといふと、夫婦相愛敬するといふと而してまた實際的の敎育が普及して居る結果であらうと思はれる。

土耳其の風俗

新月庵

四千年の大古に開けた國で今甚だ衰へた處ろは有名な埃及である、此の埃及と宗教を同じふし、風俗を同ふし。言語を同ふする國は土耳其である。土耳其は實に二十世紀の文明に獨り取殘された世界の一大國である。曾つて歐洲の羅馬帝國を呑み、又魯西亞を呑み、歐亞兩大陸に跨つて、武强の一大國を組織した土耳其も今日は甚だ衰弱の有樣で、新月の國旗は黒海の涯に幽かに殘つて居る丈けであるが、古河に水の絕へない譬への通り、今日猶一大帝國の面影を遺して居るのである。

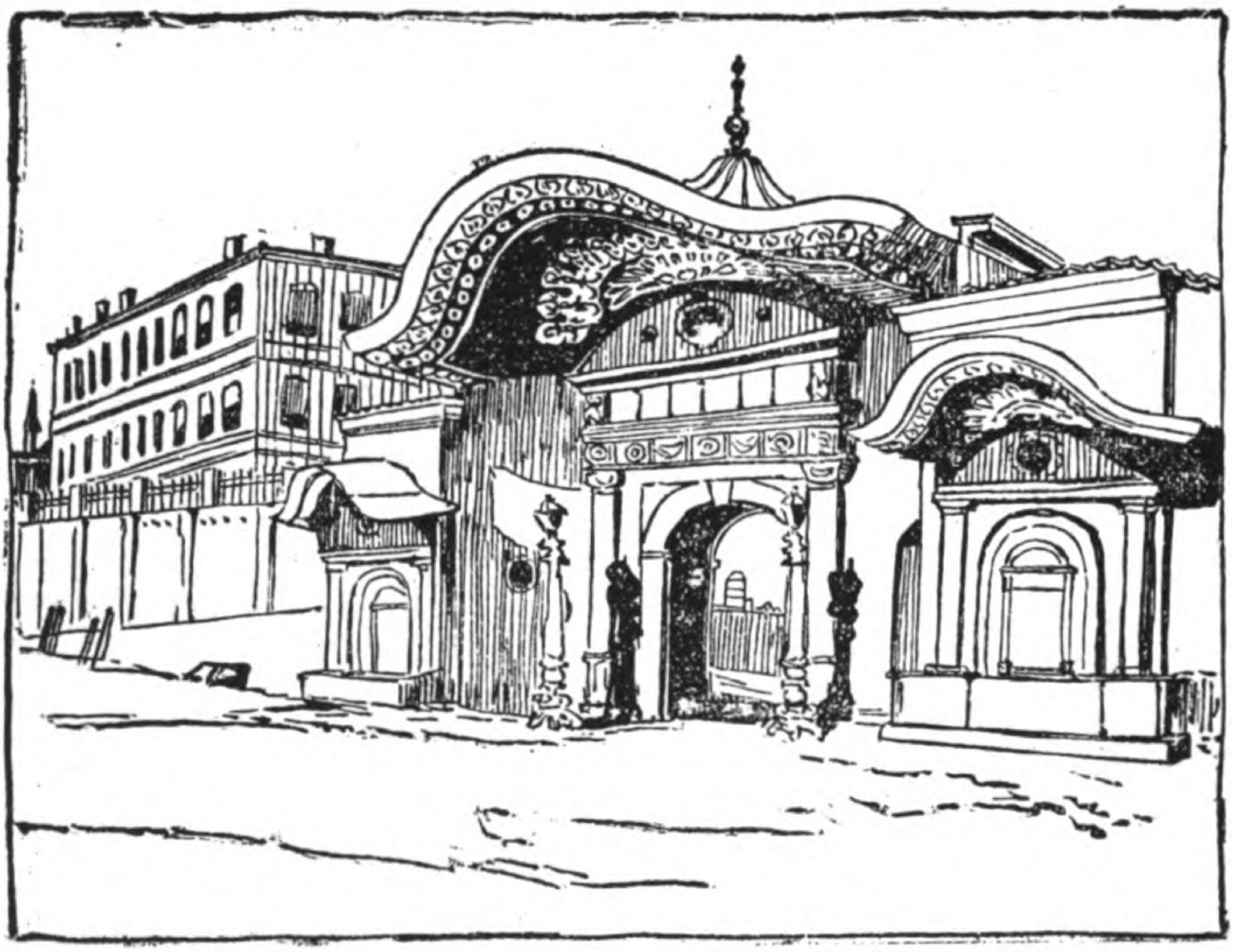
土耳其は實に奇態な國である。其人種は純粹な東洋人種であつて土地は西洋に入込んでゐる其習慣は亞細亞的であッて、政治上社會上の關係は西洋に密接してゐる、そこで歐羅巴人との交渉が中々面倒である。

彼の國の帝王は、ソルタンと唱へて東洋一流の獨裁君主、專制君主である。又其宮廷は東洋流の秘密的であッて後宮三千の美姬が今猶君主の閨門を賑はしてゐるのである、其の宗教はマホメット敎で宗旨上の禁制など中々やかましく、日常の生活に宗敎の勢力の影響して居る事は露西亞などよりも酷しいのである。

土耳其の風俗を說く前まづ宮殿の事を說かん、此國では歷代の皇帝多く宮室臺樹の營造を好み之に向つて莫大の財を費す事を惜まない、であるから、首府君斯丁堡の內外に宮殿巍々として聳へ、ボスポラス海峽の兩岸には賞月殿あり、觀旭宮あり、いづれも貴重なる大理石を以て築き、珍材、奇木を集め、殿堂に飾れる金銀の七寶燒、ヴエニスヤの大玻璃鏡、伊太利流のモザイク術を施した裝飾等、實に結構を極めたもので、

光彩燦爛として實に人目を眩するばかりである、就中ドルマンバシヤ宮といふのは皇帝が毎年二回文武百官の賀を受くる處ろで、其の壯觀は歐洲各國にも見ざる處ろである。（口繪參照）

土耳其の帝室には東洋古來の習慣として宦官といふものがある、此の輩は實に頑迷固陋の守舊派で皇帝の威嚴を藉りて傲慢不遜を極め、一國政治を總攬する總理大臣すらも宦官の權勢には頭の上らぬ事があるといふ。宦官に次で厄介なるは後宮



土耳古宮殿の正門

の權勢である、元來土耳其の宮廷に仕へる婦人は多くシルカシヤ邊から金錢を以て買ひ出して來たものであるけれども一朝皇帝の寵愛を受るときは正室の一に昇る事が出來る、正室は四人あッて、第一位に昇る時は第一后と敬はれ、以下を第二第三第四と稱するので、若し其の腹に皇子生るれば後后の總裁となッて權勢飛鳥を落す有樣をなし、其の乳母には別に一大宮殿を構へ、番兵を附けて警衛せしむるのである。金曜日にセラムリック式

と唱へて皇帝が敎堂へ參詣の時は四人の正室、皇男、皇女、百官有司相共に隨從するも婦人は一切敎堂内に入るを許されない、門内に車駕を停めて空しく式の終るを待つ、これは回敎の主旨で、婦人は劣等にして穢れたものであるといふ處ろから來た風習である。

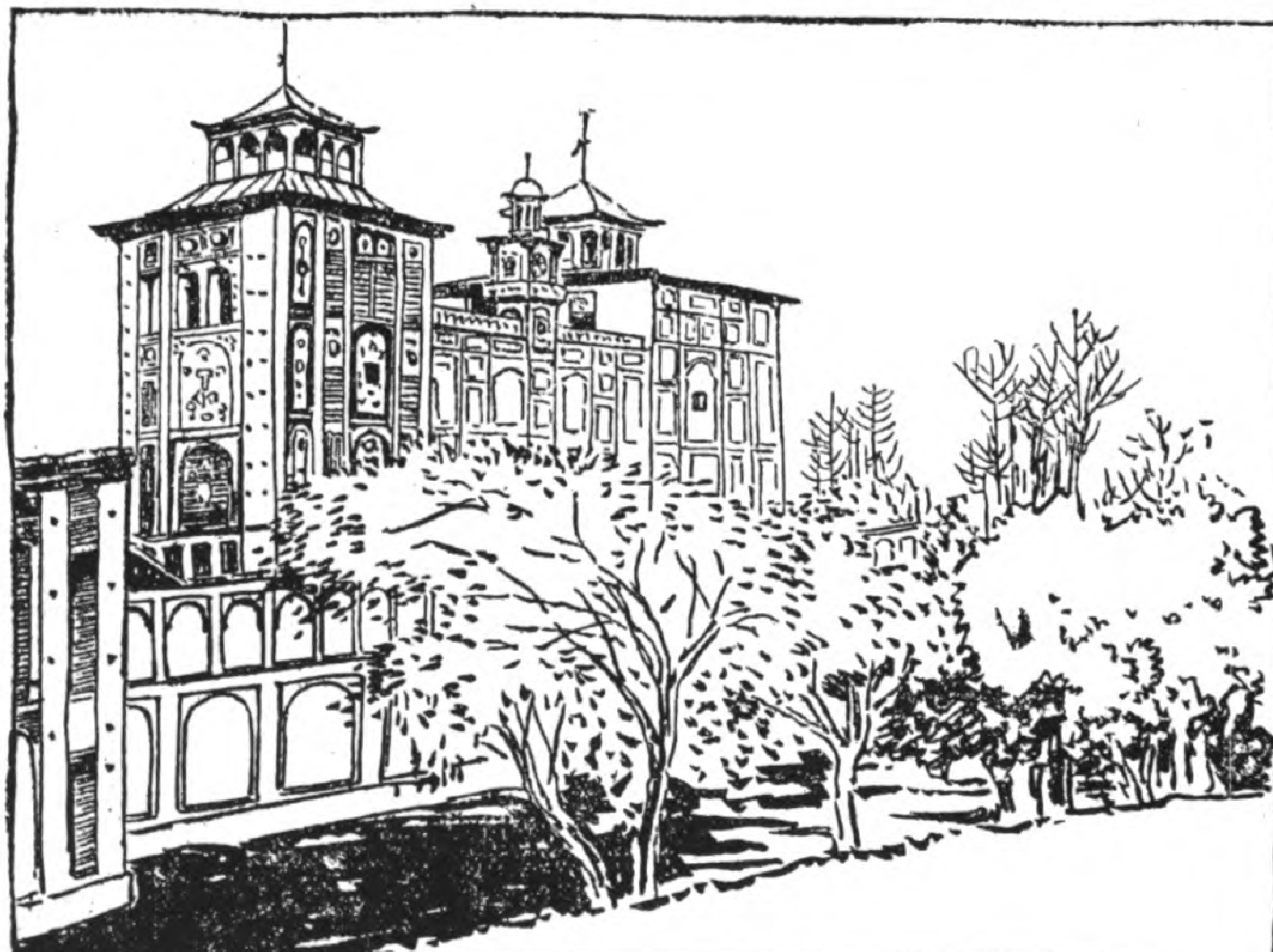
　皇帝の嬖妾殆んど無數で、每年斷食祭の時に一の新らしき妾を、納るゝの習ひであるが。これを周旋するシルカシヤの人質は宮中の愛顧を受けて種々の恩賜榮典を蒙り、世人に對して頗る驕慢である、元來土耳其の中流以上婦人は道を行くのに車に乘り、覆面して行くの習ひで通常は黑絹の外被を着し、面部は白き薄絹で上下より合せ蔽ひ僅かに兩眼のみを顯はしてゐる、下等社會の婦人は徒步であるが、覆面も白絹を用ひず、黑衣を頭上より被るを常としてゐる、又市中の乘合馬車などでは其の一局部に疎末な幔幕を卸ろして特に婦人席を區別してゐる、又各家屋内に入ッても婦人の室は其窓に細格子を嵌めて行人の眼を遮るやうに裝置てゐる、此點はやゝ朝鮮、支那等の俗と似て居る。

斯る有樣であるから土耳其では、男子が婦人の皮膚を見るといふ事は絕體的に不可能である、唯目の邊一寸ばかりを見るに止まる、故に土耳其の男子で若し婚せざれば生涯婦人の本體を見る事は出來ないのである。

　土耳其は回敎の宗旨の極めて嚴守される國柄で、大は政治、軍事の國家的より、小は日常の生活、交際に至るまですべて回敎で定められた禮式作法に則とるのである。タトエば嬰兒の稍く成長して物心を覺へそむるや、まづその幼兒に敎ゆるに「アーラ」(神の名)と斯禱の文句を以てす、されば最も必要なる經文の文句は生れながらにして覺へ込みたるが如く、漸く學校に入れば第一の課業として經文と禮拜とを敎ふる、この禮拜はマホメットの敎旨中何人も行ふべきものとして日に五回淸水を以て身を淸める事、即ち彼等の信仰として土耳其人は世界第一の淸潔人種であるとしてゐる、且つ土耳其の帝室は豫言者たるマホメットの系統を傳承したものとして唯一無二の尊敬を拂ひ、隨て此の一

帝國は宗教上の一大城壁として自然愛國心の根元となつてゐるのである、故に土國の軍人は戰に臨む時にはまづ神の名を唱へ、吶喊の時には必らず「アーラ」を叫んで死に就くのである。

　土耳其人の常食の重なるものは羊肉、野菜、米、小麥、牛乳、菓物、麵包等である、そしてこの人民は支那人と同じく非常に油こき食物を好む風習である、油は大概バタと國産の橄欖即ちオレーフ油である、食卓は歐洲各國の如く矢張テーブルの



波斯新宮庭内の堂宇

食卓で卓の中央に料理皿を置き、銘々の前へ麵包を扣へ、中央の皿より四方に取つて食ふのである、食卓に就くとまづ神の名を稱へ、それから食品に手をつけるのであるが、土耳其の俗は、中央亞細亞諸民族一般の習俗で、印度人又は蒙古人と同じく食事するに箸やフホークを用ひぬ人民である。即ち赤手をもつて直ちに食品につけ摘んで食ふのである。其の手を下して肉をむしり、野菜を摘むのを見るに指の先を思ふ儘に働かせて如何に

も巧みにやるのである。只汁物等を吸ふ時には止むなく小さき杓子の如きもので吸ふ、食事中は給仕附添ひて、料理の品を運び、食物の盡くるを待ちてそれ／＼皿を取かへ行くなり、偖て食事畢れば給仕は必らず石鹸を載せたる金盥と温湯を盛れる水指とに清浄なる白巾を添へて持ち出づ、上客より順々に石鹸にて口と手を奇麗に洗ひ清め、全く食卓を離れ、他の椅子に就くを合圖に咖啡を進むるのである。酒類は宗教の制規に依つて堅く禁じてあるけれども、血氣の若者や軍人の間には隨分此の禁制を犯して隠れ忍んで飲むものがある、但し公けの儀式や饗應の時は決して食卓に酒を供へない、其の代り水又は菓物の汁から製造した「シユラツプ」といふ甘き水を用ゆる、されば日々の食膳は勿論、公私の饗宴には必らず水や、甘き水を供するのである、酒の禁制もマホメツトの宗規であるが、豚肉を食ふ事も又マホメツトには禁じてある

土耳其の家内の装置は甚だ日本に似て居る、元來此の人民は支那の西隣今の新疆地方から移住したもので其の調度器具などは西洋風にあらずして純然たる東洋風である、まづ室内は椅子卓子にあらずして座布團、敷物の上に座居するの風習である、隨つて暖爐の法も西洋的のストーブでなくて日本流の火鉢を用ひて居る、但し此火鉢は多く黄銅製のものである。それから室の隅々には宛も土堤のやうに高く厚く倚り懸る所を築いて西洋のベンチ（安樂椅子）のやうなものがある、それから壁間の装飾として彫刻や圖畫などを飾り附けず只彼の阿剌比亞傳來の文字で格言や詩句を記せる扁額を一種の美術として掲げてある。此の邊は全く支那流日本流である。次に厠の構造は如何といふに、支那、や朝鮮の不潔なるに反し、此の國の設備は極めて清潔である、多くは大理石で築造してあつて甚だ美觀である。如何なる貧家でも厠に大理石を用ひて居るのを見ると大理石に富んで居る國柄と思はれるが兎に角清潔で殊に雪隠の中には水瓶に水を入れて置いてある、これは不潔部を洗滌するに使用するもので、水瓶を右の手に持ち左手に水を湛えて幾遍となく不潔部を洗ひ、其手を又十分に揉み洗ふて後、壁上に乾かしてある手巾で拭ひ了るのである。土耳其人は此の一點に就ては非常なる潔癖で、西洋人を不潔人種だといつて罵つて居る位である。

印度の風俗

（農商務省技師山口務氏談）

印度は印度本土と緬甸より成立ち、日本に十倍以上の面積を有し、七倍以上の人口を有する尨大なる國土で、其人種は十五六種に分れ、其言語は七十餘種に分れて居る、從て風俗習慣も所により人種により夫々異つてゐるのですから、一部を見て全班を知るは無理かも知れませぬ、私の歩きましたのは孟買、カルカタ、蘭貢の三地方を本據として、其附近に就ての觀察で、其の滯在日數も二ケ月許に過ぎないのだから、お話し申す事も元より一斑に止つて居る、何卒其積で聞いて下さい。

印度の人種が宗教上より區分ると十五六種に成る、シテ全人口の七割を占むる者がヒンヅー教を奉ずる種族、二割がマホメット教を奉ずる種族で、其餘の一割の内にはパーシー教を奉ずる種族あり、佛教を奉ずる緬甸人あり、ジャイナ教を奉ずる者あり、シーク教を奉ずる者あり、又た猶太種族もある、併し此の内最も必要なのはパーシー教徒、マホメット教徒、ヒンヅー教徒、佛教徒の四種族である、デ私のお話しようと思ふのも是等に就ての事で、其に女學世界の讀者の爲にといふ御注文ですから、婦人に關する事を主としてお話致しませう。

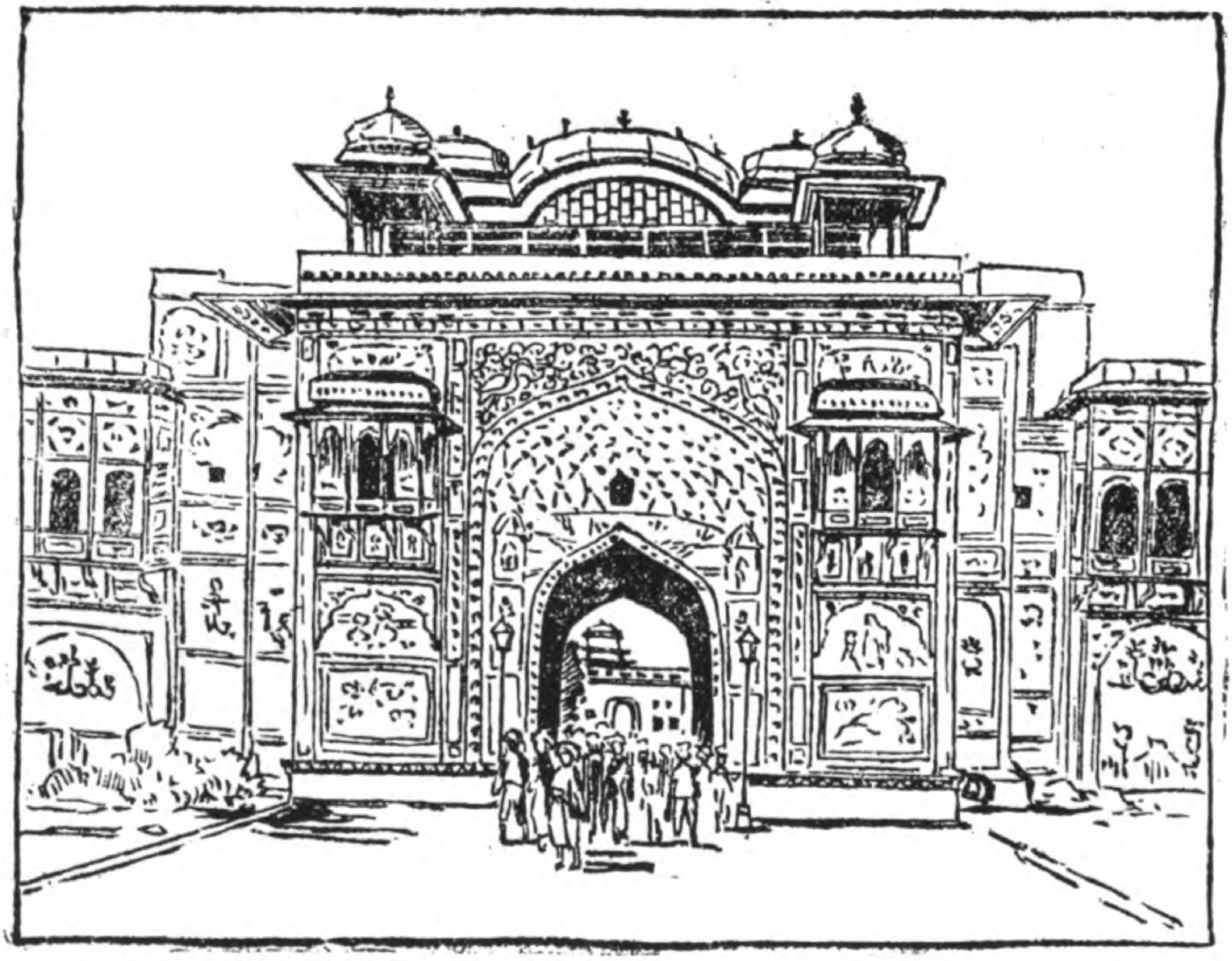
▲氣候　先づ印度人は生活に大關係ある氣候の事を申上れば、印度は彼の通りの大國ですから所により氣候の差はあるものゝ、併し大部分は熱帶國であるから、年中殆ど我邦の夏の土用中の氣候で、極寒の時でも五十度以下に下る樣な事は滅多に無い、其故袷を着る樣

な事は冷期に屬する一、二月の夜分位のものです、ソレデ印度の氣候は冷期、雨期、熱期の三に分たれる即ち十一月より翌年三月迄を冷期と云ひ、四、五月、十月を熱期と云ひ、六、七、八、九月を雨期と稱してゐる、印度の雨は有名のものであるが、其は五六より八九月頃にかけて印度洋にモンスーンと唱ふる西南の强風が起り、海上の蒸氣を大陸に吹送るからして、其で此期間には降雨が多く、印度の大部分を水浸しにする、シテ其の降り工合は日本の梅雨のビショ〳〵降とは違つて、夕立の樣なドシャ降で、五分か十分で止んでは又た降り出すのだから、往來は洪水を湛へ、室内は濕つて黴だらけといふ有樣である、之に反して熱期は旱天續で全く雨が無いと言て宜い位、田舍の往來などは宛で砂原の樣で、塵埃が煙の樣に立騰つて眼も開けない、馬車の馬が咽返る位である、孟買市の市街は良い道路であるにも拘らず矢張埃が激いので水を撒く位では追付かぬ所から、水撒の代りに油を撒いてゐます、斯ういふ譯ですから一年中冷期が一番好い時期で、農作の準備が此間に行はれ、商業の盛に營るゝも亦た此の期間に限られて居ります、而して雨期、熱期になると商人も役人もシムラとなど云ふ所に避暑してソコデ事務を執り、歐洲人などはドシ〳〵本國へ逃歸つて了ふといふ狀態です。

△パーシー種族

此の種族は全印度に男女を合せて十萬足らずの人口を有するに過ぎない一小種族で在て、孟買及びスラットを中心として其附近に住つて居ります、此の敎徒は今より千二三百年前に波斯より難を避けて印度に遁れ來た人種で、其當時は僅かに五百人しか無かつたが、段々增殖して今では十萬足らずに成つて居ります、此の人種は外の種族の樣に色が黒くない、普通の日本人よりは寧ろ白い位である、容貌の特徴は鼻が大きくて口が大きくて、而して眼が鋭く圓く、眞に滿丸で猫の眼みたいである、ソレニ此の人種は文明的の敎育もあり、智識もあり、財産もあり、總ての點に於て他人種

に勝つてゐる、從て商業社會にも政治社會にも勢力を有し又た有力の地位をも占めて居る、下等な勞働に服して居るものは私共の夥伴には無いと彼等が誇稱する位であるから、孰れも皆な紳士然としてゐる、兎に角此種族は一番文明的で、利口の人間である、故に他日印度人中より有爲の人物を出すとせば、蓋し此人種の中からだらうと思はれます。



印度ザイパーの宮殿

▲食物　パーシーは常食として麵包——饂飩粉を燒て餅にした一種の麵包を用ゐますが、又た洋食の下等の樣な物も喰べるし、魚肉其他の肉類をゴタ煮にした物も喰べるし、酒も飲みます、而して彼等は食事に當りてホークもナイフも用ゐず、手摑で食べます、何だか知らないがゴタゴタ煮た物を掌で丸めて、口中へ投り込む所なぞは實にお坐の醒めた話で

す、此の手掴で食する風習はパーシーに限らずヒンヅー、モハメダン等、を通じての習慣だそうですから、印度人は全く親譲の箸で間に合せてゐるのです。

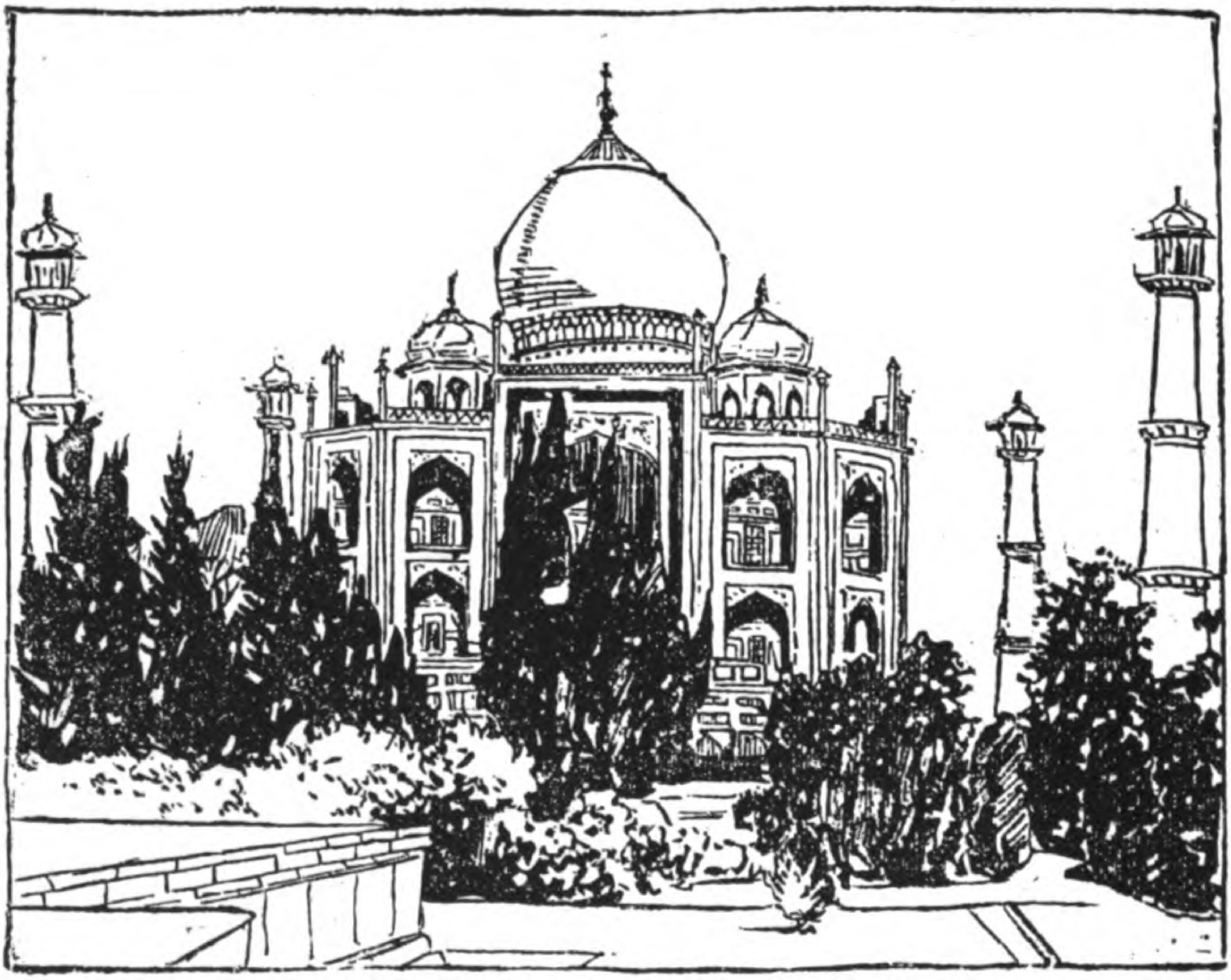
▲住居　上等社會は西洋風の家に住ひ、西洋風の寢臺に臥し、西洋風の椅子を用ゐ、室内の装飾も西洋風の物を用ゐて居ります、印度人中室内装飾等に意を用ゐるは此の人種丈で、下等な社會と雖も相當の装飾品や安物の寢臺位は所有て居ります。

▲衣服　パーシーは富の程度も智識の程度も他の教徒よりは數段勝つて居るから、從つて衣食住も遙かに贅澤である、マホメダン、ヒンヅー等の男子は多く綿服を用ゐるけれど、パーシーの男子に限つてはフロクコートに似たものを常服として居る、ソレカラ女子は下にヅボン——支那人の穿いてる樣な緩したヅボンを穿き、其上に西洋婦人の着る樣な上衣を着、而して其上にサリーと稱する日本の被に似たものを衣て居りますそれから帽子は女は冠らないが、靴は穿いて居る、履と云つてもスリツパーを穿いてるのです、若者は靴下を用ゐるけれど、老人は直接に突掛て居ります、髪は束髪に結ひ、身邊の装飾としては指環、耳輪、首飾等を用ゐて居りますが、金屬の美、寶石の光相映じて却却美しいものです、ザリー及上衣の地質は紋縮緬、紋壁紋絽、更紗羽二重、無地羽二重で、中には一ヤール拾圓以上もする佛蘭西物を用ゐて居る樣なのも隨分ある、是等は日本からも多く供給して居ります、色合はトキ色、水色、ピンク色、クリーム色、鳩羽色、藤色等重に薄色の淡泊なものを好む樣ですが、是等薄色の紋織物を着て奇麗に装作つた姿は非常に優美なものです、私は世界中最も優れた服装だと思ひます、要するにパーシーは西洋人に近く、隨分女で油繪も畫けば刺繍をするものもあつて、美術思想を有てる所から、自然服装も華麗に成つたのでせう。

▲宗教　パーシー教徒の信奉するパーシー教は一名拜火教と謂つて火を拜む宗旨である、信者は其故家に火を絶した事がない、又た寺院では火を焚き、之を信者が拜みに行く、而して寺から火の元を貰つて來て、之

を靈火と稱へ大切にしてゐる、斯様に火を拜むと共に又日を拜むので、彼等は朝夕海岸に集つて日出と日沒とを禮拜する風習である、

△野蠻極る葬儀　私は前にパーシー種族を文明的だと言つたけれども、勿論比較的の言葉で、其の葬儀を見るに及んでは野蠻とも亂暴とも申し様がないのである、其は實に恐ろしいもので、氣の弱い者なら話を聞いた丈でも慄となさるでせう、死人を土葬にしても火葬にしても餘り善い心持はし



印度マハメダンの禮拜堂

ないのに、此所では宗教上の方則として死骸を鳥に喰ませるのである、其の概況を申せば、孟買市の郊外なるマラバヒルの丘に、幽冥塔と稱する直徑十五六間の槽があつて、之に大さ人體を容るゝに足る幾條の溝が堀てある、此の溝こそ彼等が葬儀を執行する場所で、貴賤貧富の差別なく、苟くもパーシー敎徒と生れたのは一度は必ず此の溝に横へられる運命を有て居るのです、溝は血が能く流れる様に造られ、槽の中央部には丸い穴があ

つて、溝を傳つて來る血潮が流込むやう出來て居り、その血は穴を通つて底に溜り、それから地の底深く泌込むやうに成つて居ます、デ毎日幾人かの死骸は此丘へ擔ぎ上げられて溝の上に置かれる、すると鷲に似たバチエラーといふ鳥が、幾羽も群を爲して幽冥塔に集ひ、死骸の眼と云はず口と云はず、滅多無性我勝ちに啄むのですから、實に無慘の極ですが、彼等は之をば死者に對する禮と心得て居る、迷信程馬鹿々々しくも又た恐ろしいものはありません、英國政廳も此の蠻風を禁じようと、新聞紙上を利用して小供の腕が木の枝に引掛つて居たの、孩兒の足が物干に墜ちたの、女の顏の肉が髪の毛と共に往來に墮ちてゐたなど〻書かせて、陋習打破に努めてゐるのですが、却々効力の無いのは慨嘆の至です。

△佛教種族

印度は佛祖釋迦の出生地であるが、印度本土には殆ど其迹を絶ち、東北の一隅なる緬甸に行はれて居ります、で緬甸人即ちバーミンスなるこの種族の人口は九百四十萬からあります、印度本土の土人よりも幾らか富んで居て、生活の程度も高い、而して歌舞音樂を好み、中々洒落者で、錢放が奇麗で、宵越の金は使はぬといふ氣風です、ソレニ女の稼ぐ所で小賣商の如きは大抵女の職業に成てゐて、女房として夫に食はされる筈はない、男一人位は女の腕で養へると言てる位です、容貌は淺黑で日本人に克く似てゐる、日本人が彼方から來たものでは無いかと思はれる程です。

▲食物　何でも喰べます、だから豚の樣な人間だと言はれてゐるもの〻、併し米が常食で、矢張手摑です、而して副食物にはゴタ／＼煮の中へ辛い物を打込んで喰べます。

▲住居　此の地方には粗末な木造の家が多い、室内には床が張つてある許で疊もなければ建具も無い、屋根は細竹で葺いてある、又た所によると床も竹で張つた家がある、併し都會などでは普通西洋造の粗末な家に這入てゐる、ソレデ彼等の坐居するや悠然と宛で佛像

に見るが如き形の結跏を組いてゐる、土人の家が粗造であるに、引代へ、寺院は仲々立派で、地内にはパコダと稱する塔が幾つもあるが、金泥銀粉燦として其は實に莊嚴を極めたものです、此所へ彼等パーミースが來て佛體に恭しく禮拜する爲體は日本の寺院に見る所と少しも異はありません。

▲衣服　パーミースは派手な人間ですから、衣物には仲々良い物を用ゐる、男女とも下にロンギーと稱する腰巻樣の物を締め、上に支那人の着物の樣な筒袖のコートを着、女は絹ハンケチの長いポアーと云ふ物を兩肩より胸に懸け、男は之を頭に捲いて居ります、其の長さは一ヤール七分、幅二尺からある、此のポアーは日本より行く紋綷、タフタ、羽二重を用ゐ、下に締めるロンギーは普通緬甸製の秩父絹樣の物を用る、コートの方はキヤラコ、寒冷紗の類を使つて居ります、髪は束髪で、花簪を差し、帽子は冠らぬけれど履物は日本の雪駄に似寄つた物を用ゐて居ます、ソレデ彼等が外を歩く時は、一種の烟草——樟腦に似た香料を經木で卷いたもの——を吃へて、之を吸ひながらブラ〳〵歩いて居りますが、餘程奇觀ですよ。

▲演劇　パーミースは又た音曲がゝつた事が好ですから芝居は盛にやります、芝居と云ても日本の盆踊の樣なものでロンギーやポアーを着飾つた男女が列を作つて、ドンチヤン、ガンチヤン騷々しい音樂に連れて踊るのです、興行時間は晩の九時から翌朝八時位まで、ソレモ多くは野天の木蔭で遣つて居るので、見物人は毛布や枕を携へ寢轉んで見て居ます、眞に呑氣なもので、以前は亞片をスパ〳〵喫ひながら見物したものださうですが、英國の配下に屬してからは、是丈は嚴禁されました、それから緬甸の都府の蘭貢邊は御祭の多い所で、二月から三月にかけて、十月から十一月へかけて盛にお祭を遣ります、又た九月雨期の終る頃になるとランプ祭を遣る、其は丁度燈籠流しの樣なもので硝子に種油を容れ火を點して川に流すのです、

△マホメダン

マホメツト敎を奉ずる種族をマホメダンと稱し、元とトルコ、アフガニスタン、アラビヤ等より侵入した人間で其數は全人口の二割にしか當らないが、其の性質は慓悍にして戰爭を好み、多年武力を逞うした結果三百三十年前に於て一度ムガル帝國を創立し印度を統一した事もあるのです、宗敎上の關係からヒンヅーとは非常に仲が惡く、水火相容れぬ讐敵の間柄です、デ此二大種族が永い間相敵視して居たのが、詰り英國に宜しく遣られた原因と成つたのです、彼等は慓悍ではあるが果斷の氣象があるので、ヒンヅー等に比し遙に事務的才能がある、從つて商賣も仲々上手です、容貌は一般に黑色で、鼻筋が通てゐるのと、眼が鋭いのとか此の種族の特徴であります。

▲食物　マホメダンの内でも海岸の者は米を常食とし、ライスカレーの類を好んで喰べます、彼等は一般に肉類を食すれど、豚は一切口に入れず、食事は矢張り手摑です。

▲住居　普通木造或は煉瓦造の汚穢い家に住つてゐる屋内は土間で在て、寢臺も椅子も用ゐず、唯だ茣座や莚蓆を敷いた丈で、安座を組いてゐる、室内裝飾等は更にありません。

▲衣服　マホメダンの女の服裝はパーシーの婦人と殆ど異りません、矢張帽子も冠れば靴も穿きます但だ着物の柄行に幾らか濃厚の物を好む樣です、其柄指環を箝める、腕輪を箝める、耳にも鼻にも飾を用ゐる、と云ふ風ですから娘の邊幅の物を頭の先から足の先まで調へるには彼方の金で三百ルーピー餘、日本のに換算して二百圓餘もかゝるのでして、實に贅澤なものですマホメダンの女は餘り外出しない習慣で、偶に已を得ず外出する事があれば、八丈か綿繻子で拵へ眼の所に硝子又は金網を張つた被衣みたいな否袋の樣な物を頭からスッポリ被つて出掛るので、其の姿は丁度傘の化物見たいです、上等な人が外出する時は牛車に乘りますが、之にも黃八丈か綿繻子で造つた厚い袋を被せる、マホメダンといふ種族は餘程人に見らるるを忌がる質と見えます。

▲宗教　彼等の教義は實に亂暴なもので、女房は四人までは持つても構はぬ、妾は何十人抱へようと差支ないと信じ、布教を爲すにも武力に訴へて、信じないもクソもあるものか、脅し付て無理往生に信ぜしむれば宜いとしてある、マホメダンの寺院はモスクと稱へ、建築極めて立派で、彫刻も華美を盡してゐる然し伽藍の立派なるに反して堂内には何も見るべき物がない偶像も無ければ裝飾もなく、眞個のガラン堂である。



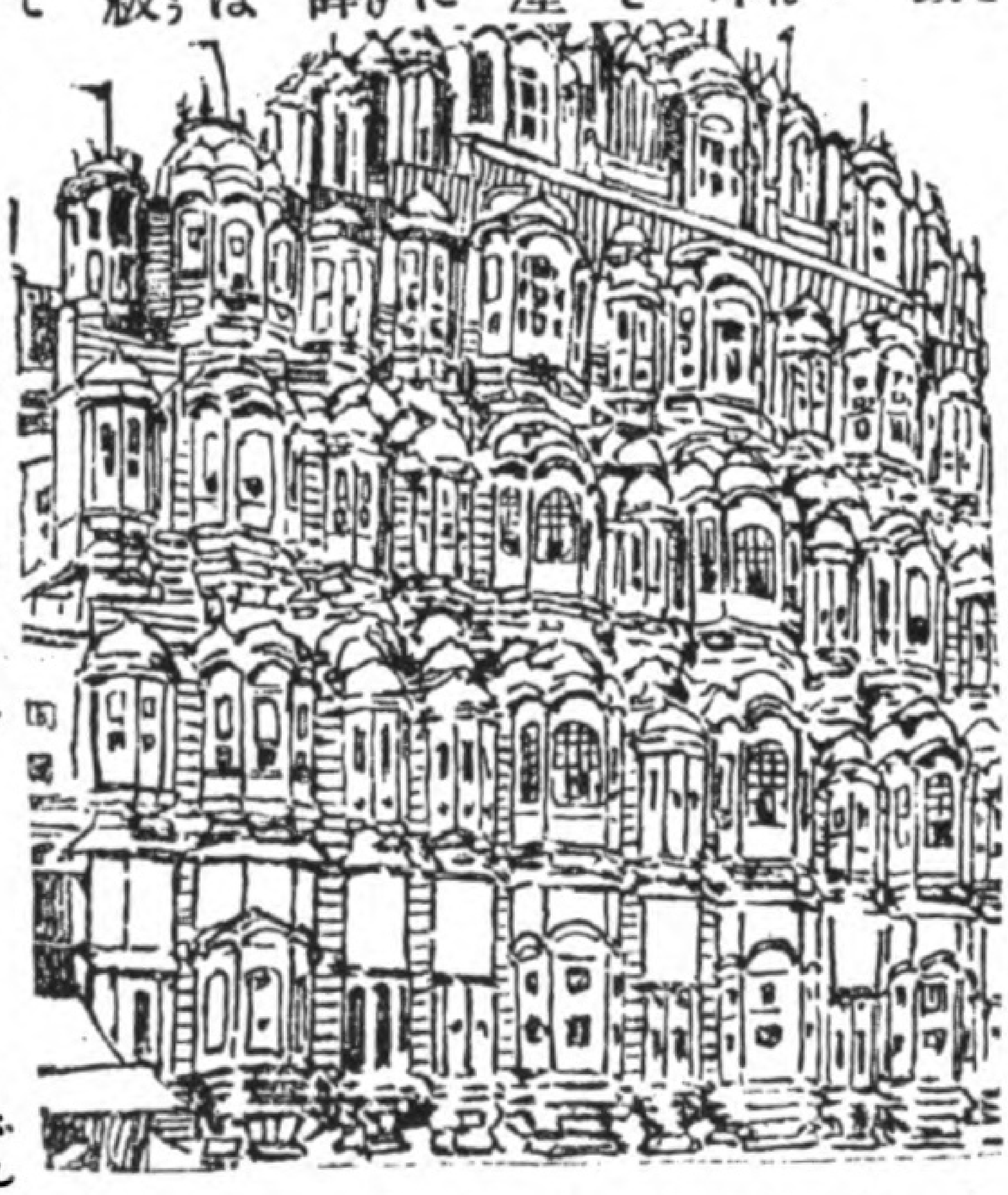
マホメダン族の武人

△ヒンヅー種族

ヒンヅー教は印度教若しくはバラモン教と稱する宗旨で、此の宗旨を信ずる者をヒンヅーと云ひ、全人口の七割を占めて居る大衆であるから、印度を研究しようと思ふものは是非共此の種族を研究せねばなりません、彼等は元と印度土着の原種ではなく、歐羅巴人と同種のアリヤン人種なので、其が三四千年前北部アフガニスタンの方から移住と云よりも寧ろ侵入し來り、年所を經るに從ひ漸く其の血族が全國に瀰蔓し、特殊の宗教や風俗を形作つたのです、ヒンヅーの容貌は略ゝ西洋人と同型の顏立で、概して立派である、但だし色が黑くて目が凹んで、鼻筋が通つてゐるが、而も其が未開の故か何となく氣が利かなく見える、性質は概して怜悧ならず、隋弱な人間で獨立心が無く、屈從に甘んじ、一致力を欠ぎ、迷信が非常に强い、其だから他の種族に始終苛められて許居る、眞に意久地のない人種である。

▲種姓　此の種族には特別な社會制度、種姓と云ふものがある、其は昔時戰勝者なるヒンヅーが印度に侵入して來て、土着の印度人を壓倒して了つて、印度の主權を握る事と成つた、所が段々星霜を經るに從つて戰敗者なる土着の印度人の爲めに反對に征せられんとする傾向を來した、玆に於て戰勝者なるヒンヅーは之を防ぐ爲に、住民の間に劃然たる階級を作つたのが、種姓の起りで、其れが後には宗敎上不可侵の法典と成つて了つた、デ此の種姓といふのは、第一婆羅門、第二刹帝利第三毘舍、第四首陀の四階級で、其の差別が極めて嚴格である、ソレデ婆羅門は僧侶の階級で、最上位に居り、世々立法、祭祀、敎育を司り生殺與奪の特權さへあつた位である、その次の刹帝利は武士の階級で、司法、行政を司つてゐる、佛敎の始祖釋迦如來も此の種姓から生れたのです、次に毘舍は農、工、商を營む階級で、首陀は四種姓中最下級に屬する奴隸の一團で、前にお話した土着の印度人は遠き昔に於て此の種姓に貶されて了つてあるのです、斯くて婆羅門は永世婆羅門たり、首陀は永劫賤民たるの運命を免れず、四者の間嚴然として相犯し相雜るを許さなかつたものでしたが、後には異る階級の間に戀が行はれ、結婚が行はれた爲め、此の四種姓以外に混成的一種の階級を澤山作り上げ、殆ど分類も出來ぬ位に成つたが、而も尙は此の階級思想は益々極端に走つて、終に職業に據て種姓を極る樣に成つた、例へば百姓は百姓の身分を守り、大工は大工、左官は左官、クツタはクツタと親代々相傳の職業に從事し、大工の家に生れゝば一生大工で暮らして百姓に成る譯にも左官に轉業する事も出來ません、斯うなると親が其子の爲に職業を選ぶ必要がありません、何でも親のする通りを爲せて行けば善いのですから、却てラクかも知れません、我が日本にも幕府時代までは、身分上の制限がありましたけれど、其は制度上から來たことで、印度の是は宗敎上から來てゐるのだから、根抵が全然違つてゐる、扨て彼等が天分否な宗敎上自己の境遇を守る一二の例を擧げて見れば、私が孟買に着いた時の事でした、埠

頭から乘つた馬車の馬丁に手荷物を宿へ運んで呉れと命じたが、どうしても持て來て呉なかつた、其柄宿屋の部屋ボーイに一寸郵便を出して來て呉ろと手眞似で賴んだが、是も知らん顏をしてゐる、何うして宜いのか私も是には困りましたが、跡で段々事情を聞いて見ると、ツマリ馬丁は馬車を御するのが本務で荷物の運搬は爲すべからざるもの、又た部屋ボーイは部屋の給仕ではあるが郵便を入れに行くのは別に其人ありといふ譯なのでした、何と驚いた譯ではありませんか、是等は皆な階級思想から來た弊風です、而して種姓の異つた人間の料理した物は喰べず、自分より以下の階級の者が食事中に來た時は其の食を廢棄して了ひ、其代り目上の者に向つては遠く離れて其の影も踏まない事に成つてゐる階級を尊重する弊習も玆に至つて極まれりと言ふべきです。



▲迷信　ヒンヅーの宗敎上の迷信は實に甚しいもので、寧ろ盲信と言つた方が適當かも知れません、彼等は牝牛を靈獸として尊んで居る故、牛は一切食べません、但し乳は飮みます、又た牝牛は勞働に使はず、其代り牡牛は殘酷に使役致します、其柄又た罪滅しだと言つて牛の糞を體に塗つたり、牛の小便を飮んだり、又は之で顏を洗つたりする、往來に牛糞がある時は拾つて家に持歸り固めて燃料にする、最も甚しいのは黑燒にして齒磨粉に製し上る、ソレデ彼等は汚いとも何とも思つて居りません、不思議な習慣もあればあるものです、其で居て酒は一切飮みません、否な宗敎上飮んではならぬ事に成てゐる、啻に飮んでならぬのみならず手を附ける事さへ出來ぬ事に成て居ります、私

が蘭貢に滯在して居た時の事でしたが、日本から酒樽が着いたので、之を印度人に運ばせ樣とした、すると印度人は其の匂を聽いて居たが之は何うも變だ酒ではありませんかと駄目を押すので、酒ではない神酒だと言つて、到頭宿の二階に運ばせたまでは善かつたが、後で其の事が解つたものだから、是は大變な事をした日本人に欺されて手にも附ける事の出來ない物を運んで罪を犯したと言つて、大の男がワアー〳〵泣き出したには弱りました、又た彼等は罪滅の爲めに順禮に出掛けるが、其法は實に馬鹿氣て居ります、什麼遠い所へ行くにも尺蠖が尺を取りながら歩く樣な工合に地面を這つてゆくので、額は擦り剝く血は滴れる、見るも無殘な廻國姿ですが、彼等は之を當然な難行苦行と思つて居る、其柄印度にはガンヂスやインダスと呼ぶ大河があるが、土人は之を靈河と稱へて、神聖視する所から罪穢を洗はんと遠方から旅をかけて沐浴しに來る、其の爲めに河岸に大きな建物が出來てゐて、着替の置塲となり、土人は衣物の儘飛込み、沐浴を終ると此家で衣物を着更へ、清淨無垢の體となるのである、ですからガンヂスの支流フウグリ河なぞに朝の四時五時頃に行くと、黑山の樣に人が集つて居て、大變な賑ひださうです、ヒンヅーの寺院は日本の佛刹に似寄てゐて、いろんな像——猿の樣な物や何ぞが飾つて在て仲々立派なものです、種姓の弊習といひ、迷信の惡風といひ要するに印度人は宗教中毒に罹つた民で、其の害毒は深く膏肓に入り、到底濟度し難いのである

▲食物　海岸の者は常食としてライス、カレーを食し海岸に遠い所では豆に黍を餅に搗いて丸めてふかして團子にした物を喰べ、之に辛い香料を添へます、彼等は宗教上の掟に依て酒は飲まず、肉食はせず、一切精進です、動物性の物は牛乳より取つたバタの樣な物を時々用ゐる位のものです、食器と言つても種類は極めて少ない、即ち水或は牛乳を容れる銅の壺、眞鍮製の水呑銅製若くは眞鍮製の釜、カレーを盛る硝子製若くは眞鍮製の皿、陶器製の丼位に止り、一の物で幾つかの用を兼させる例へば水入は手桶の用をもし水呑は

手水鉢の代用ともなり、釜は煮炊から、湯沸し、牛乳沸しを兼ねて居ると云ふ鹽梅式で、至極簡單なものです、私は一日ヒンヅー人の饗應に招待された事があつたが、其時の御馳走は未だに忘れません座敷と言ても土間ですから、私は壁に凭れて蹲踞んで居ると、軈て私の前に爼板の形をしたお膳が据つた、その膳を見ると芭蕉の葉が敷いて在て、上に飯が盛てある、すると瓢簞の若いのをカレーで煮たのや、胡桃仁、生姜の煮付たのを三品許り別々にボーイが來て盛る、續いて汁物が出る、其は柿の葉見た樣な物で拵へた椀に盛つてあつて、バタの樣な油こい而して素敵に鹽辛い唐辛子澤山のソツプです、そして脇に水壺が置いてある、如何にも變つた珍料理である、所がこの御馳走を頂戴しようにも箸も無ければホークもない、一體何うして喰べるのかと見てゐると、主人は壺の水を飲み〳〵右の手で芭蕉の葉の上の食物を掴んで其を丸めて頰張るのです、で私も其に眞似なければなりませんが、御馳走は變だし、米は厭な臭ひがするし、迚も食ふ氣になれない、と云つて食べぬ譯に行かぬから、漸との思ひで呑下しました、併し是は上等な方で、下等な奴になると共同便所の傍かなんぞで、例の芭蕉の葉に載せた奴を平氣でムシヤ〳〵喰べてるには驚きます、それで彼等には面白い習慣がある、即ち淸淨には右の手を用ゐ、不淨には左の手を用ゐる事に成つてゐるので、飯を握るには左の手でし、不潔な物をいぢる場合には必らず左の手でする、例へば彼等が厠へ上る時の如き、紙を使はない習慣なので食事の時に用ゐた水呑を持込んで、其で臀を洗ふのですが、其時も矢張左の手を用ゐ、決して右の手を不淨には用ゐません、斯樣に時と場合によつて左右の手を遣ひ分けるといふのは、餘程面白い習慣だと思ひます。

▲住居　彼等の棲家は木造の堀立小舍か煉瓦造の粗末なので、內部は一面の土間です、何の家にも必らず壁間を見ると油畫擬ひの重に宗敎上の神話を描いた石板畫が額として掛けてあります、併し之を外にしては裝飾及び家財諸道具何もありません、勿論寢臺も無いの

で、土間へ持てつて呉座や木綿の敷物を敷いて寢る、それから酷暑の時は屋外又は往來の齊天井の下に、石を枕に星を數へて寢るのもある、それが必ずしも無宿乞丐の徒のみではない、立派に家のあるものでも時には行るのだから、呆れる外はない、それで敷物も或時は敷き、或時は掛けて蒲團の代りにし、或時は疊んで革鞄にするといふ風だから、成程家財の要らぬ筈である。

▲衣服　ヒンヅーの女の下等な者は丸裸の上にサリーと稱する木綿の布をぐる〳〵體軀に卷付けてゐる許ですが、稍々善い身分になると乳房を匿す爲にチョリーと稱する襯衣の短い樣な物をば下に着、中流以上の婦人に在ては絹のサリーを用ゐます、サリーの模樣色合は極めて濃厚で、赤、樺、紫等の派手やかなケバ〳〵したものを好みます、而してどんな身分の者でも跣足で居る、王侯貴人の妻女でも往來を歩くに履物を用ゐません、ペスト流行の時でも平氣なものです。

△結婚の風習

之より結婚に就て少しく述べませうが、其の前に先づ印度に於ける不思議な統計を御覽に入れませう。

英領印度總人口二億三千一百八十九萬九千五百七人

男……………一億一千七百五十四萬九百六十五人

女……　一億一千三百八十七萬七千二百八十六人

不　明…………………四十八萬一千二百五十六人

内

未婚女三千九百二十二萬二千四百二十七人

既婚女…………五千四百十七萬千四百十人

寡　婦……二千四十八萬三千四百四十九人

此表に示す所を視れば、寡婦の數は女の總人口の五分一に當り、又た既婚女の約半數を占めて居るので、直ちに印度に寡婦の多い事が證據立てられる、何うして這麼に後家が澤山あるかと云ふに、ヒンヅーの如きでは一度結婚して夫に死なれゝば、總ての身の飾りを除つて後家を立て、決して再婚しない事に成てゐる、其も畢竟貞操を守ると云ふ道德的信念に基いたのではなく、宗教上の檢束に餘儀なくされたのである、其で古昔は夫が死ぬと妻は殉死して一緒に燒かれる風習で在たが、英領に成つてから之を嚴禁すると同時に法律

上再婚を許した、其が爲め殉死丈は止めたが、術は舊習を守つて再婚を肯じない、社會も亦た迷信を以て充たされてゐる所から、寡婦に成つたものは娶る所か之と交際もしない、口も利かないと云ふ恐ろしい風であつて、つまり是が印度に後家の統計を多くした所以である、最う一つは非常に早婚の所爲である、少し金のある富祐な手合の如きは、小さい子供同士を……女子は五六才乃至七八才にして、男子は十一二才にして結婚させて了ふ、だから若し男子が十五才で死ぬと女は八才位で最う後家を立てる、這麼話が印度には澤山ある、斯うい ふ譯で未だ人情を解さぬ内に早く若孀婦と成て了ひ、社會からは死んだ人の樣に扱はれて、生先長い生涯を味氣なく送るのであるから、婦人の身に取つては甚だ氣の毒な風習である。尤も男子の方は再婚しても構はぬ乍併一旦亡妻の喪に服した以上は生涯再婚が出來ない事に成つてゐるさうだ、更に他の統計を擧げて見よう。

五才以下の女の數一千九百十六萬八千九百九十七人
内 未婚女……………一千九百萬六千七人
　 既婚女……………二十四萬三千五百三人
　 寡　婦……………一萬九千四百八十七人
五才以上十才以下の女數一千九百八十九萬五千四百六十二人
内 未婚女一千七百七十六萬九千九百二十二人
　 既婚女…………二百二萬九千七百四十二人
　 寡　婦…………九萬五千七百九十八人
十才以上十五才以下の女數一千五百五十六萬六千七百十八人
内 未婚女…………八百七十萬六千八十八人
　 既婚女……六百五十八萬四千七百六十八人
　 寡　婦………二十七萬五千八百六十二人

即ち五才以下の幼女にして既に二十四萬はお嫁さんであり、一萬は後家さんであるのですから、寧ろ滑稽と言はざるを得ない、で其の割合も年齢の登るに從つて多くなり、十五才頃には大抵緣付いて了つてる事に成てゐる、何と驚いた譯ではありませんか、以て如何に印度人が早婚で寡婦を立つる陋習の甚しきかを知るに足るのである。

▲婚禮　ヒンヅーの結婚は、結婚と言ひ條男が女を金

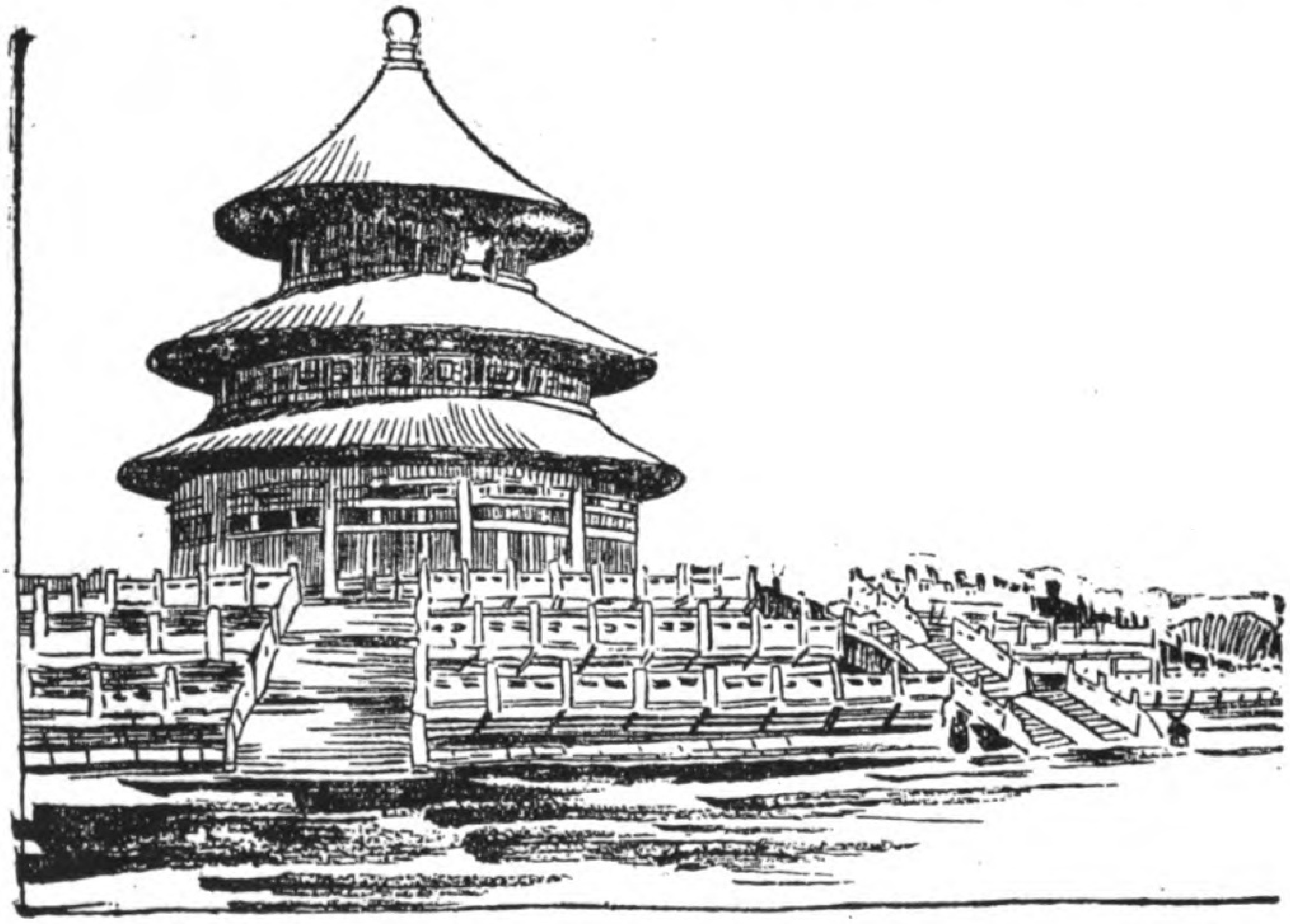
で買ふのである、兩親が寄つて百圓二百圓と價を極めると、貰ふ方で其丈の身代金を拂ふ事に成てゐる、婚禮の時は女は樺色のサリーを着るが、男は金襴の着物か又はビロードに金モール等のピカ〳〵した物を着け馬に乗つて嫁を迎ひに行く、此時は馬にまで裝飾を施します、其故支度に手間がかゝる、それで式が三十日も續き、加之に嫁を送つて來た友人知己達には御馳走もし、金も與るといふのですから、中々費用がかゝる月に六七圓の給料を取る者でも百圓位の金は何うしても要るといふ事です、ですから高利貸より無理算段に金を借りて婚禮入費に充てたのが、一生稼いでも償ひ切れないで死んで了ふ例が往々あるさうだ、勞働者の中には兄弟の結婚費用を助くる爲めに働いて居るのだと言つてる者もある位だ、下等社會の婚禮は大きな木の下で式を擧げ、此所へ友人を寄せて辨當を振舞ふ、すると友人等は輪をなして新郎新婦を取巻き、歌を謡ひながらぐる〳〵廻つて、如何にも愉快らしい相です勿論幼稚な者は相當の年頃になるまで實家へ預けて置くといふことです。

支那家庭事情

池田秋旻

男尊女卑の張本と云ふべき支那でも、内房に在つては思ひの外婦人に權力がある、是は男子の思想が甚だ粗かで、家政の細事にまでは、迚も注意が屆かない所から、自然婦人が日々の家事を整理することになる、其習慣が次第に一種の權力を形造つたのであらう、一二の例を擧げて云へば、北京語の儞と云ふ文字はお前と

云ふ意味で、同等以下にしか用ひない、然るに主婦の間では、互に儞と云ふ言葉を用ひて居る、其他飲食衣服婢僕の事等、家事に屬するものは、大抵皆妻君の一了見で始末を附け、男女內外の區別が判然と分れて、男子の權力は、殆んど內房には入らないと云つて宜しい程であるが、併し夫は眞に家政の細事に限られた範圍內の話で、外に向つては勿論、家政の事も其大體に就ては、女子の權力と云ふものは殆ど無い、男子は何處までも婦人を輕蔑し、婦人も亦實際智識に乏しく、



北京城內天壇の全景

世間の事情に疎い所から、自分でも成るべく差控へ、言うて宜いことまでも言はない風で、家政の主領とは云ふものゝ、其實女中頭、下人の取締も同樣で、家計の財源は申す迄もなく、何一つとして機密を聞くとは出來ない、誠に水臭い話で、夫婦の情合は、單に子孫繁殖の目的に依つてのみ繫がれて居ると云つても宜い。

▲舅姑の關係

支那の家屋の構造は、一つ邸內、名けて一家と云ふものでも、其實幾棟にも分れて居れば、一家の內にてまた個々の所帶を持つに、

少しも差支がない、故に支那では、成人獨立の身になつても、父子兄弟一家に住するの習慣であるけれども、それは唯だ大門を同うして居るに過ぎないので、既に一家を構へるヿになれば其家の貧富にも因るが、成るべく一戸的住居の出來る所に新夫婦を置き、舅姑が一一之に干渉すると云ふやうなヿは少ない、大きな家になると、起臥は勿論、食事も別々で、全く別居したのも同然である、中以下のものでも、夫婦の部屋と定められたものがあつて、舅姑は舅姑、新夫婦は新夫婦で棲んで居る、それから又所謂小姑と稱へて、夫の姉妹がある場合にも、是は舅姑に近い方の部屋に居て、新夫婦とは至極緣が遠いから、多少嫁の惡口を云ふ位で鬼千匹と云ふ程の邪魔にはならない、此點から見ると、支那の嫁は日本の或家族の嫁よりも、餘程暮しよいのである。

▲副妻の事

支那では妾のヿを副妻とも云つて、中人以上の家にはなくてならぬものゝやうになつて居る、是は祖先の血統を絶やすヿを、何よりの罪としてある支那の教から起つて、妻に子のない時、妾を置くヿにしたのでもらうが、今では妻に子の有る無しは毫も關係せず、大抵の人が妾の一人や二人は持つて居る、其不潔殺風景實に驚くばかりだ、殊に支那では、妾を買ふと稱へ、日本で下女を探す樣に、妾口入所の婆さんに賴んで置けば、軈て連れて來る、之は多く貧家の娘で、其價は通例二三百兩から四五百兩までだ、買入れた妾は、家族の一部に加はへられ、終身他に往かない、衣食小遣錢等を給するヿも、家族同樣である、左れば妻と妾とは、普通同室に棲んで居て、同じテーブルにて飲食をする、併し身分は判然として上下の區別がある、故に假令ひ妻君が夫の寵を失つても、妾が妻君の地位を奪うヿは決して許されない、即ち妻は飲食衣服、祭祀、奴婢の使役、舅姑の世話等を司るに反し、妾は食事の周旋、臥床の始末より、室内の掃除等に至る迄、奴婢と同樣の勤めを取り、場合に依ては歌を歌ひ、舞をも舞はなければならぬ、其上何か事ある時、妻は公服を

着て珠釧を戴くことが出來るに、妾は如何なる場合にも婢衣を纏ふに過ぎない、此位に上下の差別は立てゝあつても、人情として、妻妾の間に喧嘩の絶えないのも當然の結果で、妾は主人の寵を受くる代りに、妻から非常な虐待を受けることも珍らしくない併し何の樣な事情があらうとも、妻を離縁することの出來ざるは素より妾と雖も之を放逐することは出來ない、此事は互に承知のことであるから、喧嘩と不愉快との間に一生を送るので、此點から云ふと支那の家庭ほど趣味のないものはなからう。

▲本腹と妾腹

本妻の腹に男子を得なかつた時は、妾腹の子を進めて家督相續人とすることが出來るも、本妻に子のある時は假令ひ妾腹の子より年が少なくても、それが父の世職を襲ぐべきものと定まつて居る、前にも述べた通り妾は殆んど其家の下婢と同樣の地位であれば、隨つて本腹の子は妾腹の子に對し、平生少しも敬意を表せないのみならず、甚しきは妾の名を呼棄てにするさへあり、本腹妾腹の子に、斯く尊卑の區別があるのは、遉は禮儀の國だけに、大に取るべき所である、然るに支那人中には反對の議論があつて、假令ひ妾腹とは云へ同根共本の義から云へば、左まで尊卑の區別を立てるにも及ぶまいと云ふ說もあるが、其說は未だ一般に行はれて居ない。

▲妾は合葬するを得ず

終りを愼み遠きを追ふとて、支那では死人に對して禮を爲すの習慣であるから、葬式の模樣を見れば、其生前の地位身分及び、其國の風俗人情を知ることが出來る、妾の事は日本でも、近來社會改良家の間に餘程八釜しい問題であれば、男尊女卑の本家本元たる支那の妾の話が、參考となる點も少なくなからうと思はれる支那では妾の葬式に就き、一定の禮が設けられてない即ち妾は禮の上から公然其存在を認められないのである、併し大淸會典中に、母は子を以て貴しと云ふことがあつて、之は主として妾に適用される、若しも妾腹の子が、立身出世して、都合よく一品二品の官に上るも

が出來た時には、生みの母たる妾もまた、夫人の禮を以て葬られる、夫人とは二品官の妻を云ふので、其他子の立身の階級に隨ひ、三品四品と順次に葬儀も下つて來る、但し爰に最も注意すべきは、葬儀に於て之を夫人の地位に進むるにも拘はらず、妻は其夫と合葬するを得るに反し、妾は如何なる場合にても、主人と合葬することを許されないことである。

▲婦人の仕事

支那の婦人は化粧をするのと靴を縫ふより外に、用事は無いとの評は、好く當つて居る、殊に北京の如き官吏の巣窟でもあり、又滿洲人は通じて懶惰者が多いから、自然其風が女子にも及んだのであらうが、左れば商人と云つた所で、商家の店頭に女子は禁物なり、店に出ぬとすれば、官吏の家と少しも變つたことはない所で婦人の司どるべき家政と云ふものも、其範圍が甚だ狹く、詰る所飲食衣服の二つに歸着するので、婦人の役目は、主人から金を貰つては、飲食と衣服との世話をすれば、それで足りるのである、物品の贈答、手紙の往復等は、婦人がしてよさゝうに見えるが、之は悉く主人が遣つて居る、教育衛生等のことは、何人も更に念頭に懸けたこともない、扨て其飲食と云つた所で中等以上の家には、別に料理人があり、一切引受けて居るから、唯だ欲いものを注文すればよく、左なくとも大抵の家には二人三人の下女を使つて居るから、主婦が態々煮炊きに手を下すの必要もない、衣服も其通りで、洗濯は無論下女がする、新しいものも平生着は下女が縫ふ、上等品は仕立屋に送る、主婦は終日殆んど用が無くて退屈して居る。

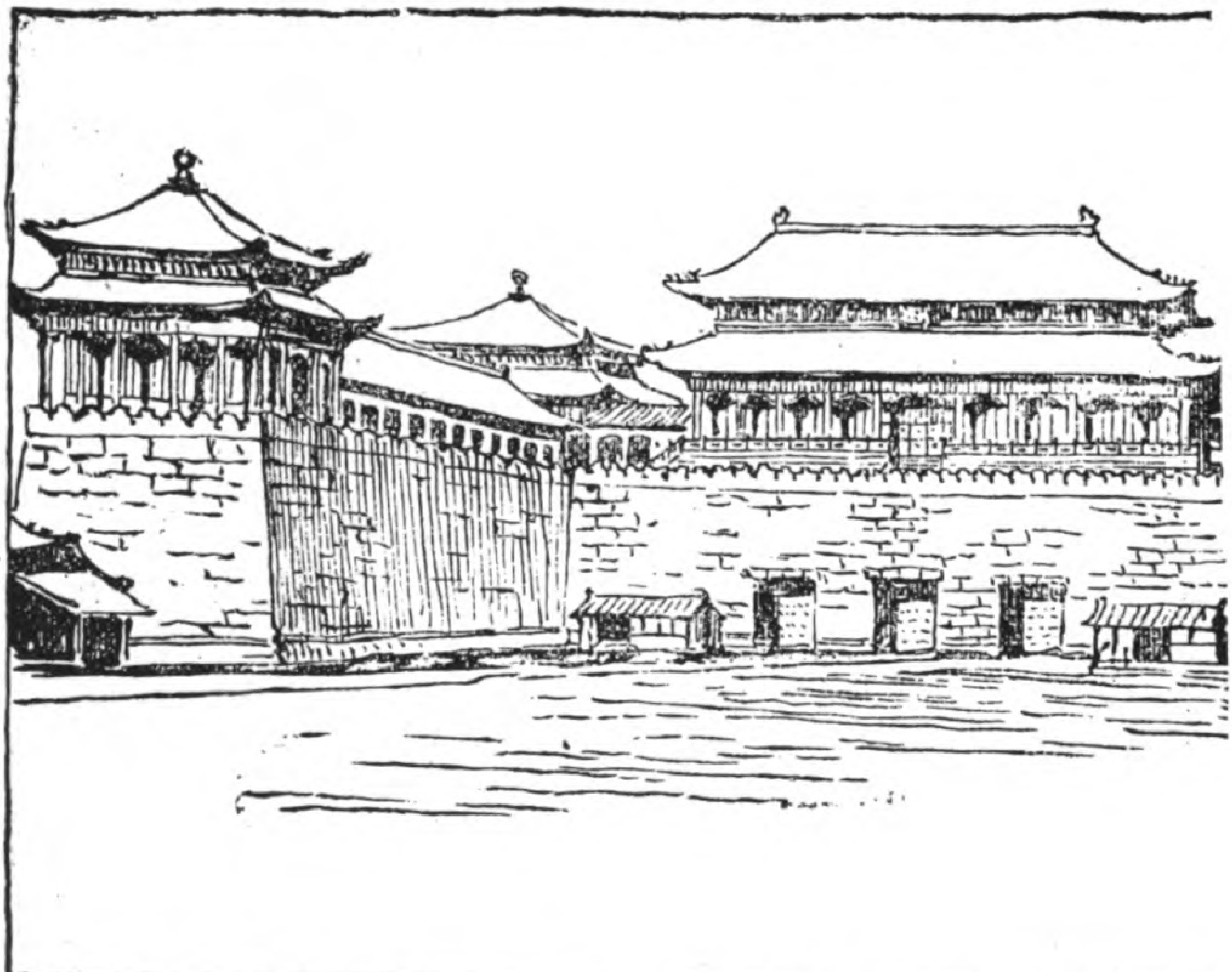
▲恐るべき墮胎

支那人は、小供に附けては目の無い程可愛がる、併しそれは生れて後の話で、懷姙中は必ずしもそうでない、無論平生から小供の欲しい／＼と思つて居る人は懷姙中も出來得るだけ、之を大切にするに違ひないが一家の暮し向きが不如意であるとか、或は夫婦でないものゝ間に種を宿した時には、平氣で墮胎の罪を犯して居る、最も法律では墮胎に何等の刑を科せない、左

れば處々の横町の倉の壁なんどに、墮胎藥の廣告が澤山粘つてある、墮胎丸と云ふのもあれば、麵法墮胎と云ふのもある、統計上墮胎の數が何の位あるかは分らないが、此有様では中々少なくあるまいと思はれる、中にも其原因は、重に生活問題に伴ふので、正式の結婚をした夫婦の間の懷妊に多いとは、益す以て一驚を喫せざるを得ない、

▲女子の敎育

支那は昔から文化の國とか何とか稱へられても之を今日の文明國に比す



北京宮殿の側門

れば、實に驚くばかり幼稚なもので、中にも女子敎育など〻云ふとは、毛頭支那人の腦裡にない、左れば北京天津等の大都會にも、未だ一の女學校がない、尤も上海の方に往けば一二の女學校が無いでもないが、それにしても頗る微々たるものである、男子には時勢後れの學問ながら、役人になる階梯ともなり、又幾分か人前をも繕らはねばならぬため不完全ながらも幼少の時より、讀書はさしてあるが、女は中饋を主ると云ふ本文に基き

臺處で煮炊が出來ればそれで澤山だとの方針で、讀書などに意を用ひるものは至つて少ない、偶には學者の娘など讀書詩文の一通り出來るものもあれど、それとて唯だ從來の漢文を稽古するだけのことで、文明流の學問と云つては何も知らない、畢竟實學推理の觀念に乏しい支那人には飯を炊いたり漬物をしたり、家事經濟の帖簿記入が、悉く學問の應用であることに氣が附かないからであらう、然して偶ま讀んで居る書物は、女兒經、女四書、女小兒話、孝經、四書、烈女傳、古文詩賦等であつて之と共に小楷を書くことを習はせて居る。

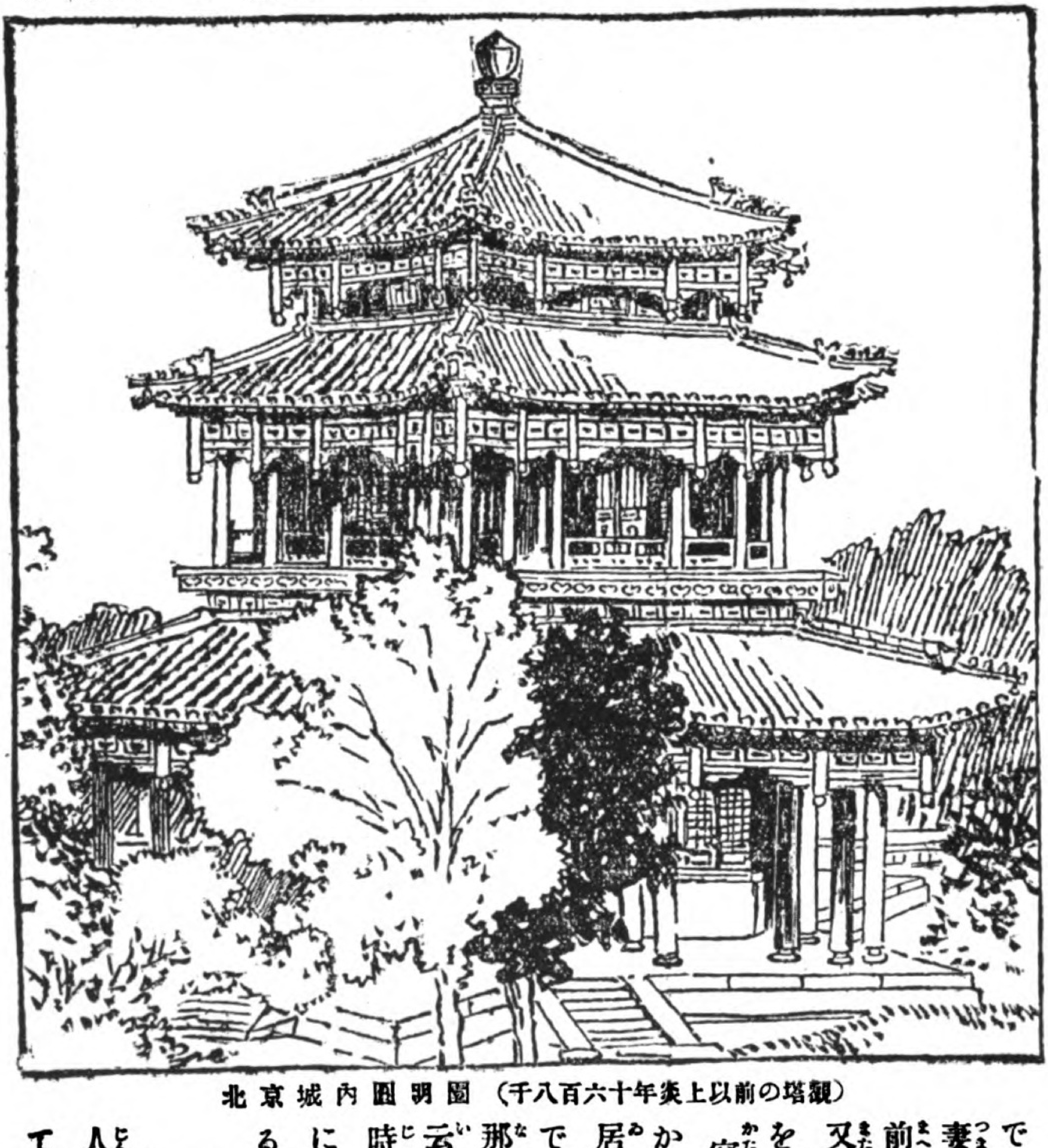
△子女の遊戯

遊戯の種類の少ないのは、未開國の證據であつて、支那も亦其例に漏れない、隨つて小供同士が集つて遊ぶなどのことも甚だ少ない、七八歳にもなれば同じ邸内の親類の小供など二三人位つゝ遊ぶことはあつても、門外から友達が遊びに來ると云ふことは先づない、其遊び方は日本でもよくあることだが、春先の暖ひ日に、日向に茣座を敷き、霜解の土なんかで人形を造つたり飯事などをする、此年頃までは男女とも同樣であるが十歳位になると女は漸く變つて來る、其中でも漢人の女は例の足を縮小することに非常な力を費すので、戸外に出て遊ぶなどゝ云ふことは殆んどなくなる、之に反して滿洲人の如きは中々お轉婆だ、日本で考へると支那人のことであるから、十五六歳にもなつたら、頗る樣子ぶつて運動などもしないかと思はれるが、決してそうでない、尤も男の見て居る所では、此年頃の女は非常に謹愼である、其代り女ばかりの所では、鬼事をする木の枝に上る、隱れん坊の時などは、大きな甕を乘り越えて、其中に入つたり出たり、隨分活潑な運動をする、是は全く服制が善いからであらう日本服で此樣なことをすれば足が出る袖が絡まる、迚も不體裁で出來ない、滿洲婦人の體格が好いのは、食物などの關係もあらうが、此等の運動も大に與つて力がある、

▲娘と花嫁

娘は賣物だなど稱へて、出來るだけ立派に飾るのが世間並べての風であらう、然るに支那では、娘は髮を

お下げにして、簪なども餘り挿さない、着物も極めて質素にして、餘り人目を曳かぬ事を力めて居る、(尤も外出の時などは必らずしもそうではない、)之に反して一旦人に嫁すると、それは〳〵出來得るだけ立派に着飾り、髪も上げて澤山な花簪を挿し、外出の時など殊更に立派



北京城内圓明園（千八百六十年炎上以前の塔觀）

である、畢竟人の妻となれば、一人前の婦人となり、又一方には女は己を愛する者の爲に容くると云ふところから、自然獨身で居た時とは違ふのである、左れば支那にて女の花とも云ふべきは、娘の時代でなくて、寧に花嫁の時代である。

▲婦人の娯樂

遊戲娯樂は支那人には男女を通じて至て乏しい、殆

ど皆無と云つても宜い程である、畢竟男女の分隔てが餘り嚴重に過ぎ、娛樂の方法に手の出し樣がないのである、第一外出は女子の禁物と極つて居り、來客があつても男子ならば過はない、婦人客は先方からも容易に出て來ない、外出と交際とを除いて、外に何等の樂みを取ることが出來やうか、支那の女子ほど無趣味殺風景で詰らぬものは無からう、唯だ一年兩三度、城の内外にお寺の開帳があり、又元宵の觀燈と云つて正月十五日の夜、提灯屋や菓子屋が、店頭に多くの提灯を點すことがある、此等の時ばかりは、僅に例外として婦人と雖も外出をする、又人に連れられてならば、夜も燈籠を觀に往くことが出來る、其他五月の五日、七夕、中秋の看月、九月九日の節句等、兒女と共に種々の催しをして遊樂するけれども、何れも家内に閉籠つてすることで、誠に物淋しいものである、人生一年中之と云ふべき樂事がないとすれば、彼等が深窓に隱れて阿片を飲み、其中毒が身を害することにも氣附かないで、遊惰をこれ事とするも、一方から云へば多少恕すべき所がある、家庭の改良と共に、大に遊戲を奬勵すべきことは、單に支那のみではない、日本でも頗る必要なことであるだらう。

朝鮮の家庭

文學博士　金澤庄三郎

朝鮮の家庭は内外の別が嚴重であつて、内部の事は容易に知ることが出來ぬ、即ち家屋の建築法が既にさうで、どの家も大抵中庭を取り圍んで口の字形に建てる。其南に面した方が男子の住居で、こゝに客間もあ

る。日本の奥座敷が朝鮮では表座敷であつて、門を入つて直ぐが此客間即ち所謂舍廊である。此處は男の世界で、女は這入ることが出來ぬ。丁度一種の倶樂部の樣な體裁で、近處隣はもとより通りかゝりの人でも遠慮なく這入つて談をするといふのが朝鮮の風である。但し客が來たからというて日本の樣に茶を汲んで出すでもなし、たゞ欵待は煙草の一點張である。勿論朝鮮人はどんな時でも煙管をはなすことはない、大工、左官の樣な勞働者が仕事をするにもやはり長煙管をくはへて居る。其不釣合な風といつたらとてもお話にはならぬ。一度政府で此煙管の長さを制限した事があるけれども、朝鮮の煙草は粗製で極めてきついから、とても短い煙管では飲めぬのである。かういふ風に朝鮮人と煙草とは暫くも離るゝことの出來ないもので、丸で我々がステッキでも持つて居る樣に、何處へゆくにも長煙管をふり廻して居る。しかし主人の方にもそれぞれ煙草の準備があつて、灰落し、煙管、唾吐などは、どの座敷に行つてもずらりとならべてあつて其數と種類とは家の貧富をあらはすともいふべく、いはゞ一種の裝飾である。さてどこの座敷に行つても、例の大きな帽子をきた白衣の先生たちがあぐらをかき又は立膝をして、(室内で帽子を冠ることも、あぐらをかく事も立膝をすることも、朝鮮では普通の禮式である)くはへぎせるといひたいが、煙管が長いからさうは行かぬ雁首を灰落しの上にのせて、たてひざですぱ〳〵やつて居る。朝鮮たばこの一種の臭と、温突を張つてある油紙の臭(朝鮮の床は石でたゝんで、土で塗つて、其上に油紙がはつてある。さうして其下を竈の火が通る樣につなて居る、これが所謂温突といふものである)とは、どの家に行つても我々の鼻を衝いてくるので、一度朝鮮に行つたものは終生此惡臭をわすれることは出來ないであらう。

朝鮮は朝夕二食で、朝食が丁度午前の十時前後であるから、いはゆる食前には充分の時間があつて、朝鮮人は朝飯前に可なり仕事をするのである。朝起きると顏を洗つて頭をとき、前夜寐る前に解いた網巾といふ

網の樣なもので、眦のつり上るほどきつう額にはちまきをする。それから帽子を着てぶら〳〵出かけて、あちらこちらの「サランゲ」にゆき、飯時になると歸つて來て、それがすむと又出かける。一體朝鮮の家屋は主として防寒的に出來て居る室の樣なものであるから、室内は寧ろ一種の休息場で、天氣でもよければ戸外が彼等韓人の重なる世界である。かういふ風に朝鮮の男子は一日客に接して居るか、さもなくば町をぶらついて居るのであるから、所謂家庭の味といふものは多く解して居らぬと考へられる。

さて女子はどうであるかといふと、前にいうた「サランゲ」の北側に中庭を隔てゝ内房といふのがある。これが、所謂日本の北の方に當る女の本據であつて、主亭の外の男子は何人も此内に這入ることが出來ぬ。朝鮮婦人は其家に於ては亭主以外の男子を見ることもなく、又上流社會の女子は外出するのにも、夜間人靜まつて街に男の影の見えぬ時でなければ出ぬのである。男女の別が表面上嚴格であることはこれほどで如何に親密な間柄でも友達の夫人と談をすることも出來ず、又夫婦連れ立つて外出することなどは決してないのである。食事の如きも男は大抵表座敷でする。一家團欒して食卓を共にすることなどはあまりない樣にきいて居る。朝鮮女子の生活はまことに陰氣で、狹い部屋の内を己の世界として、洗濯と裁縫とに追はれて居る。芝居、音樂其他普通我國に於て女子の樂とするものは、多く朝鮮に於て欠けて居る。

前述べた男女の別が表面上頗る嚴重である反動として、裏面に於ては風俗が甚よろしくない。我々は此處に朝鮮家庭の暗黑面を語ることは好まぬが、女子が春先き山間の小川へ遊山に行くことを法律で禁じ、又『寺にゆく處女は負はれて町に這入る坊主』などいふ諺のあるのを見ても、大抵の樣子は知れるであらう要するに始めに述べて置いた通り、朝鮮の家庭の内情は容易に外部から窺ひ知ることは出來ぬが。その夫婦間の關係はあまり幸福なものとは思はれぬ。これに反して、男女とも、兒童の間は怜悧で活潑で前途有望に

見えるのであるが、それが成長するといつの間にか普通の朝鮮式となつて了ふ。これはそも〲何がためであらうか、早婚の弊もあらう、又社會全般の感化力にもよらうが、いづれにしても將來朝鮮人の敎育に從事し、殊に朝鮮社會の改善をはからうと思ふ人の注意して研究すべき問題であると考へる。我輩は朝鮮家庭改良の先驅として、先づ(一)蒸風呂の如き「オンドル」を廢する事、(二)朝夕二食の制度を改めて世界一般の三食制とする事、(四)内房制を打破して男女の交際を公にする事、(四)朝鮮の制服を改める事、殊に男子の白衣を廢する事、(五)男子の斷髮を斷行して、例の鉢卷即ち「マンゴン」を禁ずる事、(六)喫煙の害を說く事等を唱え様と思ふ。此他まだいふべきことは數々あるけれども、それは他日に讓るとして、兎に角以上の事が根本から改められなければ、朝鮮人を主體としての事業は何事も凡て成功しないものと確信する。朝鮮家庭の談をと乞はるゝまゝに所感の二三を述べた。いづれ他日別に詳しく論ずる事とせう。

（完）

韓國の衣食住

英、米、獨逸、佛蘭西の如き世界の文明國富强國の生活狀態を紹介し、摸範的家庭を披露する傍らに、衰亡國と見做され、貧乏國と見做された朝鮮の生活狀態を記述するは、自然の對照として極めて趣味ある事柄であらう。

韓國の生活狀態は如何なる有樣であるか、京釜鐵道が貫通された今日、事新らしく申すほどでないが、從來朝鮮内地の事は、日本と接近して居る割合にあまり日本人に知られて居ない、これは旅行者の多くは都會の地だけ多く見て、田舍の狀態を詳しく報道したものがないからである。一體朝鮮人は活智のない人間で勞働を嫌ひ、貯蓄をせず、進んで取るの勇氣もなければ退いて守るの耐忍もない、一口に言はば怠惰もので飢の來るまでは寢て居て樂をしやうといふ人種である一例を擧ぐれば、風雨の日は一切外出をしない、これは傘のないのも一つの原因であらうが歸する處ろは勇

氣に乏しいのである。彼の京城に電車鐵道が通じた當時、晴天の日にはぐ皆滿員の札をかけるのが一日雨天と來ては電車の中は寂寥として人影なしといふ有樣である。殊に奇とすべきは此の電車が通じてから毎日遊山の爲めに乘るもの引きも切らず、朝から晩まで長の一日何用事もないのに同じ處を幾度となく乘り廻して爲めに身代を潰したものもありと、朝鮮人を説明する。好材料である。斯る懶惰の人間であるから其の生活狀態も實にお話にはならないほど不潔なもので、家屋といへば極々矮陋な豚小屋同樣、冬は寒氣の烈しい爲めは暖床と稱して床下に枯草を燒いて溫度を通じ床はタ、キになつて荒莚が敷いてある。室内は寒中でもオンドルの暖氣の爲めに蚤、虱、蠅など暑中同樣に發生する、殊にピンデイ即ち南京虫の襲擊は恐ろしい、壁は大抵荒壁のまゝであるが稍々上等の家屋は壁に油紙を貼つてある。

尤もこれは多くは田舍の農民の家屋であるが、大都會の紳士の邸宅は割合に立派である。併し總體からいふと朝鮮の家屋はまづ豚小屋のやうに見ゆるのであるが、これに反して衣服の奇麗で、且つ服裝の發達して居る事は寧ろ異數である、朝鮮人は日本人の如く、衣服に縞物を一切用ひない、いつれも無地で、多くは白色であるが中には紫、赤、淡紅、黄、水色などいろいろ好みがあつて、浮織の模樣のついたものもある、其他は絹、木綿、麻、で多くは支那から輸入したものである、貴人は多くモウシヨータンといふ綀絹を着る、未婚の婦人や、小供の上衣は洋服のチヨツキ位あつて下は裳で頗る長い、いづれも簡裡で袂がないから巾着のやうな小袋を澤山腰の廻りにぶら下げてあつて、化粧道具や、煙草などを入れて居る、又朝鮮婦人は奇態に衣服の洗濯をする風習で婦人が一生の仕事といふのは只衣服の洗濯に過ぎないかと思はるゝばかり、如何なる日でも晴天であれば河畔に五人十人の婦が居て洗濯して居らない事はない、そうして其洗つた衣服は乾して糊をつけ、鏝をあて、裁縫するのである。又朝鮮婦人は裁縫術に長じて居て手縫ではあるけれども恰も

ミシンで縫ふたやうに針の目のこまかい事は迚も日本人の及ぶ處ろでない。

次には食物である朝鮮人の食事は支那人と同樣一日二食と定めてある、即ち朝の九時過に朝飯晩の五時頃に晩食する其の代り非常に大食で大きな黄銅の茶碗に山盛して三杯位も食する、一食が日本人の殆んど二度分位の分量がある。主食物は日本と同樣米でそれに牛豚、野菜、干魚いろ〳〵の副食物がある、料理は割合に進歩して居る、只不潔を厭はないのは閉口である、牛の頭を大釜で煮込んで、其汁に唐がらしを散して啜る、又牛の臟腑を蒸してこれに鹽をつけて食する、腸でも爪でも構はず一切煮込にして食ふのであるが食膳には必らず蒜を刻んでこれを振かけて食ふのである、食後に茶を飲むといふ事はないが漬物はある、これは沈菜といつて一寸風味のあるものであるが、この漬物は朝鮮では贅澤品としてある、又赤豆のもやしを油にいためて食ふ、これが中々美味である。朝鮮人は食事の際箸をあまり使はない、專ら匙で食ふ、箸は只菜を撮み取る位である。兎に角朝鮮人は食物衣服共に日本人よりは進歩して居る樣である。



朝鮮國王の玉座

朝鮮は薪炭に乏しい國である、乏しいといふよりは殆んど皆無といつてよい位であるから、燃料は大抵枯草や藁、乃至は松葉のやうなものである、朝夕の飯を炊くのに竈へ枯艸をくべると其の煙がオンドルに通じて飯が出來ると同時に室内が暖まるのである。

こゝに不潔人種の尤も厭ふべき風習は釜の萬用法で

ある、飯を焚き、汁を煮る其の釜で汚れた衣服を煮る、時としては不潔物の附着してゐる事があつても平氣で之を煮るのである、それから料理をするのに箸で挾むといふ事をせず何でも手づかみにする、又煮物をするのに杓子で味を吸ふて試て、其吸ひ餘しを釜の中へ入るので、見て居る者の目に甚だしく不快を感せしめる。

次に尤も不快を感ずるものは便所である、朝鮮人は客の前でも平氣で尿壺を置いて尿をするので其尿壺を其儘客の前へ置いてそれへ唾をしたり煙艸をハタいたりする、風習とは言ひながら、人をして奇異の感を抱かしむるものである。

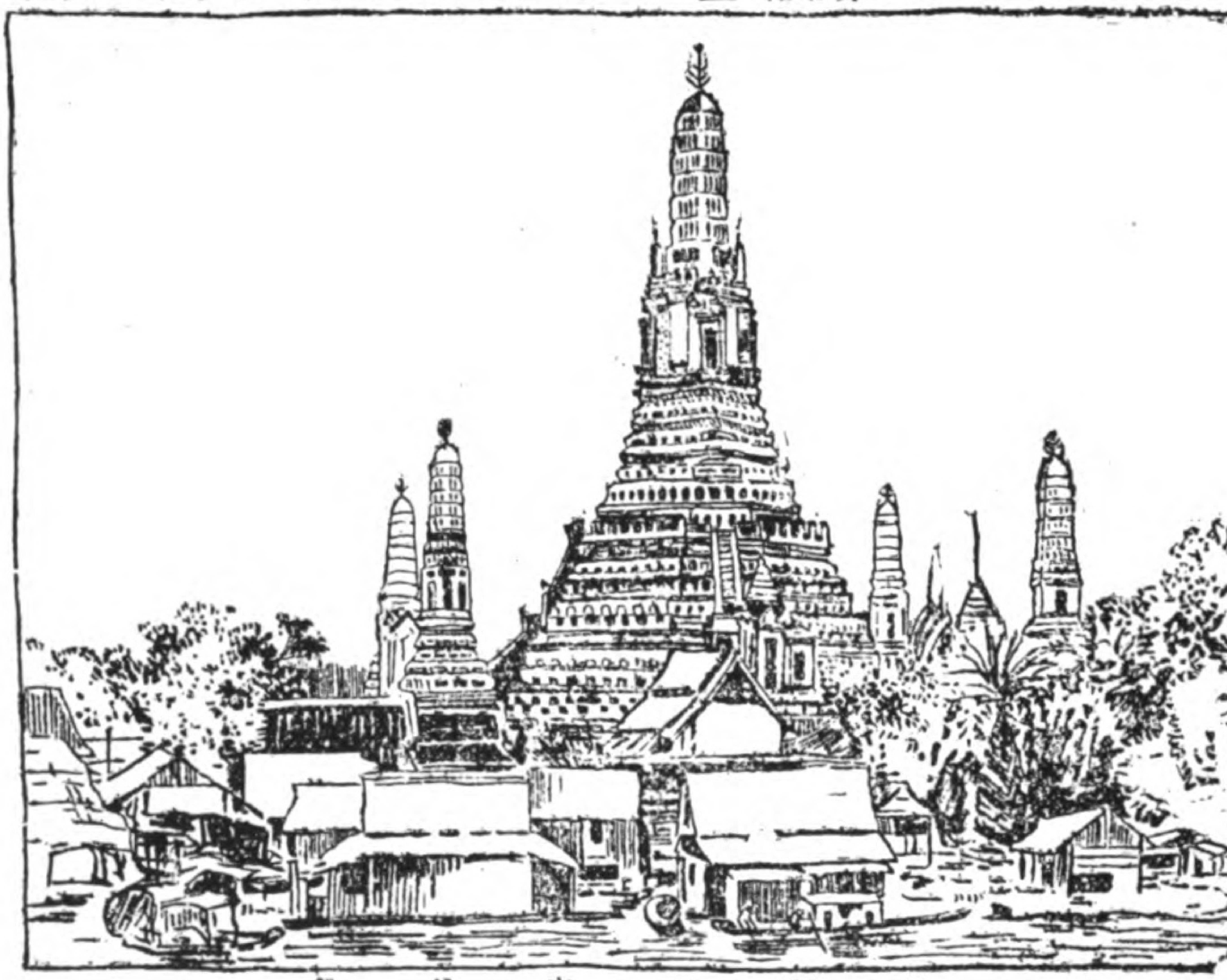
朝鮮の婦人は外客に接する事を許されない、けれど最下等の婦人になれば勞働を執らねばならぬから臆面なく市中を往來する、彼等は器物を運ぶのに何れも頭へ載せて行くこれは、中々熟練したもので、朝夕の水汲み、市へ持ち出す穀物の運搬すべて頭上で擔ぐ、中々重量のものであるが彼等は上手にこれを載せて決して落す樣な事はない。（漫遊者某）

多妻國暹羅風俗

橄欖樹下の人

▲家屋の構造　一般に住みよく出來て居つて、北緯十度から二十三度の間即ち全く熱帶に位して居つて、三月の始めから炎暑燒くが如く夜になつても辛抱が出來ない程の事が珍らしくないから、一般に風通しもよく明り窓は廣く切つて在つて、藁又は籐編みの壁代、藁葺屋根至つて凌ぎよく出來て居る。分けて盤谷府などになるとメナン河を挾んで居つて、市內の交通も大概船を用ゐ、河岸に臨んだ家で家根付のカノイ船又は端艇の無い家は無い位であるので、晝の暑氣も割合に凌ぎよく、夜は殊更淸凉愛すべきものが無いでも無い、此等河岸に接近せる家々は床下を高くし、棧橋兼階段ともいふべき梯子が水上から各戸の入口に懸つて居る下等社界の家屋になると居間とも客間共單に一間で、入口も一方といふ犬小舍同然なのが多い。寺院殿堂宮殿官衙等の重なる建造物は重に盤谷府に集つて居つて

市の美觀を添え特に寺院殿堂には目を驚すべきものも少くない。此外にフローチング、ポピレーションヨン即ち流動民といふのがある。此等の住民は家根付のカノイや屋形船（船の上に小家屋を組立てしもの）等に起臥して居つて、各自の商賣又は仕事の都合、扨ては他に住み心のよい處を見出しなどする時には何時でも水上を流れ出して、蝸牛の轉宅よりも餘程呑氣な生活をして居る。此等住民の詳密なる計數は得る事が出來ないが盤谷の住



盤谷府の高塔

民を三十萬から四十萬の間と假定して、其半數は確に水上に生活し、其內の五萬人は上述の如く始終流れ廻つて所定めず世渡りをして居る。夫れ故此運河町の繁昌は實に夥しく、各商店は皆川に面して見世を張り、各商店共河の方に張出し家根がしてあつて又棧橋に出來て居るから通り掛りの船は此處へ繫留して買物をするやうになつて居る。其商店の多くはといふと支那の廣東人で彼等は總住民の三分の一を占めて居るといふに至つては驚かざるを得無い。

▲寺院と宗教　殿塔、暹羅語でワットは盤谷に於ける一偉觀で、中にもフラコ寺の如き其第一に位し、棟數六棟宮廷廓内に在るもの、次はチエン寺の塔、フラコ寺とは河を隔てゝ、巍然圓塔碧空を磨し綠、黃、鳶色の家根の如き到底寫眞には顯はし難き美觀である。勿論盛に行はれて居るのは佛教で、國王之れを信仰し、王弟の如きは佛僧である、但し國王は佛教信者なるも、國民の信教に對しては自由を與へ、他教たりとも其領土内に於て迫害を加ふる事を禁じてある。

▲一夫多妻の國　此國では一夫多妻の制を免してある國王に正嬪といふものが左右二人あつて其他愛妾と言つては餘り言葉が卑俗になるが則ち後宮といふのが百乃至千といふ數に及ぶ事があつて、皆同國貴族の娘なのである。先づ皇太子が五位に即くと貴族は爭つて美しい娘を獻上すると、ナンハム即ち禁娘と稱して宮中から外出する事を禁じられる、先王の頃までは其制規が嚴格であつたが、今王に至つて其羈束も餘程緩かになつた、といつても、一々外出するには許可を受けての上で無ければ外出が出來無い、夫れも度々願ひ出るといふ事は勿論出來ない、其處で此等多數の宮嬪が皆遊んで居るかといふのに、我德川時代の制度と同じく種々の役割(ラシャカン)がしてあるから、なか〳〵役に依つては忙しく、又重い責任を持つて居る。又左右兩妃となると容易に其姿を見る事も出來ない、祭典でもある時は稀に姿を見せる位である、參内する時でも締切つた轎輿の中に居るといふのであるから大した窮屈なものだ。正妃に立つのは王族中最も血緣の近いものを撰び、其他の所謂粉黛となると獻上物もあれば國王の御目に留つて拔擢されるのもある、拔擢されたのも獻上物も等しく宮中に召されナンハムとして必要なる種々の教育を受ける事になつて居る。又左右兩妃冊立の式といふのは、洗淨式を用ゐる、此式は先づ高貴なる王家の加持僧が先づ或木の葉を取つて之を水に浸して式に取掛る式場は新に六尺の高サ三段の壇を築き其最上壇に皇妃の御座所が出來る、王妃となるべき婦人は此處に座つて、加持僧が木の葉を水に浸し祈禱を

する間待つて居る、其淸淨の水を僧が冠の上、及び王妃たるべき婦人に注ぎかけて、其婦人の身にある處の汚れを拂ひ、病根を斷つといふで、餘り風習としても面白くない式である。王統を繼ぐべき皇太子たるを得るは、唯だ此左右兩妃の儲出に限つて他の後宮連の生んだ處の子は此特權を得る事が出來無い、國王が此通であるから少し地位あり資財あるものにして一夫一婦を守つて居るものは至つて尠い。

▲白象の大幸福　暹羅といへば誰も直に白象を聯想する、此白象の形は國旗にも染拔かれ、政府の官印にも彫付けられてある。斯く白象の珍重され佛教信徒には靈佛として拜せらるゝのは如何なる理由であるかといふに、第一白象は佛と靈氣相通ずるものなりといふ事佛は時に白色の動物として其姿を現ずるといふ事（故に象のみならず白色の猿白色の鳩其他白色の生物皆尊崇せられぬはない、本邦の俗白蛇を拜するも同様の迷想より來たのであらう）、白象の出る時は天下泰平にして王室の繁榮を來たし戰ありとも必ず大勝利を得る事其他種々の迷信が附隨して居るのだ。其迷想の中で死んだ國王とか大豪傑とかゞ生れ變つて白象となるといふ話などは餘程勢力あるらしい。フランク、ヴインセントは白象に關して、生きて居る間は靈佛として崇められ、其死は國家の大不幸なりと安南以外の印度支那人に信ぜらるゝ旨を記し。婆羅門經中ラマザナ中には全世界の四分の一の大きさの象があつて、其頭の上へ此地球を載せ、上には山もあり森もあり、種々の國無數の都府あり、此カクーザ（虛空象！）が疲れ休めに頭を動かすと大地震が起る、ラマは此象を恐れてパタラ（奈落）へ逃込んだ、東から大地を掘つて逃げた處が南へ突拔けた、すると此處にもムハプドマといふ大象が居て大きさも前のと同様であつた、ヲマは之を見て吃驚して西へ大地を掘つて逃げた處が、此處にもソーマヌカといふ同じ大きさの大象が居た、北へ出て見ると此處には雪白のブトラといふ大象が居たといふやうな事が言つてある。

白象及赤斑點のある象は實に稀有で、千三百五十二

年間即ち西暦五百十五年から千八百六十七年迄の間に唯廿四匹しか捕られなかつた、五十六年目に一匹といふ割合で最近に白象を捕へたのは千八百八十五年であつた、之れを捕獲者から國王に報ずると、王は忽ち發見捕獲者と其九族、其地方民に金を惠み、特に捕獲者の如き國王より金子千弗を賜り一生の課税を免せられ一躍して大富豪になり盤谷府に之れを連れて來る役人もさまぐ\の恩賜に預る事になる。象は今までの荒縄に引返へて唐紅の紅紐を付けられ、晝は美しき鳥の羽にて造られた團扇で其蠅を拂はれ、夜になると縫模樣のある絹緣の蚊幮を垂れて蚊を防ぎ都へ此象を送られる、船が出來る、立派な屋根が其上に出來る恰も王宮の如き飾付をなし、金糸銀糸もて刺繡せる帳を垂れて肅々としてメナン河を下る、沿岸の人民は歡呼して之れを送迎する、盤谷府に達すれば、國王群臣之を迎へて王宮内の特に築造せる象の住所へ送込むと。王の加持僧は白象の神靈上に於ける要求を知るべき役目を命せられ、醫博士は其肉體上の健康を診察する、金銀の皿に其欲する處の飮食物を盛りて供へられ、一々王族の待遇を受ける。若し此白象が死ぬと其式は國王王妃の葬儀と同樣に擧行され、名木の柩が出來るが此柩斗りでも千弗からの値がある。火葬後三日其儘とし、三日後灰を貴重なる容器へ收めて王家の墳塋中に葬るのだ暹羅の象は實に幸福なものである。

世界各國の庖厨

西京の着倒れ、東京の食倒れといづれの國にも其國の風習に特種の現象あるものなり、その特徵によつて各國の事情を玩味するは極めて趣味あることなり、されど世界各國の生活狀態を一目の下に列記せんこと元より企て及ぶべきにあらざれば、こゝには只其の庖厨の異同に就て聊か穿鑿する處あらんとす。タトヱば同じ酒類に就ても、英國のキスキイ、佛國の葡萄酒、獨逸のビール、露西亞のオーツカと、各々其の殊なる處ろを記さば、其の國々の生活狀態も自然に槪觀さるべきなり。

△佛蘭西（美味）

佛國は歐洲隨一好尙の源泉として許されたるほどありて其庖厨は中々鹽梅の妙を極めたり食物は重に麵麭肉類、及び野菜にしてその麵麭は日本製のものよりも味よろしくその形は圓きあり方形なるあり、長さ五六尺に及べるものあり、多くは牛酪を附することなく他の副食物を相手に食する例なり、肉類は牛、羊最も多く豚肉、兎肉あり、鳥魚の肉を加へ用ふること我が國に同じ、野菜は大根、紅蘿蔔を始めとして概ねあらざるなく果物又多く其味他國の産に勝れたり、兎に角佛國は天產物潤澤にして庖厨を賑はす材料極めて多し、食事は概ね三度にして家族一卓に集り、同時に食するを常とし、食事中は成可く語り賑ふを喜ぶ風なり佛國の料理はその美味なる點に於て世界に有名なれども之れは單に贅澤なる社會の一部を喜ばしむるに止まり概していへば社會一般に節儉にして材料の經濟には最も意を用ひ猥りに食品を浪費する樣の事なく殊に地方部舍人の生活は儉薄にして毫も肉食國と稱すべき價値なく、褐色の麵麭、林檎の汁、豚の脂肪等を以て珍味となせり。

又葡萄酒は此の國特有の飲料なれば最も多く用ひられ、その他麥酒、茶、珈琲の飲料も又少からず用ひらる、兎に角佛國は巴里其他二三の大都會に就きてこそ贅澤にもあれ、華奢にもあれ、隨つて全歐洲好尙流行の中心として見らるゝも佛國全體よりいへば、其生活は極めて質素儉樸にして、勤儉貯蓄の專らなる、支那人と比較して大なる相違なき程なり。

△露西亞（喫茶的）

露國の庖厨を一と口にいへば都會の豪華、田舍の窮すとも稱すべし、世界に貧乏なる國民多しといへども恐らく露西亞の田舍小民ほど哀れ貧乏なる有樣なるはあらじ、まづ彼等の常食は裸麥より製したる黑麵麭に瓜漬、鹽魚、乾茸等の副食物にして僅かに一週間に一兩度の肉類を得るに過ぎざるなり、尤も南方露西亞に

至れば土地肥へて產物も豐かなれば黑パンの外に白パンを用ひ肉を取ることも多し、飮料は茶を第一とし、食時には勿論其他にも常に用ひられ如何なる貧人も眞鍮の茶釜を備へざるなし、これを「サモアル」といふ露西亞人の家に入つて「サモアル」あらざれば一家の團欒なきものとして非常に寂寞を感ずるなり、而して其茶に二種あり一は紅茶にして主として上流社會の需用に應ず、一は磚茶にして多く下等社會に用ひらる、いづれも支那產なり、其飮み方は湯に浸し、或は珈琲、砂糖、橙等を加へて飮む、故に日本の如く茶の眞味を知らざるなり、斯く茶は多く用ひらるゝもその貧しき食物を助けて烈寒に適する力なければ「ウオッカ」と稱する熾烈なる酒類は到る處ろに飮用せらる、右の外菓物菓子を用ふる事意外に多く中にも菓物は冬季暖熱なる室內にありて其の逆上を治する淸冷劑なりといふ、露國の食事は朝十時、晝二時、晩八時を普通とす、中にも優長なる人は朝十一時に起きて茶を飮み二時に始めて朝餐を採り、四時再び茶を飮み、八時晚餐を爲し、十時頃三度目の茶を飮み、十二時に至りて夜食を爲すもの珍らしからず、又普通料理の献立には「スープ」より直ちに肉を出しそれより、魚、鳥、菓子又は菓物を出すの例なり。

△獨逸（賀素）

獨逸は他の文明國に比較して料理割烹といふ事にあまり心を用ひざる方なり、一般の食料は麵麭、牛、豚、魚、鳥の肉、牛乳、牛酪、野菜等なるは他國と異ならざれどその材料は潤澤ならず、且つ料理法は極めて拙なり、今獨逸中等社會の食事に就て言はんに朝飯は八時より九時までの間として珈琲、牛乳、麵麭、牛酪などにて晝飯は一時乃至二時にてスープ、魚類、肉類、菓子、菓物、珈琲等にて一日中尤も盛饌なり、晚は七時より八時の間にして「ハム」冷肉、乾酪等すべて冷かなるものなり、而してこの國の麥酒を用ふるは猶佛國の葡萄酒を用ふるがごとく、中食、晚食ともに用ふ、中等以下の食膳は黑麵麭、野菜又は甘薯等を常食とし

時に豚、牛肉の一片を飯ふに過ぎず、されど其の缺乏を補ふて餘りあるは麥酒の飲用なり、麥酒は獨逸特有の飲料にして一ヶ年全國の消費額實に十五億圓に達し而して其量は平均一人に付六斗六升餘に上るといふ、殊に驚ろくべきは婦人小兒より下婢輩に至るまで之を當然の飲み物として怪しまざるの風習なり。

△英　國（質實）

英國の庖厨を仔細に點檢する時は佛國の下、獨逸の上にあるがごとし、この國の食卓に用ひらるゝ麵包は定ね切パンにして佛國のもの〻如く味よろしからず、また獨逸流の黑麵包をも食用せり、副食物は鳥獸、魚肉を主とし、野菜菓物を副とすること自餘の各國に異なる處ろなし、一般の料理は佛國に及ばざれども又特有の長所あり、酒は「ウヰスキー」又は「ブランデー」を主とし麥酒之に次ぐ「ウヰスキー」は精酒分多きが上に英國人の飲酒量は他國人に比して甚だしく多大なるが故に勞働社會の如きに至りては其の爲めに身を誤るもの多しといふ。

△米　國（潤澤）

米國の庖厨は世界一の潤澤を以て聞こへたりこれその國の新開地にして物產豐富の致す處ろなるべし、某學者の說に米國の庖厨にて日々殘物として拋擲する物を以て支那人を養ふ時は優に五六千萬人を生活せしめ得べしといふ以て其一斑を知るべし、食物は肉、麵包牛乳、野菜を常食とし、殊に肉類は廉價なれば之を用ふる事多く平均一人の消費高は英人の二倍、佛獨人の四倍に及べりといふ。

△印　度（天然物）

印度人は元來西洋人種と同根なるアリアン人種なれども食事上の習慣及び其の內容は東洋的なり、卽ち其の庖厨に就て見るに彼等の常食は日本人、支那人と同じく穀物にして專ら米を食ふ、他に小麥、豆、及び稷を用ふ、而して是等の穀物は日本の如く單に炊ぐにあ

らずして多くは團子の形となして食膳に供す。故に臼と杵とは毎家必らず之を備ふ、穀類の外に菓物野菜及び天生の美味なる食物夥多あり、是等は直ちに取つて食ふべく調理割烹を用ふれば却てその風味を損ずるがごとし、又この國は宗教の制裁幷に氣候の影響によりて肉類を取ること極めて稀にして、彼の波羅門の種姓にあるものは殆んど之を食ふことゝなし、飲料に茶、牛乳等にて酒も又宗禁なれば食膳には之を用ふる事なし又食事は一般に午前と薄暮との二回にして上流の者は諸種の副食物を供ふれども下流の者は只疎末なる雜飯の數椀を傾くるに過ぎざるなり、又食事を爲すに歐米各國は「ナイフ」「肉叉」を以て、日本、支那は箸を以てするに反し、印度と土耳其は指を以てす。是れやゝ蠻風の嫌あるを免かれざるべし。

△支　那　（二食國）

支那は大國なり、其面積よりいふも、其人口よりいふも、歐州大陸全體と比較して遙かに大なれば、支那の庖厨狀態を一概にいふ事能はざれども其内自から全國に通じて一貫したる特色あり、まづ日常の食物を言はんに北方及び滿洲にありては麥、高粱を主とし多くは粉にひき、團子となし、或は脂を塗りて之を焙り、或は蒸し温めて食す、南方支那にては米を主とし炊ぎて飯となす、されど一般を通じて下等の農民は麥高粱豆、粟等雜穀、及び蕃藷の類をその常食となせり、副食物は獸肉と野菜とにして魚肉は海岸地方に於て多く用ひらる。

支那人の食事は一般に二食にして朝は十時頃に食し晩は四時に食す、朝飯には肉類多く晩飯は淡泊なり、而して中等以上の生活をなすものは點心と稱して朝八時と午後の二時頃に少許の食物を取る、點心は北方にては多く餅菓と茶とを用ひ南方には粥を用ふること多し、次に料理法を言はんに支那人は一般に脂肪の多きを好み殊に豚肉は殆んど彼等の常食品といふべく我邦人が淡泊を旨とする鰹魚節などを用ふる處には必らず豚の脂肪を調和し、其の濃厚なるを喜べり、又煮沸せ

ざるもの及び寒冷なるものを嫌ふの風習にて如何なる貧民にても生水を飲むことなく、又如何なる暑熱の日と雖も熱氣蒸騰するものにあらざれば、食せず、而して献立及び料理は甚だ巧みにして廉價なる數種の材料より夥多の食菜を作り殆んど些の廢物を止めず、一度の食事に於て中人以上は常にその食卓に七八種品を供へ一汁一菜といふが如き麁末な膳部は絶へて見ることなく、從つて宴會などの盛饌に於ては山海の珍味數十種を配列すること普通なり、されども貧賤の者に至りては都市に住むものも猶一飯一菜にして甚だしきは一椀の雜炊に舌を鳴らせり、又料理の種類には北京料理南京料理、廣東料理などいひ、名々其特徴あり、就中廣東は古くより外國と交はりたればよく西洋の料理法と混和して日本人の口に適すといふ、而して飲料は專ら茶にして、酒は食卓上に供するもの多からず。

△朝鮮（滋養的）

韓國は貧弱にして其人民は無氣力の譏を免かれざれ共、其庖厨は割合に進歩したるものにて、お茶づけ香物の日本人の食物よりも衛生的滋養的に適へるが如し、韓國の常食は米を第一とし、貧民にあつては麥又は稗を以て是を補ふ、副食物は肉類及び蔬菜にして肉は豚、牛、犬、魚等を用ふること多く獸肉は是を漬物又は脯肉として貯へ置き必要の時出して用ふ、又一般に韓人は食物に韮、蒜を混じ、胡椒にて味を附ける風習なり只料理法の不潔なるは甚だ厭ふべし、野菜は多く瓜、蘿のごときは生にて食ひ、生漬物となす、次に飲料は米麥の煮汁を用ひやゝ高貴の者は蜜又は茶を用ゆ、酒は一般民家に醸造する物を用ゆ、味ひ酸味を帶び且つ惡臭を帶びて甚だしく野蠻の物なり。

婦人の枕

▲女子の枕　寢具の改良中最も必要なるは婦人の枕なるが在來の者は生理學上非常に有害にして又婦人が生涯苦痛とする處なりしも社會因習の久しき結髮の關係より餘儀なくせられ居りしに束髮の橫行以來は自然に小枕の必要を無くしたる爲め近頃は殆ど男兒の枕に等しきものを在來の臺の上に載する事が流行し來りたるは頗る有益なる風潮と申すべし因みに記す西洋婦人の枕は一般に四角形様の柔かき毛又は綿を容れたるものゝ上に洗濯の便を圖りて蔽ひを掛けたるものなり。

支那人の生活

支那人は餘程儉約な人種であるから日本人から一寸見ると誠に貧乏な吝嗇な生活しか成し得ぬものと思ふであらうが、彼等は決して見掛ほど貧乏ではない、金を持つて居てもそれを遣はないのが支那人である、金がなくても遣はうといふとするのが日本人である、日本人は懐ろに金がなくてもあるやうな顔をする、之に反して支那人は有つてもない樣な風をして居るこれが双方の氣象の反對である、タトエば彼の外國商館の番頭を見よ、日本の商館番頭は無一文が多いけれども、支那の番頭の中には十萬圓二十萬圓の資産を持つてゐるものがある、それで主人に金を貸す、只は貸さない、利子を取る、又彼の大道の食物商人、日本でいへば、路傍の露店に大福餅や、饂飩を賣つてゐるやうな者の中にも三萬や五萬の身代のものがある、けれども見掛は非常にお粗末で日本人から見ると如何にも貧臭いが支那人はそれに甘んじて金を持つてゐる、日本で五萬なり十萬なりの金を持つてゐる人で番頭手代になる人があらうか、多くはお手車でマニラの卷煙草を咥へ、パナマの帽子をかぶつて意氣揚々として居るではないか、それ丈の相違が支那人と日本人との間にある、それでいつも支那へ視察に行つた人の目に支那人がうつるとどうも支那人は貧乏だ、といふのは未だ支那人の眞相を知らぬ人である、又支那人は紙卷煙草も日本製のものを購つて呑むけれども、決して一と袋は購はない、又燐寸も一と箱は購はない、空箱を持つて行つて十本なり二十本なり買つて歸る一方からいふと紙卷煙草を一と箱買はぬ貧乏人と思ふか知られどそれは決してさうでない、紙卷煙草を何本も持つてゐるとどうしても無駄に喫ふ、けれども一本づゝ買ふと餘程喫みたい時でなくては喫まぬ、即ち儉約から起つたのである、それから又マッチも同樣で、澤山あれば無駄に燈すが少なければ極く入用の時でなければ火をともさぬ、その位だから火つきが能くないと承知せぬ。一本のマッチでも日本人のやうに、ヒョイとつけてポント捨るやうな事はしない、一本付ければ三人も四人も寄つて煙草を喫むのが支那人の風習である、その位つましい人間で何事にも無駄はない、であるから日々の生活なども日本の下等社會よりもズット簡單な生活をして、居るがこれとても決して金のない譯ではなくて、全く節儉、經濟の理から來て居る、一例を擧げると支那の下等社會の多く住んで居る支那街に行くと、湯を賣つて居る家がある、毎日白湯を湧かして賣つて居る、勞働者はいづれも朝出て晩に歸るのであるが、彼等は歸つて來て飯を食ふにも火を熾すにも及ばぬ藥罐を提げて一文なり二文なり持つて行くと湯が買つて來られるから、それでお茶を入れて茶漬が食はれる、故に部屋に火鉢もなければ炭取もないといふ有樣又なくても濟むのである、日本人のやうに無駄な火を熾してチン〳〵お湯を湧かして置くにも及ばない、斯る簡單な生活であるけれども、金は案外に貯て居る、故に支那人は吝嗇だ、貧乏だといふのは根本的の誤である。



世界家庭觀

晩襟子

日本

定義 主人は妻を奴婢の如くに扱へども、長火鉢に差向ひの内幕を覗けば、妻は主人を奴僕の如くに扱ふとぞ

さア理由が譯らぬ事になつたぞ、そんな馬鹿氣た定義があるものかとなのたまひそ、實際日本中流の家庭と云つば、鳥渡夕方のお買物にも、旦那様は一足お先きへ、いゝ懐ろ手のぶら〳〵と打たせ給へば、奥様は少し後れて、一子小太郎をせッたら負ひの、大きな包を後ろへぶら下げ、おまけに旦那さまの洋杖まで持たせられて、えッちらおつちらお歩行になつては居るが、さアお宅の格子を一足潜ると、「おうま草臥れた、貴郎の足が早いんですもの、さア〳〵坊は阿父様の方へお出で、母ちやんは用があります」と火鉢の前へつくなんだら、それッ限り、暫らくは此處安本龜八の作とあつて、活人畫の本家と云はねばかり、旦那様はさうと知つても、今度は小太郎を横抱きの、椽側を二三度うろ〳〵「どうだえ、小便が出さうだが、もう手が明いたかね」とはなんぼう難有き志ならずや、然るを妻君ちッとも臆せず、「忙しないぢやありませんかね、今抱いたばかりですにね、小便が出さうならやつて下さいな、儂もう草臥れたんですもの」と矢頭を計つた遠

射砲の、一たまりもなく、「さうか〳〵」と仰るなり。其意氣地のなさ加減は横町の莫迦の如しと雖も、流行の脊廣に縞の洋袴、茄子の上へ墨をかけて、其上へまた鏝をあてたやうな靴を召され、官廳會社の椅子に凭り給ふ時んば、儼然として、下僚屬官を叱り飛し、威氣天を呑むの慨ありとは變れば變るものなりけるよ。さればこそ、歴史の裏には女あり、八島壇の浦の戰にも、義經は九艘飛の苦を嘗め給ひたれ。女ならでは明けぬ國柄とていづれの家庭もこの厄難はありと見ゆ災難は妻難に通す、女子と小人は養ひ難しとの嘆、あながち無理とも思へぬなり。「ね、いゝでせう明日白木屋へ行きますわ、お隣の奥さんだつて持つてらッしやるぢやありませんか、無いと恥だわ、白木屋に安い見切物が出たつて云ひますもの」「そりやア惡いとは云はんがね、今月の晦日まで待つてくれないか、この二十日頃に少し入る事もあるしするからね」とは俺くまでも下手に組んだ相撲と知るべし。「入るからッて〳〵、何にさう入るんでせう、また徒らなくお酒を飲んぢまはうと思つて、ぢやアようござんす、入りません、裸で居ますから、お客があつたつて裸で御挨拶に出るからいゝ」昔は云へり裸で道中がなるものかと、裸で挨拶に出るとあつては印度の禮式にも見えぬ圖なれば、「何もさう云はなくつてもいゝぢやないか、ぢやア買つて來るさ、全體若干のものなのだえ」と稍好望なり「いくらつて、四圓出ませんわ、あれ迄から買いたいと思つてましたの」「ふうん」とばかり、これにて旦那樣絶望の氣を含めり。「嬉しいわ、もうあれがあれば此夏は何にも入らないのよ」と儲け役は小太郎よ、直ちに乳にありつくべし、四圓の金は小なりとも、旦那樣の氣苦勞それ如何ぞや、二十日には宴會もあるものを思遣りなき妻の憎さよと思へど、執拗き怒りに觸れなば、それこそ二三日は辨當の菜も梅干に限らるゝ恐れあれば只、「はい〳〵」と云ふがまゝなる家庭には、表面こそ浪風立たね、足搔隙なき水禽の一皮むけばこんなものとぞ。

英國

定義　紳士と淑女、伉儷睦ましく、飽くまでも品性問題、シルクハットの冠り様で直ぐに離縁と云ふ事なり。

娘の時代から風采堂々として氣高い男子を好むとある國柄とて、紳士淑女の結婚後も親しき中に禮儀を備へ、女の方で「遊ばせ」と云へば、男の方でも呼捨にするやうな事はなく「ミルリーさん」と尊んで、何處の會にも、散歩にも、雌雄離れぬ鴛鴦の、人も羨むばかりとぞ。「もし貴郎、明日倫敦座へ行つて見やうではございませんか、今度の劇は珍らしくハプトマンの作だつて申しますから、屹度面白いだらうと思ひますの、確か『ハンネル』だつたかと思ひますが、貴郎未だ御覽になりませんつて、原作はドリームポエムでお讀みになつたんでせう、あのそれ、酷い嵐の晩に村の教師が不幸な娘の身投げを助けて樵夫小屋へ連れて來て、其娘が落入るまで、神樣が出たり、惡魔が出たり、望みに欣び、悶へに泣くつて、隨分哀れですわね、あの初めの樵夫小屋のお婆さんの祈りが面白くつてよ、外は大變な嵐で、ピユー〳〵つて風が吹いて居る小さな樵夫部屋に、世捨て人のお婆さんが祈つて居るあの祈りの唄は、さう〳〵

桃源境裡風塵なく。落花流水悠々たり（一）



Abide with us in mercy,
Lord Jesus Christ, we prey,
That henceforth we may never-

てのですね、眞個に彼の幕は凄いんですもの」「ミルリーさんは夢幻歌劇のやうなものが好きかね、私はやつぱりあゝ云ふ變つた性のものよりも、シエキスピアーや、ユーゴーの作の方が面白いと思ふ。ユーゴーの「ルア、ブラー」あれは私が劇を見た初めだつたが、未だに面白く感じて居ますよ、什麼もハプトマンやズーデルマンの作は餘り大き過ぎて、私のやうなものには面白くありませんね」「あら、貴郎は未だ眞個に劇を御覽にならないからですわ、明日是非一緒に行つて頂戴、乾度面白いつて被仰るに違ひない」「いや此間イプセンの『リツルエヨルフ』と云ふ劇を見たが根つから面白くなかつたよ」「あら、あれと今度のとは劇の性質がまるで違つてるんですもの、今度のは是非見て頂戴」と無理に引張り出して、五弗の場所も紳士の體面を汚すとあつて第一等のお客樣、歸りは公園の共同椅子に劇評の沈ひざらひ、意見は假令異なるとも、いがみ合ふやうな事はなく、手を携へての散歩も舞踏にまがひたり。「ねえだからあゝ云ふ劇を御覽ぢやいつて申ますの儂は信じますわ、これから貴郎は儂の云ふ事は乾度反對なさいますまいと、だつてあれ程ユーゴーを主張なすつた貴郎が、あれをいゝつてお譽めになるんですもの、眞個に貴郎は紳郎ですわね」人目の關も何憚からうと云つたやうな足どりして、直ぐに接吻、これは紳士にあるまじきとは日本の事、英國では愛情の表示と知るべし、まかり間違つて足でも踏んだら、それこそ紳士の體面を與向に振かざして「あゝ見損つた〳〵、そんな方ぢやアないと思つた、儂断然結婚を取消しますわ」恐ろしや〳〵

佛蘭西

【定評】華美なる國柄だけ家庭も多くは衒華にして實伴はず、中流社會には隨分突飛な家庭をなすものありとぞ。

男ありけり。いく度妻を代へて見ても、痩ぎすの女ばかり、雲岳女史に似たるをと思へど、代へれば代へる程痩せたるに當りて、失望云はん方なく、有繫に思ひ煩ひたり。「あゝ什麼したと云ふのだらうな、幾度妻を代へて見ても、來るやつも〳〵痩せたのばかり、世間には隨分肥つた女も多いのだが、所詮肥運に拙ないのかも知れん、よし〳〵もう人に賴んだりすることはない、公園へでも行つて探したら、思つた通りのが無いとも限らぬ」と一張羅のフロクコートに身を飾つて今日は女房の狩くらに、好き獲物こそござんなれと公園へは出掛けたり。さて共立椅子に腰打かけて、あれよこれよと見てあれば、これはまた思ひ通りの肥滿女ビール樽のやうな腹を抱へて、やがて歩行に堪へ兼ねしや、男のかけし共同椅子の半座を別けてドッカリと腰を下しぬ。待てば海路の日和もありとは實にこの事よ、いざゝらば當つて見ん、とまづ公園の景色を賞で次に四方八方の話に慰み、それとなく聞けば、天幸とや云ふべき、其女には夫なしとぞ、忽ち話は纏りたり。男の滿足云はん方なく、公園よりわが家へ還る途すがらも、女の手を曳き、腰を押し、情けの詞を掛けなどして、やがて家へ連れ還

父親「娘も今度いよ々々東京へ出すのぢや」(二)



り、長椅子を與へなどして、勞はりかしづく事世の常ならず、竹取の翁がかぐや姫を拾ひ擧げしも、洒落ではないが、かくやと思ふばかりなり。「あゝ能く來てくれた、いやこれまでお前のやうな女を探しぬいて居たのだが、什麼も思ふ壺に箝るのがなかつたのでな、しかしまア袖振合ふも多少の緣、これから世話を賴みますぞ」魂宇頂天外に飛びもやせん、大切の〳〵シャンパンも惜氣なく拔かるれば、取つて置きのバナ、ケーク、これが西洋の婚禮かと思へば大きな間違なり。「ところで先の女房の着物も殘つて居るから、その儘では汗臭い、着換へては什麼かね」と云ふ御宣託、唯々として着換への樣子見るともなしに見て滿足、其體格の立派なる事、我朝の梅ケ谷も其處除けなり。いでやこれよりカーテンの中、今宵を交はす新枕の、多年の本望達するは此時と、思ひは同じ花嫁も、四海浪靜かならんとせしが、俄かに逆浪岸を嚙んで、「あいた、痛、痛！」と云ふ悲鳴の聲、何事ぞと周章てゝ男は、カーテンを手繰寄せ、手燭の光に能く見れば、妻は苦痛の絶頂なり。「おい、什麼したと云ふのだ、腹が痛いのか、腹か、腹か」と己が腹を抱へながら轉手古舞の大狼狽、「お醫師を呼んで下さいまし、早くドタトルをあの序に產婆を！」と云ふ聲の中、悲鳴に混つて聞ゆるものあり。「オギャー、オギャー、オギャー」とは異むべし花嫁のベットの中より產聲高く揚がるなり。やこいつは大變なものを脊負ひ込んだぞ、道理でいやに肥つてると思つた」と男は再び覗き込めば、大兵肥滿の大女はげつそりとして瘦せたる形、男は呆れて口あんぐり、暫らくものも云へざりき、と、

まうばさんの物語に記せるが、これぞ佛蘭西一流の大滑稽、極端なれども事實に近し。

獨逸

〔定義〕軍人でなければ夜の明けぬ國、軍人の出入なき家庭は、花に香を殺ぎしに似たりと。

「ソウ、オフト、ジー、カーム、エルシーン、ミールデー、ゲスタアルト、ソウ、リイプリヒ……」「能く勉

強が出來ますねと、坊ちやまが讀本の御勉強を妨げしは、伯爵家出入の若年士官なり。「やアヘルマンさんだね、今日は隊は什麼したの、姉さん家に居てよ」と坊ちやまは得意の色あり。「はア、僕の顏を見ると直ぐに姉さんを聯想して下さるは難有い、いや、今日は阿父樣にお話したい事があつて來たですが」とは眞赤の僞り、眞個はその姉君に逢ひたきなり。「阿父樣、阿父樣はまだ博士會からお返りないの、阿母さまもオペラへ被入つてお留守なんだけれど、姉さんだけ、あの、頭痛がするつて、お部屋に居るの、行つてごらんなさいと云ひ切つて、また「ソウ、オフト、ジー、カーム……」若年士官は兩手で腰を突張つて、押し出したかと思はれる高笑ひ。「ハ、、、、、、ソウ、オフト、ジー、カーム……君が來ませる折ごとには難有いな……シナウはうまい言を云つたものだ」翻へすやうに戸を排して、歩行むやカーペットを敷詰めある長廊下を、姉君の御部屋よりはピアノの音かすかに洩れたり。豚扉！「おはいり下さい」とんと開けて顏だけ先きへ。「相變らず御精が出ますな」「あら、ヘルマンさんいやな方ね、脅かしてさ、私今日本の六段の譜を習つて彈いてるけれど、什麼してもうまく合ひませんの、貴郎戰勝國の樂譜を御存じ？」とよもやこれのみは彈き得じ、とばかり乾と士官を打瞻る。「いや、日本の六段あれは面白い譜です、僕も少しはやりますが、あの日本通のケルチンから習つたです、よござんすか、そらテン、トヽ、チン、トン、テトヽン、テン、トン、テト、テト、テト、チントヽトン」「口ばつかりよ貴郎は、さア彈いて御覽なさい、私伺ひますわ」士官はピアノの座に直つて彈き始む、梁上の塵舞ふや否やは知らざるも、兎に角譜には合ひたらん。「ま、うまい事ね貴郎は眞個に御器用ね、繪もお書きになれば音樂の嗜みも深く被入るのですもの、誰だつて迷ひますわよ」「いや不可んです、眞個に習はんのですから、調子が亂暴で、殆ど音樂と云ふ事は出來んのです」「だつて其位お出來になれば結構だわ、さう云へば貴郎此間の舞踏會へ被入つて嘸面白かつたでせうね」「いやあ

の位面白い舞踏會はありませんでしたな、儂はミルレル伯の令孃とヴォルカを踊りました」、「あら、あのシユチエさんとヴォルカをお踊りなすつたんですつて、嘸お似合なさいましてせうね、乾度喝采をお博しになつたに違ひない」と稍嫉妬の眼を睜る。「ハヽヽヽ、喝采どころか大汗でしたよ」「あの方は少しお足の向が惡い方ですから、お踊悄くかつたでせうね」と徐々に冷かし始むるなり。「まつたくです、什麼も調子が合はんですよいやあの位骨の折れた事はありません」トンと戸を押して入來るは父なる伯爵なりしが、ヘルマンを見るより莞爾やかに長椅子へ凭れながら「ヘルマン君相變らず盛ぢやね、今日博士會へ行たが、君の噂さが出たぢや、君のやうな軍人の出入する家は幸福ぢやと云ふ事ぢや、ちと奢り給へ」とは飽くまで甘き父君ならずや、令孃は得意なり。「阿父様、今ヘルマンさんと日本の六段を浚つて居たんですわ、眞個にお上手なの」「一つ彈いて聞かせてくれんか」「儂不可ないんですもの……」と鼻を鳴らして、「ヘルマンさん一つ彈いて御覧なさいましよ、阿父様乾度吃驚なさるわ、で、濟んだらまたお庭でテニスでもしませうぢやありませんか」

其中に母も歸る、晩餐は同じ卓子に士官も伴食、「あゝこんな幸福な事はありませんね」とは母君のお詞なりき。軍人とならば獨逸が好し、艶福この上なしとかや。

米國

定義 萬事金貨本位、夫妻の愛も、親子の情も、物々交換は大の禁物、圓いものならでは納まらぬと云ふ家庭。

命が大切か、金が大切かと米國の人に踏ふたら、「どうして／＼命より金の方がいくら大切だか譯りやアしない、理窟はなしさ、俺の生きてる間は只の人間だが、死んで見給へ、直ぐに一萬五千弗に化けるやつさ、時これ金、時間でさへ金になるもの、世の中に金にならないものはありはしないよ」との大氣焔、生命保險と

云ふもの出來しより、昔はお金が蛙に化け、今は人間がお金に化ける世の中とて、家庭の愛情も凡てこれ金、亞米利加主義もまた格別なり。「ヘンリーや、お前鳥渡其處にある植木鉢を窓の中へ取込んで下さい」「何程の價値があるだらう」「ニッケルでやつておくれ、勢力よりも賃銀の方が餘程の超過だよ」「ぢやアニッケル一個くれるんだね」と莞爾もので植木鉢をかゝへしが、什麼したはずみにや、取落してがら／＼どん。「あれ、ま、お前什麼したと云ふのだね、大切の鉢を破毀したぢやないか、辨償するがいゝ、お前の事だから一弗に負けて上げる、さアお出し／＼」と母は大の御不興なり。「辨償するよ、阿母さん、だけども僕一弗拂ふ義務はないと思ふんだ」「莫迦をお云ひでない、この鉢はね阿父さんが聖路易の博覽會で買つてお出でになつたので、八弗もお出しになつたんだよ、阿父樣がお歸りになつて御覽、阿母さんは不注意だと云つて元價を仕拂はなければなりません、たつた一弗を拂ふ義務がないなんぞツて、いくらお拂ひのつもりだえ」「九十五センツは拂ふけれど」「何故またそんなに五仙ばかりの事を惜まないだつていゝぢやないかね」「だつて未だ阿母さんから五仙貰はない

「オー、イエス、グーパイ」（三）



もの、落して破毀さうが什麽しやうが、こゝまで入れたんだから、僕の義務は盡したんだ、だから九十五仙しか拂ふ義務がないと云ふのさ」「まア現金だこと、阿父さんよりもお前の方が餘程剛くなるよ」と反つて審められると云ふ仕義なれば、老は八十になる婆さんより、小は今年生れた赤ン坊に至るまで、生命保険の二つや三つつけざるはなき有様、これが悉く團欒して食卓に向ふ時んば、金がスープを啜る如く紙幣が燒麵麭を咬るに似たり。第一の令孃既に婚期近しと見え、華やかに着裝ふて、様子をつくりながらスプーンを手にし給ふ、聞けば五千弗の保険つけありと即ち五千弗だけの品をつくれるならずや、「あの阿父さま、儂此間阿父様に願つといた夏衣、あれ眞個に拵へて下すつて」「さうく夏衣を強請られて居たつけの、だがお前はこの週間何をしたかね」「しましたわ、阿父様の襯衣を縫つて上げましたり、スクールボーイの居ない時、二日と云ふもの儂が代つてお部屋のお掃除をしたぢやありませんか、一昨日の晩ヴァイオリンを弾いて聞かせて上げましたし、時計も巻いたんですもの」「よしくそれで何の位の價値があると思ふのかな」令孃は打吟じて、「二十弗は頂でいゝ事よ！」「かうとあれが二弗、あれがまア高くつて五弗か、少し高いやうだな」「よくつてよ、またお埋合せ申しますわ、ね、よござんしやう、誂へても」「簿記法から云ふと極めて貸借に差があるやうぢやが、ま、止むを得ん、誂えるがえゝ」「今日貴郎ヘンリーが大變な事を致しましてすよ」「何だ、何をやつたんだ、また大切な手紙でも破つたのだらう」「いゝえ、あの、貴郎が聖路易の博覧會からお持ちになつた、あの鉢ですが」「破つたか」「綺麗に破りましたの、それはもう粉もとゞめずに」「惜しい事をしたな、ヘンリーは辨償をせんければならんな、然しこれは阿母さんの不注意から起つた事ぢやから、俺は阿母さんから貰ふ權利があるの」「それはもう儂の不行屆きなんですから、元價を辨償致しますが、五弗でしたつけね、おやア今朝のと差引きにして頂きますわ」「今朝の？何だつたかな、お前と約束した事でもあつたかな、は

て五弟の報酬と、いや、忘れる筈はないのだが」「お忘れになつたんですわ、それ今朝お出ましがけに、ね、譯つたでせう？」「出掛けにかえ、はてね出掛けにお前と約束した、そんな覺えはないがな」「ホヽヽ、ちやア申しませうか、あの、そら」と令孃の顔を見て、更に夫を顧みたるが、極めて低聲に、「あの切吻の代ですわ！」と益らぬものは主人なりけり。

伊太利

主義　美術國の故を以て、夫は美術家、妻は文學者、無聲の詩、有響の畫、相俟つて琴瑟和合、月夜のゴンドラ船はこれ等一對を載せて、緩く波紋を織る。

これは合衆國とは正反對、株が騰らうと下らうと、そんな事には一切お關ひなしの樂天主義、家庭はいつも趣味だらけの、汚點だらけと誤るべからず。「貴郎が今度あの美術展覽會へお出しになつた「牧場」ね、あれが大變評判が好いんですつてさ、昨日もある貴族があの繪を御覧にあつて、背景がいかにもよく描けて居る、殊に夕日の光線なぞは無類の出來だ、と云つてお賞めださうですよ、儂、實は甚麼繪が出來るかしらと思つて心配してましたわ、また去年のやうに銅牌位ぢやア不好になりますもの、今度は屹度金牌よ、まつたくあれは好く出來てよ、畫室で見た時はさうも思はなかつたけれど、あの廣い、光線の極めて恰好なところへ懸けられると、貴郎の筆ぢアやないやうよ、儂今度ばかりは感心しましたわ」妻君はこゝを先途と囃立てたり。

夫の畫伯欣然として籐椅子に臥そべりながら、「いや自分では會心の作と思はんよ、第一あの牛を見て居る農夫の腰が面白くないので、いくら書きかへて見ても氣に入らんのだ、も少し什麼にかなるだらうと思ふと今更後悔さ」「よござんすわ、あれより書き方はなくつてよ」「農夫としては餘りに品があり過ぎて不可んと思ふよ」「さうねえ、さう云へば品があり過ぎるやうだけれど、あゝ云ふものを書いても、作者の氣品が高いから、自然現れたものと思へば、結句いゝ事よ、さう貴

郎圓滿な畫つてな出來ない事よ」「いや有力な辯護があるので、俺も心丈夫だが、どうも會心の作でないものを譽められると云ふのが面白くないさ」「名譽だわ、貴郎、僕あの畫と同想の新體詩を拵へやうと思つて、苦心しても貴郎の畫に負けまいと思ふものですから、什麼してもうまく出來ませんの……」「牧塲と題してかね、面白からう、それでも腹案は出來たのだらう」「文學評論」の誌上でまた一騒がせ騒がすかね」「冷かしちやア可厭！　始めの句はかう云ふんだけれど、後がうまく行かなくつて……今度は少し長いのにしやうと思ふんですがね」「始めの句は何と云ふのかね、定めて奇想天外から來るんだらうね」「貴郎は可厭、直ぐに冷かしてかゝるんですもの、僕云はないことよ」「冷かすんぢやアない、まつたくお前の詩は思ひがけもないものを捉んで來るからな、あの此間批評家を騒がせた『古址の歌』だつてさうさ、

　その石垣を積みし人
　　戀にもだえて積みたれば、
若き乙女が血の色に
　　動ぎてあはれ壊れしか

と云ふのだもの、大抵の者は驚ろくだらうぢやないか」「あれとは違ひますわ、今度のは柔かく出た事よ！

　雲の幾重を日はもれて
　　淋しき牛の起臥や
　牧塲の秋をとめくれば
　　鐘はたいかに寒かりし

つて云ふの……それからあの廣々とした景色を歌つてだん／＼日が落ちて來るところを云はうと思ふんですわ」齋伯は「成程」と句を切つて、繰返し歌ふ。戸の外から、「あの奥様、麵麭屋が參りましたが、何と申してやりませう」と恐る／＼伺ふは年稍老けた下婢なり。妻君は振返つて、「あゝ勘定かえ、そんなものは今かまつて居られないつて、さう云ふがいゝ」「でも、御勘定を頂かなければならないと申して、動かないんでございますもの」「イゝと云へばね、さう云つておやり、今に家ぢやア美術展覧會から金牌が來るんだつて、そ

んな非美術な麵麭なら、もうこれから買つてやらないつて序にさう云つておやり！」

西班牙

定義 極端なる女尊男卑主義、亭主は始終女房に頭上らず、金庫の鍵は女王の手に握らる

リップヴヮンウヰンクルの女房のやうなのは、國内到るところ轉がつて居れば、リップヴヮンウヰンクルのやうなヘンペックドの亭主も到るところ轉がり居れり。されば自から女權の擴張は非常なものにて、往來を歩行いて居ても、女に逢へば一々辭儀を施し行くこと、宛然わが邦の女髮結か、乃至は婦人專門醫に異らず、往來既にかくの如し、家庭へ一歩踏入らんか、それは想像の及ばぬ程男は意氣地なく、女に權威ありて、お尻に敷かるゝ事一方ならず、漢皇の色を重んじける日、支那にては男を生むを憂ひ、女を産むを欣ぶとあつたが、直ちに以て此國に推すを得べきか、聞けば女の髮には大象もつながるゝとかや。男の一人や二人縛る位雜作もない事さね、と西班牙美人はのたまふさうなり。「ちよい

星郞「すみれさん貴女は實に美的ですよ」
菫「アラ星さん、貴郞はほんとに人がわるいわ」（四）



と貴郎や、貴郎は昨夜何處へ行つたんですえ、僕に無斷で出て行くなんて、乾度碌なとこぢやアなくつてよ、有體に云つたらいゝぢやありませんか」と妻君殊の外の逆鱗なれば、亭主先生大いに恐縮の模樣なり。「無斷つて、何も曖昧な所へ行つたと云ふぢやアなし、例の教育演說會へ行つて、歸りに珈琲店へ寄つたばかりさ、何もさう角芽立たずともいゝぢやないか」「角芽立ちますともさ、演說會へ行んなら何故さう云つて被入らない、教育演說なら、妾も聞きたいつて始終云つてぢやありませんか、自分一人で勝手な眞似をして置きながら、僕を寂しがらせて、ま、何て不人情なんでせう、乾度演說會へ行つたんですね」「誰が嘘をつくものかな、正に行つたんだよ」「ぢやア甚麽な演說があつたか云つてごらんなさい、フラウツエン博士が出たやうですね」「面白かつたよ、いつもあの博士の主義なんだが、一體わが西班牙國は餘りに女權が發達して居る、女權の發達は決して咎むべきでないが、智識も教育もない女が無闇に威張つて、それが爲めに男の活氣を奪ひ、男が外に向つて發展すべき勢力を挫ぐと云ふのはいかにも殘念である、と云つてな、古來千餘年の歷史に徵して滔々二時間に亘る長演說さ、で、最後の結論と云ふのが極めて時事に適切して居る、かう云ふので、日本と云ふ國は世界の最も蕞爾たる邦である、其小さな邦が、世界三分の一を占めて居る露國に打勝つと云ふのは、畢竟男子の活氣が外に溢れた結果で、此原因は女子にある、女子と男子との責任が平常別になつて居て、女子には女子の權限があり、男子には男子の權限が與へられて居る、此天賦の權限が能く守られゝばこそ、男子は全力を外に盡す事が出來る、尠なくとも男女兩性の權限を明らかにしなければ、一國の隆盛は得て期すべからず、と結んだ時は、や、非常な喝采さ」「眞迦な」と妻君打消して「そんな眞迦な事ッてあるもんですか、博士だなんて淺薄な議論をするものね、貴郎は眞理とお思ひなの」「一理あると思つたね、お前の前だけれど、實際女權が强過ぎる傾があるのだから」「何ですつて？」と柳眉を逆立てたが、い

よく〳〵お別れにするより仕方がありませんね、貴郎が女權を認めないと云へば……」「認めないとは云はん、只一般女子の權利が男子に比して强過ぎると云ふまでだ」「いゝえ、不可ない事よ、貴郎は女權を認めないから、そんな淺薄な議論を傾聽して感服するんですわ、だから貴郎が其了簡なら、斷然結婚を取消すより外はありませんね、儂はもう決心して居るんです、一刻も早く出て行つて下さい、もうも顏を見るのも可厭ですから」「なに、出て行け！　それは酷い、此處は俺の家ぢやアないか、可厭ならお前の方から出て行つて貰はふ」「儂に出て行け、よくそんな事が云へますね、俺の居ない後は此家はお前にやると云つたぢやありませんか、貴郎が出て行つた後は儂の物ですわね」「そ、そりやアさうかも知れないけれど、俺の方で出て行かうと云ふのぢやない、お前の方で別れると云ふのだから、お前が出て行くが當然ぢやないか」「誰が出て行くもんですか、隣りの御新造を呼んで聞いて見るがいゝ、何方に理があるか」「そりやアお前の方の肩を持つに極つてるよ、あゝ何故俺はこんな國へ生れたらうな」「儂の方にも不服はあつてよ、何故貴郎のやうな冷酷な夫をもつたか知らと思ふと、いつそ死にたくなりますわ」「俺の方が死にたくなる」と涙をほろり。

丁抹

〔定義〕西班牙とは正反對の男尊女卑、女はたゞ男の云ふことを唯々諾々、幕に腕押は自烈ッたい程主人の骨が折れる家庭なり。

「おい〳〵昨日里の阿母さんが被入つたと云ふが、さうかね」「ハイ」「阿父さんが少し御病氣だと云ふ事だが」「ハイ」「あのお土産は阿母さんから戴いたのかへ」「ハイ」「御病氣は甚麼な御病氣だえ」「ハイ」「困るな、御病氣は什麼だと聞いて居るのにハイは困るせう」「お風邪を召したのかえ」「ハイ」「お熱でもあるのかね」「ハイ」「什麼も困るな、お前のハイも古い事だが、物を聞いてる中は何とか答へて貰はなければ困るぢやないか」「ハイ」「またハイか、自烈ッたくなるな、此間もお

前が病氣だと云ふから醫師を呼んで、什麽だ頭痛はしないかと云つたら、ハイと云ふし、咳は出ないかと云へば、ハイと云ふものだから、醫師は脈のとりやうがないつて歸つてしまつたわな、もう少し瞭りしてもらはないと、飛んだ眼に會ふ事がある、假令へばお熱でもあるかねと聞いたら、少しあるやうですけれども、大したことはございません、とか何とかばつを合はせてくれゝば張合があると云ふものぢやないか」「ぢやアあの、少しあるやうですけれども、大した事はございません」「眞似も困るな、まアいゝや、さう云ふ鹽梅に受答へをすればそれでいゝのだ」と云ふ所へ鈴が鳴る。「オイ、誰か來たやうだ取次いでおくれ」「ハイ」とばかり妻君出迎へればこれぞ主人の叔父君なり。主人は家かね、大増早い退出ぢやないか」「ハイ」「風邪でもひいたかな」「ハイ」「熱は什麽だ、熱さへなければいゝが」「少しあるやうですけれども、大した事はございません」「さうか、熱があつては困るだらう」と廊下を元の座敷に入る。「おい、お前は風邪をひいて、熱があると云ふぢやないか、醫師に診せたらいゝだらう、變すると困るでの」主人は怪訝な顏、「叔父樣風邪をひかれたと被仰るですな、それはいけませんね」「莫迦な事を云ふな、お前が風邪をひいたと云ふぢやないか」「風邪なんぞひくものですかこの通りぴん／＼して居るのです」「訝しいな、お前今主人は風邪をひいたと云つたな」と叔父君は不思議さうに細君の顏を見る。「ハイ」「熱が少しあると云つたな」「ハイ」「この通りぴん／＼して居るではないか」「ハイ」「何を云ふのだかお前の云ふ事は少しも譯らんではないか」「ハイ」主人は橫手をポン「はゝゝゝ、それは妻の父が風邪をひいたのを俺と取違へたのです、なア、さうに違ひないだらう」「ハイ」「ものはなるたけ瞭り云はんと譯らんことになるよ」「ハイ」「叔父さんに珈琲でも上げたらよからう」「ハイ」「その椅子をも少し其方へ」「ハイ」「其處を締めて」「ハイ」「あゝ寒い」「ハイ」「早くおし」「ハイ」と出て行くを叔父君見送りて、「あゝ柔順な女だ、お前はいゝ嫁をもつて幸せぢや」とはさりとはおかしき國柄ならずや。

露西亞

【定義】過褒は寢て待ての本文通り、幸福は只ハリストを賴めとばかり、家庭の運命は一に神の手にありと知るべし。

星耶「自由結婚でなくちや神聖の愛は成立ないれ
すみれ「ホントにそうですよ、ですが隨分嫁んでゐる人もあるでせうれ



「あゝ草臥れたく」と今年六十になるミチールは半ば足の折れし椅子へ腰を下して、妻のマーすを顧みたり、「喃婆さん、たゝた一人の伜兵隊にとられて、此年して畑掘返すつてのは、まアこの位不幸な事はねえと思ふだよ、サケスキーめ今頃は何してるだか、負傷して歸るか、捕虜にでもなればいゝと思ふだけんど、モクデンの戰さ大分酷かつたで、おッ死にやアしねえかと思ふと、心細くなるだアよ」「なアに安心するがえゝだよ、俺毎日ハリストさまア祈つてるだから、いつか一度屹度歸つて來るだ、なアに隊長さまから豫定の退却お好だで、おッ死ぬやうな事はあるものでねえ」「何せえ早く軍さやめにさッしやればえゝにさ、ザール樣いかに我慢强いつても、かう打負けてばかり居ちや

ア浮む瀬はねえだから、今の中早く和睦した方がえゝだ」「さうよの、戰さ勝つたつて、日本取れるでなし、何で戰さぶッ始めたゞか譯りやアしねえだ、トルストイ樣毛嫌いして、ガポン樣牢へ打込んだつて、此方等が憤れ出しやア國は闇だ、無暗に鐵砲や鎗の尖で追散らさうッてそりやア一時は逃げ出すべえよ、神さま承知なさらねえだ、あんな事で此方等恐れると思ふと大間違ひの基ぢやアねえか、蟻の穴から堤打壞す例もあるだから、いつか一度破裂せずに居るものでねえ、サケスキー此戰におッ死んで見ろ、俺鍬ひッ擔ひで聖彼堡まで押かけて、悴の敵とつてやるだよ」「村長樣でせえさう云はれるだ、今度の戰さア此方が無理だて、屹度負けるだ、無理な事をして勝つ例はねえッてだ、勝つても負けても別に此方等ア痛え事も痒いこともねえけんど、悴ぶつ殺すのが可愛想でなんねえだよ」と兩個は一家の不幸を嘆きて、淋しき夕暮を爐邊に雨を聞くなりき。「郵便！」の聲「何處から來たゞかな、爺さん開封て見るがえゝだ」「西比利亞第一軍團司令部とあるだ、悴の事に相違ねえ」「戰地から來たゞかな」「うんにやモスクワで取ついでよこしただ」「何と書えてあるだ」「から讀めねえだあゝちッとでも書物讀んどけばと今になつて思ふだよ、ちよッくら村長樣べえ行つて、讀んでもらうだな」「それがいゝだ、何だか胸さわぎしてなんねえだよ」ミチールは手紙を鷲掴にして小舍を出でたり。

暫らくして歸り來るミチールの面は、朱を濺ぎしやと思はるゝばかり、眼の色異樣に光りて、吐く息虹にも似通ひけり。「媼さん、悴はとう〳〵おッ死んだゞよ、これ、名譽の戰死とあるだ、鐵砲で咽喉打拔かれたと云ふだもの、痛かつたに違ひねえ、媼さん」と大きく「汝何してるだな、悴おッ死んだと云ふになー」「おッ死ぬ氣遣えはねえだ、俺先刻から一生懸命祈り上げてるだからな」「だつて此手紙の中へ書えてあるだもの、俺もう生きてる甲斐がねえだ」「なに其手紙におッ死んだと書えてあるだかね、爺さん、周章てるでねえ、いゝよ、おッ死んでも關はねえだ、おッ死んだつ

て、神様はおッ死なすものでねえ、今に歸つて來るだよ」「姐さん、死んだものが何で歸るものか、氣の狂れたでねえかね」「歸へるつては、一度は死んだつても、乾度蘇生へるだ――ハリストよ、死より我兒を蘇生せしめ給へ、希くは蘇生せる我兒を我家に送り給へ、アーメン――」神もさこそはてこづり給ふべし。アーメン！と此の稿を結ぶ。(完)

歐米の婚禮作法

B、K生

婚禮を以て人生最大の禮とし、最も鄭重に、最も嚴格に執行ふことは、歐米も日本も變りは無い。尤も歐米の婚禮式法は、我國同樣、階級により、地方により、時代により、多少の相違變遷は免れぬので、茲に紹介するのは、英米に普通一般の、最も新しい作法慣例の大要である、先づ婚禮になる迄の進行から始むれば、

男女の交際

歐米の結婚は、男女の自由撰擇に基くこと勿論で、自由撰擇の抑もは、男女の自由交際であるから、此交際といふことは、當人同士に取つて、非常に大事であるのみならず、親達も陰ながら少からぬ注意を拂ふので、時に隨分八釜しい干渉をさへ見る。此干渉は、德義上ある程度迄は一般に是認されて居ること勿論で、別けても親の財產を相續すべき娘を目的とする場合など、男子は此點に重き注意を拂ふべきである。

交際の結果、双方氣心も知れて、愛情も日一日深くなり、遂に男子から心の底を明して、女子の承諾を得れば、茲に婚約が成立つので、其際昔のやうに、男子から先づ女子の父親に許諾を請ふ必要が、今日は無いとはしてあるが、若し其の女子が自分より身分の上の者の娘か、大財產の相續者である場合には、前言ふたやうに、此禮を缺いてはならぬとなつて居る。

世間には隨分八方美人といふのがあつて、男子は確に成功と信じて居て、長い〳〵苦心の末思ひ切つて言ひ寄れば、案外拒絶されて、大失望をすることがある。

これは女子の愼むべきことで、許さぬ男子に許すと思ひ込ませる仕打は、必ず避けねばならぬ。

交際中の作法として、心で許す男子の外は、高價の品を貰つてはならぬ（花、書物位は差支ない）。夫から、婚約の男女を除いて、他の男女と手紙の遣り取りも禁物である。

男子から女子の父親に、結婚の許諾を乞ふ時は、自身直接に面會して申込むがよい。手紙の方が樂ではあるが、それだけ又向ふでも、拒絶し易いといふ場合が少くない。然し現時の親達は、娘の好いた男子ならば、多少の不滿は忍んでも、快く承諾するが眞理で、双方の家族に少も不滿の無い結婚は、天下に例が稀であると觀念する傾が強いから、大抵は自由結婚の原理が圓滑に實行されるのである。

婚約の指輪

双方相許して、双方の親兄弟も承諾したとなれば、男子は先づ女子の家族親類に紹介され、次に女子が男子の家族親類に紹介され、夫から日を撰んで所謂婚約の指輪を男子から女子に贈る。此指輪を贈ることは、以前は必ずといふ譯では無かつたが、今日では必要の條件で、指輪は金製に淡泊した寶石を箝めた物が行はれる。寶石を幾個も箝める場合には、紅玉石と碧玉石とを相接して置くことは禁物となつて居る。人によつては、指輪の代りに腕輪を贈ることもある。腕輪には大抵内側に簡單な好もしい文句を彫刻する。

婚約の期間は若い男女の花盛りで、情愛は蜜の如く、公然相携へて、天地は彼等二人の爲に存在するものと外思へない。であるから、歐米の社交界では、婚約の男女は、晩餐會、夜會、總ての交際會の邪魔者のやうに思はれる場合が少くないといふことで、成程此種の會に於ては、衆等く樂むといふのが原則であるのに、目に情人あつて他に何物も無き彼等が、番ひ離れぬ胡蝶の始終一つに寄り合つて喃々するなどは、人の噂でもして居るやうに見えて、妨げになるは無理の無い次第で、さればとて、如何に當人等が氣が付いて力めても、伊太利の諺では無いが、戀と咳は隱

されぬのであるから、當人等が充分注意する其以上は、氣を惡くする方が、度量の狹いのだとして置かねばならぬのであらう。

婚約中不幸にして結婚が將來双方の利益で無いといふ事が分つて、破約といふ悲むべき事になる場合があるならば、其時は直接よりは手紙で申送るのが禮で、其手紙には、今迄に貰つた手紙や指輪其他の品を添へて返す。すると先方からも同樣取纏めて返して來る習慣である。

婚禮の準備



父親「これは何ちうザマだ、怪しからぬ、不埒至極め

娘「そう仰有つても困るワ姿シ理想があつてよ

いよ〳〵何時婚禮となると、家中支度で大騒ぎである。支度の宰領は母親で、小間物屋が來る。仕立屋が來る。客が來る。親類友達から御祝ひの遺物が來る。當人は一々之へ禮狀を出し。母親と交る〴〵客を接待する。こんな時には一番手明きの父親は、一番鶩鳴つて居る。小い妹や弟は家にばかり居て邪魔掛りの役を務める。犬猫迄ソワ〳〵して見える。一番割の惡いのは花婿で、此頃は毎日のやうにやつて來るが、無論いつものやうに取合れない、餘りの事に膨れるを、今幾日我慢なさ

れば子ーなどと、妹達に慰められるのか、からかはれるのか、顔を赤くしてスゴ〳〵歸つて行く。

花嫁の支度は、花嫁自身の財産と親達の補助金で整へる。それで賢い娘は、先づ必要の品を書き揃へ、代價を見積つて、買入れた物へは棒を引くことにする。新世帶の家具は、以前は花嫁の方で持つたが、今では婿の持となつて居る。尤も勝手道具や、客坐敷の必要品、家内の裝飾品中、友達や親類から贈られる物が少くないので、以前は此の祝ひの遣ひ物は重に裝飾品であつたが、今日は段々實用品になつて來て居る。贈られた物は部類別をして、座敷の卓子の上へ積み上げ、一々名刺を添へて、奇麗に飾る。椅子とか、卓子とか、屛風とかいふ大物は、積む譯に行かぬから、然るべき處へ札を付けて置く。

贈物の心得

祝儀の贈物は、婚禮前二週間、少くとも一週間前に花嫁花婿の家へ届ける習慣で、其品は其人に應じて撰むべきである。淸敎徒の者は華美を嫌ふから、金剛石入りの頸飾りなどは禁物で、夫から夜會などを開くことの出來そうも無い夫婦に、夜會用の氷皿なども心なしの業である。

贈物は實用的と言ふたが、これは階級にもよることで、自分より大金持の者に、勝手道具など贈るのは、却つて失禮であるから、これは何か相應の高尚の裝飾品などにすべきである。自分と同等位の者、又は以下の者には、食刀、肉叉、皿鉢、椅子卓子、茶器など然るべく見立てるのであるが、一つ注意すべきことは、同じ物を大勢から贈る恐を避ける手段で、之には友達同士集つて内相談するとか、花嫁の妹に内々尋ねるとか、親類などなら直接に花嫁に尋ねるとか、臨機應變にやるべきである。親類や極の親友などなら、金錢を贈ることもあるが、普通の友人などでは失禮である。

待女郎と裾持

待女郎といふのは、式場で花嫁に侍く處女等で、花嫁が撰む。其數は奇數の事も偶數の事もあり、花嫁の妹か極親しい友達と極つて居る。尤も花婿の妹も加る

ことがあるが、花嫁の妹の方が先である。其服裝は花嫁持で、色合は其人に似合ふやうに撰ぶのであるが、お揃ひで皆に似合ふといふことは大分難しいことで、止むを得ず二色位にすることもあるが、それよりは、クリーム色とか白とかいふ、淡泊した一色にする方がよい、としてある。

冬の婚禮には、一般比較的地味の服裝を撰ぶ。

それから待女郎の服裝は、無論花嫁のより品を落す。

待女郎の中に一人待女郎頭を置く。これは式場で花嫁に近く立ち、其花環や手袋を預る大役を務める介添人である。



多くの婚禮には、一人花嫁の裾持を伴れる。これは多く花嫁の弟で、其服裝は、花婿が海軍々人なら海軍服、陸軍々人なら其聯隊の色を用ふるといふたやうに整へることもあるが、多くの場合には、高尚な古代の服裝を撰ぶ習慣である。

裾持の男兒は式場迄は花嫁の直ぐ後に隨ふが、歸りには列の最後に下つて、待女郎の中に少女があれば、それを保護して行く。

花婿の介添人

婿の方にも介添人が付く。其一人は「ベストマン」と呼び、婿の弟か親友で、婿が式場にて花嫁にやる結婚の指輪を忘れて行きはせぬか、帽子を置忘れはせぬか、よく氣を付けるのが第一の役目である。「ベストマン」の對とも見るべきは待女郎頭で、式後の宴席では、相並んで座を占める。

「ベストマン」以外の付添人は幾人もある。何れも獨身者で、花嫁の方の待女郎に對するものである。宴席では待女郎と並んで座る。付添人の上衣は黒で、薄色の手袋とチヨツキとズボンで之を調和し、ボタンの穴へ花を挿す。

婚禮の朝

花嫁の身の飾りは無制限では無い。例へば色の鮮かな寶石や金絲物は禁物となつて居る。尤も婿の男から頸飾などを贈られゝば、婚禮の日始めて着けて出る例である。

婚禮の朝花嫁は平常の通り食堂へ出ずに、自分の部屋で朝食を食べる。食堂へ出るのは作法に外れて居るとしてある。衣裳を着け終つて、部屋で待つて居る中に、時は進んで、いよ／＼式場、即ち教會堂へ出掛けることになる。

婚禮の日、男は女子を訪ふてはならぬ。婿の上衣は、新調の黒の「モーニングコート」で、ズボン、チヨツキ、手袋は薄色、「コート」の「ボタン」穴へ花を挿す。佛國では「イーヴニングドレツス」を着るが、英國では「モーニング」と極つて居る。

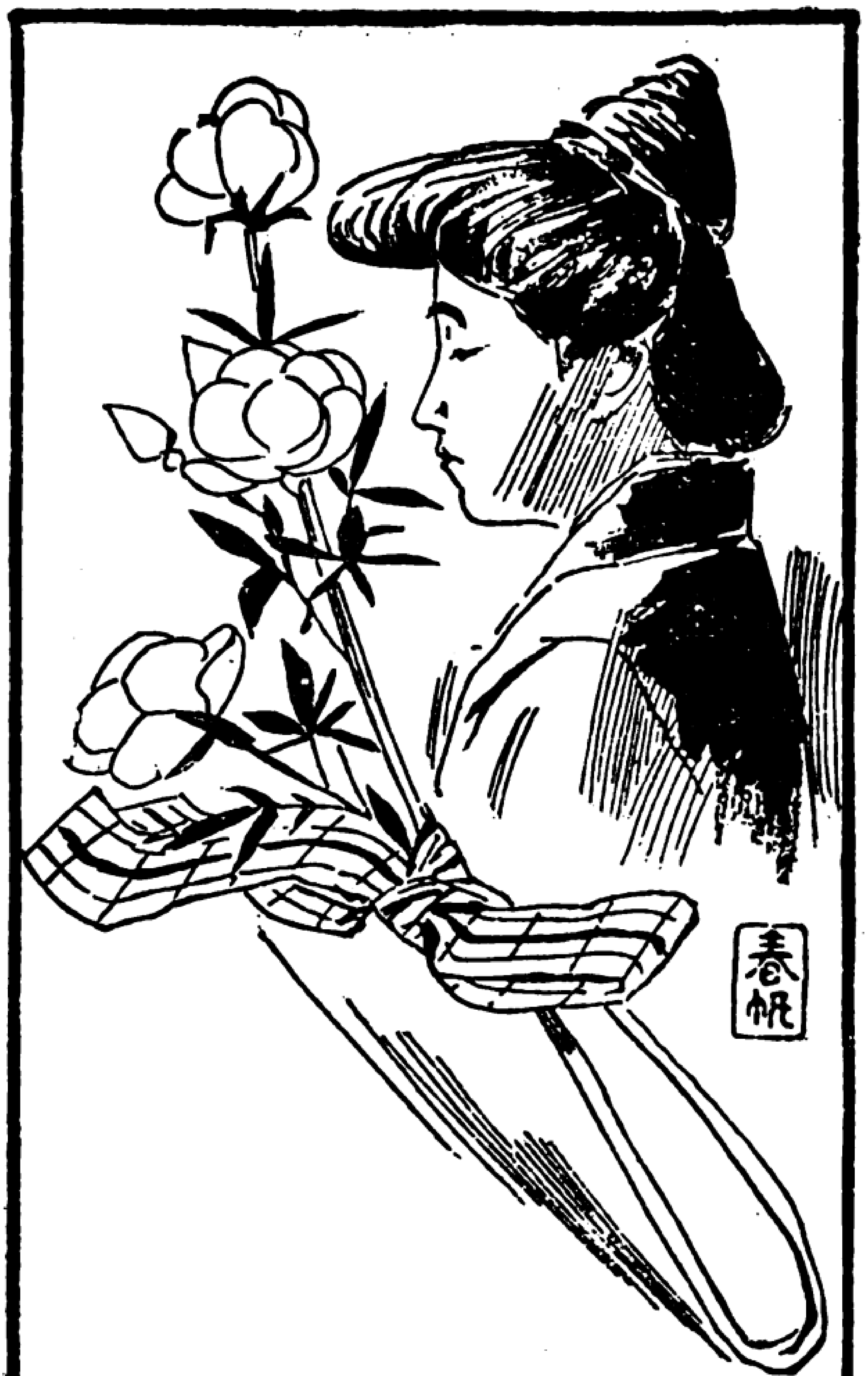
花嫁と待女郎は、何れも手に花束を持つて式場へ出る。これは花婿からの贈り物で、待女郎への花束は前晩迄に婿の方から贈るが、花嫁の丈は朝特別に贈る習慣である。花嫁の花束は白薔薇、白百合、橙花など、凡て白で、長い白の「リボン」で結び、「レースペーパー」で包むか、若くは白繻子の花束持で持つ。尤も此花束の形や飾りは、始終流行が變るから、何時もかうとは云へぬ。

婚禮の招待狀

極質素に友達の十人かそこら招く丈の場合には、娘

の親から肉筆の招待狀を出すが、一般には印刷した「カード」を配る。此「カード」は緣が銀の厚紙で、其文句は『何月何日何時何處々々にて誰々（娘の兩親の名）の娘誰と誰（婿の名）の婚儀執行致候に付御光臨を乞ふ』と記し、式後の宴席に招待するならば、其後へ『式後何處々々にて何時より祝宴』と添へる。儉約の場合には、婚禮を午後にして、此祝宴を略することもある。

今では婚禮は午後三時迄は執行が出來ることになつて居るのである。招待狀は、婚禮當日前、少くとも三週間に出すので受取つた者は、直ぐに返事を出すのが禮である。



婚禮の場

さていよ〳〵其日其時刻になると、教會堂の門は開いて、眞先に婿の一行が到着し、夫から待女郎の一行が到着し、最後に花嫁が到着する、客は時を計つて參會し、設けの席に着くので、花嫁より後になるのは失禮である。花嫁の車が聞えると、花婿は聖壇の右手に立ち、「ベストマン」は少し下つて其右に立ち、待女郎は玄關に出迎へ、花嫁は車から下り、父親の右の腕に縋つて進歩を運び、其直ぐ後に待女郎頭、其後に待女

郎が二人づゝ並んで随ふ。奇數なれば、最後の一人は一人である。待女郎の後に花嫁の母親が男の兒の一人又は近い親類の者と並んで行く。花嫁が進んで花婿の左方に立つと、其父親は花嫁の左に立ち、待女郎頭は花嫁の後ろに、花束と手袋を受取る役目に立つ。若し自分と花嫁と二人の花束を持切れぬと見れば「ベストマン」が助けてやる禮である。客席には高下は無い。

　式は牧師によつて執行される。『神の合せ給ふもの人之を離す能はず』『あなたは健かなる時も、病める時も――』など、紋切形の問答と、盟が滯りなく濟み、結婚指輪は婿の手づから嫁の指に箝められ、(花嫁は此前に手袋を取る)式が目出度終ると、花婿は腕を花嫁に貸し、番ひ離れぬ鴛鴦睦しく眞先に聖壇の前を退り、待女郎、「ベストマン」、双方の母親、親戚、特別の親友の順で、別席へ行つて、結婚登記簿に署名する。署名は當人共の外、證人二人でよい譯で、之は「ベストマン」と待女郎頭の名譽であるが、花嫁の友達も之に與るが常である。此處で双方の親類縁者男女の者が花嫁を接吻する慣習であるが、略して祝辭を演べる丈にすることが多い。

　署名中待女郎中の少女等が、客の間に祝ひの徽章を籠に入れて來て配る。女客へのは橙花、男客へのは蔦葉又は樫實で飾つてある。何れも裏に留針が付いてあつて、客は受けて胸に飾る。

　署名が濟んで、花婿の馬車の用意宜しと知らせて來ると、婚禮の譜の奏樂が起り、新夫婦は連れ立つて式場を出、馬車に乘り移り、祝ひの鐘(宗派により)に送られて軋つて行く。待女郎の馬車が其に續く。「ベストマン」は待女郎を助けて馬車に乘せ、自分も其後の馬車へ一緒に乘つて行く。花嫁の母親は客に失禮して之に續く。祝宴の主人公であるから、特別の例として、之が許されてあるのである。客は何れも相慶して、ガヤ／＼と花嫁の生家の宴席へ行く。

　「ベストマン」の役目の今一つとして牧師と登記吏、及び奏樂者、鐘撞男(若しあれば)に謝儀を拂ふ。此謝儀は人によつて差等はあるが、先づ牧師と奏樂者に

十圓、登記吏に五圓、寺男には相當の祝儀である。

婚禮の祝宴

花嫁の生家で開かれる。新夫婦先づ歸つて客間に出、主人夫婦は其入口に立つて居ると、客ははやゾロ〳〵と參着する。先づ御目出度の祝辭、夫から新夫婦と握手（式場でした者は復びせぬ）、夫から坐敷の三隅に卓上に飾つてある贈物を見、時刻が來て、食堂へ導かれる。此日婦人客は決して帽子を取らぬ。夫から男客は帽や手袋や杖は玄關へ置いて、いつもの夜會の時のやうに客間へ持込まぬ。猶客は花束を持たぬが、婦人客は夏なら扇子などを手にする。

因に、三四十年前迄は、婚禮の席に黒い衣服は縁喜が惡いとして忌んだものであるが、今ではそんな迷信は殆んど構はぬ。



食堂へ入る時の順序は、新夫婦相携へて第一、花嫁の父親と花婿の母親と第二、花婿の父親と花嫁の母親と第三「ベストマン」と待女郎頭第四、續いて待女郎と花婿側の付添人、續いて親戚知友の客で、食堂席の順は、新夫婦は『婚禮の菓子』に對して食卓の中央、花嫁は花婿の左に坐を占め、花嫁の隣に其父親と花婿の母親の組、花婿の隣に花嫁の母親

と花婿の父親の組、待女郎共は、其相手と並んで花嫁に對して坐に就く。

祝宴が始まる。茶や珈琲は出ない。酒は色々出るが、三鞭が第一である。氷と菓物も出る。「スープ」も出る。然し何よりも大切なは卓上に飾つてある「婚禮の菓子」で、花嫁が先づ一片切つて給仕に渡すと、給仕は之を取つて細く切り、客に廻す、外の品は辭退してもよいが、此ばかりは、好かなくても一片は是非食べねば無禮である。

「婚禮の菓子」が濟むと、食卓祝辭が始る。尤も無ければ無いで差支ない。今では此祝辭は段々流行らなくなつて、單に祝盃を擧げる丈の事も珍しくない。祝辭なり、祝盃なり、先づ新夫婦の萬歳が第一で、夫から婿の父から嫁の兩親の健康を祝し、嫁の父が之に答へる。之で宴が濟んだので、花嫁は先づ母親に連れられて席を退き、旅行服に着變へる。花嫁の退いて廊下へ出た時は、千斤の重荷を卸した氣がして、ホッと息をつく。尤千萬である。花嫁は衣裳室で雪白の長い絹上衣を脱ぎ、さつぱりした旅行服に着變へる。これから直ぐ新婚旅行の途に上らうと言ふのである。用意は前以て出來て居る。親友親戚の人々は、皆玄關へ送つて出て挨拶する。妹や弟どもは今更のやうに泣き出す。友達は當分別離の接吻を交換する。さらば〳〵の聲を後に蹄の音輕く停車場指して樂しい蜜月の旅程に上るのである。

以上の正式祝宴の代りに、午後の喫茶時刻を以て、簡單な畧宴を開くことが流行する。此風の略宴は、半立食で、儀式もやかましくなく、三鞭其他の酒も出るが、茶と珈琲が重なもので、客は座するも立つも勝手である。御馳走は男子が給仕から、受取つて、相手の婦人の分を周旋する習慣であるから、給仕の數も少くてよし、萬事經濟的で、却つて樂しい。猶夏時分ならば、庭園に食卓を設けて、園遊會的立食をやることもある。

新婚旅行

新婚旅行といふ事の利害については、色々の説があ

つて、或人は此一生一番樂しい期間を、頻繁なる友人の訪問や新世帯の屈托から免れて、水入らずの戀しい同士、思ふまゝに、呑氣に樂み廻るのであるから、最も賢い習慣であるといひ、之に反對する人は、新しい經驗で、心の落着かぬ、身體の調子の狂つて居る期間を、滊車滊船で搖られ、「ホテル」の心配などに曝すのは却つて宜くないと言ふて居る。議論は兎に角、新婚旅行は歐米一般の風習で、新夫婦はかやうに必ず出懸ける。但し、其期間は、今は世の忙しくなつた爲め、頗る短縮され、最長二三個月、最短一週間位、先づ二三週間といふところである。其出懸ける場所は、國內なら景色のよい都會、温泉場、湖水の邊、國外なら、或は巴里、羅馬、或は瑞西の景勝温泉などである。それも月によつて違ふとは勿論である。爰で婚禮に最も適當と信せられて居る時期について述べる。



結婚の時期

歐米で結婚に最も適して居るとして、實際最も多く行はれる月は、六月と七月である。五月は氣候上最も適當の月であるが、之は不緣喜の月とされて居る。三月は斷食祭と言つて、斷食して神に懺悔する祭期の月で、舊敎信者は此月に結婚せない。基督復活祭期間(基督の釘殺の後更生つた紀念祭)にも結婚はせない。二月は寒い。八九月は熱い。それ

で是非六月七月となるのである。

婚禮の日を取極める權利は、何れの階級に於ても、必ず女子の方にある。新婚旅行を幾月もする風習であつた時代には、行きたいと思ふ地方の最も愉快な時期を撰んで、婚禮の式を擧げたものであるが、今では、新婚旅行地は婚禮の時期によつて定められるやうになつて來て居る。

結婚名刺

結婚名刺といふもの、以前は必ず知友の間へ配るべきものとしてあつたが、今日では全く自由で、一々配らずとも唯然るべき新聞（英國ならば『タイムス』新聞の如き）へ廣告を出す丈で澤山といふことになつて居る。若し之を配るならば、名刺は自分の處女であつた時のと、夫人の名を夫の名と並べたのと、夫のと、三枚を光澤のある狀袋に入れ、先方の名丈書いて封じ、更に之を普通の狀袋に入れて送る。今日では、三枚の名刺の代りに、三折りの一枚の名刺が出來て、折つた眞中へ誰々及夫人と記し、兩傍へ處女の時の名と、男の名とを記す。此名刺は婚禮の日の夕刻、花嫁の妹が配り廻り、若くは郵便に投ずる。

新家庭

樂しい新婚旅行から歸つた。新家庭を作つた。下女に奥樣と呼ばれてサッと赤くなる、自分より年上の友達が猶獨身で居るのを見て、變な感じがする。今迄親がゝりで呑氣に暮したのが、急に一家の主婦となつて、トンチンカンの事ばかり、一向勝手が分らない。里が戀しくもなる。夫の留守などには何とも言へず氣が滅入る。然しそれも當分で、新しい勝手道具が錆び始める頃には、何時とはなしに世帶馴れて、歴とした主婦公になり濟して了ふ、『時』は一切を支配するのである。

新夫婦の舊友は、先づ新夫婦の新家庭を訪問するのが禮である。訪問されゝば、新夫婦は之を答問せねばならぬ。訪問されぬ人の處へは、よし招待を受けても、斷つて行かぬ定めである。答問の際置いて來る名刺には、自分の在宅面會時日を左の上の肩へ記入して置く。

此日は一般主婦の在宅面會日と別段違つたことは無いが、來訪客は必ず多い。然し菓子や酒は出すに及ばぬ。「婚禮の菓子」も無用である。

新花嫁は、何れの會に出ても、上席の名譽を與へられるのが、歐米社交界の習慣である。此の如くにして、社會は一生の花たる此時期を、彌が上にも爛熳馥郁たらしめるので、此時期を樂しく經過して、さて結實の時期に入るのである。

佛國愛國婦人の問答

菊池雪子

佛國は只今でこそ日本の敵なる露西亞と同盟のおつきあひの上より、經濟上の方面より、多少露國に贔負をして居るやうですが、其の昔は皇帝奈破翁が莫斯科まで攻入りたる古事もありまして心底より露國と交誼を結んで居るか判りませぬ、それは兎まれ、佛國は愛國心の名高い國で日本を除くの外一番に指を屈せらるゝでせう、ですから、同國の婦人なども彼のジャンダーク以來愛國の熱情に富み、アルサス、ローレンの事を聞いて居る今日の小學生徒すらも敵愾心が深く、他國では中々類似なき程愛國の實例に富で居るさうです、同國の家庭にありました母子の愛國心に關はる問答を掲げて見ませう、是れは軍國の今日多少我國の家庭の參考にもなることゝ思ひます。

母「お前方は婦人の愛國心に就て明確な思想を有つて居りますか、お前方の中には愛國心と云ふものはたゞ男子にのみ限られて居るものだと思つて居る者はありませんか。」

二女ジャンヌ『お母さん、失禮ですが、私は姉さんの先きにお答いたします、私は愛國心といふものは男子ばかりでございません、女子も有つて居なければならないものだと思ひます、ジャンヌダルクも矢張女でございました、豪い愛國者ではありませんか、お母さん、私もジャンヌと云ふ名前ですからアルクのジャンヌの

やうに佛蘭西の爲に働かなければならぬ義務があると思ひます。』

長女マリー『お母さん、私は此の美しい佛蘭西の爲には死んでも關ひません、御國の爲に死ぬのは却て名譽だと思ひます、其の代り私は死んでも獨逸人にはなりませんよ、若し不幸にして私達の住まつて居る土地が獨逸の領分にでもならう者なら私はお母さんと一緒に一日も早く他の土地へ移りたうございますヨ、其時今所有て居る財産などを取られても關ひません、一千八百七十年の戰爭にアルサスロレーンの人も多く其の通りいたしたと私は學校の先生からお話を聞きました。』

母『私はお前方の話を聞いて愛國心の深いのを見て大層よろこびました、お前方の心が愛國の熱情で燃えて居ると見えてお話までが熱心で實に嬉しうございます、けれど愛國心のやうな立派な事でも餘り度に過ぎてはいけません、例へばお前方は若も戰が始まつたとするならば直ぐ兵隊さんのやうに銃砲だの劍だのを執つて戰場にお出ですか。』

ジャンヌ『イエ、お母さん、私は爾う思ひません、女の愛國心と云ふものはそんなものでないと思ひます、其んな事をしたら人が皆んな私達を馬鹿だ狂氣だと申すでせう、ジャンヌダルクは馬に乘つて戰場に進み出ましたが、其れは神樣の思召で特別なことでございます、一般の規則は女の愛國心は戰場で顯はれるものではないと此間も學校の先生が仰つしやいました、女子の國を愛する本分と云ふものはモット謙抑でなければなりませんと云つて聞かせて下さいました。

母『ジャンヌは隨分分つた子です、女の愛國心の性質までも幾らか分つて居ますネ、然し畢竟は家庭の母となつて佛國婦人と云ふ名を耻かしめないやうにするには如何したら善いとお思ひですか、今度はマリーに聞きませう。』

マリー『家庭の母となりましたなら、子供を眞面目に育て、國民を作る積りで敎育を授け、一旦緩急あらば子供の義勇を勵まして充分國民の義務を盡させるやうにするのが本統の愛國心と思ひます。』

母『マリーは姉さんだけあつて善くお答が出來ました、それはお前、多分學校の先生から敎はつたんでせう、敎はつても結搆なお答でした、お母さんはお前がよく愛國心のことを辨へてお出るのを見て大層よろこんで居ります、だがマリーや、お前の今お話した愛國心と云ふのは平時の愛國心と云つて平和な時分には佛蘭西の母たる者は如何いふ心掛を有つて居らなければならぬかと云ふのでありますが、戰時には佛蘭西の母たる者は如何樣にして愛國心を顯はさなければなりませぬか知つて居りますか。』



ジヤンヌ『お母さん、知つて居ります、私知つて居りますから私にお答をさして頂戴な……戰時にはネ、お母さん、何んでも強く忍ばなければなりません。』

母『強く忍ぶと云ふのは如何するのですか。』

ジヤンヌ『何んでしたかしら……忘れて了ひました、姉さん、知つて入らつしやるでせう、……ネ、ー姉さん。』

マリー『ジヤンヌさんは餘り差出るもんだから何んでも忘れて了うですよ、私が言つてあげませう……強く忍ぶと云ふのは戰の時には如何な辛い義務でも勇ましく忍び、其の子の出征するのを見て女々敷泣くやうなことをしないで却て勇氣を勵まして遣るやうにし、家の生活を口實にして良人の出征を留めるやうな卑怯なことをいたさす、結局佛蘭西の婦

人たる者は自分の子供を自分の所有とせず佛蘭西と云ふ公母の所有と思ひ、良人の戰地に往くのは家の名譽であると思ひ、良人は外に敵と戰ひ、自分は内に情と戰うと云ふやうにしなければならないと此間先生が詳しく教へて下すつたじやありませんか。』

ジヤンス『さうでしたネ、姉さん……私すつかり忘れて了つたんですもの。』

母『ジヤンヌには餘り六箇敷かつたでせう、姉さんは實によく記憶えて居りました、お母さんよりも愛國心をよく知つてお出ですから洵に嬉しうございます、お父さんが御在お出でしたらば嘸およろこびでせう、お前方のお父樣は丁度爾ういふお心で御國の爲に生命を犧牲にお供げになりました、お前方は女ながらもお父樣の血を受け、幼少い時から愛國心をよく學び、お母さんにも増して能く心得てお出るのは何よりも嬉しいことです、……然しマリーや、戰の時に佛蘭西の婦人たる者の盡すべき所はそればかりですか。』

マリー『イエ、それはかりではありません、戰の時には負傷する兵隊さんや、病人なども澤山あると云ふことですから、それを助け、それを慰めなければなりません。』

母『さうです、それを人道と申し、負傷者や病人などは國家の爲に負傷し、國家の爲に働いて病氣にまでなつたのですから、其の病氣までも貴うございます、ですから佛蘭西婦人たる者は或は看護し、或は繃帶を作り、或は見舞ひ、或は慰安になるものを送つてやるのは當然のことです、愛國婦人の義務も丁度それなんです、お母さんも今はお前方のお父樣に離れましたが、多少の財產があつてお前方を教育して行くことが出來ますから、同時に又愛國婦人の義務をも盡したいと思つて居ります、若しも戰がありましたならば、お前方と一緒に此の義務を立派につとめませう。』

ジヤンヌ、マリー『さうですネーお母さん。』

アヽ、是れ實に佛國愛國婦人の家庭に於ける母子の會話です、此種の家庭の狀態などは別に詳しく書いて紹介いたしませんでも大抵推測られます、今や我國の軍人家庭に於ても之に劣らぬ有樣でせう。

西洋人の迷信

龜卜子

「ジェームス二世王戴冠式の最中、王の戴きたる寶冠は、故なきに傾いて落ちんとし、空晴れて風も無きに、錦織の丈夫なる玉座の天蓋は二つに裂け、同時に白塔上の國旗も裂け破れたり。此種の出來事は、偶然と言へば言はるゝも、天命を以て民に臨む王者の上に起りたる以上、單に偶然の一語を以て滿足し得べき小事にてはあるまじ。」



以上は千七百十一年一月廿三日附を以てヒツケスといふ學者から、倫敦「ユニヴアーシチー、カレツジ」といふ大學の學長に送つた手紙の一節である。迷信、御幣擔ぎ、緣喜などいふことには最遠いと思はれる此種の人々の心の底にも、猶少くとも此位の程度迄は擔がれたもので昔の將軍には、行軍中又は對陣中、愛馬が斃れるとか、野猪や兎や栗鼠が路を横切るとか鴉鳴きが惡いとか、雷電とか、嵐とか、雲の形とかいふ事の方が、良參謀の作戰計畫などよりは、重く見られた例はいくらもある。勿論今日の歐米人には、これ程のことは無い。擔ぐにしても御幣はずんと輕い。然し、若し文化と共に全く地を掃つたなど〻思

ふならばそれは大層な間違で、よし玉座の天蓋や塔上の國旗の裂け破れた理由が、科學的に説明されたとした所で、ヒッケスの懐いた程の不祥の考は其場合、蓋し今日歐米人の大多數の心の底に湧き起らずには居ないであらう。朝起きて早々襯衣を裏返しに着た。上靴の右左を間違へて穿いた。左手の樫の木で鴉が可厭な聲で鳴いて居る。裏の森で妙な木精が響いた。膳に向つて氣が付けば、家族は十三人だ。今日は金曜日だ。思はずナイフとフオークを十文字に皿の上へ組んで置いた。鹽を覆した。卵を落して壞した。長男が拇の爪を嚙んで居る。煖爐の火が跳ねて、棺の形の缺片が轉がり出た。犬が遠吠して居る。椅子が壞れて尻餅搗いた。こんな工合にやられやうものなら、どんな歐米人でも、其の日一日位は塞ぎ込むであらう。氣の小い擔ぎ屋なら、氣違ひになるかも知れぬ。

▲福帽

赤坊の生れる時、頭に膜を被つて生れることがある歐米では之を福帽といひ、非常に縁喜がよいとされ、誰は生れる時福帽を被つて來たので、後とう〳〵王になつたなどいふ言傳へは立派に歷史に迄載つて居る。此膜は之を被つて生れた赤坊が幸運と言はれるのみでなく、之を買つて帽子の内へ縫込んで被れば、辯護士にはよい客が付き、裁判官は進級すると言囃され、現に有名な人で之を被つた人も知れて居る。此福帽は又水難除の効があると信ぜられ、今を去る百二三十年許前、一七七九年八月廿一日發行の倫敦モーニング、ポスト新聞に次の如き廣告が載つた。

「遠洋航海に出立んとする海軍士官の必須品。見事なる福帽。代價僅に二十ギニー。」

一般災難除の守りとして、今を距る九十年、一八一三の二月廿日の倫敦『タイムス』に、矢張こんな廣告がある。

「完全なる生兒の福帽賣却す。望の者はマイノリー市チヤーチ街二丁目二番地に問合せられたし。災難除の守り。代十二磅。」

其後一週間の同紙上に同じ種類の廣告二つ迄出て居

る。今も折々雜報などに福帽といふ語が出る。一體此膜は生兒の破つて出る子宮膜の一部に過ぎぬのであるが、いつからか此の様な迷信が、赤坊と一緒に生れて來たのである。

▲くさめ

紀元前四百年許の希臘に大政治家で大將軍で名高いゼノフォンがある時軍を集めて訓示をして『……我軍は今や天祐の下にある。』と言ひも終らぬ中に、一人の兵士が嚔をした。すると之を聞いた軍隊に、歡呼の聲期せずして雷の如く、神々を讃美して、暫しは鳴りも止まず。靜るを待つてゼノフォン、大音聲に、『戰友よ、ジュピター神天祐を下し給ふこと、今の吉兆によりて毫も疑ふ所なし』と結んだ。これで見ると、嚔の御幣は古いものであるが、嚔はいつも吉兆とは見られなかつた。今でもさうで、寧ろ凶兆である。舊教の坊さん達の中には嚔は靈魂が身體を拔ける徴證であると信じ、始終嚔の癖のある人の爲めに、特別の祈禱を捧げてやつたといふ話さへある。日本では嚔をすると、『畜生』と罵る癖がある。歐米にも傍に居る人が直ぐ『神汝を惠め』と祝し、自分は『神我を惠め』と緣喜を祝ふ人が多い。何れも惡い緣喜を拂ふ意味である。葡萄牙では嚔を仕損ふのは非常の失禮と見られ、英國のある地方には、嚔をすれば匆々帽を被る習慣がある



これ等は不思議の運命を擔ふと信じて居る嚔に對し、敬意を表するのであらう。人によつては嚔の數で吉と凶を分け、又時刻によつて此區別をすることもある。

▲鹽と酒

西洋料理には必然食鹽が出るが、それを零すのは非常に縁喜が悪いとされて居る。若し誰か此粗忽をすると、傍の人は「ア、御氣の毒の事だ。あの人の家には何か變があるナ」と思つて不快に感ずる。だから歐米人と會食する時は、食鹽は特に注意せねばならぬ。然し此時には縁喜直しの法がある。それは其零した鹽を撮んで、肩越しに後ろへ撒くので、人によつては、後ろの火の中へ撒く。つまり日本の鹽花である。

鹽を清めに使ふのは、古い、普通の慣習で、聖書にも、基督が弟子達に「爾曹は世の鹽なり」といふたとある。洗禮の時水へ鹽を一抓み入れるのは舊教の方では今もすることである。鹽は又救ひの印しと見られる事もあつて、洗禮の時「智識の鹽を受けて永遠の生命を得よ」と宣言したこともあつたとか。ある地方の人民は、朝外へ出る時は、鹽を少しポケットへ入れて行き、嫁取り、養子、衣服食物の遣り取り、皆鹽を少しづゝ添へる習慣があり、乞食でさへ、鹽を添へてやらねば、物を貰ぬ御幣かつぎもあるといふことである。愛蘭では以前、役人などの入府の時は、娘達は窓から其人の頭へ鹽花と小麥粉を撒いて祝ひ、老農は今でも、春の働始めには、畑へ鹽を撒いて豐作を祝して居る。

鹽を零せば縁喜が悪い、二人の間へ鹽を零せば交情愛情が割れるといふと同じやうに、葡萄酒を零すのも非常に不縁喜、不吉の兆とされて居る。然し妙なことには、鹽を零した凶兆は、葡萄酒を裾へ零せば消へると信じて居て、此法をやる人もある。猶ある地方の人は麥酒を零すのは縁喜がよいといひ、東歐の田舍へ行けば、東洋に於けるが如く、酒を塞へ注ぐ習慣もある。

▲靴とシャツ

靴の右左を取違へ、シャツを裏返しに着るのは、何

か悪い事のある前兆と信じて居る者がある。靴下も同様。此縁喜は古いもので、昔羅馬帝オーガスタスの殺された朝、帝は靴の右左を取違へて穿いたと傳へて居る。猶太人の中には朝起きて着物を着る時、先づ右の靴下を穿き、夫から右の靴を穿いて、紐を結ばずに左に移り、左を濟してから、右の靴紐を結ぶ者がある即ち右から始めて右で終るを縁喜がよいとして居るので、一般歐米人は右を尊ぶのである。

夫から靴についての妙な縁喜は、親兄弟などが大事の用で出懸ける時、又は花婿の通る時は、後ろから古靴を投げ付けて縁喜を祝ふ習慣で、これは日本で婿に水を浴せた習慣と一對である。愛蘭では、役人を選擧すると、其人に古靴を投げて、頭の上を越させる例があつた。



▲姿見

鏡を壞すのも、壞されるのも、不吉として大層嫌ふ誰か死ぬる前兆で、大抵は家の主人だとして居る。英國には、夜蠟燭の火で鏡を見るのを嫌ふものもある。

▲目耳鼻口胸脇

日本では嚔をすれば噂をされて居る兆として居るが、歐洲では、耳が炎ると人が自分の噂をして居る兆として居る。この信仰は古いもので、二千年の前の本にも、羅馬の文學者が同じ事を言ふて居る。

夫から左の耳の鳴るのは不吉で、右の耳の鳴るのは吉兆として居る。これも起源は古い、耳の鳴るのも、人が自分の噂をして居る兆と見られた時代もある。頰の炎るのも地方によつては、噂の兆にされる。尤も之には、左がよい噂で右が凶い噂と、反對である。噂の兆は以上ばかりでない。時と地方により目尻のピク〳〵するのも、鼻血の出るのも、話の始めに吶るのも、理由も無くて出る溜息も、鼻先のムヅ痒いのも臂の痒いのも、此仲間に入れられる。

以上の事柄は噂ばかりでなく、待人の來る知らせと見る人もある。例へば『戀人に逢ふべき宵ぞ、右の目痒き』といふ古歌がある。『さゝがにの蜘蛛の振舞、今宵しるしも』の類である。鼻の頭の痒いのは珍らしい人の來る前兆とは、今も歐米人の言ふて居ることで、夫から、蚤に喰はれて身體の痒いのも、同じ前兆にされて居る。蚤の名物の日本などでは、夏になれば、珍らしい人が來詰めで、忙殺されることだらう。

鼻頭の痒いのは、葡萄酒にあり附ける前兆として居るなどは、酒呑と鼻赤の關係を甘く言つたものと思へる。唇の痒いのは、好いた人と接吻の出來る前兆といふに至つては。一層むき出しだ。

接吻で思ひ出したが、鼻血は戀愛の兆と見られて居て、小說などにはよく引合ひに出される。始めての人と對話中、急に鼻血が出て、忽ち親友になつたなどの話もある。

然るに又、鼻血が左から唯一滴落ちるのは、緣喜が惡いが、右なら吉兆として居る。尤も人によつては、右左どちらでも、唯一滴か三滴の鼻血を大變嫌ふ。

物を食べながら、口から其物を落すのは、病氣に罹る前兆として恐ろしがる。かういふ迷信は、食事中の失禮を戒めるのに、よい方便になる。

人と並んで居る時、其並んで居る人の方の胸が動悸を打つか、其方の頰が炎れば、其人が自分を欺す積で居ると、男女間などには往々信ぜられて居る。

起きる時に右を下に寢て居るのは緣喜がよいとして居る。『メリーさん御樂み。今朝右に寢ていらしつて？』

など挨拶するので、こんな歌がある。

右に寝て居た嬉しさよ
起きて祈禱を捧げてぞ
目と手を洗ひ衣着けて
街巷に出れど跛者も
兎も見えず髯
長の
巫者にも逢は
で此朝け
不吉の前兆無
きぞ
うれしき

▲手と爪

右の掌の痒いのは錢を握る前兆。爪の根の白い部分は『天福』といふ呼稱。爪に黒い斑點の出るのは凶兆。掌の黄い斑點は『死點』。夫から同じ器で一緒に手を洗つたり、人の手を洗つた水で手を洗つたり、するのは仲惡になる前兆として嫌ふ。



猶太人は、爪は金曜日に取るものとして居るが、一般歐米人は、金曜日と日曜日には爪を取るもので無いとして居る。爪と髮を切るのは、昔から縁喜の多いもので、昔の羅馬人などは、特にやかましく言つたものであるとか。

爪を嚙む癖の人がある。非常に嫌はれるのみか、行末ロクな者にはなれぬとされる。ウッカリ之をやると氣が付いて非常に縁喜を惡がる。英語に『あなたは私の前で拇の爪を御嚙みになるのか』といふのは、『あなたは私と絶交なさるのか』といふのと同じ意味である。昔の歐洲人は、子供に危難を避けさせる爲に、拇を內

に手を握つて居るやうに仕込んだもので、溺死人の手も、同樣にして握らせた。これは、拇の爪の間から惡魔が入り込むといふ迷信に基くのである。

▲燭　火

日本で燈心に丁子が出來れば、珍しい人が來るといふのと同じく、歐洲では昔から、蠟燭の心に瘤が出來れば、珍客の前兆といふて居る。敎會堂などで祈禱中、これがあつて、火が俄にぱッと輝けば、其祈禱は神の耳に達いたと信じて喜ぶ。此瘤即ち丁子は、英國では蠟燭の「文」と言ふ一名がある。矢張よい文の來る前兆との信仰からで、アムステルダムの旅館や料理屋では、御客を此で卜ひ、若しこれが客の來る前に燃え切れて了へば、「軒下まで來た御客樣行つて仕舞つた」と言ふ。猶蠟燭のパチ〳〵跳ねるのも手紙の來る知らせ（多人數居る時は、正面に向つて居る人に）、不規則に燃えて、蠟の堤が切れ落ちるのは、泥坊の入る知らせ、此崩れが獨りで直れば、「ヤア泥坊行つて了つた」と言つて喜ぶ。蠟燭の明りが手紙を書く時、蠟燭が間違つて倒れゝば、其手紙の用向は成就せないと信ずる者もあり。手紙の墨を蠟燭の火で乾かす時、若し其手紙に間違つた字があれば、用向は矢張成就らないと信ずる地方もある。愛蘭の人は蠟燭の火を吹消した後では、「神よ願くは更に新なる天の光を賜へ」といふて寝る習慣である。蠟燭の用が少くなるにつれ、此種の迷信が段々忘れられるのは、どこも同じ傾向である。

▲爐　火

火を毀すのは、怒る前兆。消えかゝつた火の急に起るのは目出度い事の兆證。暖爐の石炭を置く鐵格子の滓灰の垂れるのは、珍客の來る前兆。樣々の迷信縁喜がある。英國の北部には、石炭の燃え滓を吟味して、—棺に似た形のがあれば、誰か死ぬ人のある前兆で、財布に似たのがあれば、金を儲ける前兆と信じて居る者が多い。暖爐の火が跳ねて、石炭の缺片が飛び出す時、其形が棺に似て居れば、居合せる者は顏見合せて青くなるなどは、馬鹿々々しい迷信である。誰か死ぬと信ずるのである。

▲轉倒

朝戸外へ出て轉べば、其日一日縁喜が悪い。馬に乗り、又は馬を牽いて出て、其馬が轉んでも同様。

閾に躓くのは縁喜が悪い。朝道で物に躓いたら、振返つて、其石なり、棒なりを蹴るべし。さもなくば其日の中に不吉の事が出来する。

夜石塔や土饅頭に躓くのは不吉。これはシエーキスピーアといふ作者の作の中にも出て居る。

楷段から轉がり落ちるのは縁喜が悪い。然し楷段を上へ轉べば吉兆。上へ轉べば落ちないから、これは如何にも吉兆に相違ない。

轉ぶことについての迷信縁喜は以上の如くで、日本にも殆ど同じ迷信がある。

▲刄物

食事の時食刀と肉叉は皿の上へ揃へて置くが法で、十文字に組んで置くと、不吉として大層嫌はれる。

情人に小刀を贈るのは、戀の縁を切る兆としてある。

剪刀剃刀亦同じ。刄物は友達にも決して贈らぬ人が多い。尤も之を贈る時、其の刄物ばかりでなしに、假令留針一本でも、一文銭一枚でも、何でも外に物を添へて贈れば、不吉を消すと信ぜられて居る。

剃刀や剪刀、小刀などは拾ふもので無い、縁喜が悪いとしてある。

▲拾ひ物落し物

歐米で忌む拾ひ物は、刄物の外、銀の細工物、銭、靴及靴下の紐など重なるものである。尤も銭は拾つて直ぐに使つて仕舞へばよいとしてある。使つて了つてから落主の知れたなどは、埋らぬ話である。歐洲人の中には、人が何でも物を拾ふのを見れば、「半分分け」と呼ぶ癖がある。別に其物を分けて貰ふ積りでは無い。拾つた物を縁喜のよい物として、其縁喜を半分分けといふ意味であらう。

縁喜のよい拾ひ物は、第一が蹄鐵である。蹄鐵を吉兆とすることは、歐米一般で、基督降誕祭のカードや繪葉書などによく此圖を見る。

落し物の中で一番縁喜の悪いのは、靴の紐、靴下の

紐、及びカチン留めである。

▲疣と黒子

日本の通り、歐米でも夫々縁喜が付いて居る。先づ心臓の上にある人は確かに悪黨で、上腹にある人は大食家で、脾臓の上のは神經質の兆で、腕と肩のは利口、右の腕は別けても議論家、脇の下は金持の名望、腮にある人には必ず心臓の近邊にもあつて、金持になる兆、手足の甲か掌にある人には腹にもあつて、子福者の兆、頸にあれば上腹にもあつて、勇力の兆、喉頸は富と健全の兆、唇は饒舌の兆、今一つ胃の強い兆、右の額は大金持になる兆、但し左は大貧乏の兆。右の耳は富と名望の前兆、左は貧乏と不名望の兆。男でも女でも、鼻の頭か前にあればしかも色の赤いのならば甚く不品行の前兆して。非常に嫌はれる。肋も其類に見られる。

唇は吉兆で、男は謙讓上品、女は勇氣の兆。膝頭は男なら出世の兆。女の左の膝頭は子の多い兆。夫から心臓の左側は大病身。胸は貧乏、太腿は大貧乏の大不仕合せといふて居る。一般に黒子や疣に生へる毛は、福毛と言つて大事にする。

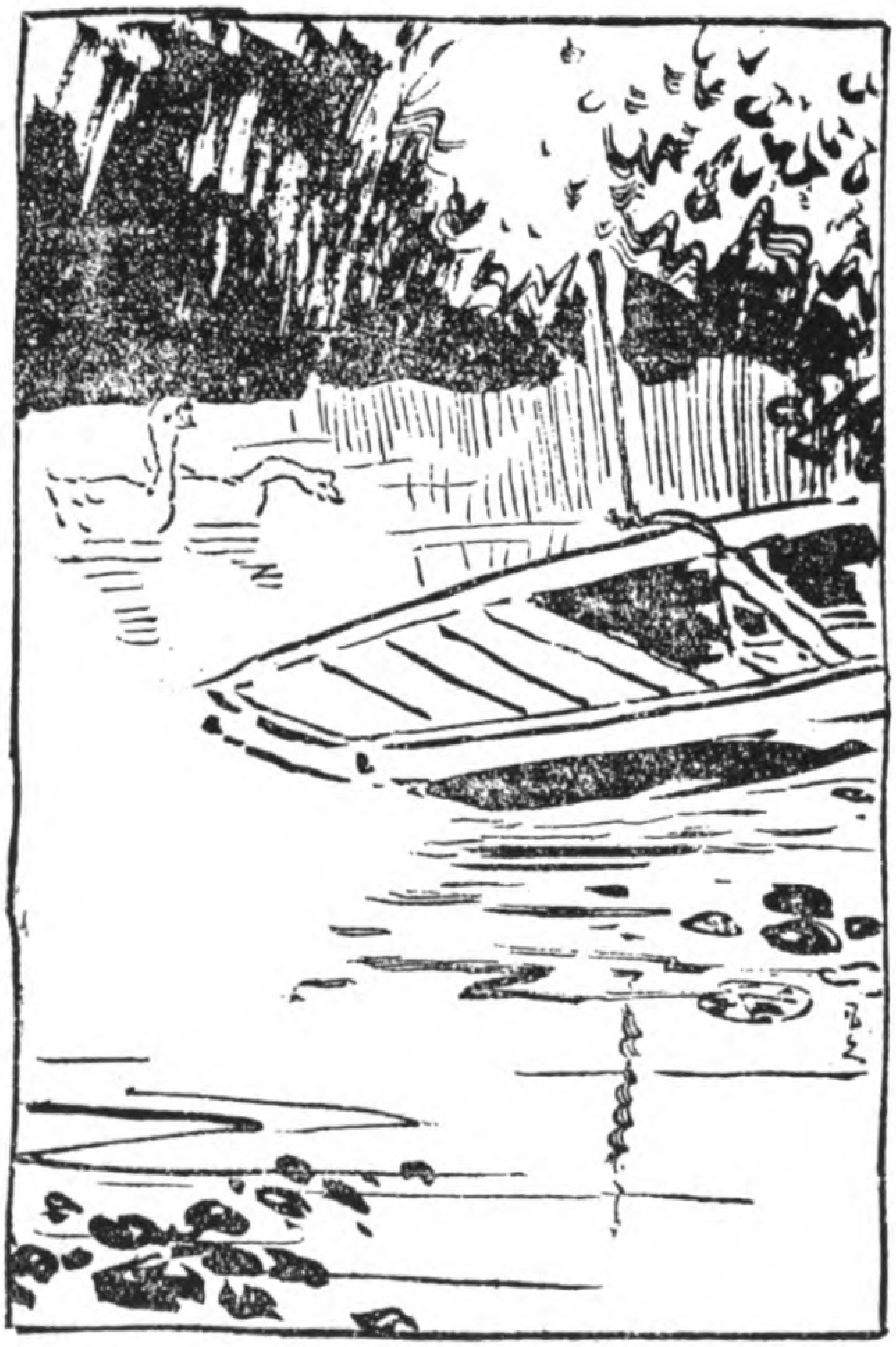
▲吐唾

日本には不潔の物を見れば唾を吐く癖がある。夫から化されぬやうに眉に唾を塗るといふ諺がある。歐洲にも昔から似た癖があつて、唾は魔法幻術を消す力があると信せられ、敵に向つて勇氣を増す爲め、自分の胸へ三度唾を吐きかける習俗があつた。英國の勞働者が同盟罷業をやる時には、同じ石に唾を吐き懸けて盟の兆とし、漁夫は出懸けに櫂の柄へ唾を吐き懸けた。夫から市場へ牛肉や鷄や卵などを賣りに出る田舎女の中には、初商ひの錢は接吻して、唾を懸けて、ポケツトへ入れる舊習を未だにやる者がある。逃げないやうにの禁厭だそうな。西ウオールスの人民は、何か不吉の事があれば『惡魔』と呼んで唾を吐く。矢張清める意である。其外右の靴を穿く時、唾を吐き込んで穿くとか、櫛の歯に止つた髪毛には、唾を吐き懸けて棄てるとか、色々な迷信が行はれて居る。

▲數

歐米人は二、四、六、八などの偶數を嫌つて、一、三、五、七、九などの奇數を好く。農夫は牝雞に卵を抱かせる時、いつも奇數にする。祝砲は三七二十一發で、神は三位一體で、一週間は七日で、七人目の子の七人目の男の子は神醫になると言はれて居る。

然るに、奇數の中十三といふ數、此數程歐米人に嫌はれる數は又とあるまい。ある市で屋敷の番地が十三番地である爲め、其處の家を借り手が無いと云ふ、理由で、番地變改を願出た話もあり、旅館に十三番の室といふのは大抵無い。十三人一室に集る事があれば、其中の一人は其年の内に必ず死ぬると信ぜられて居る。此迷信は基督が十二人の弟子と晩餐をやつて、其夜其弟子の一人ユグに賣られて、釘殺された故事から來たのである。十七世紀頃、ある日、英王エドワード陛下に奏聞した者がある。其趣旨は、カムブリッジ大學のクライスト、カレッジには學長一人に教授十二人で甚だ不吉であるから、教授の中一二人減すが宜しからうといふことであつた。其時の王の返事が面白い。『いや夫よりも、それへ猶十三人加へて、廿六人にするがよい。』此カレッジの職員數は其後久く廿六人と定つたといふことだ。



歐米では、男には七年目及び九年目が厄年で、女には六年目が厄年だと言はれて居る。此言ひ傳へは古いもので、羅馬帝オーガスタス、シーザーは、七九の大厄を無事に濟したとて、大祝ひをしたとある。今に歐米の老人に、六十三は大厄である。尤も人により六十六を大厄とも言つて居る。

二といふ數は英人間には一般に忌まれる。何々二世の稱ある王の中には、災厄に罹つた者が多いといふ。例として、英王中でウヰリアム二世、ヘンリー二世、エドワード二世、リチャード二世、チャールス二世、ジエームス二世などを擧げる。數の迷信については、猶色々面白い話がある。

▲猶

歐米に行はれて居る迷信中、基督の殺された日、即ち金曜日を忌むこと、毎月の不吉の日、鴉、梟、蟋蟀、犬、猫、鼠、豚などの動物に關する迷信、各種草木花卉に關する迷信、天候に關する兆徴、婚約、結婚、葬式、其他の禮式に關する緣喜、數へ立てるならば、非常のものになるのであるが、今は唯、歐米人間にも、かやうの迷信、緣喜、御幣があるといふことの例として、以上だけで、筆を擱く。

歐米百生活

△　△　△

佛國女學生の寄宿舍

佛國中流社會の處女にして女學校生活を爲すものは學費並に食料を合して一ヶ月百五十フラン乃至二百フラン(七十圓乃至百五十圓)を要す、人口稠密の都會は田舍よりも比較的費用の嵩む例なるが、まづ二百フラン以內なれば學習に不足を感ずることなし、彼等の食事は朝、晝、晚の三度にして朝餐はスープ一皿に麪包の大きなる切れ一つ、其外にチヨコレート若くはジヤム又はボルターを添ゆることあり、食事を濟して八時三十分に講堂に出席して二時間の後自習室に歸り十二

時に至るまで午後の課業の下稽古を爲し、十二時より一時までの間に晝食と運動を爲す、晝の食物は大概スチユーと、野菜入のソース各一皿づゝを加ふ、麪包は好み次第にて賄方は適宜に切りたるを籃に入れて持ち來るなり、この時彼等女學生が麪包を受取る時の狀は恰も賭博の勝負に類し、我れ先にと爭ふて取る若し過ちて取落すものあれば傍らにある者素早く是を拾ふて陰かに懷ろにするものも、あり。是れ一つには次の食事まで空腹となりし時の用意なり、飲料は水一壜の中に少許の葡萄酒を加へたるものを供



す、これをアパンダンスと稱せり。

彼等が遊戲する場所はやゝ廣けれど高き壁にて四方を取圍み、恰も監獄の運動場の如く、立樹なく平面の廣庭なり、遊戲はテニス、クリケツト、等なり、午後一時に至れば自習室に歸り二時より四時まで教場に出席す、斯くて四時までの課業を終り教師の手を離れ監督者の手に渡る時麪包一切を得て有合せの物と併せ食するの例なり、而して五時二十分までを運動の時間とし、同時より又自習室に歸りて翌日の下稽古を爲す、而して八時が晩餐より、其食堂に赴く

には朝晝の時と同じく二人づゝ相並びて列をなし、靜かに入るべき規則にして食物は牛肉の煮たるものと野菜一二品なり或は時節によりて食後に林檎一ッ若くは櫻の實を供する事あり、飲物は晝食の時と同樣混交物なり、食事終れば再び二人づゝ相並んで寢室に歸る、此時明日の早手廻し　身體を淸むるものあり。佛國に於ては身體の不潔なるは神の意に戻るものなりとて、監督の老婆は常に彼等女學生に向つて毎日やかましく言ふを以て彼等は毎朝寢起の時身體を洗滌するを例とす。

以上は月曜日より金曜日に至る毎日の例なるが、土曜日は休暇も同樣にして課業なき日なり、尤も朝夕は稽古室に入りて稽古せざるべからず、されど午後には監督者附添ふて市外へ運動に出掛けるなり、かくて日曜日には市中に父母若しくは保證人ある者は其家に歸るを得べし、但し監督者若しくは其他の保管人の考にて聊かたりとも平生其意に戻りし事あれば禁足さるゝ事あり、尤も歸宅を許されたるものも朝學校を出づる時は其時刻を記せし鑑札樣の物を受取り、家に達して其父に示せば到着の時刻と夕刻歸校の時刻を記して渡すを又持ち歸りて之を監督者に示すなり、夕刻は午後十時までに必らず歸校せざるべからず、以上佛國女學校の寄宿舍生活は極めて嚴重にして殆んど兵營的規律に準ずるものなりといふ。

歐洲大都會のホテル

歐洲大陸漫遊の客を以て顧客とする、歐洲第一流の旅館の設備こそ實に凄まじきものなれ、旅館の有樣は各國を通じて共通のものなるが、其の相違するは只大小の差違ありて便利と不便利の相違あるのみ、ホテルに二樣あり一を米國風といひ、他を歐洲風といふ、米國風とは食附を意味し、歐洲風とは寢宿を意味するものなり、其の宿泊料は普通倫敦に於て寢宿十志(日本貨にして五圓)食附き一磅(十圓)を相場とす、尤も大抵の客は出先〳〵にて自由に飲食するを以て單に寢泊するのみなれども田舍の遊覽者などは食附の約束をな

すもの便利なりといふ、旅客まづ旅宿に就れば、入口に帳場のごときものあり、此所にてまづ第一に宿料を取り定めそれよりガイト(案内者)に導かれて階段を昇り又は昇降機に依りて定めの室に通れば一人寢臺あり、二人寢臺あり、前者は單身の客に宛て、後者は夫婦連の客に供するものなり、室内は大凡二坪計りにして多少の裝飾あり、尤もこれは只寢臺に過ぎずして別に座敷あり、こゝは粧飾頗る華麗にして樂器を備へ、書籍棚ありて娯樂的の書物を列ね又新聞雜誌をも備ふ、されば旅客は男女互に打混じて笑語、歡話、意の向ふまゝに娯樂を慾まにして洋々たる音樂折々の興を添ふ、日本の諺に旅は憂き物とあり、又支那の語に旅行を逆旅と稱し、又羈旅の身と稱し、兎角旅には困難と悲愁の伴ふものとし、行路難等の語あれども西洋諸國文明都會人の旅行は、旅行を以て一種の娯樂となし、保養となすは其のホテルの組織既に十分風流的慰樂的なるを以て知るべし、又喫煙室に至れば美髯の紳士紅顏の少年と相談笑しつゝ一本幾金に價する煙草を喫するあり、又各自の小談話室は寢室と共に借る事を得るを以て旅客は思ひ〳〵に小談話室に入りて其の交友と珈琲を啜り、チヨコレートを飲む。又男女の化粧室ありて、こゝには姿見鏡、石鹼、ブラシ、タオル其他の化粧道具を備付け、大小便所も附屬せり、又理髮所ありて、こゝには髮の艶をうるはしくする香油、髮を伸ばす毛生藥など効能を述べて客に侑むる暴利屋もありとぞ、食堂には大小の別あり、大食堂は主に本式の食膳を供し小食堂は勝手に注文し得て手輕なり、食時には四方の坐敷より食堂に集り來り各自卓前に座を占め美人と紳士は互に眺め互に評し以て終日の慰みとなす、給仕長は食堂を監督して給仕人を指揮す寢臺にも又婢僕あり何れにも多少の心附を要するものなり、其額は人々の隨意なれども大凡宿料の一割位と知るべし、地下に二階或は三階の室あり、こゝは概ね割烹室荷物置場等に充つ、又廊下に消防機あり、火事の報知をする紐は壁側にあり又郵便箱あり、且つ爰には門番小使の詰所ありて、客より品物の買入を依托され市中

見物の案内、旅行の相談、荷物の出入より馬車の注文等一切の世話を爲し便利調寳に取り賄ふの仕組なりとも。

米國美人の婿定め

平民主義一天張の合衆國人が共和國を以て無上の天國と思ふはいふまでもなき事なれども中には自國に爵位勳等のなきに苦しみして他國の貴族を羨む者もありといふ、殊に金滿家の令孃などは親に強請て金を貰ひ外國の貧乏なる貴族の中より婿を生捕り來りて自から貴族の令夫人と成り濟まし、何爵夫人又は何伯の奥方と人に呼ばるゝを悦ぶものあるに至れり。米國の婦人は英國貴族の戀慕には抵抗し得ること稀れなりと雖も、歐州大陸の貴族共は此の限りにあらずとぞ、身體偉大にして風采も男らしく正に一個の好男子、美丈夫たるに相違なしと雖も、コサックの貴族に對しては何分其の御髯にはと躊躇するを以て常とせり、財政の不如意を以て有名なる日耳曼貴族は、コサック人よりも近寄易しと雖も、或る婀娜なる妙齡婦人の説に獨逸人は言語に優美の點なく、音調極めて殺風景にして到底妾等が生涯の友にはあらじといへり、西班牙及び伊太利の貴族は國柄の性質として嫉妬心深く彼の男の目附がどうも怪しいとてナイフを振廻すなど如何にしても戀にやさしきアングルサクソンの婦人の心には叶はず、佛蘭西人は心なき浮氣者との評判高く共に戯るゝには良き相手なれども一生連添ふ良人としては一考すべきものなりといへり、されど佛蘭西人中豈多少の好男子なからんや亞米利加婦人の是れと一生の苦樂を共にして嬉しき日月を送るもの尠からず、只恨むらくは共和政體の佛國に於ては爵位勳等は社會に重きを成さず、遺傳の權利によつて貴族たるものは概ね皆金錢に乏しくして一身の尊嚴を保つことも出來ず、さればタトエ前代に名家たりし家の公子と雖も一笑百媚を生ずる米國美人の心に叶ふこと少し斯る次第なればまづ米國富豪の婦人を惱殺するものは矢張剛毅朴訥のコサック武人なるか、されば米國と露西亞は、既に個人的に戀愛しつゝあるものといふべし。兩國が近今國際的に

親密を來したるもの又偶然にあらずといふべし。

巴里の飲食店

流石は世界の公園だけありて巴里は料理の尤も進歩し發達したる處ろなるが、市中に星の如く列なる料理店の中にもカフエアングレー、メエリンドレーの如き割烹店は就中尤も有名なるものにて一日の客數散財數千フランに上るといふ、まづ是等の料理店にて上等の料理を注文すれば酒を別として凡そ十五法（凡我が七八圓）を拂ふを常



とす、巴里の料理店には定價會席膳あり、注文選食店あり、小食店あり、而して料理に格別の相違はなきも中央繁華の場所にあるものは不廉にして場末にあるものは廉價なり、但し其價は別として市中到る處ろに各種の料理店散在するを以て旅客は寓所の何れにあるを問はず家を出でゝ何處如何なる場所に到るも食事に窮する事なし巴里の食事は起床の時に麪包と珈琲を食し、十一時より一時の間に午餐を喫し、最も念入の食事を午後の六時より八時の間に於てするの例なり、最も繁華なる場所柄

にては終夜店を開きて客を待つもの多しといへども時刻過ぐれば座敷甚だ込み合ふを以て群集を厭ふものは早く食事を取るを宜しとす、食事終りて勘定を濟ましたる時は何處も同じ習慣にて給仕人に心付を與ふを要す、其額上等店にて五十參乃至一フラン中等は其半額、下等其又半額なり、若し二人會食する時は其二倍を與ふ帳場には婦人多く勤め、給仕人は男子之を爲す、但し小飲食店にては給仕にも大抵婦人を用ひ、且つ麵包幾片バタ幾塊、何々幾個及び卓掛、膝掛の代價まで一々細かに計算するなり、凡そ巴里に來りて永く滯在し、遊樂するものは多く世界の富豪なるが、其中にて尤も多きは、露西亞の貴族、米國の紳士、南米の豪商等なり、巴里にては是等の客を稱して田舍大盡といふ、料理店の内容はまづ粗斯のごとし、次に珈琲店の模樣に就て少しく語らん、珈琲店は巴里の特色にして其數の多きこと實に驚くばかりなり、旅客若し巴里の景況を知らんと欲せば此種の店に入りて數多並列せる卓邊に腰打掛け給仕人に珈琲酒類若くは其他の飲料を注文して之を飲みながら出入の客人の樣子を眺めなどして一時間此處に止るべし、是等の店は屋の内は勿論店先の敷石上に無數の圓卓と椅子とを羅列し、其上に日覆ひの布を張り出したれば客は此處に腰打掛け街路通行の人の有樣を觀ながら食事するを常とす珈琲店は單に飲料のみならず一寸した料理をもなして小食の需に應ずるもの多し、客若し午前に到りて珈琲を命すれば給仕人は大形のコップに牛乳入珈琲を盛り、麵包を附けて出す、其價は三十錢乃至五十錢なり、若し午後に入りて珈琲を命ずれば牛乳無しの珈琲一椀のみを出す、之れを黑珈琲といふ其價十五錢より二十錢なりと。

ミカレム祭

佛國には、種々の宗教的祭典あるが中にもミカレム祭は極めて賑はしきものなり、抑もミカレム祭とは、カレム、即ち精進、潔齋紀、(凡そ一ケ月間教主の死を怨み、精進潔齋をするの時なり)の中日といふ意味にして如何に熱心なる宗教信者も一ケ月間を精進しては

身體疲弱するが故に其の中日に精進落を一回するなり何がさて久々にて肉類を食する事なればおの〱歡喜に堪へず、歌ふもあり踊るもありて、市民皆狂するが如き有様にて、各自おもひ〱の奇装をなして市中を狂ひ廻るといふ事なるが、實際は何も昔人の如く、正直に精進潔齋を成すにあらず、只祭りだけはむかしの名殘にとて今も猶保存せらるゝなり、いづれの國の祭も其の紀元は大率斯くの如きものなり、さてこの大祭は毎年三月にして、本年は三月十四日を以て行はれたり、今其の景況を見るに、まづ此祭に尤も大切なるは女王を撰擧することなり



女王とは祭典行列の大立物にして、巴里市場の賣子若しくは洗濯女工中より容貌、性質、品行共に秀逸なるものを公撰するにあり、其の撰擧法は最初女王五名を撰ひ、更に女王中の女王なるものを撰擧するものにして其方甚だ嚴密なり、此女王に撰ばれたるものは、一生の名譽にして其の衣服、冠、帽、(祭りに用ゆるもて)等は實に豪奢を極め其費用は一切祭典費より支辨するなり、又如何に身分職業の卑賤なるものにても、女王となる時は其當日、大統領市長、縣知事に謁見して、高貴なる贈り物を受くるなり、又祭の行列の通過する處は見物人拍手喝采して女

王の萬歳を唱へ、女王は一々是に答禮する樣、一寸見てはおかしけれど是れ即ち巴里にて職工を奬勵し、又細民を慰安するの良法なりといふ、されば當日の祭典費として大統領及市會よりは少からざる寄附金をなすなり、故に祭車の如き毎年美術家、意匠家に托して種々の新奇なる裝飾を工風せしむ、祭車の中尤も美麗なるものは女王の乘車なるが、是は巴里の紋章に擬したる帆前船形の大馬車にして七名の侍女其左右に附添ひ六頭の驪馬を以て牽しむる樣如何にも一國の女王と疑るゝ位なり、而して七名の侍女は、七外國を代表するものなりといふ、又行列の前後には一隊の騎兵と巡査ありて是を護衛する樣は容子を知らぬ外國人には眞に皇族などの通行かと怪しまるばかりなり。是の祭典には職工のみならず大學の學生も是に加はり大統領は學生連にも祭費補助として若干金を寄附するの習慣なり、而して當夜巴里の大通にては例のコンヘチ（色紙を小く丸く切りたるもの）の投合をなして尤も賑はし、又其並木には長き色紙を掛けたる樣、最も美麗なり、兎に角ミカレム祭は巴里の祭典中最も盛觀の者なりといふ。

獨逸人の家計

獨逸人の收入は英國若しくは米國人に比較すれば、較や少額なり、同國の經濟學者は各個の收入高に隨ひ全國民を左の四ッの階級に分類せり、

第一貴族及び上等社會　全國を通じて三十五萬家
　一歳の收入二萬四千五百圓以上

第二中等社會中の上等部　全國二百七十五萬家
　一歳の收入千三百五十圓以上四千五百圓以下

第三中等社會下等部
　歳入九百圓以上千三百五十圓以下

第四下等社會　五百萬家
　歳入四百五十圓以上に登らざるもの

さて次には獨逸人の給料なるが獨逸にてはすべて給料低廉にして第一流の公立學校長の俸給と雖も一ケ年二千五百圓乃至三千五百圓以上に登ること少し、尤も邸宅はすべて官給にして其の子女はすべて授業料を免

せらる、而して歩兵少佐の俸給は一年二千五百圓乃至三千五百圓にしてハムスボルクの如き生活費の高價なる地にありても商館に於ける手代の月額給は四百圓を超過せず、而して地主に雇はれて使役せらるゝ勞働者は妻子の勞働をも合し日曜の給金を受けて猶且つ一ヶ年合計四百五六十圓に過ぎず、而して又獨ポーランド領に屬する普魯西亞に於ける勞働賃金は一日僅かに八九十錢に過ぎずされば夫婦共稼をなさゝるべからざれども、婦人の得る處は元より男子に劣るあり、斯く婦人の給料は全國至る處に低廉にして、伯林府に於てすら從來一週間十四五圓なりしに過ぎず、されど近來は更に下落し、一週間六七圓となり、ホドセン府にては裁縫女工の給料一日十一時間の勞働にて二十五錢乃至三十六錢なり、男工の職工にありては妻子の勞働をも合し一週間拾圓五十錢の收入あるを普通とす、而して全國中にて尤も收週の少き處はシレジヤ國及びサタリン國の田舍にある手織職工にして一日十六時間の勞働に對し得る處ろ四十錢に過ぎずといふ、

今假りに一家内に夫妻と十六歳の娘一人、及び在學中なる二人の息子とより成る一家族あり、一年の收入五千圓ありとせば其生活に要する一年の費用大略左のごとし。

家賃	九百圓	衛生費	五十圓
保險料	三百圓	教育費	百五十圓
税金	六百圓	遊興費	百圓
食物費	千四十圓	煙草代	百圓
雇人費	百五十圓	郵便料	貳拾圓
燈火及温室	百圓	修繕費	八十圓
酒代	百八十圓	贈答費	五十圓
庖厨雜費	五十圓	避暑費	百六十圓
洗濯費	百三十圓	緩急出費	二百圓
衣服費	六百圓		
合計	四千九百五十圓		

而して一年三百五十圓以內の收入にては如何に獨逸にても生活頗る困難なれども、中等の收入あるものは只衣服と食物と、奴婢とを儉約すれば足り、好景色

の地は英國に於けるが如くならず至る處ろにあるを以て簡易に其の探勝をせり、冬期は世界に秀抜せる音樂を耳にして樂み、英國よりは少額の費用を以て却て多くの快樂を味ふ事を得るなり。

佛國の勞働社會

佛國勞働社會の狀態を知るは田舍の農家を見るに如かじ、巴里は世界の花なれども巴里を見ては佛蘭西の生活は知るべからず。巴里の女の一面は或は花にたとへ、或は柳になぞらへ、婀娜窈窕として人の心を惹く自然の婦女も、農家に育ちしものは自から進んで飾り又粧はんとするものもなく、春秋、寒暑を問はず、毎日荒き風雨にさらされて骨は稜々髪は蓬々として、衣服を着ればとて緣あるものにあらず、帽を冠ればとて花や羽毛を縫ひつけたるものにあらず、額髪には前掛を懸けず、身邊いづこをさがし求むるも寶玉類を見ず粗き布の上衣に、無色の帽子、其淡白淸素なる事實に勞働其物を人體に形容したものゝ如し、是れさながら干渉敎育、强迫敎育の恩澤に潤はざるの致す處ろにして、やがて恩澤の普く及ぶ時に至れば忽ちに婦女子は髮や衣物に都會驕奢の風を輸入し、少年子弟は墳墓の地に、鍬鋤執るを厭ひ、嫌ふて縞のズボンに、ハイカラステッキの手代番頭、僞せ紳士を眞似んとするに至るべし。然るに佛國の農家に於てはいまだ是等の厭味を見ざるは流石なり、此柔順にして勞苦を物の數ともせざる農家の婦女は即ち一國の脊髓にして又大佛蘭西國の基礎なり、其田畑にありて耕作する時も、最寄の市場に出でゝ僅かの生産品を購ふ時も又家内にありて些細の世帶をくり廻す時も、勤勉更に倦まざる一例を擧げんに、小牛を曳いて野に出づる時と市場に出づる時とを問はず、又置ならべたる露店の傍らに危坐して客を待つ間も、停車場にありて滊車の來るを待ち合はすの間を論ぜず、暇さへあれば毛糸を手にして靴下の編物に餘念なく、一分間たりとも空しく費す事を知らず、曾ちて鄕里を離れて遠方に出たる事なければ人間世界大なる事を知らず、數反の耕地と一匹の小牛とが

即ち彼等の爲めには世界なり、されど其の耕地と小牛は彼等の質素儉約の操り廻しによりて得たる處ろなれば數口の家族之によりて安樂に衣食するは實に彼れ等の爲めなり、其の容貌は前述の如く見苦きまでに荒びて見ゆれども、其の樂みは夕顔棚の下すゞみ、健康なると安樂なるとの一段に至りては敢て企て及ぶものなし、公債株劵は上るも下るも關係なければ其心を亂すに足らず、臍くり金は其儘貯へ置きて敢て人に托せず銀行の役員會社の支配人若しくは株式仲買等を心に尊敬すれどもさればとて靴下の代價積つて幾干の高となれば我が耕地の端を買ひ補



すのみ、朝起るごとに目に見へて更に失ふ恐れなければなり、主婦の爲す處ろ斯くのごとし、而して娘も又これを見眞似て日々勞働の賃銀を貯蓄するの外餘念なく、得るに隨つてこれを貯蓄銀行に預け置き彼の都會の少女が寫眞を撮るが爲めに毎月新らしき帽子を買ふがごとき事なし或る家に母の召使ひたる二十五年間勤めつゝきしものあり、其の息子の暇を遣はさんとせし時、息子は其下女を招きよせて其方は永年實貞につとめてくれ母も大層喜んで居るが年老りては、働くも否なるべければ暇を與らうと思ふが、いづれにしても其方の勝手にするがよし、若

し又暇を取りても氣樂に暮し兼ぬるならば遠慮なく言へば、暮らしのつく樣にして與らう、併し是まで幾分か貯へもあるならんが、何程あるやと尋ねたるに、彼れはスエズ運河會社の株一ト株を合せて堅固に預けたる貯蓄金額一萬フランク（五千圓）ありと聞き、其の息子は一驚を喫したりといふ、佛蘭西の大國たる所以は實に彼等勞働婦の堅固なる勞作、勤勉にして節儉なる貯蓄心に基くもの多しといふ。

暗黑の倫敦

數百千萬の財産を擁して富貴を世界の王公と競ふ大富豪十萬人あればこゝに又飢寒を忍び窮乏に堪へざる貧民十萬あり、金持の多きは倫敦の名物なれども乞食の多きも又倫敦の名物たり、市街の東端に貧民窟あり實に倫敦市犯罪の養成所たり、人若し此の社會の實況を見んと欲せば、必らず警察廳に依賴し其保護に依らざるべからず、然らざれば如何なる危險に遭ふやも知るべからずといふ。中には慈惠病院の醫師若くは食物を施與する爲めに行く僧侶と同伴するものあり、今其の概觀を略述せんに彼等惡徒の溜所には父子の間に掏摸の術を教ゆるものあれば兄弟の間に火付の法を授くるものあり、數家族雜居の一室は皆裸體にして一枚の衣を轉々流用して外出するものあれば或は紳士風を粧ふ惡漢等は絹の高帽を冠り、羊皮の手袋を穿つもあり、盲者にして大なる眼を開き談笑するもあれば跛者にして立相撲を取るものあり實に一種の梁山泊なり、而かも其の區域は極めて廣く世界各國の貧民輻輳して惡業至らざるなく、中には阿片窟といふありて阿片を喫する仲間あり、又此の内には貧民同士の娛樂に充てたる芝居、寄席、料理店、倶樂部もありて宛然一の貧民世界を構成せり、中には貧民必らずしも貧ならず、路傍に盲啞を裝ふて行人に錢を乞ふ者の中に巨萬の財を蓄ふ者あり、又市中にて乞食するも決して食を乞はず、唯錢を乞ふを例とし、是を以て麥酒を飲むものありとぞ、兎に角英國犯罪の三分の一はこの窟内に潜伏するものなりといふ。

和蘭の風俗

和蘭といふ國は奇態なる國なり、其土地は海面より數十尺も低きを以て海岸に土堤を築きて海水を防ぎ以て僅かに洪水氾濫の憂を除けり、この故に國民は極めて勤勉なり、此國の特色とも稱すべきは古風なる風車を以て製粉、木工等の諸業を營むことにして首府ロッテルダムの近傍は無數の風車郊野の間に林立して頗る奇觀を呈せり、此風車は圓塔形にして其頭部に風車の廻轉するあり、内部は三四階に畫して製粉、木工其他種々の用に供するもの尠からず、されど多くは運河の水を新陳代謝せしむ



るが爲めに使用するものなり、我國にて風車といへば只小兒の翫具として見るのみ、製米製粉等に用ゆるは概して水車なり、風車を製造に利用するは北獨逸より和蘭邊の風俗なり、此の國都會の有樣は家屋雅致あれども佛蘭西、獨逸の都會にある如く鮮麗ならず、又宏壯ならず、されど和蘭人の性質元來清潔を好むの風ありて洒掃を善くし、洗滌に力むるを以て市街舊く且つ濕氣多きに拘らず、さまで不潔なることなし、田舍の農家も亦同じく潔癖村と稱する村あり、到り見るに市人の風俗は別に異る點なしと雖も一歩田舍に入る時は忽ち蘭人特種の風を見るべ

し、即ち軀幹短くして肩幅廣く、衣服も亦一種古風のものを用ふ、彼等は勤勉にしてよく事物の利用法を考へ、たとへば水底より揚ぐる泥炭は之を乾して燃料となし、粘土は之を燒きて煉瓦石となし、沼池は水を排して牧塲又は畑地となす、而して古來湖水を乾かすもの幾十百といふを知らず。

元來此の土地は獨逸の山地より流下し來れる土砂と大洋の風濤が齎らし來れる土砂によりて成り、海岸に三十尺より二百尺の自然堤防を築きて海水を防ぐ處ありといふ、故に其地位甚だ奇にして海上より望むに其國を見ず、陸地は却て水準の下にありて河中より陸上乘馬の人を見るに低く眼下に瞰むが如き甚だ奇觀なりといふ、さればこの堤防を維持するの爲めに一都府にて一日數千圓を要すといふ、若し此土工を怠りて一朝決潰する事あれば忽ち生命財産を流失するのみならず國土は悉く海水に浸されて桑海の變を見るに至るべしといふ。

米國女學生の家庭に於ける理想

左の一篇は米國の淑女家庭雜誌に掲載する所なるが、彼の國女學生の理想を伺ふに足るものあれば、左に抄譯しつ（舟人）

記者は理想的家庭に就て米國令孃達一般の思想を叩くも亦た一興なりと思惟し、百人の女學生達に對して左の如き意味の問題を課せり。

第一　從順なる言葉は文字通りに解釋して然るや、或は尙ほ廣義の意味に解釋すべきか、又は全然婚姻條件の中より除いて可なるや。

第二　夫は妻を制限せず其の好む所に放任して可なるや、又た妻は夫を如何に待遇すべきか。

さて、此の第一の問に答へし大半數の女子の意見は從順は婚姻條件の中に是非共附加すべきもの也となすにあり、而して十七人の者は文字通りに之を解釋すべしと言ひ、二十名の女子は尙ほ廣義の意味に說釋すべしと言ひ、他の十人は解釋の點に於て別に特種の意見なし、而して是等の應答者は孰も高等專門女學校の卒業生なりき。

ブラウン大學校の一女生は答へて曰く、從順は文字通りに解釋すべし、而して決して婚姻條件の中より除

去すべからず、何となれば、家族の事は恰も社會の團結の如くに其首領に最上の權限ありて初めて圓滿を得るものなればなりと。

神學校の女學生は曰く、自己の心に愛情の充溢するあれば、其の夫に服事する事の如きは決して難事にはあらで、寧ろ爲し易き當然の義務なるを思ふや必せり妾等は自巳の愛情を支配する所天に對しては唯だ〳〵滿腔の愛情を献げて、出來得る限り忠實に働き、且つ從順たる事を欲するものなりと。

南部地方の一女子は曰く、從順なる言葉は、苟くも權謀術數に長けたる婦人に向つては、何等の苦痛も何等の恐懼も起さしむるなし、寧ろ易々たるのみと。

次にウエルス高等女學校の卒業生は意氣昂然答へて曰はく、妾は己よりも學識に於ても理解力に於ても遙か造詣深き男子ならねば婚姻せず、即ち社會の公人としては重大なる問題を處理する手腕を有し、一家の主人としては天晴家長の品位を有する底の耻しからぬ男子を理想の夫とすと。

又た西部レザーブ大學の女學生は答ふらく、妾は此の從順なる言葉を文字上よる解釋するを好まで、善きも惡しきも夫婦互に商議したる上にて、其の最後の議決に服從せんのみと。

バックチルの文學好の女學生の意見に曰はく、妾は從順なる言葉は全く儀式上より取除かん事を欲す、苟くも思慮ある夫は、其の妻たるものゝ平安幸福を欲する時に限りて命令を下し、其他の些事には頓着するものにあらず、故に夫の斯かる愛情より來る命令に對して何ぞ其の妻たるものゝ喜んで服從せざるの理あらんや、要は唯だ信用の問題なり、さるに今更事々しく從順云々と儀式張るは、却て夫婦間の情味を殺ぐ事甚だしきものなりと。

次に第二の問に對しては、殆ど意見を一にし、七十一人の女子は夫の自由主義を欲すると云ふ事に一致し只だ七人の異說と、十二人の多少論鋒を異にする者ありしのみ。

ニユー、イングランドの一女學生は曰く、夫たるものは妻女自身の化粧は無論の事、家事萬端、時に臨時の費用を支辨する事等を妻の自由に放任して可なるべし、又た一女子は正義の感情より割出して曰く、妻女に自由を與ふる事は寧しろ當然の事に屬す、若し夫れ一家の主婦にして常に出費を手帳に記入して、其の家政に周到なりとせば、自然家庭は圓滿に、和氣靄々た

るべく、夫たるもの又た後顧の憂なかる可しと。

又た他の女子は曰く、家事整理上の最良の方法は夫をして妻の名義を以て月々銀行へ預金せしむる事なりと。なほ他の一女子は之に和して曰はく、斯の如きは妻たる者の當然の要求なり、一家の主婦として自由に活計上の出費をなすべき權利を與らるゝを要すと。

家政に關して或者曰く、夫妻共に結婚の當初に於て之が商議をなすべし、而して豫め夫の收入と利得の多寡を知り置くべし、かくて結婚後は共同して夫の收入を處理し行くべし、又た其の中幾分を割きて銀行に預くる樣にし、必要に際しては夫妻の孰方にまれ隨意に引出し得る樣になし置く可し、凡そ婦人にとりて僅か許の金を其の都度夫に請求する程いやな事はなし、而も夫が金錢上に關して妻の權限內に立入る事を許すべからず、假令如何に收入少き人たりとも、身分相應に此の法に從ひ得らるべく、決して收入の多少には關せざるなり。

或る牧師の娘は曰く、夫は收入の半を妻女に渡すべし妾は實に是の如く實行しつゝあるの家庭を知れり、而して其の家族の者各自よく一致和合して家務に鞅掌しつゝあるを知れりと。

良人の待遇法に就て、ウイスコンシン大學卒業生の答に曰く、此の問題の如きは、畢竟良人たる男子其人の如何に據つて定るものなり、故に妻女たる者は能く夫の性質を觀察研究し、且つ如何なる方便を以て夫に對すべきかを先づ研究せざる可からず、若し夫れ妻女にして十分現在に滿足して、一家の和合を圖るに於ては、自然夫を誘導して、茲にスウヰート、ホームを造り出す事、蓋し容易の業なるべし、又た妻たるものは時に臨み變に應じて必要なる頓智の才をば常々養成し置くを要す、即ち夫を怒らす事なくして自己の主義を遂行する樣努むるを要すと。

西北地方大學校の一女學生は、之に對して次の結論を與へたり、曰く、過去二ケ年間妾はつとめて圓滿に生活せる數個の家族に就て觀察を試みたり、而して其の結果男子を感化するは眞に婦人の伎倆にある事を知れり、若し主婦にして性質溫良、奇麗好且つ優雅にして、常に家事に意を用ゆるなれば、不知不識の內に夫を感化誘導して、決して失敗する如き事なし、妾の見たる第一の家庭に於ては、其の夫なる人怠慢自墮落にして不精者なりしも、至つて善良の婦人此家に婚嫁せしより、遂に夫を感化して圓滿美麗なる家庭を造るに

到れり、之に反し他の二個の家庭は、其の妻なる人が家庭に對して愛情なく、趣味なく、常に外出を好み、家事を等閑に附せし結果、其の家は結婚以來、漸やく零落して次第に貧しくなりゆけり、と。

次に廣く諸方を旅行せし某婦人曰く、家庭の融和に最も必要なるは食事なり、總べて男子といふものは其の妻君が特に食事に注意するを好むものなりと。

又た一女教師は之と同意見を發表して曰く、食物は男子の心を融和ぐる上に大なる効あり。若しも食事にして注意深く獻立られ、而もその食品が夫の賞美するものなりとせば、夫の心を慰めて、爲めに家庭の不興を一掃し去る事あるべし、と。

又た一女子は論じて曰く、妾は信ず、若しも妻たる人にして最も樂しき狀態に家庭を作らんと欲せば、必ずや先づ、夫に不快の念を懷かしむるが如き事なきやうに留意する事肝要なり、即ち家内の些事には夫を煩はさゝる代り、自己の一量見に持餘すやうな重大の事に當つては、夫に相談をかけて、夫も亦た家事に責任を有するものなる事を覺らしめ行かんには、決して其意を傷ふ如き事なからんと信ず。

又某女子は曰く、婦人の品性及び容貌は又た大に男子の愛情を引き、夫の心を支配するに與つて力あるものなり、男子は妻女の容貌美にして能く衣裳の整ふを愛すとかや、故に婦人は化粧に意を用ゐ、服裝に氣を付け、決して不潔不體裁なるが如き事あるべからず、即ち朝は必ず化粧を施し、特に髮は亂さぬ樣注意すべく、又た夕も衣裳に注意して、夫が歸宅するに當りては、奇麗に取繕ひて出迎ふるやう心懸く可し、と。

コロラド大學の女學生は乾然たる態度を以て曰く、夫婦相互の氣心を知り合ふて、双方の見解を融合し、時に御互に起るべき誤解をば、正義の精神を以て解決しゆくやう勉めなば、一家の事何かあらん、と。

此の時傍聽の青年賢家は口を挾んで曰く、嬢等の言ふ所孰れも善し、然れども嬢等は完全なる主婦ならんと心掛くると同時に、又た愛嬌あるべく、快活なるべく、賴母しかるべし、余は實に斯の如き婦人を欲す、と。

下婢學校

下婢學校は岡山市に一ツ新潟市に一ツあるが今新潟のものゝ近況をきくに昨年四月同地婦人教育會によりて創立されしより以來毎金曜日午後八時より二時間宛の授業をなし來りしが學科は修身、讀書、書取、算術の四科にて成績頗る佳良に校運亦盛にして今は二百名以上の生徒を收容し居るに至れりと云ふ。

岩崎家の臺所

▲明治の金穴岩崎家に於ける所謂駿河臺様即ち彌之助氏は亡兄の奢侈に反し質素を旨とする、善く云へば節儉家である。

▲駿河臺東紅梅町の本邸には和洋の料理場が設備し、コック場の暖爐の火と、料理場の爼板の音が之までは絶えなかつたものだが、日露開戰以降は、時勢に鑑る所があつてか、彌が上にも質素を旨とし、駿河臺の本邸の門柱には何時も、主人不在中との掲示がある位だから、本邸の和洋料理は殆ど中止の狀態となつて、從來使用せしコック齋木某は先頃より俸給は給與するが當分の中解雇と云ふ事になつたので、齋木某も戰爭の終局まで捨扶持も貰つて居られないから、東京裁判所の辨當屋になつた相である。

▲所で彌之助氏は多く其の別邸なる高輪南町に夫人と共に同棲して居らるゝ相だが、別邸内には本邸より附渡りの料理人藤太郎と云ふ男が庖丁を握つて、さま〲の献立を選み珍味を調理して居る、藤太郎の手になる魚類の原料は、毎朝日本橋の魚市場から購買するのだが、此の出入魚商は本小田原町の佃金と云ふ家だ。

▲月末に同家の通ひ帳に記入された、魚類の通算高は二百圓内外を往來して居る、併し之れは時局により儉約の際だから然う云ふ算盤なので、以前は殆ど現時の二倍以上の事もあつたが、此の佃金で購買する魚類はお奥、即ち家族の食料に供する物のみであると云ふ。

▲岩崎家を稱して吝嗇家など、世間には非難する者があるとは云へ、僅の家族で一ケ月二百餘圓の魚類を食すと聞いては餘り質素とも思はれないが、亡兄の奢侈に對照するので、殊更に節儉のやうに見えるのであらう。同家で嗜好の魚類は甘鯛、糸捻鯛、生鰹、鮎の類で、鯛鮃の上等魚類には重きを置かない。それに總て走りの魚類と本場物を選擇するので、小な魚籠の中へ十圓位の魚類が入れられる。上等で高價の魚ばかりだから、奈何しても一ケ月には二百圓以上に達するのだ相である。（太平洋拔萃）

敵國旅行 西比利亞日記

WI女史

第一便（南阿ケプタウン市より）

西比利亞ブラゴエシチエンスクとし云へば北清事變の際、三千の清人アムール河に慘殺せられたるを直に思ひ起さるゝならん。

妾一家はこゝに來りて醫を業とす、人口凡六萬、多數の支那人あり。

日本人は二百五十余、重に商工人、寫眞館四軒及び專門歯科醫もあり、其餘は記するも忌まわしき職業の婦女百余名ありて何れも露人間に營業す、居留民事務所なるものありて同胞間一切の事務を辦じ大に親睦しつゝありき。

日露問題に就ては猶人の心を痛むる程には非ずして無事に明治三十六年を送りぬ。

やがて新年は來りぬ、明治三十七年とはなりぬ。

此頃に至り日本より來る處の新聞雜誌類、時局に對する記事は悉く浦鹽に於て或は塗抹或は切拔かれ、加ふるに一ヶ月遲れて着するより日本内地の情況更に知る由なかりき、併かしながら風雲少しく荒立ちたるを悟り歸國を望む者無きにあらざるも、悲しひ哉此武府の地冬期旅行の困難なる事一通りにあらず、汽車の便なく、アムールは全く堅氷を以て塞ぢられ、汽船の通路なし、僅かに氷上橇を通じて旅行者の爲に供するも永き日數を要し、慣れざるものは寒氣に堪ふ可からず、加ふるに費用の莫大なる實に夏期の十倍とす、是等の事情の爲め今如何ともする能はず、五月の解氷期をひたすら待ちつゝありき、然るに

一月廿七日、浦鹽斯德なる川上貿易事務官より一の諭告書は來りぬ、其文に曰く（大畧）

目下日露間の關係は多少切迫せるの事跡無きに非ざるも、兩國間には依然として親和的談判繼續しつゝあるを以て、宜しく沈重の態度を執り漫りに動搖すべからず、今後萬一不幸にして兩國の和破るゝ時は居留民の保護歸國及其他に關しては我政府に於て

相當の處置を執るべきに付き、各自從前の通其業務に安んじ輕卒の擧動なき樣注意すべしと、是により多少切迫せるを知るも未だ引揚を要する程にはあらずと感ぜらる。

又廿九日、第二の諭告書到着す、即ち大畧すれば左の如し。

日露間に就ては多分平和的の終局を告ぐるに至るべしとは存じ候へ共、國際上の關係は何時如何なる急變を生ずるや豫知すべからず、若し兩國の和交破裂するの場合には帝國臣民の保護は特に拙者よりも露國地方官に依賴するの手筈なるも、猶其地方在留の我同胞は此際至急重立ちたる者居留民を代表し別紙の意味にて願書を認め候て其地州知事に差出し、電信を以て願意を大守に上申すべし、此手續を爲し置く時は有事の場合好都合なるべしと自信致し候間、至急右御取運び相成り度し云々。

人々大に驚き、事務に於て有志協議を開く、即ち二月一日、主立ちたる人々六名極東大守に差出すべき願書を携へて知事を其官邸に訪ふ、知事直に面會す、依て懇々願意を述ぶ、其返答や如何に、先づ大に冷笑して曰く、戰爭などはありはせぬに、又更に言葉を改めて、目下日露の關係に就ては平和的談判進行中なり併し萬一破裂するの場合には大守に願書出す迄もなく本官に於て在留日本臣民に對して充分の保護を與ふべし、猶各自に於ても注意怠りなからん事を希望すと、代表者大に安堵し歸りて一般同胞に報告す、翌二日、武府警察署長は寫眞師某（此人は露語に精通し温厚篤實露人間にも大に信用ある紳士）を出頭せしめて曰く一朝有事の場合には縣知事は勿論、本官に於ても充分保護はすべけれども、若し不行屆の事ありては氣の毒故、各自營業を廢し一ヶ處に集合して護衛巡査を雇ひ置るゝ方宜しからん、而して其雇入れに就ては今より申込み置かざれば其當時に至り必ず巡査の不足を生ずべきに付き、或は應じ難き事あるべし、巡査一名一ヶ月の給料金二十留は各自に支拂ふべしと、あはれ何たる無責任の言ぞや、驚くの外なし、つまり勝手に巡査を雇ひて護衛させよと云ふにあらずや。昨日知事の言にて幾分安心せし人々又大に驚然たり、或は事務所に會して協議し、或は家内に額を集めて方法を謀る、妾一家に於ては斷然出來得る限りの方法を講じて、一

日も早く歸國せんとす、實に是れ千載一遇の好機男子は勿論女子たりとて聊か國恩を報ずるの秋なり。

三日、突然事務官より來電あり。

ビンセンアルキコクナノゾムモノハシキユウトウチヘキタルベシ。

續て浦鹽居留民總代川邊氏よりも左の如く申越さる。

ニチロカンケイセツパクデンポウツキシダイイチドウトウチヘヒキアゲナノゾム

あはれ〱、人々の驚きや如何に、更に此時の同胞間の混雜は云ふも愚か、殊に婦人の狼狽と悲みはいか斗、茫然として爲す所を知らず、男子は直に事務に會合して



協議す、二百六十の同胞一時に引揚ぐると云は冬期にありて容易の事に非ず、如何なる方法を執らんとするかと人々狂氣の如くに寸時も早く出立を望めども、茲に又種々なる困難ありて中々決するを得ず、層一層人の心を痛め行くのみ、第一には莫大なる其旅費の件なり、浦鹽迄如何にしても一名八九十留を要するに、そを調へ得るもの半數に達せす、第二には多數の橇の調達なり、兎に角浦鹽へ打電して事務官より旅費の補助を乞はんと、直に右の趣を報しぬ、然るに望なき返電は來りぬ、

即ち金員の補助は出來ずと、是に於て資無き人の失望落膽筆紙に盡し難し、旅費無しとすればこゝに籠城せざるを得ず、野蠻國と名を知られたる敵國に殘留せば此先如何に成り行くや、又アムールの二の舞を演ずるなるか、或は幸に生命は全ふし得らるゝも如何なる憂目に逢ふならん、嗚呼是非も無き運命と各覺悟は極めても、又更に幼き小供を持てる人々の悲歎云ふ斗なし、或は事務官の報を綏なりと恨み、或は過般多額の金員を本國に送りたるをかこち、或は去年の夏歸國せざりしを歎くなど一々名狀すべからず、いかにも憐れなる有樣なりき、此時に至るも露國新聞は猶危急を傳へず、露人又平然たり。

六日には歯科醫の君一家處財道具盡く打捨て、蒼卒出發せられたり、同日某寫眞館の内より三人出立す合せて右七名第一の出發者とす、我家に在りては多くの患者を有し居るなれば、到底俄に出發し難し、家の片附其他如何にしても二三日を要す、併しながら二三日を經過するうちには國内の模樣如何に變するや斗り難し、こゝに於て良人の云はるゝに、かよはき婦人の身には靜かなるうち一刻も早く浦鹽に到るこそ得策ならん、途中コザックの村落を橇の旅行はいと危險なれば、先づ御身丈け早く安全の地に行かれよ、同行者はいくらもあらん、自分等二三日を待ち一家を擧げて出立し全速力を以て御身の後を追ふべしと、妾熟々考ふるに忝じけなき命なれど、此場合二三日の後果して出發するを得給ふや、或は如何なる急變ありて意の如くならざる事もあらんかと、何卒共に出立の叶ふ迄、先發を許させ給へと、再三歎願に及びたるも赦されず他の人々よりもそは却て双方の爲不利なりと皆出立を勸めて止まず、さらばと斗漸く決心し、兎に角浦鹽に到りて待ち參らせんと約す。幸露語に熟達せらるゝM氏明七日早朝出立の筈なりと、依て同氏に同伴を乞ひたるに、快く承諾せられぬ、明朝迄僅半日一夜、其間に防寒の用意、食料品買求め、暇乞など忙しき事たとへ難し、暇乞とて同胞を訪へば、羨む者いと多く籠城と決心せし人々は皆書を妾に托して曰く、日本に

着せし時投函して給はれと、宛名には或は親に、或は妻子に、或は親友に送るもあり、何れ涙の筆のあとなるぞあはれ。

最後に妾が露語の師、即露官吏夫人を訪問し、詳細の事情を告げて斯の如き次第故早急ながら明朝出發すべしと云へば、師の君の驚き一方ならず聲を放て泣きぬ、稍ありて曰く思はざりし御身と今別れんとは、いと深かりし日頃の愛、御身は捨てられしか餘りに情なし、戰爭は國際上の爭ひなり、何ぞ我等の知るべき事にあらん、どの樣にもして我家を保護し參らせん程に何卒〳〵良人と共に歸國を思ひ止まり給へとひたすら止めてやまず、あゝ敵國婦人とは云ひながら其眞情面に表はれて慈愛に富める程歡く々の言の葉いとうれしく、又悲し、今は留る時にあらず、又遇ふ事もなかるべしと思へば、種々に慰め參らせて覺束なき再會を賴みつゝ別れぬ、其夜色々の贈物を持たせて師の君は其良人と共に訪ひ來られぬ、其他懇意にしたる露婦人には態ど告げざりし。



此夜はたゞせわしき〳〵うちにいつか東はしらみそ

め出立の日となりぬ、仇の國とは云ひながら住み慣れし我家も今日を限りと思へば、いとゞ名殘の惜るゝなり、咽喉へ通らねども漸く食事を濟して防寒の支度す着衣の摸樣を記さんか、先づフランチルの肌着三枚、綿入の股引、靴下三枚及一枚の上衣を纏ひ、腰以下にはフランチル二枚及羅紗の女袴三枚なり、毛革の外套二枚を着し、頭は毛の帽子の上よりフランチルにて眼丈けを出して充分に包み、足には猶毛布を卷きて其上よりカートンキと稱する毛にて二分程の厚さに作りたる長靴の如きを穿ち、手には皮手袋を二重にす、實に歩行自由ならず。

先づ馬車を雇ひ、家内の者に送られて同行者なるM氏方に到るに、同氏も既に用意整ひ、旅行用の橇も來りぬ、M氏知已なる多くの露人皆名殘を惜しみつゝ懇ろに世話をなし、種々なる忠告を與ふ、やがて橇に乘うつるに、先づ大なるふとん二枚を敷きて、其内に入らんとするに、妾何分身體自由ならず、二三の露人助け乘せたり、猶種々なる親切を盡す、實に敵人とは思はれざるなり、此の日天氣晴朗寒氣は攝氏〇度以下三十度午前九時いよ〳〵武府を發す、武府町はづれ迄來りて見送り人と別れぬ。

是よりは名高き西比利亞荒野氷上旅行を試みんとす平時ならばいと面白き事ならん、併しながらこゝは敵國なり、露西亞なり明日の運命やいかに、妾等無事歸國を得るか、我一家果して出發し得らるゝか、はた又殘留せんとする人々やいかに。

第二便（マダカスカルより）

武府の市街を離るれば、たゞ曠莫たる銀世界にして更に目を遮ぎるものなく、太陽の光まばゆきのみ、寒風遠慮なく僅かに顯はせし面を襲ひ、痛さ堪へ難くて毛布にくるまり臥しぬ、行く事廿七露里（我一里は凡四露里）、三時間斗にして第一の驛處に着す、人家僅かに數軒、其中の一軒は旅行者の休憩所及橇を取扱ふ可く定められてあるなり、室內に入れば二ツのテーブルと數脚の椅子あるのみ、こゝにて暫時休む程に、橇、馬、

馭者、新になりぬ、ハバロフスクに到る迄實に八百露里、四十ヶ所の停車驛ありて、着する毎に必ずかくの如く總てを取換へ、乘客は室內に入りて體を暖むるなり、然らざれば到底寒氣に堪ふ可からずと。

扨てこゝを發し同じ事に進みつゝ二時間或は三時間毎に各驛に着して行くなり後より出立し來る人々の便利にもと休憩の時間を利用して、途中の模樣詳細に認め、武府へ差出せしも後にて聞けばそは着せずして警察に沒收せられしとか、惜くや折角の心盡しも水泡に歸しぬ急ぐ旅にしあれば食事の時も心せき夜に入るとても更にまどろむ事なく、ひたすら馭者をはげますのみ、されど己れには後に心引かるゝにぞ、そも又いとゞつらしや。



八日(二日目)

午後四時、第九驛に到る、こゝは人家三四十もあらんか、始めて村落らしき處を見る、むさくるしき農家の小供等集り來りて珍らしげに見入り居るもおかし、日本人など知らぬ者多かるべし、實に呑氣なる此邊の露人は戰爭などゝは未だ夢にも知らざるなり、或は問ふて曰く何の爲めに寒中態々旅行せらるゝにや、氷が解ければアムール河に船の便ありなど親切に敎へ吳るゝさへありけり、夜に入り八時過る頃第十一驛に着すこゝにて夕食せんとす、食事の

有様を述んか、何處の驛にもたゞ茶とパンと砂糖と牛乳あるのみなれば、こゝにて、まづ茶とパンを求む、無論パンは黒パンなり扨て副食物は自分等持參のものカツレツ、ビフテキ、ソップの氷を取り出し、暖めしめて食するなり、たとへ器物は汚なくとも熱き茶とソップ、暖き肉のうまき事は實に平時の山海の珍味にも勝るなり、これにて體も暖まり勇氣も出でぬ、かゝる困難なる旅路も便利なるは食物の携帶し易き事なり、何日にても腐敗する事なく、たゞ袋に入れたるまゝにて持ち行き、食する毎に少しづゝ暖めさへすれば、直に出來立てと同様のものとなるわけにてソップの氷を旅行用とするはいと妙ならずや。

こゝより次ぎの驛迄は最長距離にして三十三露里と云ふ、夜中の事故寒氣も一層烈しからんと、充分用意して九時過る頃こゝを發す、扨てこの夜中の進行こそ最烈しく、最淋しく、最寒氣に耐へ難きなり、始の程は馭者も勢よく鞭ちて進めども、追々夜の更くるに從ひ、平然居眠するありてたとへ通ひ慣れたる道とは云ひながら、たゞ馬の歩むに任せつ、馬はよき事にして進むともなく、或は右に或は左に暗黒の中を行く覺束なさ、馬の頸に附けたる鈴は猶淋しさ添えんとして折々のチリン／＼憐れげなり、歩み遅ければ音も絶々に聞く時は、げに何ともたとへ難きすごさ淋しさを感ずるなり、嗚呼狼の棲むてふ西比利亞原の眞中に夜半深く此鈴の音を聞きし其時の心地と云ふものは、實に終生忘るゝ事能はざるべし、東西南北、一點の光明なく、一軒の家屋なし、嗚呼………。

身はふとんと毛布の中に埋まりつゝ、眠らんとして眠られず、體のそちこち痛み出し、寢返りせんとすれば何處よりか針の如き寒風入り來りて、チク／＼と身を刺す、さしも充分に用意して出でたるなれど　猶手足は痛み、呼吸する毎に口より出する息は直に氷となりて頬鼻のあたりを刺すなり、一寸の身動きもする能はず、馭者をはげまさむも容易の事にあらず、あゝ實に如何なる貧苦もこれに如くものあらんやとぞ感じける、到底實驗せざる人々の知る處にあらざるなり、

然るに驚くは馭者殿よ、二枚の毛布の外套に同じ帽子と手袋のみにて平然と居眠りしつゝあり、やがて凄き犬の遠吠の聞こゆるにぞ漸く次の驛に近づけるを知りていとうれし、程なく橇は止まりて、馭者のだみ聲高く「パリエーハリ」(到着せりと云ふ意)と云ふ、驛毎に聞く此聲や、實に身にしみわたりて今も猶耳底に殘り居れり。

漸くに橇を下りて室内に入らんとすれば、此時はや一時頃にもや中なる人々はとく寢に就きしと覺しく、叩けども〳〵明けざりけり、其つらさよ、寒さ冷さはとく過ぎて苦しき痛さを覺ゆるのみ、暫くにして起き來るに戸を開くを待ちかねて走り入りつ、暖爐にすがりつきぬ、暖爐とて深更に及びては早やさめはてゝあり、中々に體も暖むる事難し、然るに橇の用意整へば又直に乘りて行かねならぬなり、毎夜〳〵かくして同じ樣にぞ過し行く。

此旅行の爲め、手足を凍らせて不具となりたる者多し、旅行者に注意するに「寒くない樣に」とは云はず「凍らぬ樣にせよ」と云ふ。

九日(三日目)

正午第十六驛アラデなる村に着す、人家二三百あり武府なる我家より電報着し居たり、何事にやあらん先づ胸の騷がれて急ぎ開き見れば、即ち「來る十二日露曆一月二十九日川上事務官浦鹽出帆す以後船無し」と云ふ、十二日あゝ如何に急ぎたりとて到底間に合はず、是に於て妾熟々考ふるに後より出立せんとせし武府なる人々も最早間に合はざる爲め、見合すべし我一家も又殘留せざるを得ず、何卒して是より引返し運を天に任して何事も一家と共にせん事を切望すれど、同行なるM氏は又正反對死を以て歸國せんと決心し給ふさりとて言語不充分なる妾一人歸らん事は出來得る事にあらず、如何にせんと思案に呉れしが、巴府迄行けば又よき方法もあらんとて、M氏の意に從ひ、又進む事に決す。

扨てこれよりは馬を加へて三頭とし、全速力を以て走る。

これよりは全く河中に入り、氷上をのみ行くなれば寒氣益々嚴し。

十日(四日目)

夜の十時ミハエルセミヨウノスカヤに着す、こゝは餘程大なる村落の如し、此處にて又も、武府よりの電報に接す、即ち「是非武府に歸り來れ」と我家にては如何に案じつゝあるか、便船無きに猶進むは無益なりと信じて、再三の電報を發せしなるべし。併ながらM氏の聞き入れされば、今如何ともするによしなし、兎も角巴府迄行かざるを得ざるなり、されば此事直に返電して今や發せんとする時、一人の露旅客入り來りぬM氏何かと話を試み給ふに、其人曰く只今豫備召集令を發せられたり、自分は即ちコサックの豫備士官にして召集に應じ、今より巴府に赴くなりと聞きて、扨てこそと打驚きM氏もたゞ無言にてをはせしに、其人又曰く御身等は日本人にてをはさんが、何れへ行かるゝや、巴府へ向はるゝか、是より巴府に到るの沿道は悉く豫備兵の集りて人心大に荒立ち居れば、御婦人を連れての御通行は御困難なるべし、幸自分も同じ道なれば御同行すべし、御心配あるなと、親切面に表はれて云はるゝにぞ、うれしさ限りなく、共に〳〵こゝを發す、これよりは食事も共になして、色々打解けて話などもするに、此士官家には妻もあり、三人の小供もあり、兄も又軍籍に身を置けるよし、あはれ家に殘れる妻女の心中やいかに、敵も味方も人情に變りは無きものを。

十一日も過ぎて、

十二日(六日目)　午後三時第四十即ち最終の驛に着きたり。

こゝには新聞もあり、巴府の模樣も知るを得たり、猶數十の日本人は殘り居れりと云ふに、いとゞ心強くなりぬ。

途中に豫備兵等の出征を送る酒もりに醉ひ亂れたるさま〳〵の者に出遇ひたれど、幸に彼の士官の一方ならぬ親切に依り、無事なるを得たるうれしさを深く深く謝し、こゝにて士官と袂を別ち、彼れは先に、妾等

は後れて發す、今度はいよ〱巴府に到着するなり、此日烈しき吹雪途中一入の困難なりき。

目的の地と云ふにはあらねど、苦しき旅行も終りを告げ、又多くの日本人もありと云へばたゞうれしさに心急かれ、寒さも厭はず、吹き來る雪を事ともせず、首を延べてはまだ見えぬかと望む事幾度、漸くにして遙か彼方に森の如きもの見えたり、次第に其輪廓を明かにしつゝ、やがて見覺ある寺院の塔も認められぬ。

午後六時即ちハバロフスク市街に入るを得たり、休憩所に來て橇を捨て、更に馬車を雇はんとするに、其馭者のこそ〱ばなし「日本人だ高く取つてやれ」とて、僅二三丁の處三留と言ふ、常ならば二十カペーク位なるに余りなる高價と再三なじりたれど、更に聞かず、荷物も多くあれば是非なく云ふがまゝに拂ひて、直に某知己なる日本寫眞館を尋ぬれば、うれしや數人の人々は或る事情の爲めに殘留し居られたり。

互の挨拶、其他は云はずもがな、武府を出でしより六日間こゝに漸く再生の思をなせど、それと共に張り詰めし氣力とみに衰へて疲勞云はん方なし、何事も明朝を約して久々にて衣服を着換へ、六日間の溜寐せり

十三日

いよ〱疲れ烈しく堪えがたけれど、かくてあるべきにあらざれば起き出でゝ人々によき智慧を求めんとするに、M氏には疾く起きて既に浦鹽の模樣など調べて居たまへり。

事務官既に去りて、無論日本への便船は無けれども猶獨乙船は二回入港の筈なりと云へば、確に其船には便乘するを得ん、今より直に出立すべければ、御身も早く用意せられよと、M氏頻りと妾を急がし給ふ　妾又何とすべきや、心は既に武府なる我家のほとりを迷ひてあり、夫を敵國に殘して何で妾一人逃れんと欲すべきや、願はくは妾をこゝに殘して、君先づ出立し給ひてよと乞ひまつる、M氏仰せらるゝには獨乙船は猶二回入港すると云ふにあらずや、然らば其間充分の日數あるべし、兎に角彼の地に到り、詳細取調べ間に合ふならば、武府へ打電して、身一家其他の人々をも呼

び給へと、然らむとて妾も又取急ぎ用意しつ、此日午前十一時浦鹽行の汽車に乘込みたり。

妾等の乘れる一室は、主に戰地に向ふ將校を以て充たされたり、一士官妾等を見て、不思議に思ひ「御身等何處へ行かるゝや、浦鹽には最早便船無し、殊に戒嚴令を布かれたれば今は外國人は一切彼の地に入る事能はず、わけて日本人たる御身等は必ず拘留せらるべし、此先ニコリスクには軍事警察の設けあれば、そこにて一旦下車なし、よく聞き合せたる上行かるべし」といと親切に敎へらる、拘留と云ふに驚き顏見合せてぞ暫し居たりける。

又年若き士官曰く、今度の戰爭は結局英國が對手なればいと面白し、自分は此度志願してピータスブルグより來りし者なりとて意氣豪然たり、然るに此人至て親切にして何かと注意を與へ呉れ、御身等空腹にあらずや、食堂に御供せんか軍人多けれど決して御心配あるなどゝ、種々いたはらるゝより案外の思せり、共に食堂に行けば隣席に食事しつゝありし商人體の男、妾に向ひて日本人は何故あはてゝ歸國せらるゝのか、戰爭は政府と政府との爭なれば、我等何ぞ害を加へんや、下等社會には隨分暴の者あれども、それ等は我々に對してさへ害を及ぼすなれば、よろしく警察に訴へて可なり」と。

こゝは二等室にして乘客も中流以上の者のみなれば幸に無事なりしなり。

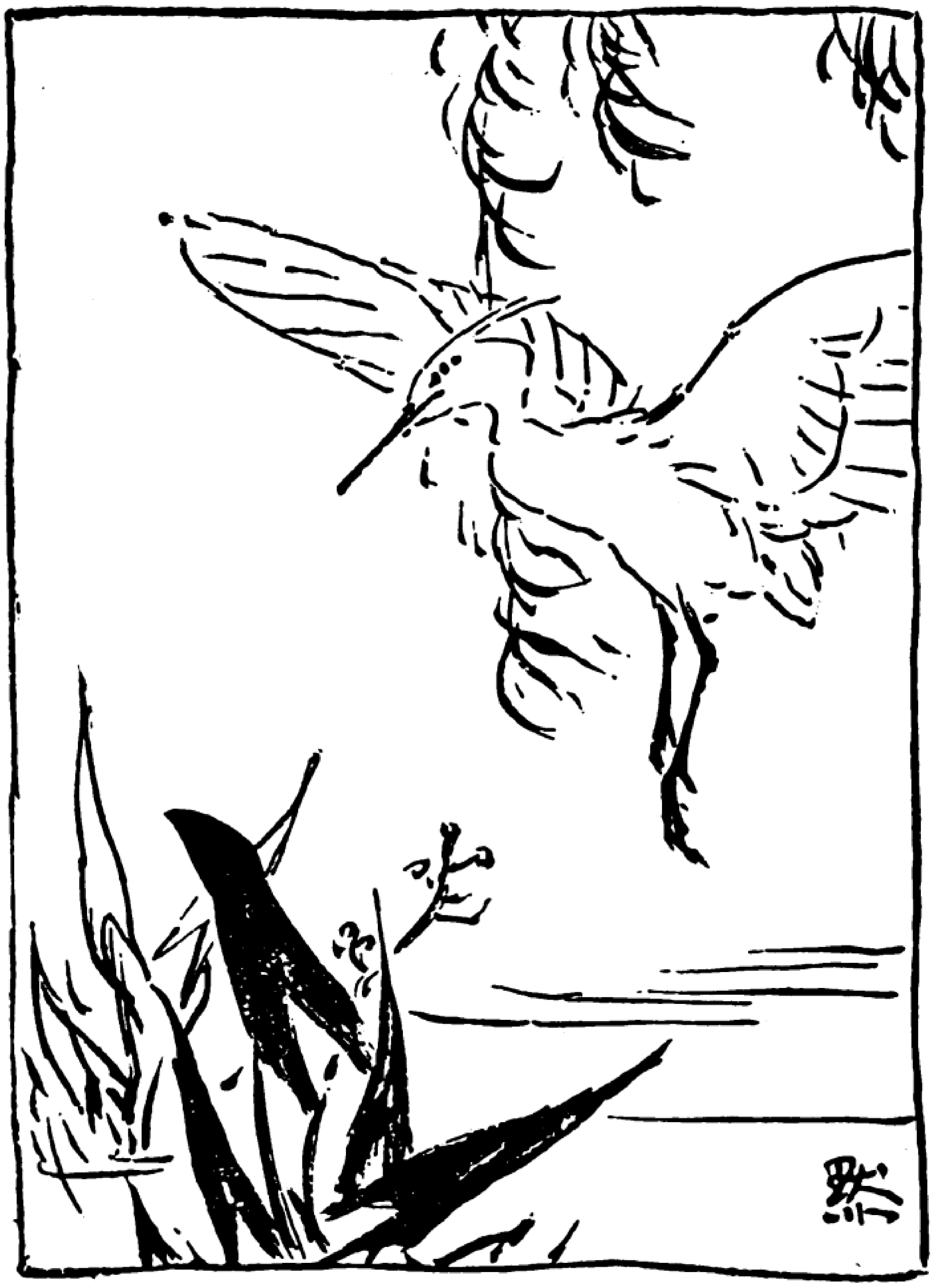
午後三時ニコリスク驛に來る、彼の士官の忠告に從ひて下車し軍事警察署に到りて浦鹽の情況を聞くに、吏曰く「御身等今浦鹽に到りて何の益やある、彼の地の警察に拘留せらるゝ迄の事なり」と憎々しき物の言ひ樣、腹立しきと失望にうやむやして、停車場に來る當驛には戰地に向ふべき兵士そこにもこゝにも散在しつ、皆心荒々しくなり居る事とて妾等を見るや、種々の惡口を吐き、或は握りこぶし見せるあり、物をなげるありいと、烈しければ婦人待合所へと逃げ込みて、片隅に小さくなりて居たりける。

扨ていよ〳〵浦鹽をも望なき事となり、後へ戻らざ

る可からず、妾はたゞ武府の有様の心に懸るにぞ、左程失望とにはあらねども御氣の毒なるはM氏如何計失望落膽せられしや。推し參らすに餘りあり、實に是迄の御辛苦筆紙には盡し難し。

第三便
（錫當島コロンボより）

午後六時漸く浦鹽より列車來りぬ、いと嬉しくて急ぎ乘らんとすれど、何れの列車も立錐の餘地なく、二等切符を持ちながら三等室の少し隙ある處に無理に乘込みぬ、乘客は主に婦人小供にして、避難の爲めに浦鹽より引揚げ來りし人々なり、妾等腰を下すべき處もなく、立往生してありければ、傍に居し一兵卒は立ちて席を讓り呉れたり、嬉しさに一禮してそこに座しぬ



追々夜も更け行くに一方ならぬ空腹を覺えぬ、考ればまだ夕食せざりしなりき、食堂に到れば何故か戸は固く閉して開かず、空しく歸り來りたれども、扨てコウなると、いよ〳〵物ほしく、ほしければとて得るに由なし、此邊の停車場には何物も無ければ是非に及ばず明日迄辛抱せんと、M氏と話し居る時、件の兵卒頻と慣々敷言葉を懸けて曰く『私は今度上官の夫人の御供してハバロフスク迄行くのですどうも此汽車は

大そうな乘客です私の主人は中等の切符を買ましたけれども、場所が無いのでこゝに乘つて居られます、今浦鹽の有樣は淋しい樣な物凄い樣な、婦人や小供は避難の支度で大騷ぎです、日本人は一千人程警察の下に保護を受けて居ると云ひますが人の話ですから分りません」などゝ聞きもせぬに饒り續けぬ終りに心附いたやうに「あなた空腹ではありませんか今夜は食堂に會議がある爲め閉ぢてあります、若し何かお入り用なら私が持つて來て上げませう」と云ふとそれこそ最望む處とひたすら頼みけるに彼の兵士唯々として出で行きぬ程無く彼れはカツレツ、パン、茶迄も持ち來るに妾等の喜びは例ふるにものなく漸く飢を凌ぎぬ其美味なりし事よ此時ははや十一時過ぎなりき此兵士或は親切もありしか知らねども實際は金を貰ひ度くてかくせるなり、一般露國の兵卒及巡査などの卑しき事は恰も日本の乞食の如し、金さへ與ふれば何事も心の儘となる。

此夜十二時半巴府に着す深夜の事故馬車も無くM氏何處よりか荷馬車を雇ひ來られ荷物と共にそれに乘りて竹内寫眞館へと急ぎたり、一時頃同家に到り着きしも時節柄とて戸締最嚴重にて叩けど〳〵起きられずほと〳〵閉口してある程に馬車引身を躍らして塀を飛び越えて内に入りぬ、家の入口の戸は容易に開きたるより、馬車引きヅカ〳〵と室内に入り行けば、そこには丁度妾等と行違ひになりて昨日浦鹽より來り給ひし太田覺眠師の眠り居られしなりき、覺眠師は深夜に怪しき物音するをいぶかりて居れしに、突然大男の入り來りしより、其驚き一方ならず、直に布團の下なるピストルを握りつゝ、手まねにてあちらへ行けと云はるれど、馬車引は中々動かず、其中に他の人々も皆目を覺まし、扨てこそ怪しき奴の亂入せしぞと各ピストルを手にして猶も樣子を窺ひ居るなりき、馬車引もどうやら樣子を悟りて直に自分に門の戸を開き妾等を入れて與れたり人々は妾等を見て二度の驚きしばしは言葉も無かりけり、馬車引は獨り打笑ひつゝ金を受け取りて歸り行きぬ。

夜中に人々を驚かせしを妾等深く詫入りたれば一同

こゝに始めて大笑しつゝ、其後いつまでも此時の驚きを口にせられたりき。

太田覺眠師に就ては諸嬢既に記臆せらるゝならん妾等拙き筆に同師を評する能はず。師は歸國に便なる浦鹽に居られしも、たゞ一人踏み止まり給ひ、歸國叶はざる同胞を慰問せんとて單身佛像を負ひ身命を賭して敵國の奥深く進まれしなり、これ決して凡人の爲し得べき事にあらざるなり。（同師の精密なる幽囚記花も實もあるいと面白き記事は編輯御出版ある事と存候世に出でし上は諸嬢御一讀あれ或は既に出でしや）

同師の話に依れば武府第一の出發者歯科醫の君一行七人は漸く支那便船の間に合ひて、歸國せられたりと、而して妾等第二の出立僅か半日の差ありしのみ今や空しく引返さゞる可からず。

十五日

當時巴府の有様は市中豫備兵を以て充され、酒店は悉く閉ぢられぬ、こは兵士の飲酒を禁ずるが爲めなり、婦人小供は夜中の外出を注意し各戸締を厳重にされぬ

扨て妾等巴府迄辿り來りしも、此後如何なる方法を取るべきか、人々は曰く今や日露の開戰と云ふ事は小村の隅々迄も知らざるなし然るに婦人を連れてコサックの村々橇旅行は危險鏡にかけて見る如し、左れば五月の解氷期迄當家に滯在せられ、而して後船にて武府に歸られなば最安全の策なるべしと、M氏も大に賛成してひたすら止まるべくすゝめられぬ、併し妾は斷然決心する處あり、人々の忠告を斥け、一日も早く武府なる我家に歸らん事を斷言す、幸ひ太田覺眠師も生命を賭して是より武府に赴き、先づ同市の殘留者を慰問せんと決し給ふ、妾も又一命を天に任せて出立せんとする、何をか恐れんやたとへ此巴府今は無事なりとも、敵國人たり吾等殊に露官吏の處置明日の事は斗り難し武府にある者も又然らん妾願はくは生死を夫と共にせんと切望して止まざればなり。遂にM氏も同意せられぬ。

實に此行や決死の人にあらざれば爲し得べからずと信じたりしなり。（此文是にて盡たるにあらねど紙數に限あるを以て一まづ筆を擱く）

奇聞界世

▲一笑價百萬弗　頃日の事米國ミシガン州に有名なる銀行家あり、家に巨萬の財を積み何不足なき身ながら妻子もなく、親戚朋友も既に死し又老後を慰むる者もなし、銀行家は他人の一家團欒笑ひさざめくを見るにつけても、我が境遇の不幸を嘆つの念愈加はり巨萬の富も遂に此の樂を購ひ得ざるを感じたる折柄、一日某街を通りかゝりたるに、とある家の若き婦人の掃除し居たるが、彼を見て無邪氣の笑みを洩らしつゝ、親しげに挨拶したり、銀行家は此日より大に元氣付き、後毎日其家の前を通り、彼の賤婦人の愛嬌ある挨拶を受くるを以て無上の樂みとなせり、然るに數月ならずして右の銀行家は不圖病氣に罹り、果なくも死亡したれば、其後遺言書を展き見たるに百萬弗の財産を擧げて悉く之をこの婦人に贈くるとありたりと云ふ。

▲繪葉書の媒介　去年の夏米國ロスエンゼルスのストームといふ一婦人が、瑞西へ旅行した時に遊覽先から本國にある自分の弟に一枚の瑞西美人の繪はがきを送つた、處が之を送られた弟のストーム君は受取つた時から、餘りの美容に惚々しちまつて、一切無我無中早速米國を飛出して、瑞西下り迄繪はがき美人の、探索に出かけていつた、着西後夜の目も合せず探しに探した結果、漸く四ケ月目に其本尊は、一カッフイー店の女中である事が知れたので實に手の舞ひ足の踏むところを不知、早速自分の切なる意中を打明け、共々手を携へて歸路に着く事が出來た。

毎月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）……金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二冊 增刊四回……一、四、七、十月價格同一）

郵稅 一冊 二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引四十圓
一等	五十四錢	十七圓二十八錢	割引三十三圓
二等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
三等	三十七錢	十一圓八十四錢	割引二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文畧規
●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅八年七月十五日發行　第五卷第拾號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

博文館發兌婦女書類

醫學博士 三島通良君編

はゝのつとめ

洋裝大判全一冊美製本
正價七十五錢郵税十錢

本書は多年職を文部に奉じ學校衛生に於て且つは又專門小兒科醫として名聲嘖々たる三島博士が個人衛生中最必要にして且國家富强の基たる婦人及び小兒の健康を保護增進せんが爲め泰西の學理を應用し之を本邦の人情風俗に鑑み能く我邦現時の家庭に適應する衛生法を叙述されたるものにして世の賢母良妻たるの職責を盡さんとするの人は素より一家の經營上何人も缺くべからざるの要書なりと謂ふべし行文又平易流暢なり。

博文館編輯局編

茶の湯と生花

全一冊 洋裝大判美本
正價二十五錢郵税六錢

茶の湯と生花は日本特有の一技にして、苟くも中流以上の士女は皆之を辨へざるを恥とす。本書斯道の大家に請ふて其技の初歩より奥秘に至る迄を、最平易明瞭に述べ、文の足らざる所は圖繪を以て之を補ひ、讀む人をして又師に就くの煩なからしむ。（第廿一版）

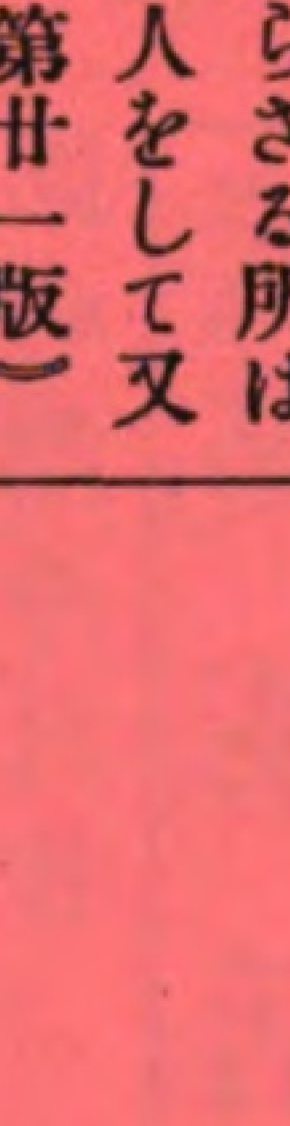
醫學博士 井上通泰先生監修

家庭衛生叢書

正價一冊廿錢全部一圓十錢郵税六錢宛
全部十二冊洋裝大判美本紙數一冊百卒頁

家庭に衛生上の智識の必要なるは猶鳥の翼に於けるが如く魚の鰭に於けるが如し、住居を撰ぶにも、衣服を製るにも、食物を調理するにも、小兒を養育するにも、氣候の寒暑にも、傳染病の流行時にも、病人の出でし時にも、婦人の姙娠時にも二六時中衛生上の智識の考察を待たざるはなし。

家庭衛生叢書は毎編皆各專門の大家が特に衛生上注意すべき事項に就て講話せられたるものにして現に旣に講話を承諾せられたる專門博士のみにても三十餘名に達し發行以來非常の好評を博し今や第六編印刷中にあり。



（後付の一）

●佐々木信綱君著
詠歌辭典（彩色木版寫眞版挿入）　正價七拾五錢　郵稅八錢

●宮澤春文君著
作歌自在　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●有賀長伯君著
和歌八重垣　正價五拾五錢　郵稅八錢

●佐々木信綱君校註
百人一首講義　正價貳拾錢　郵稅四錢

家政學

華族女學校學監下田歌子女史著

家事内政を整理するは、婦女生涯の本務にして衣食住の事より始めて、金錢の出納、公私の交際、賓客の應接、子女の敎養、婢僕の雇使に至る迄皆其責務にあらざるはなし、此書は下田歌子女史が當世に鑑みる處あり、女子敎養に對する綱要を網羅し、其志昂めて周密の志行を養成するにありて、疎放の習慣を矯正し實際的良母賢妻を得るの捷徑を示さる、實に是れ齊家の韜略たり。

全二冊　和裝　大判四百卌頁　正價一冊參拾錢　郵稅一冊六錢

岡崎淵沖君著
各傳比較 **點茶活法**

全四冊和上綴帙入　正價貳圓五拾錢　小包送貳拾錢

此書は篇を客法主法手前置合器物床飾露地茶室等に分ち附するに各傳傳統の系譜を掲ぐ○首めに斯道の總論を擧げ茶道は遊戯に非ずして修身齊家の法たることを辨じ各編毎に復其事を細論して事理合一の旨を示す○各編皆諸流の傳を列記して其異同と理義の在る所を知らしめ一目其是非好惡を撰び易からしむ○初學の人は此書に依りて主客の作法を始め手前百變の基棚莊千化の起露地の繩張茶室の構造迄容易に獨習自得せられ師範の人は此書によりて各傳の異る所作の變亦一の理義ある事を了し敎導の助け講義の參考となる事尠からざれば何流何派に論なく凡そ斯道に志ある者は必ず一本を座右に備へ置かざるべからざる古來類なき全書なり

●江刺家協一君著
茶の湯大全（優雅木版畫）　正價六拾錢　郵稅八錢

●吐月齋惠一鳥君編纂
盆石挿花 **四時の詠**（優雅木版畫）　正價五拾錢　郵稅六錢

●秀貫齋月一珦君編纂
盆石挿花 **正風花鏡**　正價五拾錢　郵稅六錢

●大露庵河村一洗君選
新撰活花圖式　正價四拾錢　郵稅六錢

（後付の二）

婦女書類

增訂

日本女禮式大全

坪谷善四郎君著

禮式は人間處世の大本、人品尊卑の因て分る所、殊に婦人にして禮なきは、最も卑しむべし而して近來女子禮式の書少からねど古に偏して今の世に實行し難きあり新奇に走りて全く禮法に合はざるあり能く古今を折衷し、詳略の宜しきを得たるもの稀なり編者之を憂ひ日本、女禮式大全を著はし頗る世上に好評を博しぬ、然も著者の責任を重んずる好評を博すると共に益々愼重を加へ各般の事一々之を實驗に徵し或は專門家に質し、增補改訂今や其第十五版を印行するに至れり、平易の文章に多くの繪畫を挿み叮嚀周密を極めたり良妻賢母の友にして、貴女令孃婚姻の際必ず携へ玉ふべき良書なり

▲全一冊洋布上綴正價九拾錢小包送拾五錢
▲蒔繪函入特製本正價壹圓廿錢小包送拾五錢

華族女學校學監下田歌子女史著
● **女子書簡文** 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君 渥美雅子女史共著
● **新撰女子用文** 正價參拾錢 郵稅六錢

佐々木信綱君著
● **日本婦女用文** 正價拾八錢 郵稅四錢

曾我部純一君著
● **最新家計簿記** 正價貳拾五錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
● **歌まなび** 正價壹圓五拾錢 小包送拾五錢

佐々木信綱君著
● **詠歌自在** 正價壹圓 郵稅拾貳錢

落合直文君著
● **新撰歌典** 正價四拾錢 郵稅八錢

華族女學校學監下田歌子女史著
● **詠歌の栞** 正價參拾五錢 郵稅八錢

和洋禮式

大橋乙羽君著

全一冊洋裝 正價貳拾五錢 郵稅六錢

人生交際の道、禮を以て第一とす、本書は世に得易からざる幾多の珍書を參考し、專門師匠の校閲を請ひ、優麗なる圖を加へ、順序のよき區別の下に、反覆叮嚀に冠婚喪祭の禮法、起居、言語、衣服、應對、宴遊、獻酬の諸式より上下、父子、夫妻、親戚、知友等の諸作法まで凡て和洋の禮式一切を記述せり

博文館發兌

干河岸櫻所君評釋

女訓評釋

全一冊 和装
正價六拾錢
郵税拾錢

女訓十二種

●女今川 ●女實語教 ●女庭訓
●女訓孝經 ●女大學 ●女中庸
●女小學 ●女孝經 ●女誡
●女論語 ●内訓 ●女範

此書は古來女子の教科書として襲用せる前記の十二部を纂めて註釋を加へ古訓を解するに新思想を加味したるものにて初めは簡易にして次第に文意俱に高尚に至るものなれば此一冊にして賤の女も學ぶべく高貴の御方にも適當に尋常一年生にも讀得べく女子大學女學生にも研鑽に値すべき本邦唯一の女訓寶鑑なり請ふ御愛購あれ

松原岩五郎君著
●女學生の栞 正價參拾五錢 郵税六錢

華族女學校學監 下田歌子女史著
●女子普通禮式 正價參拾五錢 郵税八錢

同
●母親の心得 正價參拾五錢 郵税八錢

同
●學校の心得 正價參拾五錢 郵税八錢

東京女學館講師西田敬止君著
●帝國女子修身鑑 正價一冊拾錢 郵税一冊貳錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●外國少女鑑 正價參拾五錢 郵税六錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●内國少女鑑 正價參拾五錢 郵税六錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●庭訓お伽噺 正價參拾五錢 郵税六錢

（後付の四）

文學士大町桂月君著

女學生訓

全一冊 洋装
正價貳拾五錢
郵税四錢

家庭以外學校の女子教育家桂月先生が獨特の奇警なる觀察を寓し趣味津々として乾燥無味なる小言の比にあらず讀んで面白きが上に女子百般の事に關して適切なる訓戒を垂れて女子教育上の指南車たり又木鐸たり世上の女子は更なり娘を有せらるゝ父母も必ず一本を備へ玉はざるべからず

婦女書類

華族女學校學監下田歌子女史著
●泰西所見 家庭教育
正價參拾五錢 郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●家庭の心得
正價參拾五錢 郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子女史著
●婦女家庭訓
正價參拾五錢 郵稅八錢

濱本義顯君著 木版錦繪挿入
●婦女敎育 明治姫鏡
正價六拾錢 郵稅八錢

中村鈴子女史編
家庭の模範
全一冊 和裝 正價參拾五錢 郵稅八錢

方今社會の上中流に通じて其家政一般を見るに表面錦繡を飾りて裏面に糞土を包める如く破倫悪徳を行ふて靦然愧ざる人多し爲めに一家は悪魔の棲所となり風波絕ゆる時なく和氣藹然の家庭は全く其痕跡を失ふに至れり是れ一家の小にして實は國家の大に及ぼす利害ならずや女學世界記者中村鈴子女史久しく誌上に家庭訪問欄を擔任し數年名家を歷訪して其直話を世に紹介せり今本書に其模範となるべきもの數家を撰摘して一層世に益する所あらしむ權門有力者の家庭學者名士の家庭軍人實業家等其各家の主人に直接して實踐躬行の直話を寫眞し溫かき香ばしき家庭を作らんとするの眞模範に資するなり諸子一本を備へて美質良風を涵養せらるべし

藤本藤陰君著
實用料理法
全一冊 洋裝 正價貳拾五錢 郵稅六錢

金錢の使用にも死活の二法あり、同じ肉菜にても、鹽梅調理の巧拙によりては味ひに天地の相違あり、故に賢にして節儉なる一家の主婦は、最も料理法に注意し、廉價にして味ひ善き食物を調ふべし、此書は此等の人々のために、日本、支那、西洋三國に涉り、最も簡便にして又最も實用に適する百般の調理法及び献立等を詳記し、兼て古今の料理法に及べり、戶々日常必需の書は實に是れなるべし

八百善主人著
●八百善料理通
正價參拾八錢 郵稅六錢

小田原屋主人編
●漬物早指南
正價拾貳錢 郵稅四錢

醍醐山人編
●料理早指南
正價貳拾五錢 郵稅六錢

風羅山人編
●料理いろは庖丁
正價拾八錢 郵稅四錢

(後付の五)

刺繡術專門 磯村大次郎君著
●實用刺繡術
正價廿五錢 郵税四錢

博文館編輯局編纂
●衣服と流行
木版刷錦繪及寫眞版挿入
正價廿五錢 郵税六錢

中島義弌君著
●新撰女子作法書
密畫挿入
正價廿五錢 郵税六錢

中島義弌君著
●新撰小學女禮式
正價廿五錢 郵税六錢

飯田呉服店裁縫部主任編
實用裁縫全書
全一冊洋裝大判二六六頁
正價金五拾錢 郵税八錢

本書は飯田呉服店（通稱高島屋）專織部員の協力編纂に成れるものにて尚斯道達人の助力を得たる著述なり故に本書の主とする處は普通の衣服は固より之に附屬する諸種のものに就て普ねく裁ち方積り方等を網羅し專ら實用に供せしむるにあり故に女子諸學校の參考書となると同時に家庭の好伴侶たるべきなり本書前編に於ては裁縫に關する諸般の要件を掲げ後編に於ては裁ち方積り方を圖解し附錄には織物染物の產地を記して參考に供せり讀者よ實用を主とする本書は解説にて六ヶ敷所は密圖を添へて直ちに了解し得べき樣注意せり請ふ愛讀あらんことを

山田興松君著
實用 造花術指南
全一冊 洋裝
正價貳拾五錢 郵税四錢

造花術の技工に關する良書極めて尠なく偶ま之を得るも技術者と著述者と其人を異にするを以て、理法實際に適せず、讀者をして全然無意味に了はらしむるの憾ありしなり、然るに本書の著者は拾數年來斯術に從事せられ、目下校舍を開て生徒を敎授するの傍ら其敎科書に充てん爲め本書を編述せり、故に其記する所專ら實驗實用を旨とし一定の方式を案出し初學者が容易に了解し得る樣最も親切に説明せられたる女子手藝の要技として家庭上缺くべからず請ふ續々御購覽あらんことを希望す

華族女學校學監下田歌子女史著
●女子手藝要訣
正價參拾五錢 郵税八錢

榮雲齋先生編
●挿花大樂抄圖會
正價四拾錢 郵税六錢

江原春夢君著
盆景、盆石 盆山、盆庭
●秘訣圖解
正價參拾錢 郵税六錢

順石軒翁編
●盆山百景圖
正價壹圓 郵税拾四錢

（後付の六）

婦女書類

干河岸櫻所君編

日本女子立志編

全二冊 和装 大判七三六頁
正價一冊六拾錢 郵稅一冊八錢

此書は中村暘齋の比賣鑑に續きて慶元以後より明治の初に至るまで我國の諸書に散見せる賢媛節婦三百有餘人の善行美事を類纂して賢淑貞烈忠烈孝烈勇烈文學才畧の七部に分ち本邦古來の良風美俗たる婦教の綱維を保持するの一端に供するものにして閨閤の寶鑑婦人立志の基礎なり且つ文章暢麗にして讀み易く記述精細にして趣味深し方今女子風敎の紀正を促すこと急なり本書の上梓せらるゝもの實に明代の龜鑑といふべし

岸本宗道君校註
● **校註古今和歌集** 正價拾五錢 郵稅四錢

若松賤子女史遺稿 櫻井鷗村君編纂
● **忘れがたみ** 正價壹圓 郵稅拾錢

樋口一葉女史著
● **一葉全集** 正價四拾錢 郵稅拾錢

大橋乙羽君著
● **花鳥集** 彩色木版密畫挿入 正價壹圓 小包送十五錢

安藤紫陽君 箕輪撫鬘君共編
● **名士の父母** 正價廿五錢 郵稅四錢

鈴木光次郎君編
● **明治閨秀美譚** 正價拾貳錢 郵稅貳錢

博文館編輯局編纂
● **婦人壯烈譚** 正價貳拾錢 郵稅貳錢

華族女學校學監下田歌子女史著
● **お伽噺教艸** 正價卅五錢 郵稅六錢

吉田調子君著

裁縫と編物

全一冊 洋裝 正價貳拾五錢 郵稅六錢

女子の尊き天職は、母として子女を育成し、妻として一家を齊整するを主とす。特に家族の衣服類は、一として女子の手に繋らざるなく、裁縫及び編物は、實に女子として、尊卑に論なく、最も必要の手藝たり。本書に於て懇切鄭寧に其順序方法を解明し、一讀其術に精通すべからしむ、他の慰み物に精しくとも、裁縫に迂きは、婦人の恥なるを辨へ玉ふ方は、速に此の書を讀み玉ふべし。

博文館發兌婦女書類

◎西洋料理法（第拾四版）

佐々木孝君著

正價貳拾五錢　郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子女史著

料理手引草

全一册和裝大判正價廿五錢郵稅八錢

新たに、家を持てる婦人が第一に困難を感ずるは、料理と献立とにして、其學校にて或は師に就きて、之を修め得たる人と雖も、之を實地に應用變通して、尙且つ物も揃はず、人手も少きを、能く機轉を行ふこと難きは、大方世間の通弊なりとす、故に本書には、專ら其實踐に裨益すべき事を示して、其衞生と經濟との注意を主として、年若き主婦の參考に資せられたるものなり。

阪本隆哉君著

衞生食物調理法

全一册　和裝大判一五四頁

正價參拾錢　郵稅六錢

本書に從來の料理法より其衞生に適ひたるものを撰擇し其調理法を最も平易に述べたり故に日常の食膳に上るべき食物も此書によりて調理すれば滋味多くして人體を加養すべし例へば章魚は皮を去り奴豆腐は沸湯を注ぐなど其外野菜の洗ひ方切り方煮方炙り方食物の着色中毒物又は飲料の選び方器具の清潔小兒の食物など一々說き示したり家庭衞生書として日常料理の師册として各家是非一本を備へらるゝの必要あることを知るべし

西田敬止君著

育兒と衞生

洋裝大判　全一册　美本

正價貳拾五錢郵稅六錢

能く健全なる小兒を生育し、又家族の健康を保つは、是れ人間第一の幸福の基なり、著者親切に、平易明瞭に、其の次第を詳叙し、文字の足らざる處は鮮明美麗の畫を以て之を補ひ、懇篤至らざる所なし。世の文字を解する人々之を讀みて育兒衞生に注意し玉ふべし。



（後付の入）

THE RUSSO-JAPANESE WAR ALBUM

大本營陸軍部御許可

神戸 關西寫眞製版印刷會社製

日露戰役 紀念寫眞帖

洋裝總クロース
縱六寸五分
横九寸
口繪金文字入
寫眞百餘枚
堅牢頗美本

紀念寫眞帖 第壹輯

第二軍の出征、鹽大澳上陸に初まり、金州南山の激戰、ダルニーの占領、得利寺の奇捷、蓋州の占領に至る迄の寫眞百餘枚

正價壹圓貳拾錢
小包料拾五錢

大本營海軍部御許可

旅順要塞戰紀念帖

正價壹圓貳拾錢
小包料拾五錢

攻圍八ヶ月、兩軍の死傷十萬世界最新の戰術を應用し能く防ぎ能く攻め覆載間の視線を盡く此所に集め龍驤虎踞千古の壯觀を極む、而も防守軍は力屈して開城降を請ひ我帝國攻圍軍の名譽を全世界に宣揚せしめたり此帖は神戸光村氏が海軍部の囑托を受け數人の寫眞技師をして陸海方面の諸戰況を撮影せしめたる壯烈の紀念帖たり。

紀念寫眞帖 第貳輯

箭樓子第二軍司令部門前●太平嶺の鐵條網●同敵の鹿柴●大石橋の激戰●同激戰中第五師團司令部に敵彈雨下●大石橋停車場●同兵站病院●海城の內外の諸景●海城々外敵の塹濠狼穽鐵條網等●王公山々麓の砲壘●海城々外沙河の渡渉點●東清鐵道分捕貨車の運搬●鞍山川に敵の燒棄せる鐵橋上の消防●鞍山站附近の急追擊●首山堡攻擊中外國武官の觀戰●同山麓の我軍躍動●同山下の新戰場●遼陽攻擊用分捕重砲運搬●同重砲の間接砲擊●遼陽燹火の遠望●遼陽戰後の慘狀等珍貴紀念寫眞百餘枚

△正價壹圓貳拾錢　小包料拾五錢　新刊發賣

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

文藝倶樂部定期増刊 世界各國の家庭

(明治廿參年拾貳月廿五日 第參種郵便物認可) 第五卷第拾號 (明治三十八年七月十五日發行)



(定價金貳拾錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊲
明治38年7月（第5巻第9号、第5巻第10号）

2007年12月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3290-4　C3321